

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	小林 大志
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 300 号
学位授与の日付	2020 年 9 月 15 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	ドイツ語の名詞化における項実現の統語論的・意味論的原理 名詞項と指示同定の関係に注目して

Name	Kobayashi, Taishi
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 300
Date	September 15, 2020
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The syntactic and semantic principles of the argument realization of German deverbal nominalizations: Focusing on the contribution of nominal arguments to referent identification

ドイツ語の名詞化における
項実現の統語論的・意味論的原理
名詞項と指示同定の関係に注目して

小林大志

グロス表

ACC	accusative	対格
DAT	dative	与格
F	feminine	女性
FUT	future	未来
GEN	genitive	属格
IMP	imperative	命令法
INF	infinitive	不定詞
M	masculine	男性
N	neuter	中性
NOM	nominative	主格
PASS	passive	受動
PL	plural	複数
PRF	perfect	完了
PRS	present	現在
PST	past	過去
PTCL	(verb-)particle	動詞不変化詞
PTCP	participle	分詞
REF	reflexive pronoun	再帰代名詞
SBJ1	subjunctive I	接続法 I 式
SBJ2	subjunctive II	接続法 II 式
SG	singler	単数
1	first person	1 人称
2	second person	2 人称
3	third person	3 人称

目次

グロス表	i
1. はじめに	1
第 I 部：名詞化の項の実現・解釈規則	7
2. 名詞化の種別について	8
2.1. 名詞化の形態論的な種別	8
2.2. 名詞化の意味論的な種別	13
2.3. 不定詞名詞化の項の義務性	17
2.3.1. 不定詞名詞化と Grimshaw (1990) の CENs	18
2.3.2. 不定詞名詞化の不完了相性	21
2.3.3. 内包の表現としての不定詞名詞化	23
2.4. まとめ	27
3. 項と項構造について	28
3.1. 項と項に関する諸概念	28
3.2. 動詞の項構造への状況項の導入	31
3.3. 項構造の名詞への拡張	33
3.3.1. 1 価述語としての普通名詞と指示項	33
3.3.2. 機能名詞と関係名詞	34
3.4. 名詞化の項と項構造	35
3.4.1. 基盤動詞の状況項と名詞化の指示項	36
3.4.2. 基盤動詞の主題項と名詞化の主題項	37
3.4.3. 名詞化の項と項付加語	38
3.5. まとめ	40
4. 動詞における項実現の理論	41
4.1. 語彙分解文法 (LDG: lexical decomposition grammar) による意味形式の分析	41

4.1.1.	基本関数と各動詞グループの意味形式	42
4.1.2.	語彙分解された意味形式による意味役割の指定	45
4.1.3.	項の階層関係と L 統御	46
4.2.	構造格・語彙格	51
4.3.	動詞項の写像的なマッピング	53
4.3.1.	構造項の資格を持つ項と持たない項	54
4.3.2.	最上位性と最下位性による中位項の扱い	56
4.3.3.	動作主の特権的ステータス	58
4.3.4.	並列された意味形式における項の合成的評価	61
4.4.	まとめ	63
5.	名詞化の項候補の観察	65
5.1.	属格	66
5.1.1.	属格項と属格付加語	67
5.1.2.	主語属格と目的語属格	76
5.1.3.	前置属格と後置属格	85
5.1.4.	所有冠詞	88
5.2.	前置詞句	90
5.2.1.	前置詞項（名詞化）と前置詞項（動詞）の対応	92
5.2.2.	前置詞項（名詞化）と非前置詞項（動詞）の対応	94
5.2.3.	主語的 durch 句	99
5.3.	補文	104
5.4.	名詞化複合語	107
5.4.1.	N1 の解釈	107
5.4.2.	名詞化複合語における属格の解釈	110
5.5.	まとめ	112
6.	名詞化の項構造を巡る先行研究の理論モデル	113

6.1. Bierwisch (1989) の項構造の継承モデル	113
6.2. Ehrich & Rapp (2000) の意味形式の継承モデル	115
6.2.1. BECOME 関数の重要性	116
6.2.2. 名詞化複合語における項の排斥効果 (Ausschlusseffekt) と後継効果 (Nachrückeffekt).....	121
6.2.3. 意味形式の継承モデルの問題点	123
6.3. Bücking (2012) の属格付加語モデル	126
6.3.1. 後置属格の属格付加語としての分析	127
6.3.2. デフォルト規則	128
6.3.3. 属格付加語モデルの問題点	130
6.4. まとめ.....	132
7. 指示表現としての名詞化における構造項の実現	133
7.1. 名詞句の統語構造	133
7.1.1. 属格項と前置詞項の位置関係と NP シェル.....	133
7.1.2. 名詞の構造格としての後置属格	137
7.1.3. nP 指定部	139
7.1.4. 属格付加語	142
7.2. 名詞の項と指示	145
7.2.1. 動詞項の義務性と法・時制の解釈.....	146
7.2.2. 項の実現による指示対象の同定	148
7.3. 名詞化の項と状況の同定	151
7.3.1. 使役的狀態変化の名詞化.....	151
7.3.2. 活動動詞の名詞化.....	159
7.3.3. 使役的所有変化動詞の名詞化	162
7.3.4. 所有動詞の名詞化.....	164
7.3.5. 与格支配の活動動詞の名詞化	169

7.3.6.	効果動詞の名詞化	172
7.4.	前置属格と所有冠詞の項的解釈	178
7.4.1.	前置属格と所有冠詞の統語論	179
7.4.2.	前置属格・所有冠詞の解釈	184
7.5.	不定詞名詞化における項の義務性と指示	195
7.5.1.	名詞項の任意性と個体指示	196
7.5.2.	不定詞名詞化における項実現の動機	197
7.6.	まとめ	203
8.	第 I 部のまとめ	205
	第 II 部：目的語属格の欠如と状況の同定	215
9.	目的語属格の欠如	216
10.	形態論仮説	220
10.1.	語幹名詞化の関与性	220
10.2.	ふたつの語幹名詞化	223
10.3.	形態論仮説の問題点	225
10.4.	まとめ	228
11.	物理作用動詞の名詞化における目的語属格の欠如	229
11.1.	物理作用動詞における真の被動者	229
11.2.	一次的格付与による与格所有者構文の形成	232
11.3.	二次的格付与による対格所有者構文の形成	234
11.3.1.	交替現象と一次的・二次的格付与	234
11.3.2.	二次的対格付与の手続きと ψ 素性	238
11.3.3.	物理作用動詞における二次的対格付与	241
11.4.	身体部位の所有者による状況同定の不可能性	243
11.5.	まとめ	244
12.	目的語属格を欠く ung 名詞化	245

12.1.	言語事実の確認： <i>Warnung</i> と <i>Mahnung</i> における目的語属格の欠如	246
12.2.	<i>warnen/mahnen</i> における二次的格付与	252
12.3.	所有者による状況同定の不可能性	255
12.4.	まとめ	258
13.	使役移動動詞と適用動詞の名詞化：二次的対格付与と「対格化」	259
13.1.	適用動詞と「対格化」	260
13.1.1.	対格化の副次的効果としての「全体的作用」	261
13.1.2.	「対格化」と二次的格付与	266
13.2.	適用動詞と使役移動動詞の名詞化における項の振る舞い	269
13.3.	所在関係のより精細な分析	273
13.3.1.	場所と場所を規定する個体	273
13.3.2.	場所・方向の前置詞句の意味形式	274
13.3.3.	接頭辞 <i>be-</i> の空間的意味形式	276
13.3.4.	「場所から場所を規定する個体」を取り出す適用動詞	278
13.3.5.	使役移動動詞における構成的な使役的所在変化	280
13.3.6.	使役移動動詞・適用動詞の名詞化における状況の同定	282
13.4.	まとめ	285
14.	例外的目的語属格：不定詞名詞化と置き換わった派生名詞化	287
14.1.	例外的目的語属格に関するデータの収集	288
14.2.	例外的目的語属格の生起環境	291
14.3.	例外的目的語属格と不定詞名詞化	294
14.3.1.	例外的目的語属格と <i>nach</i> による副詞規定	295
14.3.2.	例外的目的語属格をともなう派生名詞化の不定詞名詞化への書き換え可能性	298
14.4.	例外的目的語属格が認められるメカニズム	304

14.5. まとめ	308
15. 第 II 部のまとめ	309
16. おわりに	315
参考文献	323
謝辞	332

1. はじめに

この論文の主題は、ドイツ語における動詞の名詞化である。この論文では動詞の名詞化のみを扱い、形容詞など他の範疇の語を基盤とする名詞化は扱わないため、以降では動詞の名詞化を単に「名詞化」と呼ぶ。また、特に必要がない限り、この論文では「名詞化」という語を、「動詞から名詞を派生するプロセス」という意味でも「派生された名詞」という意味でも用いる。名詞化は、ドイツ語を対象とする言語学の研究において従来から盛んに論じられてきたテーマのひとつであり (cf. Ullmer-Ehrich 1977, Bierwisch 1989, Ehrich 1991, Ehrich & Rapp 2000, Kaufmann 2003, Blume 2004, Solstad 2010, Bücking 2012 etc.), その議論の観点も多岐にわたっている。この論文では、これら名詞化を巡る論点のうち、名詞化の「項」を巡る問題に注目する。

ドイツ語の名詞化では、基盤動詞の主語や目的語といった項と意味的に対応する成分が、属格や前置詞句などの形で現れる。これには、例えば、(1a) の名詞化における *Marias* 「マリアの」と *durch Peter* 「ペーターによる」や、(1b) の名詞化における *Galliens* 「ガリアの」と *durch Cäsar* 「カエサルによる」が該当する。

- (1) a. **Die Behandlung Marias durch Peter** dauert noch an.
the treatment.NOM Maria.GEN by Peter.ACC go_on.3SG.PRS still PTCL
ペーターによるマリアの治療が続いている
- b. **Die Eroberung Galliens durch Cäsar** begann im Frühjahr 57 v.Chr.
the conquest.NOM Gaul.GEN by Caesar.ACC begin.3SG.PST in_the Spring.DAT 57 BC
カエサルによるガリアの征服は紀元前 57 年の春に始まった

(1a) の *Marias* と *durch Peter* は、意味上、(1') の文の目的語と主語に対応し、(1b) の *Galliens* と *durch Cäsar* も、同様に、(1') の文の目的語と主語に対応している。

- (1') a. **Peter** behandelt **Maria**.
Peter.NOM treat.3SG.PRS Maria.ACC
ペーターがマリアを治療する
- b. **Cäsar** eroberte **Gallien**.
Caesar.NOM conquer.3SG.PST Gaul.ACC
カエサルがガリアを打ち破った

ここで重要なのは、基盤動詞の項と、名詞化においてそれらと意味的に対応する成分の関係が単純な図式とはなっていないという事実である。例えば、上の(1'a)の主語 *Peter* は、名詞化において、(1a)の *durch Peter* のように前置詞句と対応するばかりでなく、(2a)の *Peters* のように属格とも対応する。一方、(1'b)の主語 *Cäsar* は、(1b)の *durch Cäsar* のように前置詞句とは対応するものの、(2b)に示すように、属格には対応しない。

- (2) a. **Die Behandlung Peters** dauert noch an.
 the treatment.NOM Peter.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL
 = [ペーターが誰かを治療すること] が続いている
 = [誰かがペーターを治療すること] が続いている
- b. **Die Eroberung Cäsars** begann im Frühjahr 57 v.Chr.
 the conquest.NOM Caesar.GEN begin.3SG.PST in_the Spring.DAT 57 BC
 ≠ [カエサルが何かを打ち破ること] が紀元前 57 年の春に始まった
 = [何者かがカエサルを打ち破ること] が紀元前 57 年の春に始まった

つまり、(2a)の名詞化は「ペーターが誰かを治療すること」という意味でも「誰かがペーターを治療すること」という意味でも解釈されるのに対し、(2b)の名詞化は、「何者かがカエサルを打ち破ること」という意味では解釈されるが、「カエサルが何かを打ち破ること」という意味では解釈されないのである。

動詞の項と名詞化の項の対応関係を巡っては、すでに Bierwisch (1989), Ehrich & Rapp (2000), Solstad (2010), Bücking (2012) といった先行研究によって、様々な理論化が試みられている。しかし、これらの理論化は、後述の通り、「A という項は B という種別の動詞の名詞化において C という形式で実現し得る」という規則をまとめた「ルールの記述」にすぎないものであり、「どうしてそうなのか」ということを説明しうる原理に基づく定式化とはなっていなかった。こうした背景から、この論文では第一の問題提起として次の問いを設定する。

Q1. 基盤動詞の項と名詞化の項の対応関係は、どのような原理に基づくどのような規則によって定式化できるか

動詞の項と名詞化の項の関係を論じる際、項と付加語をいかにして峻別するかということが大きな課題となる (cf. Kaufmann 2003, Hartmann & Zimmermann 2003, Bücking 2012)。というのも、動詞の項がその義務性を第一の基準として付

加語と峻別されるのに対し、名詞化の項的成分は基本的に任意であるからである。例えば、*ernennen*「任命する」という動詞において対格目的語は義務的で、(3)に示すようにこれを削除することはできないのに対し、*Ernennung*「任命」では、(4)に示すように、*ernennen*の対格目的語に対応する属格は義務的ではなく、これを削除しても表現の容認性は損なわれない。

(3) a. Paul ernannte Peter zum Vorsitz.
 Paul.NOM appoint.3SG.PST Peter.ACC to_the chair.DAT
 パウルはペーターを議長に任命した

b. *Paul ernannte zum Vorsitz.
 Paul.NOM appoint.3SG.PST to_the chair.DAT

(4) a. **Die Ernennung Peters zum Vorsitz** fand um 3 Uhr statt.
 the nomination.NOM Peter.GEN to_the chair.DAT occur.3SG.PST at three PTCL
 ペーターの議長への任命は3時に行われた

b. ^{OK}**Die Ernennung zum Vorsitz** fand um 3 Uhr statt.
 the nomination.NOM to_the chair.DAT occur.3SG.PST at three PTCL
 議長への任命は3時に行われた

したがって、動詞において項と付加語の峻別基準となる義務性は、そのまま名詞化の項と付加語を峻別する基準とはできないのである。そこで、この論文では、第二、第三の問題提起として以下の問いを設定する。

Q2. 動詞において項と付加語はその義務性を第一の基準として峻別されるが、項が基本的に任意であると考えられる名詞において、項と付加語はそもそも、またどのようにして峻別できるのか

Q3. 動詞の項が基本的に義務的であるのに対し、名詞の項はどうして基本的に任意なのか

名詞化における項の振る舞いを観察すると、他動詞の名詞化において、基盤動詞の対格目的語は基本的に属格での統語的実現が可能であるということが明らかとなる。例えば、(5a-d)の名詞化において、属格はすべて(5'a-d)の文の対格目的語に対応している。

- (5) a. Die Behandlung Peters dauert noch an.
 the treatment.NOM Peter.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL
ペーターの治療が続いている
- b. Bei diesem Krieg ging es um den Besitz Schlesiens
 in this war.DAT go.3SG.PST it.NOM about the possession.ACC Silesia.GEN
 この戦争はシュレージエンの領有を巡るものだった
- c. Die Erschießung Peters geschah des Nachts.
 the shooting.NOM Peters.GEN occur.3SG.PST the night.GEN
ペーターの射殺は夜間に行われた
- d. Die Übergabe Peters erfolgte termingemäß.
 the handover.NOM Peter.GEN occur.3SG.PST on_schedule
ペーターの引き渡しは期日通り行われた
- (5') a. Der Arzt behandelt Peter.
 the doctor.NOM treat.3SG.PRS Peter.ACC
 医者がペーターを治療する
- b. Die Habsburger besaßen Schlesien.
 the Habsburgs.PL.NOM possess.3PL.PST Silesia.ACC
 ハプスブルク家がシュレージエンを領有していた
- c. Die Geheimpolizei hat Peter erschossen.
 the secret_police.NOM PRF.3SG.PRS Peter.ACC shoot.PTCP
 秘密警察がペーターを射殺した
- d. Er hat der Polizei Peter übergeben.
 he.NOM PRF.3SG.PRS the police.DAT Peter.ACC hand_over.PTCP
 彼は警察にペーターを引き渡した

しかしこの一般化は、(6) に示すように、*Schlag*「殴打」など一部の名詞化には当てはまらない。

- (6) Der Schlag des Mannes hat sich vor Mitternacht ereignet.
 the hit.NOM the man.GEN PRF.3SG.PRS REF.ACC before midnight.DAT happen.PTCP
 = [男が誰かを殴ること] が夜半前に起こった
 ≠ [誰かが男を殴ること] が夜半前に起こった

(6') Er schlug den Mann.
he.NOM hit.3SG.PST the man.ACC
彼は男を殴った

Schlag の基盤動詞である *schlagen* 「殴る」は、(6') に示すように、対格の項をとって用いられる。一方、(6) の *der Schlag des Mannes* は、「男が誰かを殴ること」という意味では解釈されるが、「誰かが男を殴ること」という意味では解釈できない。つまり、*schlagen* の対格目的語は *Schlag* において属格で実現されないのである。

Schlag などの名詞化に見られるこの現象を、この論文では、「目的語属格の欠如」と呼ぶ。目的語属格の欠如は、先行研究ではその重要性が顧みられず、規則的な扱いのできない「語彙的な例外」として扱われることが少なくなかった。一方、この論文では目的語属格の欠如に積極的に注目し、第四の問題提起として、次の問いを設定する。

Q4. *Schlag* などの名詞化にみられる目的語属格の欠如は、どのようなメカニズムで生じるのか

以上四つの問いに対し、この論文では、動詞の項が「法と時制の解釈」のために実現されるのに対し、名詞の項の実現が「指示対象の同定」のために行われることを明らかにする。名詞化において指示対象とは状況であるから、この主張は、名詞化の項の実現が「状況の同定」という原理に則って行われることを意味する。

この論文は2部構成である。第I部では、名詞化の項の実現パターンを観察し、そのパターンを適切に条件づける規則の原理立った定式化を試みる。2章では、ドイツ語における名詞化の形態論的・意味論的な種別について論じる。3章では、項と項構造の概念について概観し、一般に動詞について論じられることの多い項構造の概念が、名詞にも拡張されることを述べる。また、項と項構造の概念に関して、この論文の議論で必要となるいくつかの理論装置を導入する。4章では、動詞の項実現について論じる。5章では、ドイツ語の名詞化に見られる項的な成分について、形式ごとに、その振る舞いを観察する。6章では、名詞化の項の理論化を試みた先行研究である Bierwisch (1989), Ehrich & Rapp (2000) および Bücking (2012) について、それぞれが提案するモデルを批判的に検証する。7章では、「指示対象の同定」という観点から、名詞化の項実現に関する独自の理論化を行う。8章では、第I部のまとめを行う。

第 II 部は、*Schlag* などの名詞化における目的語属格の欠如という現象にフォーカスし、この現象が、第 I 部で提示した「指示対象の同定」という原理に基づく規則の帰結として導かれるものであることを明らかにする。9 章では、第 II 部で扱う目的語属格の欠如という現象について概観する。10 章では、この現象を巡り Rapp (2006) などの先行研究が主張する形態論仮説の問題点を指摘する。11 章では、目的語属格を欠くとされる名詞化が複数含まれている物理作用動詞の名詞化に注目し、この現象が、動詞における「二次的格付与」と関わっていることを主張する。12 章では、ung 名詞化でありながら目的語属格を欠く *Warnung* と *Mahnung* について論じる。13 章では、11 章と 12 章の議論から、目的語属格の欠如に動詞における「二次的格付与」が関係すると考えられることを背景として、「二次的格付与」という理論装置から連想される適用動詞の名詞化に注目する。14 章では、目的語属格を欠くとされる名詞化に現に実例として見出される例外的目的語属格について論じる。15 章では第 II 部のまとめを行う。最後に 16 章において、この論文全体についてまとめ、この論文の成果とさらなる研究への展望を示す。

第 I 部：名詞化の項の実現・解釈規則

2. 名詞化の種別について

名詞化と一口に言っても，その中には形態論の点でも意味論の点でも様々な種別のものが含まれる (cf. (7)/(8))。本章では，項構造という観点での名詞化の観察に先立ち，名詞化の形態論的・意味論的な種別と，各種別の特徴について概観する。

(7) 名詞化の形態論的な種別

- a. ung 名詞化: **Forschung** 「研究」 < **forschen** 「研究する」
- b. 語幹名詞化: **Schlag** 「殴打」 < **schlagen** 「殴る」
- c. e 名詞化: **Reise** 「旅行」 < **reisen** 「旅行する」
- d. 不定詞名詞化: (**das**) **Schlagen** 「殴ること」 < **schlagen** 「殴る」

(8) 名詞化の意味論的な種別

- a. 状況名詞化: **Erschießung** 「射殺」 < **erschließen** 「射殺する」
- b. 結果名詞化: **Ladung** 「積み荷」 < **laden** 「積み込む」
- c. 動作主名詞化: **Arbeiter** 「労働者」 < **arbeiten** 「働く」

以下では 2.1 節で形態論的な種別について，2.2 節で意味論的な種別について概観し，意味論的な種別の判別を巡る方法論的な問題について論じる。2.3 節では，項の実現という観点で他の名詞化とは異なる振る舞いをする不定詞名詞化に注目する。2.4 節では，この章のまとめを行う。

2.1. 名詞化の形態論的な種別

ドイツ語の名詞化には，状況名詞化 (cf. 2.2 節) に限っても，(9)–(11) にあげるように多様な形態論的種別がある。

(9) a. ung 名詞化

Die Ernennung eines neuen Finanzvorstands werde **zeitnah**
the appointment.NOM a new CFO.GEN FUT.3SG.SBJ1 soon
erfolgen, (DWDS: Die Zeit, 31.07.2013)¹
occur.INF
新しい CFO の指名は直ちに行われる予定とのことだ

¹ この論文では，コーパスからの引用例には出典の左に検索に利用したコーパスを明記する。DWDS はベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー (BBAW: Berlin-

b. 語幹名詞化

Der **Verkauf** der Energie erfolgt über einen Pool.

the sale.NOM the energy.GEN occur.3SG.PRS via a pool.ACC

(DWDS: Berliner Zeitung, 29.09.1999)

エネルギーの売却はプール制で行われる

c. e 名詞化

Die **Reise** nach Dresden-Neustadt beginnt freitags und

the journey.NOM to Dresden-Neustadt.DAT start.3SG.PRS on_Fridays and

sonnabends um 18.09 Uhr. (DWDS: Berliner Zeitung, 11.08.2005)

on_Saturdays at 18.09

ドレスデン新市街へのツアーは毎週金曜日・土曜日 18 時 09 分に開始する

(10) a. ion 名詞化

Die **Operation** dauerte 96 Stunden.

the operation.NOM last.3SG.PST 96 hour.PL.ACC

手術は 96 時間続いた (DWDS: Der Tagesspiegel, 13.09.2004)

b. erei 名詞化

Die **Schießerei** ereignete sich in einem Wohngebiet.

the shooting.NOM occur.3SG.PST RFL.ACC in a residential_area.DAT

銃乱射事件は住宅地の中で起こった (DWDS: Die Zeit, 24.08.2010)

c. er 名詞化

Bei einem belanglosen **Rempler** mit einem anderen Auto löste

in a slight jostle.DAT with an another car.DAT release.3SG.PST

ihr Airbag aus. (DWDS: Die Zeit, 03.07.2016)

her airbag.NOM PTCL

別の車との軽い衝突の際にエアバッグが作動した

Brandenburgische Akademie der Wissenschaften) が公開するドイツ語デジタル辞典 (Digitales Wörterbuch der deutschen Sprache: cf. www.dwds.de), DEREKo はマンハイムのドイツ語研究所 (IDS: Institut für Deutsche Sprache) が公開するドイツ語代表コーパス (Deutsches Referenzkorpus: cf. www.ids-mannheim.de/kl/projekte/korpora) を表す。なお、引用例の強調・省略・補足はすべて筆者による。

(11) 不定詞名詞化

Das Gute-Böse-Schema aus der Zeit der Systemkonfrontation
the good-evil-scheme.NOM from the time.DAT the system-confrontation.GEN
kann das **Vollenden** der Einheit nicht leisten.
can.3SG.PRS the completing.ACC the integration.GEN not accomplish.INF

(DWDS: Berliner Zeitung, 18.01.1997)

体制対立時代の善悪の図式では統一の完成を成し遂げることはできない

このうち、(9) に挙げた 3 種類の名詞化 (ung 名詞化, 語幹名詞化, e 名詞化) は, ドイツ語の状況名詞化の中で中心的な地位を占める無標の名詞化と言える。とくに ung 名詞化は現代ドイツ語において生産性が高く, Wellmann (1975: 245) が行ったコーパス調査の報告によれば,² 状況名詞化の 50.2%が ung 名詞化であり, 次点の不定詞名詞化 (13.1%) を大きく上回る非常に高い割合を占めているという。語幹名詞化と e 名詞化については, Wellmann (1975: 245) の報告では, 語幹名詞化は 11.3%, e 名詞化は 3.8%と, 独立のグループとしてはさほど高い割合を占めているわけではないものの, この 2 種類は区別されずにひとつのグループとして扱われることもあることから (cf. Ullmer-Ehrich 1977), 両者を合算すると, 15.1%と, 不定詞名詞化の 13.1%を上回って ung 名詞化に次ぐ割合となる。

(12) Wellmann (1975: 245) の報告

ung 名詞化	2086	50.2%
不定詞名詞化	546	13.1%
語幹名詞化	471	11.3%
e 名詞化	160	3.8%
その他	894	21.5%
Σ		4157

² Wellmann (1975:18) によれば, この調査はマンハイムのドイツ語研究所 (Institut für Deutsche Sprache) で当時利用可能だった 7 つの語彙目録, 民話やドイツ連邦共和国基本法といった広範なジャンルの追加テキスト 15 編, Wörterbuch der Gegenwartssprache と Wörterbuch der Umgangssprache の 2 つの辞典および若干の混合テキストを対象としているとのことである。収録テキストの詳細については, Wellmann (1975: 470-476) を参照されたい。

そのためこの論文では、ung 名詞化、語幹名詞化、e 名詞化の 3 種類の名詞化を主な観察対象とする。

これに対し、(10) に挙げた ion 名詞化、erei 名詞化、er 名詞化は、ドイツ語の状況名詞化の中で明らかに有標な名詞化である。例えば、ion 名詞化はラテン語の派生接尾辞-tiō に由来する形式で、このタイプの名詞化を形成するのは(13) のような外来語の動詞に限られる。erei 名詞化は、「動作の反復を表す」あるいは「好ましくないというニュアンスをともなう」という特徴があり、意味の点で有標である。

- (13) a. Operation 「手術」 < operieren 「手術する」 < 羅 operō
b. Explosion 「爆発」 < explodieren 「爆発する」 < 羅 explōdō

- (14) a. Schießerei 「乱射事件」 < schießen 「撃つ」
b. Träumerei 「絵空事」 < träumen 「夢を見る」
c. Spielerei 「くだらない遊び」 < spielen 「あそぶ」

er 名詞化は、(15) のような動作主名詞化としては無標な名詞化であるものの、状況を表す名詞化としては、(16) に挙げるような使用頻度の低いわずかな語に限られており、きわめて有標である (cf. Schäfer 2008)。

- (15) a. Arbeiter 「労働者」 < arbeiten 「働く」
b. Lehrer 「教師」 < lehren 「教える」
c. Sprecher 「話し手」 < sprechen 「話す」

- (16) a. Hüpfen 「びよんびよん跳ねること」 < hüpfen 「びよんびよん跳ねる」
b. Piepsen 「ピーピー鳴ること」 < piepsen 「ピーピー鳴る」
c. Jauchzen 「喝采すること」 < jauchzen 「喝采する」

そのため、ion 名詞化、erei 名詞化、er 名詞化については、この論文では観察から除外する。

(11) に挙げた不定詞名詞化は、頻度の点では ung 名詞化に劣るものの、適用可能な動詞が語彙的に制約されておらず基本的にどの動詞にも適用できる点で、高い生産性を備えた名詞化である (cf. (17))。

- (17) a 不定詞名詞化: ^{OK}Schlagen, ^{OK}Treten, ^{OK}Behandeln, ^{OK}Erschießen
 b. ung 名詞化: *Schlagung, *Tretung, ^{OK}Behandlung, ^{OK}Erschießung
 c. 語幹名詞化: ^{OK}Schlag, ^{OK}Tritt, *Behandel, *Erschuss

不定詞名詞化との区別のため, ung 名詞化, 語幹名詞化, e 名詞化を「派生名詞化」と呼ぶ。不定詞名詞化を巡っては, 項に関して派生名詞化とは異なる特徴が認められることが Blume (2004), Kaufmann (2005), Bücking (2010) といった研究によって指摘されている。Bierwisch (1989) が述べているように, 派生名詞化では, 項の実現は基本的に任意である。ところが不定詞名詞化は, 基盤動詞が目的語の義務的な他動詞である限りにおいて, 目的語に対応する項が義務的である。例えば, ung 名詞化である (18a) の *die Fertigstellung der Möbel* 「その家具の仕上げ」は, 属格の *der Möbel* を削除しても成り立つのに対し, 不定詞名詞化である (18b) の *das Fertigstellen der Möbel* 「その家具を仕上げること」は, 属格を削除すると容認されない表現となってしまう。

- (18) a. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Die Fertigstellung** ^{OK}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completing.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

- b. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Das Fertigstellen** ^{??}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completings.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

残念ながらそのショーケースは一月より前には届けられません。高い需要のため, 一か月以内で(その家具を)仕上げることはできません。

したがって, 項がどのように実現されるのかという観点から名詞化に注目する場合, 不定詞名詞化については, 項に関する派生名詞化と異なる性質が何に起因しているのかということが解明すべき課題となる。

2.2. 名詞化の意味論的な種別

名詞化は、意味論の観点からも複数の種別に分類することができる。例えば、(19a) は基盤動詞によって表されるのと同じ「状況」を表す状況名詞化、(19b) は状況の結果として生み出される結果生成物を表す結果名詞化、(19c) は状況に動作主として参与する項を表す動作主名詞化である。

- (19) a. 状況名詞化: *Erschießung* 「射殺」 < *erschießen* 「射殺する」
b. 結果名詞化: *Ladung* 「積み荷」 < *laden* 「積み込む」
c. 動作主名詞化: *Arbeter* 「労働者」 < *arbeiten* 「働く」

この論文において主な観察対象となる *ung* 名詞化、語幹名詞化、*e* 名詞化の 3 種類の名詞化は、状況名詞化としての解釈と結果名詞化としての解釈を併せ持つことが珍しくない。例えば、*Überdachung* (< *überdachen* 「屋根をふく」) は、文脈に応じて、(20a) のように状況名詞化となることも、(20b) のように結果名詞化となることもある。

- (20) a. 状況名詞化

Die Überdachung des Platzes erfolgte in zwei Monaten.
the roofing.NOM the square.GEN occur.3SG.PST in two month.PL.DAT
広場への屋根の設置は 2 か月で行われた

- b. 結果名詞化

Man hat **die Überdachung** abmontiert.
one.NOM PRF.3SG.PRS the roof.ACC remove.PTCP
屋根が取り外された

状況名詞化と結果名詞化の違いは項の振る舞いとも関係している。例えば、*Entdeckung* (< *entdecken* 「発見する」) という名詞化は、(21a) のように状況名詞化として用いられる場合には動詞の目的語の項を属格で実現することができるのに対し、(21b) のように結果名詞化として用いられる場合には、この項を属格で統語的に表すことができない。

- (21) a. **Die Entdeckung des Penicillins** war ein Zufall.
the discovery.NOM the penicillin.GEN be.3SG.PST a coincidence.NOM
ペニシリンの発見は偶然だった

b. ***Die Entdeckung des Penicillins** liegt im Medikamentenschrank.
the discovery.NOM the penicillin.GEN lie.3SG.PRS in_the drug_cabinet.DAT

b'. **Die Entdeckung** liegt im Medikamentenschrank.
the discovery.NOM lie.3SSG.PRS in_the drug_cabinet.DAT
発見品は薬品棚においてある

(21') Sir Alexander Fleming entdeckte das Penicillin.
Sir Alexander Fleming.NOM discover.3SG.PST the penicillin.ACC
サー・アレクサンダー・フレミングがペニシリンを発見した

(21) のような例の観察から、名詞化の項を巡る議論では、長い間、「状況名詞化は項を持ち、結果名詞化は項を持たない」と想定されてきた (cf. Helbig 1976, 1986, Grimshaw 1990, Asher 1993, Pustejovsky 1996 etc.)。この想定は、Bierwisch (1989) や Ehrich & Rapp (2000) が (22) のような例とともに反論しているように、結果名詞化の中にも項とみられる成分をとる名詞化があることから、正しくないものである。にもかかわらず、依然として多くの研究が、この想定をとり続けている。

(22) **Die Bemalung der Kuppel** ist beschädigt.
the painting.NOM the dome.GEN be.3SG.PRS damaged (Ehrich & Rapp 2000: 276)
丸天井の天井画が傷んでいる

(22') Er bemalte die Kuppel mit Farbe.
he.NOM paint.3SG.PST the dome.ACC with color.DAT
彼は丸天井にペンキを塗った

多くの研究が上述の想定に則っていることから、名詞化の項に関する研究は、状況名詞化を対象とした議論が経験的にも理論的にも先行して様々な成果を挙げている一方で、結果名詞化を対象とした議論はあまり進んでいない。こうした研究状況を背景として、この論文では、結果名詞化にも項を持つものがあるという Bierwisch (1989) や Ehrich & Rapp (2000) の指摘については受け入れつつも、結果名詞化の項の振る舞いについては今後の研究課題のひとつと位置づけ、以下での議論は研究の進んでいる状況名詞化を対象を絞って進めることにする。

Überdachung「屋根葺き・屋根」や *Entdeckung*「発明・発明品」のように、状況名詞化としての解釈と結果名詞化としての解釈を併せ持つ名詞化は少なくない。このような名詞化について、状況名詞化の解釈と結果名詞化の解釈を峻別するには、通例、述語の選択制限が利用される。例えば、*x war ein Zufall*「xは偶然だった」は状況を選択する述語であり、*x liegt im Medikamentenschrank*「xは薬品棚においてある」は物体を選択する述語である。そのため、*x war ein Zufall*という述語がとる名詞化は状況名詞化であり、*x liegt im Medikamentenschrank*という述語がとる名詞化は結果名詞化であると判断できるのである。状況を選択する述語は様々だが、一例を挙げると、(23)の述語が該当する。(23a)は状況の実施・発生を表す述語、(23b)は状況の時間的な性質を述べる述語、(23c)は状況であるということを明示する述語である。

- (23) a. *x erfolgt*「xが起こる」、*x geschieht*「xが起こる」、*x findet statt*「xが行われる」
b. *x fängt an*「xが始まる」、*x dauert*「xが続いている」、*x endet*「xが終わる」
c. *x ist ein Zufall*「xは偶然だ」、*x ist ein Unfall*「xは事故だ」、*x ist ein Skandal*「xは事件だ」

選択制限を利用した名詞化の意味論的種別の経験的峻別は、Ehrich & Rapp (2000) や Dölling (2015) をはじめとして、多くの先行研究において採用されている手法である。しかし、この手法には、以下に示す留意点がある：

1. 意味論的種別の判別を企図して作られた作例は、選択制限とは別の要因によって不自然な文となることがある。例えば (24) は、状況解釈を持つ名詞化が状況を選択する述語に表れているにも関わらず、話者によって奇異な印象を受ける文となっている。³ これは、発生したかどうかを問題とする *x ist geschehen* という述語と、*der Bruch des Dammes* という定の状況がそぐわないことによるものと考えられる。同じ *der Bruch des Dammes* でも、(25) のように別の種類の状況の述語と組み合わせれば、この不自然さは解消される。

³ この判断はノルトライン・ヴェストファーレン州出身の20代男性による。

(24) **Der Bruch des Dammes** ist **geschehen**.
 the break.NOM the dam.GEN PRF.3SG.PRS happen.PTCP

(25) **Der Bruch des Dammes** war **ein außergewöhnliches Ereignis**.
 the break.NOM the dam.GEN be.3SG.PST an extraordinary event.NOM
 ダムの決壊は異常な出来事だった

このように、述語の選択制限によって名詞化の意味論的種別を判別する際には、その表現の不自然さが選択制限の不一致によるものなのかどうかを考慮しなくてはならない。

2. 多くの述語は、状況名詞化と結果名詞化の峻別に寄与するような選択制限を持っていない。例えば、*x kostet 20.000 Schilling* 「xには20,000シリングの費用がかかる」という述語は、状況の項も物体の項もとることができる。そのため、(26)では、*die Füllung eines 3000-Liter-Heizöltanks* が「3000L灯油タンクを満タンにすること」という状況名詞化なのか「3000L灯油タンクいっぱいの灯油」という結果名詞化なのかは判断がつかない。

(26) **Etwa 20.000 Schilling** kostet **die Füllung eines 3000-Liter-Heizöltanks** zur Zeit,
 about 20,000 shilling.PL.ACC cost.3SG.PRS the filling.NOM a 3000-liter-fuel-oil-tank.GEN for now
 (DEREKO: Kleine Zeitung, 13.09.2000)
 3000L 灯油タンクを満タンにすること (状況) / 3000L 灯油タンクいっぱいの灯油 (結果) は、現在、約 20,000 シリングする

そのため、(26) のようなコーパスの実例をもとに名詞化を観察する際には、多くの例で意味的種別の峻別が不可能である。

2 点目に関して、この論文では次善策として、コーパスの実例をもとに状況解釈と結果解釈を併せ持つ名詞化を観察する場合、「明らかに状況解釈ではない名詞化」と「状況として解釈し得る名詞化」を区別し、後者のみを観察対象とすることにする。例えば、上の (26) に挙げた例は「状況として解釈し得る名詞化」として観察対象に加える一方、下の (27) に挙げる例は、「明らかに状況解釈ではない名詞化」として観察対象に含めない。

- (27) **Die Füllung** ist aus Wolle, Holzwohle, Kapok oder
 the filling.NOM be.3SG.PRS of wool.DAT, wood-wool.DAT, kapok.DAT or
Stahlgranulat. (DEREKO: die tageszeitung, 07.12.2002)
 steel-granul.DAT
 (ぬいぐるみの) 中味は羊毛や木毛, カポックあるいはスチール粉で
 できている

この問題に対応する方策としては、上述の策の他に、「明らかに状況解釈である名詞化」のみを観察するという方策も考えられる。しかし、そのような方策は、あまりにも多くの例を「結果名詞化として解釈し得る名詞化」として排除しなくてはならなくなってしまう、経験的対象を不当に狭く限定してしまうことから適当ではない。

2.3. 不定詞名詞化の項の義務性

2.1 節でも述べたように、不定詞名詞化には項に関して派生名詞化とは異なる性質が認められる。すなわち、派生名詞化は項が基本的に任意なのに対し、不定詞名詞化は、基盤動詞が目的語の義務的な他動詞である限り、義務的な項を持つ。

- (28) a. **Die Vitrinen** können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Die Fertigstellung** ^{OK}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completing.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (= (18a))
- b. **Die Vitrinen** können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Das Fertigstellen** ^{??}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completings.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (= (18b))

残念ながらそのショーケースは一月より前には届けられません。高い需要のため、一か月以内に(その家具を)仕上げることはできません。

また、他動詞の不定詞名詞化には、派生名詞化では目的語でなく主語の項が属格となるような場合でも、同じ動詞の不定詞名詞化では一貫して目的語の項が属格となり、主語の項は属格とならないという特徴もある。

- (29) a. **Die Messung des Ingenieurs/ der Emmision** wirds
the measurement.NOM the engineer.GEN/ the emission.GEN PASS.3SG.PRS
fortgesetzt. (Ehrich 2002b:75)
continue.PTCP
- b. **Das Messen *des Ingenieurs/ der Emmision** wird
the measuring.NOM the engineer.GEN/ the emission.GEN PASS.3SG.PRS
fortgesetzt. (Ehrich 2002b:76)
continue.PTCP
技師の／排出量の計測が続いている

本節では、項に関する不定詞名詞化の性質について、先行研究で指摘された不定詞名詞化の意味的特徴との関係を考察する。

2.3.1. 不定詞名詞化と Grimshaw (1990) の CENs

Blume (2004) と Bücking (2010) は、不定詞名詞化が Grimshaw (1990) の言う CEN (complex event nominal: 複雑状況名詞) に該当する一方、派生名詞化は Grimshaw (1990) の言う SEN (simple event nominal: 単純状況名詞) に該当すると主張している。CEN とは、「動詞のようなアスペクトを持った状況名詞化」と定義される名詞化である。一方、SEN は、「ある種の状況を表すものの、アスペクトは持たない名詞」と定義される。ここでいう「アスペクト」とは「状況の内的構成」という意味であり (Grimshaw 1990: 26), 次節で述べる一般的な言語学用語としてのアスペクト (cf. Comrie 1976) とは異なるものである。Grimshaw (1990) において、CEN と SEN は、項の義務性を経験的な基準として区別されている。Grimshaw (1990) が CEN としているのは (30) の英語の例であり、SEN としているのは (31) の英語の例である。

- (30) a. **The frequent expression *(of one's feelings) is desirable.** (Grimshaw 1990: 50)
自分の感情を頻繁に表現することは望ましい

- b. **The enemy's destruction *(of the city) was awful to watch.** (Grimshaw 1990: 52)

敵の都市の破壊は見るに堪えなかった

- (31) a. **The expression is desirable.** (Grimshaw 1990: 50)

その表現は望ましい

- b. **The destruction was awful to watch.** (Grimshaw 1990: 52)

その破壊は見るに堪えなかった

- c. **The trip took a long time.** (Grimshaw 1990: 59)

その旅行は長い時間がかかった

Grimshaw (1990) は、CEN と SEN の本質的な違いが、その名詞化が「アスペクト」、すなわち状況の内的構成を持つかどうかであるとされる。CEN に内的構成があり、SEN には内的構成がないという認識は、「複雑」事象名詞と「単純」事象名詞という名づけにも反映している。

Grimshaw (1990) は、「項を持つか否か」という性質が、「アスペクト」を持つか否かという性質と連動するとしている。Grimshaw (1990) によれば、動詞が項を持つのは動詞に「アスペクト」があるからであり、CEN が項を持つのも CEN に「アスペクト」があるからである。反対に、SEN はある種の状況を表してこそいるものの、「アスペクト」を捨象し、状況のある種の「物」のようにとらえるため、項を持たないとする。

CEN には「アスペクト」があり、SEN には「アスペクト」がないという主張の経験的な根拠とされるのが、CEN が (32) のように単数形のまま *frequent* のような付加語と共起するのに対し、SEN は (33) のように単数形ではこうした付加語と共起しないという観察である。Grimshaw (1990) において、この観察は、*frequent* のような付加語は状況の「アスペクト」を修飾するので、「アスペクト」のある CEN とは共起する一方、「アスペクト」のない SEN は、そのままでは *frequent* のような付加語と共起しないということを表すものと説明される。

- (32) **The frequent expression of one's feelings is desirable.**

自分の感情を頻繁に表現することは望ましい

- (33) a. ***The frequent trip was a nuisance.**

- d. **The frequent trips were a nuisance.**

頻繁な出張は厄介だった

この観察に関係して、Blume (2004) は、ドイツ語の不定詞名詞化と派生名詞化の対比にも *häufig* 「頻繁な」などの付加語を巡って同様の観察が当てはまると述べている。すなわち、Blume (2004) によれば、不定詞名詞化はこうした付加語と共起するのに対し、派生名詞化は、単数形ではこうした付加語と共起しないという。⁴

- (34) a. das häufige Renovieren der Wohnung (Blume 2004: 22)
 the frequent renovating.NOM the apartment.GEN
 住居を頻繁にリフォームすること
- b. *die häufige Renovierung der Wohnung (Blume 2004: 22)
 the frequent renovation.NOM the apartment.GEN

しかし、「アスペクト」を修飾する付加語と共起しないからと言って、その名詞に「アスペクトがない」と結論付けるのは論理に飛躍がある。というのも、*frequent* や *häufig* と共起しないという観察からは、その名詞にも「アスペクト」自体はあるものの、それが「*frequent* や *häufig* と相容れないようなアスペクトである」という推論も導けるからである。*frequent* や *häufig* は頻度の高さを表す付加語であるから、状況を表す名詞がこれらの付加語と共起するかどうかは、その状況の「アスペクト」が反復的解釈を認めるか否かということを反映していると考えられる (cf. Hartmann 2016: 105)。つまり、名詞化が *häufig* と共起しないのは、その名詞化に「アスペクトがない」ことを示しているのではなく、その名詞化が表す状況が反復的には解釈できないことを反映していると考えられるのである。実際に、同じ動詞を基盤動詞とする不定詞名詞化であっても、(35a) のように反復的解釈が可能な文脈では *häufig* と共起し得るのに対し、(35b) のように反復的な解釈が不可能な文脈では、*häufig* による修飾は認められない。

⁴ ただし、Bücking (2010) は、ドイツ語の不定詞名詞化が CEN であるという点では Blume (2004) と意見を同じくしているものの、*häufig* が単数形の派生名詞と共起しないという観察については内省を共有できないとしている。

- (35) a. **Das häufige Erschießen mächtiger Politiker** verunsichert
 the frequent killing.NOM powerful politician.PL.GEN unsettle.3SG.PRS
 die Öffentlichkeit.
 the public.ACC
 有力な政治家たちが頻繁に射殺されることが世間を不安にしている
- b. ***Das häufige Erschießen Kennedys** verunsichert die Öffentlichkeit.
 the frequent killing.NOM Kennedy.GEN unsettle.3SG.PRS the public.ACC

このように、「アスペクト」の有無によって規定される CEN/SEN というカテゴリーの妥当性がそもそも疑わしいことから、不定詞名詞化における項の義務性を、不定詞名詞化が CEN であることによるものとするのは適当ではない。

2.3.2. 不定詞名詞化の不完了相性

ドイツ語の不定詞名詞化を巡っては、これが、英語やロシア語のような文法的アスペクト形式を持つ言語における不完了相の形式（英語で言えば進行相）と同じような、不完了相をコードする文法的アスペクト形式であるという議論がある (cf. Esau 1973, Ullmer-Ehrich 1977, Bartsch 1981, 1986, Cate 1985, Ehrich 1991)。ここでいうアスペクトは、前節と異なり、一般的な言語学用語としてのアスペクト (cf. Comrie 1976) である。

状況は、一局面ではなく全体を「外側」からとらえることも、経過・局面に注目して「内側」からとらえることもできる。文法的に体系化されたアスペクト形式を持つ言語では、状況を「外側」からとらえる場合には完了相の形式が、状況を「内側」からとらえる場合には不完了相の形式が用いられる。ドイツ語は通常、文法的なアスペクト形式を持たない言語とみなされているが、Ullmer-Ehrich (1977) や Ehrich (1991) は、ドイツ語でも派生名詞化と不定詞名詞化の対立に文法的なアスペクト形式としての機能があると主張している。Ehrich (1991: 451) によれば、(36a) の *die Reise ohne Gepäck* は「旅行」という状況の一局面ではなく全体を「外側」からとらえるのに対し、(36b) の *das Reisen ohne Gepäck* は経過に注目して状況を「内側」からとらえる表現であるという。つまり、(36a) の *die Reise ohne Gepäck* は、「旅行の始めから終わりまで一貫して荷物を持っていなかった」と解釈されるのに対し、(36b) の *das Reisen ohne Gepäck* は「旅行のある局面において、荷物を持っていなかった」という解釈が認められるということである。

- (36) a. **Die Reise ohne Gepäck** hat Spaß gemacht.
 the travel.NOM without luggage.ACC PRF.3SG.PST fun.ACC make.PTCP
 荷物なしでの旅行は楽しかった (Ehrich 1991: 451)
- b. **Das Reisen ohne Gepäck** hat Spaßgemacht.
 the traveling.NOM without luggage.ACC PRF.3SG.PST fun.ACC make.PTCP
 荷物なしで旅行するのは楽しかった (Ehrich 1991: 451)

派生名詞化と不定詞名詞化の対立に文法的なアスペクト形式としての機能があるという主張の経験的な根拠は、*retten*「救助する」のような達成動詞 (cf. Vendler 1967) の名詞化の観察から得られる。達成動詞は語彙的に *telic* で、内在的終了のある状況を表し、*in zwei Stunden*「2時間で」のような期限の副詞規定とは共起するが、*zwei Stunden lang*「2時間」のような継続の副詞規定とは共起しない。

- (37) Peter rettete den Ertrinkenden in zwei Stunden/
 Peter.NOM rescue.3SG.PST the drowning_man.ACC in two hour.PL.DAT/
 *zwei Stunden lang.
 two hour.PL.ACC long
 ペーターは溺れかけている人を 2 時間で / *2 時間 救助した

達成動詞の派生名詞化では、基盤動詞と同じく *telic* な状況があらわされる。そのため、*die Rettung des Ertrinkenden*「溺れかけている人の救助」は、*x muss bis morgen früh erreicht sein*「x は明日の朝までに達成されていなくてはならない」のような *telic* な状況を選択する述語には現れるが、*x wird zwei Stunden lang fortgesetzt*「x は 2 時間継続される」のような *atelic* な状況を選択する述語には現れない。

- (38) a. **Die Rettung des Ertrinkenden** muss bis morgen früh
 the rescue.NOM the drowning_man.GEN must.3SG.PRS by tomorrow morning
 erreicht sein. (Ullmer-Ehrich 1977: 128)
 accomplish.PTCP be.INF
 溺れている人の救出は明日の朝までに達成されていなくてはならない。

- b. ***Die Rettung des Ertrinkenden** wird zwei Stunden lang
 the rescue.NOM the drowning_man.GEN PASS.3SG.PRS two hour.PL.ACC long
 fortgesetzt. (Ullmer-Ehrich 1977: 128)
 continue.PTCP

一方、不定詞名詞化では、基盤動詞が *telic* な達成動詞であっても、*atelic* な状況が表される。そのため、*das Retten des Ertrinkenden* 「溺れている人を救助すること」という不定詞名詞化は、*x muss bis morgen früh erreicht sein* 「x は明日の朝までに達成されていなくてはならない」のような *telic* な状況を選択する述語には現れず、*x wird zwei Stunden lang fortgesetzt* 「x は 2 時間継続される」のような *atelic* な状況を選択する述語に現れる。

- (39) a. ***Das Retten des Ertrinkenden** muss bis morgen früh
 the rescuing.NOM the drowning_man.GEN must.3SG.PRS by tomorrow morning
 erreicht sein. (Ullmer-Ehrich 1977: 128)
 accomplish.PTCP be.INF
- b. **Das Retten des Ertrinkenden** wird zwei Stunden
 the rescuing.NOM the drowning_man.GEN PASS.3SG.PRS two hour.PL.ACC
 lang fortgesetzt. (Ullmer-Ehrich 1977: 129)
 long continue.PTCP
 溺れている人の救助活動は 2 時間継続される

派生名詞化と不定詞名詞化の対立に文法的なアスペクト形式としての機能があるという Ullmer-Ehrich (1977) や Ehrich (1991) の洞察は示唆に富むものである。とはいえ、不定詞名詞化に不完了相のアスペクト形式としての機能があったとしても、この機能と、項に関する不定詞名詞化の性質の関係は容易には説明がつかないように思われる。したがって、項を巡る不定詞名詞化の性質について説明するには、不定詞名詞化のアスペクト形式的な特徴とは別の特徴に注目する必要がある。

2.3.3. 内包の表現としての不定詞名詞化

詳しくは 7 章の 7.5 節で改めて論じるが、不定詞名詞化には、「具体的状況を表し難い」という特徴がある。この特徴に言及した研究としては、関口 (1960) を挙げることができる。関口 (1960: 785–821) は、不定詞名詞化を「名詞分詞」ないし「分詞名詞」と呼び、不定詞名詞化に付される定冠詞は、文脈上唯一の

存在を表すという定冠詞本来の意味をもたない「形式定冠詞」の一種であるとしている。

派生名詞化は、特定の具体的状況を表すこともあれば、一般的な状況を表すこともある。例えば、(40a) の *die Ermordung John F. Kennedys* 「ジョン・F・ケネディの殺害」と (40b) の *die Besteigung des Mount Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay* 「サー・エドモント・ヒラリーとテンジン・ノルゲイによるエベレスト山登頂」は、歴史上の事件であり、ある特定の具体的状況を表している。

- (40) a. Als wir in Geschichte **über die Ermordung John F. Kennedys**
 as we.NOM in History.DAT about the murder.ACC John F. Kennedy.GEN
 sprachen, fragten wir uns, ob es einen solchen
 talk.3PL.PST wonder.3PL.PST we.NOM REF.ACC if it.NOM a such
 Aufschrei wie damals auch geben würde, wenn so etwas
 outcry.ACC as that_time also give.INF FUT.3SG.SBJ2 if such a_thing.NOM
 mit Trump passieren würde. (DWDS: Die Zeit, 09.04.2017, Nr. 15)
 to Trump.DAT happen.INF FUT.3SG.SBJ2

私たちは歴史の授業でジョン・F・ケネディの殺害について話した際、もし同じことがトランプ大統領に起きたら、当時のような悲鳴が起きるだろうかと考えた

- b. Im kommenden Jahr jährt sich **die Besteigung des Mount**
 in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount
Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay zum
 Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the
 50sten Mal. (DWDS: Der Tagesspiegel, 22.12.2002)
 50th times.DAT

来年にはサー・エドモント・ヒラリーとテンジン・ノルゲイによるエベレスト山登頂から 50 年を迎える

一方、(41a) の *die Ermordung einer bestimmten Volksgruppe* 「特定の民族集団の殺害」と、(41b) の *die Besteigung des Mount Kinabalu* 「キナバル山への登頂」は一般化された状況であり、ある時点に発生した特定の具体的状況を指しているわけではない。

- (41) a. In Syrien und Aleppo geht es, anders als in
 in Syria.DAT and Aleppo.DAT is_going.3SG.PRS it.NOM differently as in
 Ruanda oder Srebrenica, nicht um **die Ermordung einer**
 Rwanda.DAT or Srebrenica.DAT not about the murder.ACC a
bestimmten Volksgruppe. (DWDS: Die Zeit, 22.12.2016)
 certain ethnic_group.GEN
 シリアとアレppoで起きているのは、ルワンダやスレブレニツァと違
 い、特定の民族集団の殺害ではない
- b. Für **die Besteigung des Mount Kinabalu** gilt der März als
 for the climbing.ACC the Mount Kinabalu.GEN is.3SG.PRS the March.NOM as
günstigster Monat. (DWDS: Der Tagesspiegel, 13.08.1999)
 favorable month.NOM
 キナバル山に登るには3月はよい月だ

派生名詞化と違い、不定詞名詞化は、特定の具体的状況を表す文脈にはそぐ
 わない。このことは、歴史上の事件を表す (40ab) が、(40') のように不定詞名
 詞化ではパラフレーズできないことからわかる。

- (40') a. ^{??}Als wir in Geschichte **über das Ermorden John F. Kennedys**
 as we.NOM in History.DAT about the murder.ACC John F. Kennedy.GEN
 sprachen, fragten wir uns, ob es einen solchen
 talk.3PL.PST wonder.3PL.PST we.NOM REF.ACC if it.NOM a such
 Aufschrei wie damals auch geben würde, wenn so etwas
 outcry.ACC as that_time also give.INF FUT.3SG.SBJ2 if such a_thing.NOM
 mit Trump passieren würde.
 to Trump.DAT happen.INF FUT.3SG.SBJ2
- b. ^{??}Im kommenden Jahr jährt sich **das Besteigen des Mount**
 in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount
Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay zum
 Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the
 50sten Mal.
 50th times.DAT

一方、一般的な状況を表す (41ab) は、(41') のように不定詞名詞化によって問
 題なくパラフレーズすることができる。

- (41') a. ^{OK}In Syrien und Aleppo geht es, anders als in
 in Syria.DAT and Aleppo.DAT is_going.3SG.PRS it.NOM differently as in
 Ruanda oder Srebrenica, nicht um **das Ermorden einer**
 Rwanda.DAT or Srebrenica.DAT not about the murder.ACC a
bestimmten Volksgruppe.
 certain ethnic_group.GEN
- b. ^{OK}Für **das Besteigen des Mount Kinabalu** gilt der März als
 for the climbing.ACC the Mount Kinabalu.GEN is.3SG.PRS the March.NOM as
 günstigster Monat.
 favorable month.NOM

もつとも、不定詞名詞化が用いられている文でも、特定の状況が念頭に置かれていることはある。例えば (42) では、「チームが決勝に進出する」という具体的状況が現に存在していることは明らかである。

- (42) **Trotz des Erreichens des Finales der Champions League** hält
 despite the reaching.GEN the final.GEN the Champions League.GEN hold.3SG.PRS
 sich Klopp mit Europacup-Prognosen zurück.
 REF.ACC Klopp.NOM with European-Cup_prediction.PL.DAT PTCL
 (DWDS: Die Zeit, 29.05.2013)
 チャンピオンズリーグの決勝に到達してもクロップは優勝の見込み
 について意見を差し控えている

しかし、(42) の名詞化はその具体的状況を積極的に指示しているわけではなさそうである。というのも、*trotz* の与格支配を認める話者は、この文を書き換えるなら (42'a) のように無冠詞の表現に書き換える方が (42'b) のように定の表現として書き換えるよりも自然であるとするからである。

- (42') a. **Trotz Erreichen des Finales der Champions League** hält
 despite reaching.DAT the final.GEN the Champions League.GEN hold.3SG.PRS
 sich Klopp mit Europacup-Prognosen zurück.
 REF.ACC Klopp.NOM with European-Cup_prediction.PL.DAT PTCLS

- b. [?]Trotz dem Erreichen des Finales der Champions League hält
 despite the reaching.DAT the final.GEN the Champions League.GEN hold.3SG.PRS
 sich Klopp mit Europacup-Prognosen zurück.⁵
 REF.ACC Klopp.NOM with European-Cup_prediction.PL.DAT PTCL

したがって、(42) の名詞化に付されている定冠詞には文脈上唯一の存在を表す働きはなく、この名詞化は、具体的状況と対応こそしているものの、外延を特定して指示しているわけではないのである。

以上の観察から、筆者は、不定詞名詞化が、特定の状況が念頭に置かれている場合でも、あくまで「状況の内包的表現」ととどまっておき、その状況を指示しているわけではないと考える。項を巡る不定詞名詞化の特徴には、この「内包的表現にとどまり、指示を行わない」という不定詞名詞化の特徴が関係しているのである。不定詞名詞化の「状況の内包的表現」という特徴と項に関する特徴の関係については、派生名詞化の項実現の原理について論じた後、7章の7.5節において改めて詳述する。

2.4. まとめ

本章では、ドイツ語の名詞化の形態論的・意味論的な種別とその特徴について概観した。ドイツ語の名詞化は、形態論的な観点からも、意味論的な観点からも、様々な種別に分類できる。この論文では、形態論的な種別として *ung* 名詞化、語幹名詞化、*e* 名詞化の3種類の派生名詞化を、意味論的な種別として状況名詞化を議論の主な対象とする。不定詞名詞化には、項に関して派生名詞化とは異なる性質が認められる。派生名詞化の項は一般に任意であるが、不定詞名詞化には義務的な項が存在するのである。そのため、不定詞名詞化については、項に関する派生名詞化とは異なる性質が何に起因するものなのかということが解明すべき課題となる。

⁵ この例の疑問符は、上の例の書き換えとしての不適格性を表す。この判断はノルトライン・ヴェストファーレン州出身の20代男性による。

3. 項と項構造について

項と項構造は、理論的立場の違いによらず、ほとんどの枠組みの言語研究において重要な役割を与えられた理論装置である。本章では、この理論装置に関する基本的な概念を導入し、この論文における議論に必要となる理論上の拡張を行う。

3.1 節では、導入として、動詞を例に項と項に関係する諸概念を説明する。3.2 節では、動詞の項構造に、状況に対応する項である状況項を導入する。3.3 節では、名詞にも述語としての側面があることを明らかにし、指示項の概念を導入する。また、指示項の他にも項を必要とする名詞として、機能名詞と関係名詞について論じる。3.4 節では名詞化に注目し、名詞化の項に、基盤動詞の項との対応関係という特徴が認められることを示す。3.5 節ではこの章のまとめを行う。

3.1. 項と項に関係する諸概念

項 (Argument; argument) は、第一に述語 (Prädikat; predicate) と対立する概念である。文が表す命題は、ひとつ以上の人や物の属性や関係としてとらえることができる。例えば、(43a) の文は「ペトラ」という人に「x が働く」という属性が当てはまることを、(43b) の文は「パウル」と「ペーター」という 2 人の人の間に「x が y をテストする」という関係が成り立つことを表すと考えることができる。

- (43) a. Petra arbeitet.
Petra.NOM work.3SG.PRS
ペトラが 働く
- b. Paul prüft Peter.
Paul.NOM examin.3SG.PRS Peter.ACC
パウルが ペーターを テストする

この時、属性や関係を表す「x が働く」や「x が y をテストする」の部分を述語と呼び、その属性や関係を成り立たせる人や物を項と呼ぶ。

項 x と述語 P の関係は、述語論理の記号法を用いて $P(x)$ のように表すことができる。以下では視覚的な見やすさのため、述語をすべて大文字で表記することで、項と区別する。すると、(43) の文における述語と項の関係は (43') のように表すことができる。

- (43') a. ARBEITEN (Petra)
 b. PRÜFEN (Paul, Peter)

項を1つだけとる述語を1価の述語、項を2つとる述語を2価の述語と言い、項をn個とる述語をn価の述語と言う。

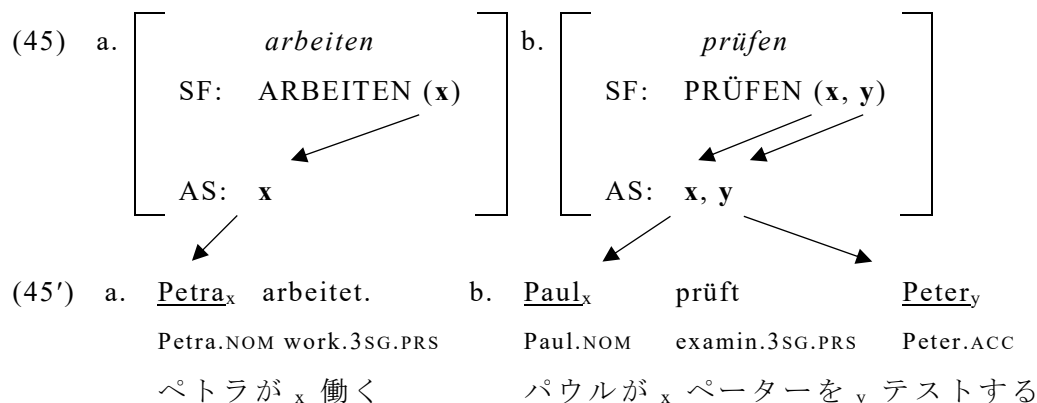
項は、項構造 (AS: argument structure) を通じて、語彙的な情報として指定される。Chomsky (1970) に始まる語彙主義 (Lexikalismus; lexicalism) の立場では、語彙 (Lexikon; lexicon) の体系が、統語論から独立した自立的なモジュールをなしていると想定される。この考え方では、語彙項目 (lexikalischer Eintrag; lexical entry) は、形態素のような要素的なものも、名詞化のような複合的なものも、すべて語彙的な知識としてその言語の話者の心的辞書 (mentales Lexikon; mental lexicon) に登録されているものと考えられる。語彙項目は、音韻形式 (PF: phonetic form), 文法素性 (GF: grammatical feature), 意味構造 (SF: semantic form) そして項構造の4つの要素から構成される情報の束として分析される (cf. Bierwisch 1989: 4)。例えば、*arbeiten* と *prüfen* は (44) の情報からなる語彙項目とみなされる。音韻形式は語彙項目の音声に関わる情報を、文法素性は統語範疇に関わる情報を、意味形式は概念的な意味に関わる情報を、項構造は語彙項目が必要とする項の数と種類を記録している。例えば、*arbeiten* には x という項をひとつ必要とするという情報が、*prüfen* には x と y という2つの項を必要とするという情報が、それぞれの項構造に記録されている。項構造中の項は、意味形式中の同じ字母の項と対応している。

(44) 語彙項目

<p>a.</p> <table style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 80%; margin-left: 40px;"> <tr><td style="text-align: center;"><i>arbeiten</i></td></tr> <tr><td>PF: /'aʁbaɪtən/</td></tr> <tr><td>GF: [+V, -N]</td></tr> <tr><td>SF: ARBEITEN (x)</td></tr> <tr><td>AS: x</td></tr> </table>	<i>arbeiten</i>	PF: /'aʁbaɪtən/	GF: [+V, -N]	SF: ARBEITEN (x)	AS: x	<p>b.</p> <table style="border: 1px solid black; padding: 10px; width: 80%; margin-left: 40px;"> <tr><td style="text-align: center;"><i>prüfen</i></td></tr> <tr><td>PF: /'pʁy:fən/</td></tr> <tr><td>GF: [+V, -N]</td></tr> <tr><td>SF: PRÜFEN (x, y)</td></tr> <tr><td>AS: x, y</td></tr> </table>	<i>prüfen</i>	PF: /'pʁy:fən/	GF: [+V, -N]	SF: PRÜFEN (x, y)	AS: x, y
<i>arbeiten</i>											
PF: /'aʁbaɪtən/											
GF: [+V, -N]											
SF: ARBEITEN (x)											
AS: x											
<i>prüfen</i>											
PF: /'pʁy:fən/											
GF: [+V, -N]											
SF: PRÜFEN (x, y)											
AS: x, y											

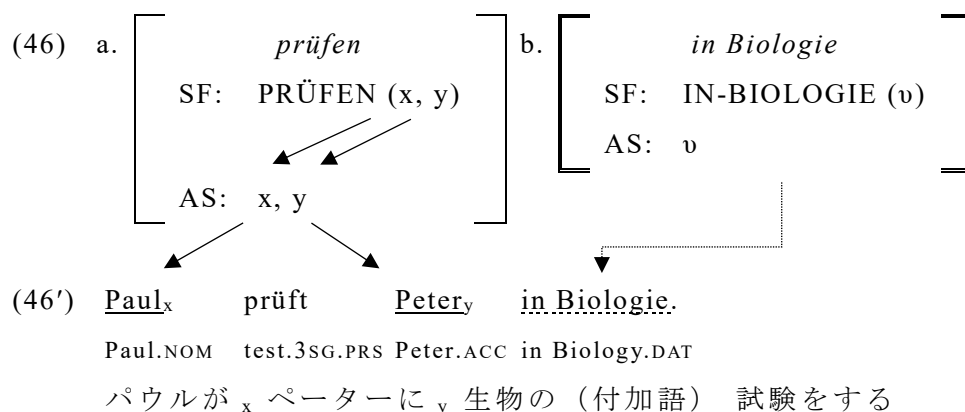
項構造という用語は生成文法において採用されたものであるが、その概念自体は Tesnière (1959) が提唱した結合価 (Valenz; valency) の概念と同じものである。なお、音韻形式と文法素性についてはこの論文の議論に関わらないため、以降では省略する。

動詞の項構造に指定された項は、主語や目的語として統語構造に投射される。*arbeiten* では、*x* が主語となり、*prüfen* では *x* と *y* が、それぞれ主語と対格目的語となる。すると、意味形式中の項は、項構造を通じて、統語構造と対応することになる。



したがって、項構造は、述語の意味形式と統語構造を媒介するインターフェースであるということもできる。

項は、述語と対置される概念であると同時に、付加語 (Adjunkt; adjunct) と対立する概念でもある。項が述語に依存するのに対し、付加語は述語から独立した成分である。例えば、*Paul prüft Peter in Biologie* 「パウルがペーターに生物の試験をする」という文において、主語の *Paul* と対格目的語の *Peter* は動詞 *prüfen* の項であるのに対し、前置詞句の *in Biologie* は、動詞とは独立した付加語である。付加語は述語が求める成分ではないから、述語の項構造には記録されていない。



動詞では、項と付加語はその義務性を第一の基準として峻別される (cf. Zifonun et al. 1997:1043)。動詞の項は基本的に義務的である。⁶ 例えば、(46') の文から、対格目的語の *Peter* を削除することは、通常できない (cf. (46''a))。一方、付加語は述語とは独立した成分であるから義務的であることはなく、*in Biologie* は (46') の例から削除することが可能である (cf. (46''b))。

- (46'') a. Paul prüft *(Peter) in Biologie.
 Paul.NOM test.3SG.PRS Peter.ACC in Biology.DAT
- b. Paul prüft Peter ^{OK}(in Biologie)
 Paul.NOM test.3SG.PRS Peter.ACC in Biology.DAT

3.2. 動詞の項構造への状況項の導入

Davidson (1967) の哲学的存在論では、状況を人や物と同じ種類の存在のひとつに数える。これは、タイプ論的に言えば、状況が人や物と同じ e タイプの存在であるということである。Davidson (1967) の哲学的存在論を背景として、Higginbotham (1985), Bierwisch (1989), Persons (1990) といった言語学の研究では、動詞の項構造に、主語や目的語として統語的に具現化する項に加え、状況に対応する項を設定している。この項を状況項 (Situationsargument; situational argument) と呼ぶ。状況項との区別のため、主語や目的語として状況の参加者を表す項を主題項 (thematisches Argument; thematic argument) と呼ぶ。

状況項の導入により、主題項を n 個とる n 項動詞は、n 価述語ではなく、n+1 価述語としてとらえなおされる。例えば、*arbeiten* は、「x が働く」という 1 価述語ではなく「x が働く状況 s」という 2 価述語となり、*prüfen* は「x が y をテストする」という 2 価述語ではなく「x が y をテストする状況 s」という 3 価述語となる。Bierwisch (1989) にならい INST という述語 (= *instanziiieren* 「例示する」) を用いれば、*arbeiten* と *prüfen* の語彙登録内容は、(47) のように表すことができる。

- (47) a. $\left[\begin{array}{l} \textit{arbeiten} \\ \text{SF: INST (s,} \\ \text{ARBEITEN (x))} \\ \text{AS: s, x} \end{array} \right]$ b. $\left[\begin{array}{l} \textit{prüfen} \\ \text{SF: INST (s,} \\ \text{PRÜFEN (x, y))} \\ \text{AS: s, x, y} \end{array} \right]$

⁶ もっとも、非義務的な項が存在することから、この基準は完全なものではない (cf. Vater 1981, Jacobs 1994)。

主題項が主語や目的語として統語的に実現されるのに対し、状況項は、文（平叙文）において存在量化されると考えられる（cf. Brandt et al. 1992）。例えば、(48a) の文は、「ハンスが働く状況がある」という (48'a) の命題を表すものとして、(48b) の文は、「パウルがペーターをテストするという事態を例示する状況がある」という (48'b) の命題を表すものとして分析できる。

(48) a. Hans arbeitet.

Hans work.3SG.PRS

ハンスが働く

b. Paul prüft Peter.

Paul.NOM examin.3SG.PRS Peter.ACC

パウルがペーターをテストする

(48') a. \exists s [INST (s, ARBEITEN (Hans))]

b. \exists s [INST (s, PRÜFEN (Paul, Peter))]

紙幅の無駄を省くため、以下では INST を省略し、(48') を (48'') のように表記する。

(48'') a. \exists s [ARBEITEN (Hans) (s)]

b. \exists s [PRÜFEN (Paul, Peter) (s)]

状況項を導入するメリットは、様態や場所の副詞規定の意味を適切に分析できるようになる点にある。例えば (49) の文において、様態の副詞規定 *hart* 「過酷に」と場所の副詞規定 *im Garten* 「庭で」は、直観的に、「ハンスが働く」という状況を修飾していると考えられる。

(49) Hans arbeitet hart im Garten.

Hans.NOM work.3SG.PRS hard in_the garden.DAT

ハンスが庭で過酷に働いている

状況項を設定しない場合、これらの副詞規定が何を項にとる述語で、その項が *arbeiten* という動詞とどのような関係にあるのか判然としない。一方、状況項を設定すれば、*hart* と *im Garten* は、動詞 *arbeiten* の状況項を項にとる述語と分析することができ、(49) の文に、(49') の意味形式 (= 「ハンスが働くという

事態を例示し過酷である状況が庭にある」) を与えることができる。この意味形式は、(49) の文の意味に関する直観に適ったものである。

(49') Es [[ARBEITEN (Hans) (s)] & HART (s) & IM-GARTEN (s)]

3.3. 項構造の名詞への拡張

文を述語と項に分析した時、通常、述語となるのは動詞であり、項となるのは名詞句である。そのため、述語と項という関係を考える際、名詞と言えはまず項としての側面が想起され、名詞の述語としての側面にはなかなか思い至らない。しかし、名詞には名詞句として項となるばかりでなく、それ自体述語でもある。本節では、名詞の述語としての側面に注目し、名詞にも項構造が想定されることを示す。

3.3.1. 1 価述語としての普通名詞と指示項

文を述語と項に分析した時、項となるのは、厳密には名詞ではなく名詞句である。*Hans* のような固有名詞や *er* のような人称代名詞は、(50a) のように単独で名詞句となり、項となることができる。一方、*Junge* のような普通名詞は、新聞の見出しなどでない限り、(50b) のように単独では項となることができず、(50c) のように定冠詞や不定冠詞といった決定詞をともなって名詞句となることで初めて項となる。

- (50) a. Hans/ er schlief ein.
 Hans.NOM/ he.NOM fall_asleep.3SG.PST PTCL
 ハンスは／彼は眠り込んだ
- b. *Junge schlief ein.
 boy.NOM fall_asleep.3SG.PST PTCL
- c. Der Junge/ Ein Junge schlief ein.
 the boy.NOM/ a boy.NOM fall_asleep.3SG.PST PTCL
 その少年は／ある少年が眠り込んだ

普通名詞が単独で項とならないのは、固有名詞や人称代名詞が個体を表すのに対し、普通名詞は個体ではなく、個体が所属する概念のカテゴリーを表すためである (cf. 吉田 2013)。

普通名詞が個体ではなく、個体が所属する概念のカテゴリーを表すということは、普通名詞の意味が 1 価述語として分析できるということである。例えば、

Junge 「少年」という名詞は、(51) のように「少年である *r*」という 1 価述語として分析することができる。

$$(51) \left[\begin{array}{l} \textit{Junge} \\ \text{SF: JUNGE (r)} \\ \text{AS: r} \end{array} \right]$$

1 価述語として分析された普通名詞の項 *r* は、定名詞句の指示対象に対応している (cf. Williams 1981)。そのため、この項を指示項 (referenzielles Argument; referential argument) と呼ぶ。

普通名詞は、冠詞をともなうことで、個体を表す名詞句となる。例えば、*der Junge* という定の名詞句は、「少年」というカテゴリーに当てはまる個体のうち、文脈において唯一に同定される個体を表す。*der Junge* という名詞句の意味は、唯一性を表す *t* 演算子を用いて、(52') のように表すことができる。

$$(52) \textit{der Junge} \qquad (52') \textit{t} [\textit{JUNGE (r)}]$$

the boy.NOM

その少年

3.3.2. 機能名詞と関係名詞

名詞の中には、指示項に加え、さらに項を必要とすると考えられるものがある (cf. 西山 1990, 2003, Vinker & Jensen 2002, Partee & Borschev 2003, Löbner 2003)。例えば、(53) の名詞句の主要部をなす名詞がこれに該当する。

- (53) a. **der Sieger** des Spiels
the winner.GEN the game.GEN
その試合の勝者
- b. **der Gründer** der Firma
the founder.NOM the company.GEN
その会社の創業者
- c. **der Geburtsort** Friedrich Heckers
the birthplace.NOM Friedrich Hecker.GEN
フリードリヒ・ヘッカーの出生地

Sieger「勝者」を例にとれば、ある人やチームについて、その人やチームが勝者であるかどうかは、どの試合を問題としているのかを定めない限り定まらない。ある人やチームが、ある試合では勝者であっても、別の試合では敗者かも知れないからである。*Gründer*「創業者」も、何の創業者なのかが明らかでない限り、ある人が創業者かどうかは何とも言い難い。*Geburtsort*「出生地」も、誰の出生地なのかが明らかでなければ、ある場所が出生地かどうかは何とも言えない。このような名詞は関係名詞 (*Relationalnomen; relational noun*) と呼ばれる (cf. *Vinker & Jensen 2002, Partee & Borschev 2003*)。「関係名詞」という用語は、後述のように、関係名詞の中の下位グループのみを指して用いられることもあるので、この論文では文脈上明らかである場合を除いて、「広義の関係名詞」と「狭義の関係名詞」を明示的に区別する。広義の関係名詞が指示項に加えて要求する項を関係項 (*relationales Argument; relational argument*) と呼ぶ。

広義の関係名詞は、関係項が特定されることで指示対象が一意に定まる機能名詞 (*Funktionalnomen; functional noun*) と、関係項が特定されても指示対象が一意には定まらない狭義の関係名詞に分けられる (cf. *Löbner 2003*)。例えば、*Vater*「父」は、「ある人の父」はただ 1 人であるから機能名詞である。一方、*Sohn*「息子」は、「ある人の息子」は 1 人とは限らないから機能名詞ではない。

(54) 関係名詞 (広義)

a. 機能名詞

e.g.: *Vater*「父」, *Kopf*「頭」, *Größe*「大きさ」 etc.

b. 関係名詞 (狭義)

e.g.: *Sohn*「息子」, *Bein*「脚」, *Eigenschaft*「性質」 etc.

機能名詞や関係名詞に対し、指示項の他に項を持たず、個体が属する概念のカテゴリーを表す名詞を種族名詞 (*Sortalnomen; sortal noun*) と呼ぶ (cf. *Löbner 2003*)。種族名詞には、*Junge*「少年」や *Hund*「犬」といった名詞が含まれる。

(55) 種族名詞

e.g.: *Junge*「少年」, *Hund*「犬」, *Rock*「スカート」, *Stein*「石」 etc.

3.4. 名詞化の項と項構造

名詞化は、指示項に加えてさらに項を必要とする名詞として、機能名詞や関係名詞とともに言及されるもう一つの名詞クラスである。広義の関係名詞は「指示項の他に項を持つ名詞」と定義されるので、その点では名詞化も広義の関係

名詞の一種であると言うことができる。しかし、名詞化の項には基盤動詞の項との関連性という機能名詞や関係名詞にはない特徴が認められることから、名詞化は普通、機能名詞や関係名詞とは区別して論じられる。

3.4.1. 基盤動詞の状況項と名詞化の指示項

名詞化の項には、基盤動詞の項との間に対応関係が認められるという特徴がある。Bierwisch (1989) 以来、名詞化は、「基盤動詞の状況項が指示項となった名詞」として分析するのが定説的な考え方となっている。

基盤動詞の状況項が名詞化において指示項に転じると考えると、名詞化が基盤動詞と同種の状況を表し、動詞において状況を修飾する場所や様態の副詞規定が、名詞化では連体修飾語に対応するという直観をとらえることができる。例えば、(56) の文は、「パウルが走るという事態を例示し、ゆったりとしている状況が芝生の上にある」という命題を表す文として、(56') の意味形式によって分析することができる。

(56) Paul läuft locker auf dem Rasen
Paul.NOM run.3SG.PRS relaxed on the grass.DAT
パウルは芝生の上でゆったり走っている

(56') Es [LAUFEN (Paul) (s)] & LOCKER (s) & AUF-DEM-RASEN (s)

いま、(57) の名詞句は、直観的に、(56) の動詞文において表される状況と同じ状況を表していると考えられる。形容詞の *locker* と前置詞句の *auf dem Rasen* はこの状況を修飾する述語である。

(57) Pauls lockerer Lauf auf dem Rasen
Paul.GEN relaxed run.NOM on the grass.DAT
パウルの芝生の上でのゆったりした走り

名詞化において基盤動詞の状況項が指示項に転じると考えることで、(57) の名詞化に、この直観に適った (57') の分析を与えることができるのである。

(57') is [LAUFEN (Paul) (s)] & LOCKER (s) & AUF-DEM-RASEN (s)

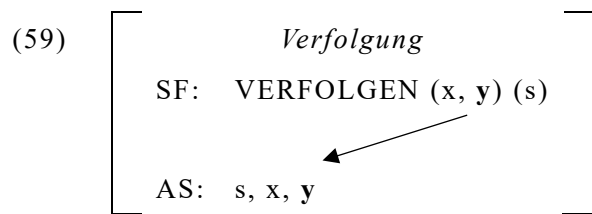
3.4.2. 基盤動詞の主題項と名詞化の主題項

状況には様々な人や物が参与する。動詞は、これら状況の参与者を、主題項として項構造に記録しており、主語や目的語として統語的に実現する。状況の参与者は状況を成り立たせる存在であるから、基盤動詞と同じ種類の状況を表す名詞化にも、基盤動詞と同じ状況の参与者を想定することができる。例えば、(58)において、*die Verfolgung des Einbrechers durch den Polizisten*「警察官による泥棒の追跡」という名詞句は、直観的に、(58')の文が表すのと同じ状況を表している。この状況には「警察官」と「泥棒」という2人の人が参与する。動詞では主語と目的語として表されるこの2項は、(58)において、属格と *durch* 前置詞句の形で表されている。

(58) **Die Verfolgung des Einbrechers durch den Polizisten** dauert
the persecution.NOM the burglar.GEN by the policeman.ACC go_on.3SG.PRS
noch an.
still PTCL
警察官による泥棒の追跡が続いている

(58') Der Polizist verfolgt den Einbrecher
the policeman.NOM persecute.3SG.PRS the burglar.ACC
警察官が泥棒を追跡する

名詞化において状況の参与者が属格や前置詞句の形で表されるという事実は、これらの属格や前置詞句を、動詞の主語や目的語と同じように、項構造に記録された主題項が統語的に実現したものとして分析できるのではないかという着想をもたらす。属格を主題項が統語的に具現したものとみれば、例えば *die Verfolgung des Einbrechers*「犯人の追跡」という名詞化は、(59)の語彙登録をもった *Verfolgung* の項 *y* が属格で投射されたものと分析することができよう。



(59') die Verfolgung des Einbrechers_y
 the persecution.NOM the burglar.GEN
 犯人の_y 追跡

すると x が存在量化されているものとし、*des Einbrechers* の指示対象である特定の犯人を d.Einbrecher と表記すれば、*die Verfolgung des Einbrechers* には「誰かが犯人を追跡する文脈で唯一の状況」という (59") の意味形式を与えることができる。

(59") $is \exists x [\text{VERFOLGEN (x, d.Einbrecher) (s)}]$

3.4.3. 名詞化の項と項付加語

ところが、状況の参与者を表す属格や前置詞句を名詞化の項構造に記録された主題項の統語的な具現形とみる考え方には、これらが基本的に義務的でない成分であるという事実が障害となる。動詞であれば、義務的でない項もあるとはいえ、項は (60) のように削除できないのが普通である。

(60) Der Polizist verfolgt *(den Einbrecher)
 the policeman.NOM persecute.3SG.PRS the burglar.ACC
 警察官が * (泥棒を) 追跡する

一方、名詞化では、(61) から属格と前置詞句を削除した (61') が問題なく認められるように、状況の参与者を表す成分を削除しても表現の容認性は損なわれないのである。

(61) **Die Verfolgung des Einbrechers durch den Polizisten** dauert
 the persecution.NOM the burglar.GEN by the policeman.ACC go_on.3SG.PRS
 noch an.
 still PTCL
 警察官による泥棒の追跡が続いている

- (61') **Die Verfolgung** dauert noch an.
 the persecution.NOM go_on.3SG.PRS still PTCL
 追跡が続いている

状況の参与者を表す属格や前置詞句の任意性は、これらの成分を、項構造に記録された主題項の統語的な具現形ではなく、項的な解釈を持った付加語として扱うべきではないかという考えをもたらす。この方向での分析における「項的解釈の付加語」のことを項付加語 (Argumentadjunkt; argument adjunct, cf. Grimshaw 1990) と呼ぶ。

状況の参与者を表す属格を項付加語とみた場合、*die Verfolgung des Einbrechers* は、(62a) の語彙登録をもった *Verfolgung* に、(62b) のように分析される属格が付加されたものとして、(62"a) の意味形式を以て分析される。(62"a) の ρ は、属格が表す関係を抽象化した関数である。

- (62) a. $\left[\begin{array}{l} \textit{Verfolgung} \\ \text{SF: VERFOLGEN (x, y) (s)} \\ \text{AS: s} \end{array} \right]$ b. $\left[\begin{array}{l} \textit{des Einbrechers} \\ \text{SF: } \rho (\textit{v}, \textit{d.Einbrecher}) \\ \text{AS: v} \end{array} \right]$

- (62') die Verfolgung des Einbrechers
 the persecution.NOM the burglar.GEN
犯人の (付加語) 追跡

- (62") a. \textit{is} [VERFOLGEN (x, y) (s) & ρ .(s, d.Einbrecher)]
 b. \textit{is} $\exists x$ [VERFOLGEN (x, d.Einbrecher) (s) & PATIENS (s, d.Einbrecher)]

仮に、動詞では主語となる x の項が存在量化されているものとし、関係 ρ が「 s は y を被動者とする状況である」という関係 (= PATIENS (s, y)) として具体化されると考えれば、*die Verfolgung des Einbrechers* に「誰かが犯人を追跡する文脈で唯一の状況」という (62"b) の解釈を与えることができる。

以上の背景から、名詞化の項について観察する際には、次の2点が重要であると言える。

(63) a. 名詞化の項候補:

名詞化において、状況の参加者は、名詞化の主題項として分析し得る「項候補」である

b. 項と項付加語の経験的峻別:

名詞化の項候補は項付加語としても分析し得るため、分析には独立の経験的基準による項と付加語の峻別が必要である

3.5. まとめ

本章では、項と項構造という理論装置について概説し、この論文で必要となる理論上の拡張として、動詞において状況に対応する状況項、名詞において指示対象に対応する指示項、指示項に加えて関係項を持つ機能名詞・関係名詞といった概念を導入した。

名詞化の項には、基盤動詞の項と対応関係をなすという特徴がある。名詞化の指示項は、基盤動詞の状況項に対応する。名詞化において状況の参加者を表す成分は基盤動詞の主題項に対応し、潜在的に名詞化の主題項として分析することが可能な項候補である。しかし、これら名詞化の項候補は、基本的に義務的でないことから項ではなく項付加語として分析することも可能である。そのため、名詞化の項候補を統語論的・意味論的に分析するには、これが項なのか付加語なのかということを経験的基準によって経験的に峻別することが求められる。

4. 動詞における項実現の理論

潜在的に名詞化の主題項として分析され得る名詞化の項候補は、その名詞化の基盤動詞の主題項である。すなわち、名詞化の項候補は、基盤動詞の項構造を通じて認定される。したがって、名詞化の項構造について論じる上で、動詞の項がどのように実現するかということは重要な意味を持っていると言える。そこで本章では、Wunderlich (1992, 1997a, 1997b, 2000) と、これを修正した藤縄 (2010, 2013) の枠組みに基づき、動詞における項と形式の関係の定式化を試みる。

4.1 節では、動詞の意味を形式的に分析する手法として有力な方法論である語彙分解文法 (LDG: lexical decomposition grammar) の考え方を導入する。4.2 節では、項に与えられる格について、構造格と意味格の区別を取り入れる。4.3 節では、語彙分解文法の枠組みで動詞の項と形式の関係をとらえる写像論的なアプローチについて詳細に論じる。4.4 節では本章のまとめを行う。

4.1. 語彙分解文法 (LDG: lexical decomposition grammar) による意味形式の分析

ある動詞が項をいくつどのような形式で実現するかということに、その動詞の意味が密接に関わっていることは疑う余地がない。LDG は、ひとつひとつ動詞の意味を個別に記述するのではなく、多数の動詞を意味のグループに分けた上で、各グループの意味を、活動を表す DO, 変化を表す BECOME など要素的な意味を表す少数の基本関数からなる構造的な意味形式に分析(以下、語彙分解)し、そのグループの動詞がとる項の数と種類を、原理立てて説明する研究方法である (cf. Dowty 1979, Bierwisch 1983, Wunderlich 1992; 2000, Rapp 1997a etc.)。例えば、*arbeiten*「働く」は活動動詞、*säubern*「洗浄する」は使役的状态変化動詞、*liefern*「納入する」は使役的所有変化動詞というグループの動詞とされる。これらの動詞の意味形式は、それぞれ (64)–(66) のように構造的に語彙分解される。

- (64) ∃s [DO (x) (s)]
 Hans_x arbeitet.
 Hans work.3SG.PRS
 ハンスが_x 働いている

(65) $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (SAUBER (y))) (s)]

Peter_x säubert die Wunde_y

Peter.NOM clean.3SG.PRS the wound.ACC

ペーターが_x 傷口を_y 洗淨する

(66) $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)]

Die Firma_x liefert dem Hotel_y Gemüse_z

the company.NOM supply.3SG.PRS the hotel.DAT vegetable.PL.ACC

その会社が_x ホテルに_y 野菜を_z 納入している

4.1.1. 基本関数と各動詞グループの意味形式

語彙分解にはさまざまな理論・流派があり，分析に用いられる基本関数の種類も，拠って立つ理論により異なっている。この論文で筆者が分析に用いる基本関数を，(67) に挙げる。これらの関数はどれも，LDG の多くの立場で採用されている基本的な関数である。

(67) 基本関数とその特徴

関数	関数が示すもの	変域	論理タイプ
BECOME (x)	変化	x = 状況	<t, t>
CAUSE (x, y)	使役	x = 状況 y = 状況	<t, <t, t>>
DO (x) または DO (x, y)	活動	x = 人, 物 y = 人, 物	<e, t> または <e, <e, t>>
POSS (x, y)	所有	x = 人, 物 y = 人, 物	<e, <e, t>>
LOC (x, Place)	所在	x = 人, 物 Place = 場所	<e, <e, t>>

活動動詞 (e.g. *arbeiten* 「働く」, *behandeln* 「処置する」), 所有動詞 (e.g. *besitzen* 「持っている」), 所在動詞 (e.g. *liegen* 「横たわっている」) は, それぞれ, 基本

関数 DO, POSS, LOC を用いて, (68)–(70) の単純な意味形式に語彙分解される。

(68) 活動動詞 (自動詞)

a. $\exists s$ [DO (x) (s)] (= 「x が活動する」)

Hans_x arbeitet.

Hans work.3SG.PRS

ハンスが_x 働いている

b. 活動動詞 (他動詞)

$\exists s$ [DO (x, y) (s)] (= 「x が y に働きかける」)

Peter_x behandelt Maria_y

Peter.NOM treat.3SG.PRS Mary.ACC

ハンスが_x マリアを_y 治療する

(69) 所有動詞

$\exists s$ [POSS (x, y) (s)] (= 「x が y を持っている」)

Hanna_x besitzt viele Uhren_y

Hanna.NOM posses.3SG.PRS many clock.PL.ACC

ハンナは_x たくさん時計を_y 所有している

(70) 所在動詞

$\exists s$ [LOC (x, Place) (s)] (= 「x が Place にいる・ある」)

Das Buch_x liegt auf dem Tisch_{Place}

the book.NOM lie.3SG.PRS on the table.DAT

本が_x 机の上に_{Place} 置いてある

BECOME 関数と CAUSE 関数は, 他の基本関数と組み合わせることで, 複合的な意味を持つ動詞グループの語彙分解に用いられる。状態変化動詞 (e.g. *erkranken* 「病気になる」), 所有変化動詞 (e.g. *bekommen* 「もらう」), 所在変化動詞 (ないし移動動詞, e.g. *kommen* 「来る」) などの変化動詞の意味形式は, BECOME 関数を使い, (71) のように語彙分解される。

(71) 変化動詞

- a. $\exists s$ [BECOME (BE (x)) (s)] (= 「x が状態になる」)

Die Schüler_x sind erkrankt.
the student.PL.NOM PRF.3PL.PRS fall_ill.PTCP
生徒たちが_x 病気になった

- b. $\exists s$ [BECOME (POSS (x, y)) (s)] (= 「x が y を手に入れる」)

Thomas_x hat eine Uhr_y bekommen.
Thomas.NOM PRF.3SG.PRS a clock.ACC get.PTCP
トーマスは_x 時計を_y もらった

- c. $\exists s$ [BECOME (LOC (x, Place)) (s)] (= 「x が Place に移動する」)

Er_x ist ins Zimmer_{Place} gekommen.
he.NOM PRF.3SG.PRS into_the room.ACC come.PTCP
彼が_x 部屋の中に_{Place} 入ってきた

使役的状态変化動詞 (e.g. *säubern* 「きれいにする」), 使役的所有変化動詞 (ないし授与動詞, e.g. *geben* 「与える」), 使役的所在変化動詞 (e.g. *legen* 「横たえる」) などの使役動詞の意味形式は, CAUSE 関数と BECOME 関数を組み合わせ, (72) のように語彙分解される。

(72) 使役動詞

- a. $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)] (= 「x の活動によって y が状態になる」)

Peter_x säubert die Wunde_y
Peter.NOM clean.3SG.PRS the wound.ACC
ペーターが_x 傷口を_y 洗浄する

- b. $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)] (= 「x の活動によって y が z を手に入れる」)

Die Firma_x liefert dem Hotel_y Gemüse_z
the company.NOM supply.3SG.PRS the hotel.DAT vegetable.PL.ACC
その会社が_x ホテルに_y 野菜を_z 供給している

- c. $\exists s$ [CAUSE (DO (x, y), BECOME (LOC (y, Place))) (s)] (= 「x が y に働きかけることで y が Place に移動する」)

Tobias_x legt das Buch_y auf den Tisch_{Place}
Tobias.NOM lay.3SG.PRS the book.ACC on the table.ACC
トビアスが_x 本を_y 机の上に_{Place} 置く

(71a) の *erkranken* と (72a) の *säubern* の語彙分解に用いられている BE(x) は、KRANK(x) (=「x が病気だ」) や SAUBER(x) (=「x が清浄だ」) などの人や物の性状を抽象化・一般化した述語である。この述語は、基本関数とともに語彙分解に用いられる。

4.1.2. 語彙分解された意味形式による意味役割の指定

語彙分解を行う利点として、第一に、動作主 (Agens), 被動者 (Patiens) といった意味役割を個別に定義する必要がなくなるということが挙げられる。意味役割は、Fillmore (1968) による概念の提唱以来、その理論的重要性が高められてきた一方で、具体的にどのような意味役割をいくつ認定し、各意味役割をどのようにして定義すればよいかという意味的内実に関する議論はいまだに意見の一致をみていない。意味役割を少数だけ認定して各意味役割を大まかに分類すると、細かな使い分けの説明が難しくなってしまう一方、多くの意味役割を認定すれば、きめ細かな分類の代償として、一般性をとらえることが難しくなってしまうのである。

これに対し、Jackendoff (1987: 394ff., 1990: 125ff.) や Rapp (1997a: 32) は、意味役割をそれ自体として定義するのではなく、語彙分解に用いられる関数の中の項の位置として定義することで、「動作主」や「被動者」といった意味役割の名称を、意味形式の中の特定の位置を指す単なる「ラベル」として扱うことを提案している。この枠組みでは、例えば、「動作主」は活動を表す DO 関数の第 1 項につけられたラベルと定義され、「動作主」という意味役割自体にはそれ以上の含みはないということになる。つまり、「動作主とは何か」という問いは、「活動とは何か」という問いに還元されるのである。すると、ある項にどの意味役割が与えられるかという問題も、その項をとる動詞の意味形式がどのように語彙分解されるかということと同義となる。このように、語彙分解によって、意味役割の意味的内実を巡る問題は発展的に解消されるのである。

この論文では、基本関数に BE を加えた各関数の項に、(73) の意味役割を設定する。

- (73) a. DO (x, y): x = 動作主 (Agens); y = 被動者 (Patiens)
 b. BE (x): x = Theme⁷
 c. LOC (x, Place): x = 所在物 (Lokatum); Place = 所在地 (Lokation)
 d. POSS (x, y): x = 所有者 (Possessor); y = 所有物 (Possessum)

例えば, (74a) のように語彙分解される *liefern* 「納入する」の場合, 各項の意味役割はそれぞれ, x が動作主, y が所有者, z が所有物である。

- (74) a. $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)]
- | | | |
|-----|-----|-----|
| | | |
| 動作主 | 所有者 | 所有物 |

- b. Die Firma_x liefert dem Hotel_y Gemüse_z
 the company.NOM supply.3SG.PRS the hotel.DAT vegetable.PL.ACC
その会社が_x ホテルに_y 野菜を_z 供給している
 動作主 所有者 所有物

4.1.3. 項の階層関係と L 統御

語彙分解を行うもう一つのメリットは, 構造的な意味形式への埋め込みの深度に応じて, 項に階層的な関係を与えることができるということである。関数 $F(x_1, x_2)$ において, x_1 と x_2 の間には, x_1 を上位, x_2 を下位とする関係がある。 x_1 が x_2 よりも上位であることを, 右向き不等号を用いて $x_1 > x_2$ と表すと, 任意の意味形式について, 項に (75) に示す階層関係を与えることができる。

- | (75) 意味形式の構造 | 項の階層関係 |
|--|------------------------------|
| a. $F_1(x_1, x_2)$: | $x_1 > x_2$ |
| b. $F_1(F_2(x_1, x_2))$: | $x_1 > x_2$ |
| c. $F_1(F_2(x_1, x_2), F_3(x_3, x_4))$: | $x_1 > x_2; x_1 > x_3 > x_4$ |

⁷ 意味役割の名称としての Theme は, 広く普及している名称であるものの, 英語の “Theme” にせよ, ドイツ語の „Thema“ にせよ, 日本語の「主題」ないし「対象」にせよ, 言語学の用語としても日常語としても様々な意味で用いられる語であるという点で瑕疵のある命名である。そのためこの論文では, 意味役割としての Theme については一貫して “Theme” という英語の名称で呼ぶことで, その他の意味での「主題」や「対象」と区別する。

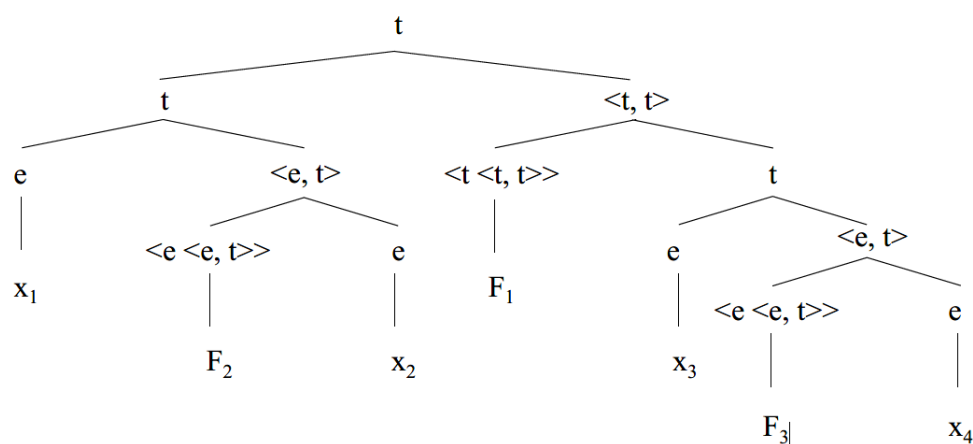
(75c) のような構造の意味形式では, x_2 は x_1 よりも下位の項ではあるものの, x_2 と x_3 および x_4 の間には階層関係がない。これは, 項の階層関係が, (76) に定義される L 統御の関係下においてのみ評価されるためである。

(76) L 統御 (Wunderlich 2000:252, 藤縄 2010:7)

タイプ論に基づくツリー (Lohnstein 1996: 112–131) において, 節点 α のひとつ上の節点 γ , または γ と同じタイプの連鎖で繋がるさらに上の節点の配下に β があれば, α は β を L 統御する

(75c) のような構造の意味形式には, (75c') のタイプ論的ツリーが与えられる。このツリーにおいて, x_1 と x_2 の間には, x_1 のひとつ上の節点 t の配下に x_2 があることから, x_1 が x_2 を L 統御する関係がある。また, x_1 , x_3 , x_4 の3項の間にも, x_1 のひとつ上の節点 t から同じタイプの連鎖でつながるもうひとつ上の節点 t の配下に x_3 , x_4 があり, さらに x_3 のひとつ上の節点 t の配下に x_4 があることから, x_1 が x_3 と x_4 を L 統御し, かつ x_3 が x_4 を L 統御する関係がある。

(75c')



他方, x_2 と x_3 , x_4 に関しては, x_2 の一つ上の節点 $\langle e, t \rangle$ の配下には x_3 も x_4 もなく, 節点 $\langle e, t \rangle$ の上の接点はタイプが異なることから, x_2 は x_3 も x_4 も L 統御していない。そのため, x_1 と x_2 の間には $x_1 > x_2$ という関係が, x_1 , x_3 , x_4 の3項の間には $x_1 > x_3 > x_4$ という関係が与えられるのに対し, x_2 と x_3 , x_4 の間には階層的な関係が与えられないのである。

項に階層的な関係が与えられることで, 文における項と形式の関係を原理立った仕組みでとらえることが可能となる。文における項と形式の関係をとらえる手法としては, LDG とは別のアプローチとして, Goldberg (1995) の構文文法

のように、ある特定の意味に「型」としての構文を対応させるアプローチがある。これは、例えば、「使役」という意味を表すのに「他動詞構文」という文の「型」が用いられるといった考え方である。しかし、そのようなアプローチでは、「使役」という意味が実際には (77) のような他動詞構文だけでなく、(78) のような自動詞構文(受動構文)によっても表され得るという事実や、反対に、他動詞構文が使役ばかりでなく、(79) のような単純な活動を表すのにも用いられるといった、意味と構文の一对多かつ多対一的な関係が見過ごされてしまう (cf. 藤縄 2010: 4-7)。

(77) $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)]

Der Richter_x zerbrach den Krug_y

the agent.NOM break.3SG.PST the jar.ACC

代官が_x 甕を_y 壊した

(78) $\exists x \exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)]

Der Krug_y wurde zerbrochen.

the jar.NOM PASS.3SG.PST break.PTCP

甕が_y 壊された

(79) $\exists s$ [DO (x, y) (s)]

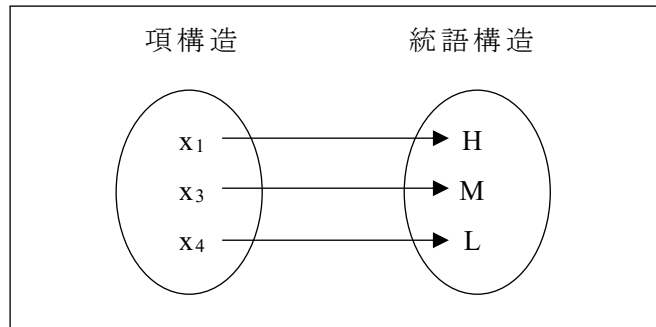
Er_x schüttelt den Baum_y

he.NOM shake.3SG.PRS the tree.ACC

彼は_x 木を_y 揺すっている

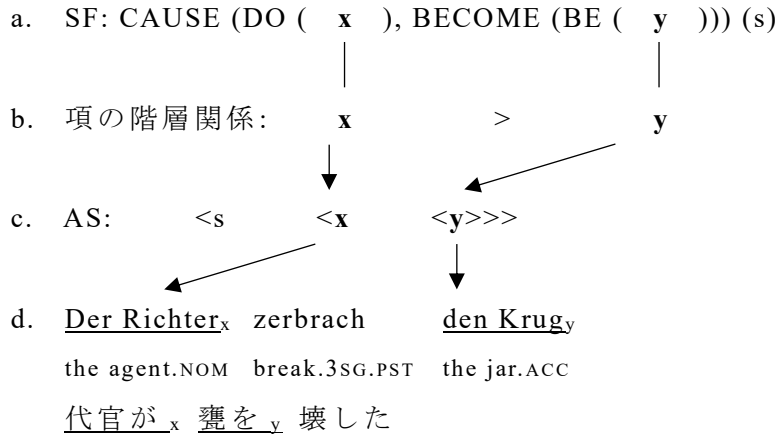
LDG では、語彙分解を通じて与えられる項の階層的な関係にもとづき、文における項と形式の多対多的な関係が写像論的にとらえられる。これは、意味形式の関係における上位の項が、統語論的にも高い位置(例えば主語)として表されるという考え方である。高い統語的位置を H, 中間的な統語的位置を M, 低い統語的位置を L と置けば、語彙分解された意味形式において $x_1 > x_3 > x_4$ という関係にある 3 項は、項構造から統語論へと、(80) のようにマッピングされることになる。

(80) 項構造から統語構造への項のマッピング

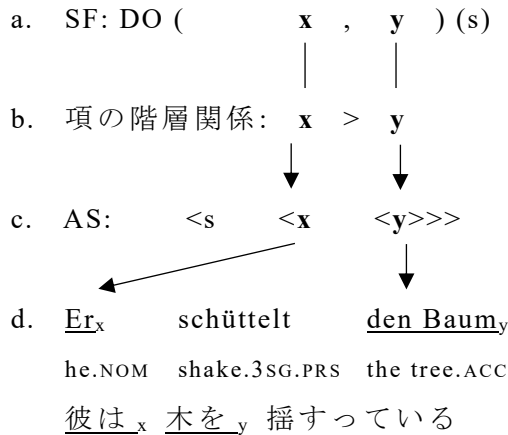


例えば、*zerbrechen*「壊す」の意味形式は (81a) のように、*schütteln*「揺する」の意味形式は (82a) のように語彙分解される。この2つの意味形式は全く異なるものの、どちらの意味形式でも、 x と y の間には $x > y$ という階層関係が成り立つ。そのため、この2項が項構造を通じて相応の統語的位置にマッピングされた結果として、上位の x を主語、下位の y を目的語とする他動詞構文が共通して形成されるのである。

(81) *zerbrechen*:

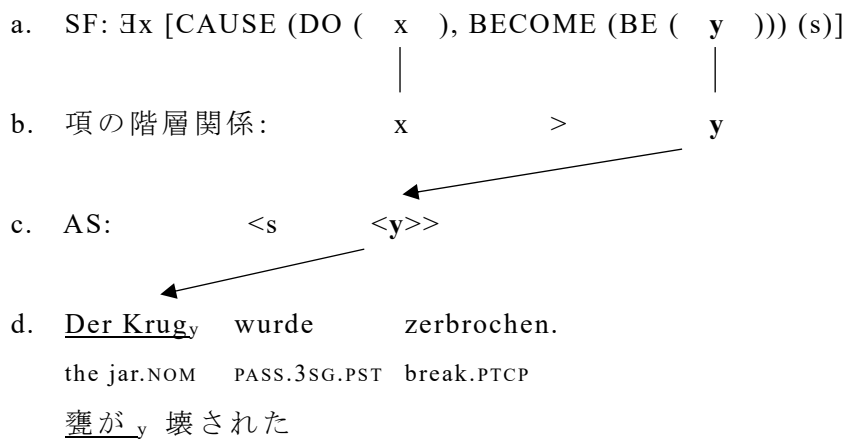


(82) *schütteln*:



「使役」という意味が他動詞構文だけでなく自動詞構文（受動構文）でも表されることは、*x* を存在量化した (83a) の意味形式によりとらえられる。(83a) は、(81a) と同じく使役的状态変化を表す意味形式であるが、(83a) と違い、*x* が存在量化されている。存在量化により、この項が項構造から抑制されていることがとらえられ、結果として、(83c) の項構造には主題項が *y* しか指定されていない。すると、*y* が統語構造へとマッピングされることで、「使役」の意味が、項をひとつだけもつ自動詞構文によって表されることになる。

(83) *zerbrochen werden*:



項構造は、意味形式と統語構造を媒介するインターフェースとして、意味形式における項の階層関係を統語構造へと伝える役目を負っている。そこで、項の階層関係を項構造でも表現するために、以降では項構造に項をただ並べるのではなく、上位の項を左として順に並べ、 $\langle x_1 \langle x_2 \rangle \rangle$ のように山括弧 (<>) を組み合わせることで非対称的に表現する。 $\langle x_1 \langle x_2 \rangle \rangle$ の場合、 x_1 が上位の項、

x_2 が下位の項である。状況項は、あらゆる主題項よりも上位の項として、項構造の一番左の位置に置く。⁸

4.2. 構造格・語彙格

格は、どのようにして項に付与されるのかに応じて、構造格 (struktureller Kasus; structural case) と語彙格 (lexikalischer Kasus; lexical case) に分けられる (cf. Chomsky 1981: 170, Haider 1985: 70, Grewendorf 1988: 151, Wegener 1991: 160ff., Abraham 2013: 35f.)。

- (84) 構造格：
表層の統語的位置に応じて与えられる格
- (85) 語彙格：
述語の語彙的な指定によって与えられる格

構造格と語彙格は、受動態のような統語的操作の対象となるか否かを基準として経験的に峻別される。構造格は構造に依存するため、統語操作の結果として、同じ項に異なる格が付与され得る。一方、語彙格は述語の語彙的な情報に依存することから、常に決まった格となり、統語操作の対象とならないのである。ドイツ語では、(86) のように、能動態における対格の項が受動態で主格に転じることから、主格と対格が典型的な構造格とみなされている。

- (86) a. Der Richter zerbrach **den Krug**.
the agent.NOM break.3SG.PST the jar.ACC
代官が甕を壊した
- b. Der Krug wurde zerbrochen.
the jar.NOM PASS.3SG.PST break.PTCP
甕が壊された

⁸ 項構造に項の階層関係を反映させる方法としては、 λ 演算子を使う手法も広く普及している。この手法では、例えば、*zerbrechen* の項構造と意味形式が i. のように表現される。

i. $\lambda y \lambda x \lambda s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)]

λ 演算子を使う場合、上位の項は右、下位の項は左に置かれることになっている。この表記法は、項構造を意味形式の左に置く場合には勝手がよいものの、項構造と意味形式を 2 行に分けて縦方向に並べる場合、意味形式中の項の順序と項構造の項の順序が逆行してしまって都合が悪い。この論文では意味形式と項構造を 2 行に分けて縦方向に並べる表記を多用するため、 λ 演算子を用いた表記ではなく、山括弧を組み合わせた表記を用いる。

語彙格であることが確かなのが、*beschuldigen*「罪に問う」などの属格支配の動詞にみられる属格である。この属格は、(87) に示すように、受動態において主格に転じることはなく、動詞の項構造によって語彙的に指定されていると考えられる。

- (87) a. Die Staatsanwaltschaft beschuldigte ihn **des Mordes**.
 the prosecution.NOM accuse.3SG.PST him.ACC the murder.GEN
 検察は彼を殺人の罪に問うた
- b. Er wurde **des Mordes** beschuldigt
 he.NOM PASS.3SG.PST the murder.GEN charge.PTCP
 彼は殺人の罪に問われた
- c. ***Der Mord** wurde beschuldigt.
 the murder.NOM PASS.3SG.PST charge.PTCP

与格については、一般に語彙格であるとする立場 (cf. Haider 1985, Grewendorf 1988, Rivet 1999), 3項動詞の与格を構造格, 2項動詞の与格を語彙格とする立場 (cf. Fanselow 1987, Czepluch 1987), 一般に構造格であるとする立場 (cf. Ogawa 2003, 藤縄 2010; 2013) が対立している。与格を語彙格とする立場で根拠とされているのは、(88) のように、*werden*+過去分詞からなる通常受動態 (*werden* 受動) において動詞の与格項は主格に転じないという事実である。

- (88) a. Peter hilft **dem Freund**.
 Peter.NOM help.3SG.PRS the friend.DAT
 ペーターが友人を手助けする
- b. **Dem Freund** wird geholfen.
 the friend.DAT PASS.3SG.PRS help.PTCP
 友人に手助けが行われる
- c. ***Der Freund** wird geholfen.
 the friend.NOM PASS.3SG.PRS help.PTCP

一方、与格を少なくとも部分的に構造格と考える立場では、その根拠として、(89) のようないわゆる *bekommen* 受動 (cf. Leirbukt 1997) の存在を挙げる。*bekommen*「もらう」+過去分詞からなる *bekommen* 受動は、能動態における与格項を主格に転じる統語操作と考えることができ、この統語操作の存在は、与

格が構造に依存して与えられる構造格であることを示唆する。bekommen 受動の存在に鑑み、この論文でも与格は構造格であると考ええる。

- (89) a. Das Gericht erkannte ihm den Titel ab.
 the court.NOM deny.3SG.PST him.DAT the title.ACC PTCL
 裁判所は彼の肩書をはく奪した
- b. Er bekam den Titel aberkannt.
 he.NOM get.3SG.PST the title.ACC deny.PTCP
 彼は肩書をはく奪された

構造格は、表層の統語構造において、構造的な条件に基づき付与される。主格が付与されるのは、一般に、IPの指定部であるとされる (cf. Haider 1985: 70, Grewendorf 1988: 152)。対格が付与される構造条件については11章以降で論じるような問題もあるものの、ここではひとまずVPの補部であると仮定する。与格については、VPの指定部がその付与位置であると考えられる (cf. Ogawa 2003: 12)。

- (90) 構造格が付与される構造条件
- a 主格 : ... [IP NOM [I' ... I]] ...
- b. 対格 : ... [VP [v' ACC V]] ...
- c. 与格 : ... [VP DAT [v' ... V]] ...

構造格が付与される項のことを、以下では構造項 (strukturelles Argument; structural argument) と呼ぶ。

4.3. 動詞項の写像的なマッピング

本節では、ここまでに導入した理論装置を使い、文における動詞の項と形式の関係性を定式化する。その際の要点を (91)–(93) にまとめておく (cf. 藤縄 2010)。

- (91) 構造項の資格 :
 構造項の資格があるのは、意味形式の中の個体項のうち、最下位項の項と、これをL統御する項

- (92) [±最上位] と [±最下位] による項の階層的評価:⁹
 動詞の構造項は、最上位なのか否か、最下位なのか否か、すなわち [±最上位] と [±最下位] の 2 つの素性によって評価される
- (93) 構造項の写像規則：
 項構造中の構造項は、その階層的評価に応じた基底の統語位置に投射される
- a. 最上位項 → ... [IP _____ [I' ... I]] ...
 b. 最下位項 → ... [VP [V' _____ V]] ...
 c. 中位項 → ... [VP _____ [V' ... V]] ...

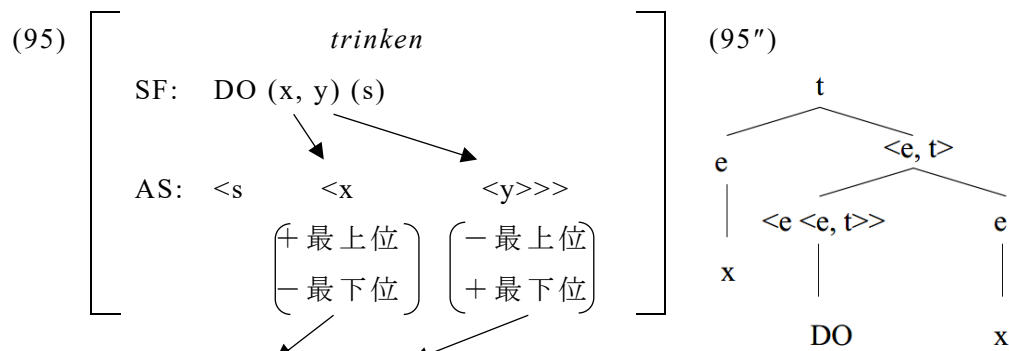
4.3.1. 構造項の資格を持つ項と持たない項

動詞において構造項となるのは、語彙分解された意味形式中の個体項、すなわち人や物の項だけである。つまり、場所の項は構造項とはならず、(94) の *auf dem Tisch* 「机の上に」のように語彙的な前置詞項として実現する。

- (94) Es [LOC (x, Place) (s)]
- | | | |
|---|-------------|---------------------------------------|
| <u>Das Buch</u> _x | liegt | <u>auf dem Tisch</u> _{Place} |
| the book.NOM | lie.3SG.PRS | on the table.DAT |
| 本が _x 机の上に _{Place} 置いてある | | |

さらに、構造項となり得る項は、意味形式中の個体項の中でも、最下位の項と、これを L 統御する項に限られている。例えば、*trinken* 「飲む」の意味形式は (95) のように語彙分解することができる。この意味形式には x と y の 2 つの個体項があり、最下位の個体項は y である。(95) の意味形式には (95") のツリーが対応するが、このツリーでは y が x のひとつ上の節点 t の配下にあるので、x は y を L 統御している。したがって *trinken* では x と y がともに構造項の資格を持っている。

⁹ この素性はもともと Wunderlich (1992, 1997ab, 2000) が [± hr] (= 'there is a higher role') と [± lr] (= 'there is a lower role') として採用したものであるが、特別の場合に負の指定となる素性はわかりにくいため、この論文では藤縄 (2010, 2013) にならい、[±最上位], [±最下位] を用いている。[+最上位] は [- hr] に、[+最下位] は [- lr] に対応する。

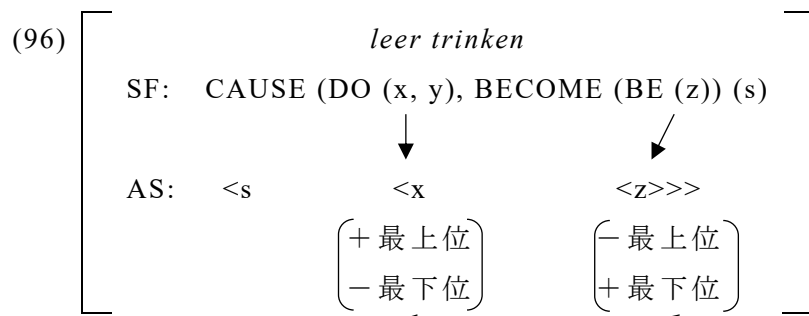


(95') dass [IP sie_x [VP [V' Wein_y trinken]]]

that they.NOM wine.ACC drink.3PL.PST

彼ら_x ワイン_y 飲んだこと

他方, *leer trinken* 「飲んで空にする」の意味形式は (96) のように語彙分解することができる。(96) の意味形式には x, y, z の3つの個体項が含まれ, 最下位の個体項は z である。(96) の意味形式に対応したツリー (96'') において, z は x のひとつ上の節点 t から連鎖で繋がる節点の配下にあることから, x は z を L 統御する。しかし y については, そのひとつ上の節点 <e, t> の配下に z がなく, この節点の上の節点はタイプが異なるので, y は z を L 統御しない。そのため *leer trinken* では, x と z には構造項の資格があるのに対し, y には構造項の資格がない。

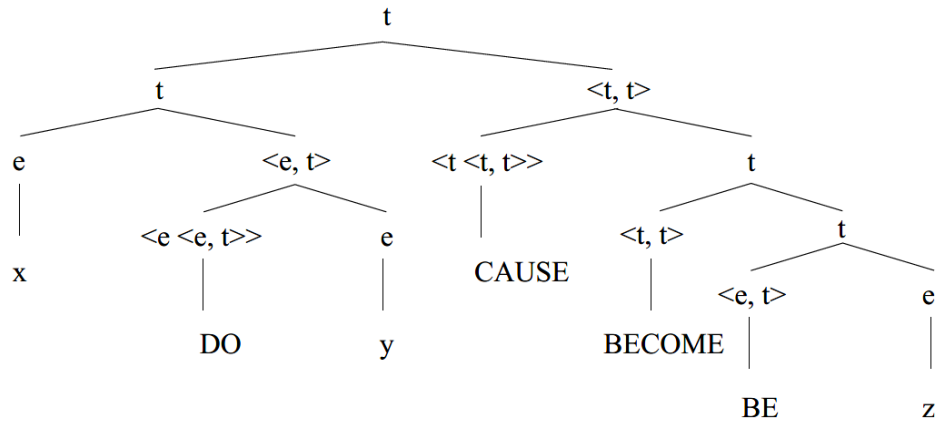


(96') dass [IP sie_x [VP [V' den Keller_z leer trinken]]]

that they.NOM the cellar.ACC empty drink.3PL.PST

彼ら_x 地下室_z 空になるまで飲んだこと

(96'')

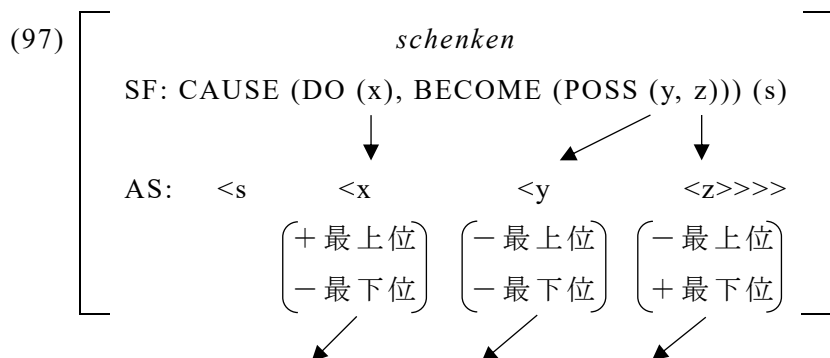


構造項は、語彙分解された意味形式における階層性を [±最上位] と [±最下位] の 2 つの次元で評価されて、この素性とともに入構造に記録される。*trinken* の場合、x は [+最上位, -最下位], y は [-最上位, +最下位] である。*leer trinken* の場合、x が [+最上位, -最下位], z が [-最上位, +最下位] と評価される。

入構造に記録された構造項は、その階層的評価に応じた基底の統語位置に投射される。*trinken* の場合、x は [+最上位, -最下位] の最上位項、y は [-最上位, +最下位] の最下位項であるから、x は IP 指定部、y は VP 補部に投射される。*leer trinken* では、x は [+最上位, -最下位] の最上位項、z は [-最上位, +最下位] の最下位項であるから、x が IP 指定部、z が VP 補部に投射される。すると、各項は、最終的にその統語位置に見合った構造格の付与を受け、*trinken* では x に主格、y に対格が、*leer trinken* では x に主格、z に対格が与えられることになる (cf. (95')/(96'))。

4.3.2. 最上位性と最下位性による中位項の扱い

構造項の階層性を [±最上位] と [±最下位] の 2 つの素性で評価することは、構造項を 3 つ持った 3 項動詞を扱う上で利点となる。例えば、*schenken* 「贈る」の意味形式は (97) のように語彙分解することができる。この意味形式には、x, y, z の 3 つの個体項が含まれる。(97) には (97'') のツリーが対応するが、このツリーにおいて、最下位項 z は、y のひとつ上の節点 t の配下にあると同時に、x のひとつ上の節点から同じタイプの連鎖でつながるもう一つ上の節点 t の配下にもあることから、x と y がともに z を L 統御している。したがって、この 3 項は、すべて構造項の資格があり、実際に *schenken* では 3 項すべてが構造項となる。

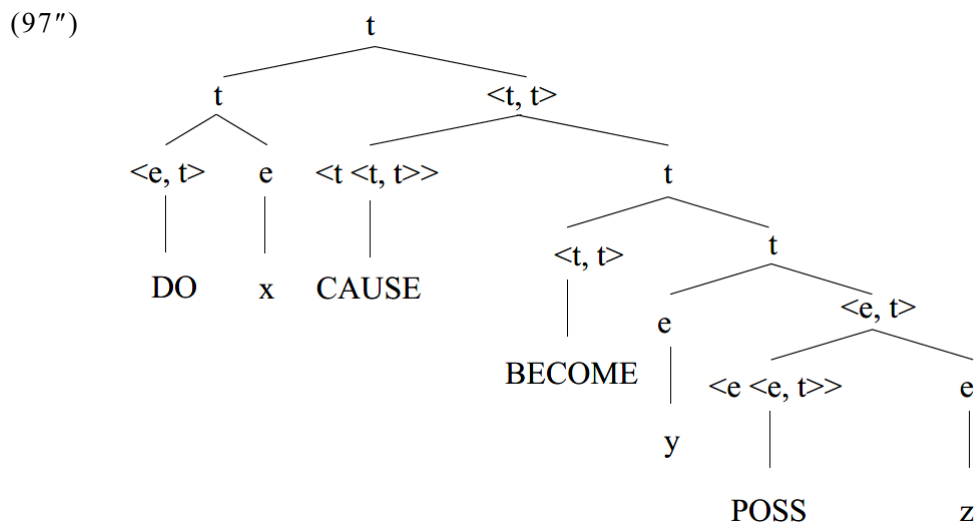


(97') dass [IP Thomas_x [VP ihr_y [v' eine Uhr_z schenkt]]

that Thomas.NOM her.DAT a clock.ACC give.3SG.PRS

主格 与格 対格

トーマスが_x 彼女に_y 時計を_z 贈ること



階層性を〔±最上位〕と〔±最下位〕の2つの素性で評価することで、一方の素性に正の指定を持つ最上位項と最下位項に加え、いずれの素性にも正の指定を持たない中間的な評価を持つ中位項が生まれる。*schenken* では、3つの構造項の評価がそれぞれ、xは〔+最上位、-最下位〕、zは〔-最上位、+最下位〕、yは〔-最上位、-最下位〕となり、yが中位項となる。各項は、その評価とともに項構造に記録される。

項構造に記録された構造項は、その階層的評価に応じた基底の統語位置へと規則的に投射される。したがって、*schenken* では、最上位項のxがIP指定部、最下位項のzがVP補部へと投射され、中位項のyは、VP指定部へと投射される。各項には最終的にその統語的位置に見合った構造格が与えられ、結果として、(97')の統語構造が導かれるのである。

4.3.3. 動作主の特権的ステータス

「使役」という意味を含む複合的な意味形式において、原因（CAUSE 関数の第 1 項）と結果（CAUSE 関数の第 2 項）の関係は不可逆的である (cf. Rapp 1997: 59)。また、使役の原因となる状況は DO である。したがって、(98a) のような意味形式は可能な意味形式である一方、(98b) のような意味形式は不適格である。

- (98) a. CAUSE (DO, ...)
b. *CAUSE (... , DO)

この非対称性は、DO 関数の第 1 項である動作主が、可能な意味形式において常に最上位項であるという帰結をもたらす。つまり、動作主が構造項として項構造の一角を占める場合、この項は必ず [+最上位] の項であり、一貫して IP 指定部に投射されるのである。

動作主の特権的なステータスを項の階層的評価に反映する方法として、藤縄 (2010: 16f.) は、DO に関わる項について [±最上位] と [±最下位] の両方の素性による評価を行う一方、DO に関わらない項については、[±最上位] については無指定としたまま、[±最下位] でのみ評価を行うことを提案している。

[±最上位] による評価を DO に関わる項に限定することには、ドイツ語に 2 種類ある所有動詞を単一の意味形式によって分析できるという利点がある。ドイツ語には、所有を表す動詞に、所有者を主格、所有物を対格とする *haben* 型の動詞 (cf. (99a)) と、所有者を与格、所有物を主格とする *gehören* 型の動詞 (cf. (99b)) がある。*haben* 型動詞の主格・対格の構文と *gehören* 型動詞の与格・主格の構文には、所有者を主題とするのか所有物を主題とするのかという情報構造上の差異があることから、両者の相違は意味形式によってとらえられる概念的な意味の外にあると考えれば、両所有動詞をあくまで同一の意味形式によって語彙分解することができる。

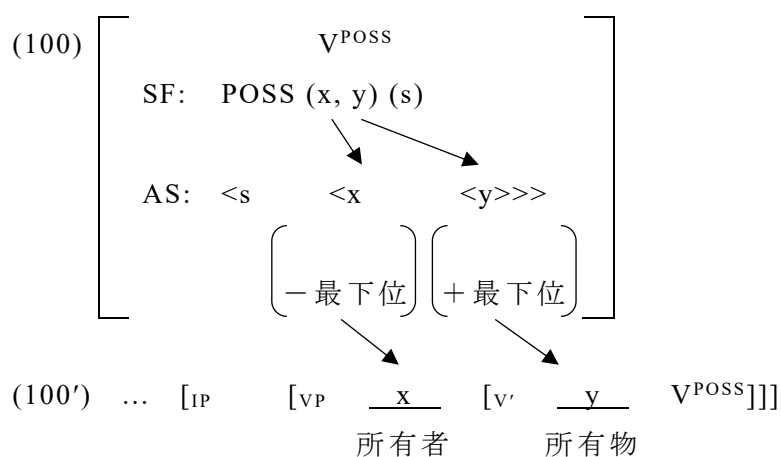
- (99) $\exists s$ [POSS (x, y) (s)]
a. Hanna_x hat viele Uhren_y (haben 型動詞)
Hanna.NOM PRF.3SG.PRS many clock.3PL.ACC
ハンナはたくさん時計を持っている

b. Das Auto_y gehört mir_x (gehören 型動詞)

the car.NOM belong.3SG.PRS me.DAT

その車は私のだ

所有動詞は POSS 関数のみで語彙分解されるので, [±最上位] による評価を DO に限定すると, 任意の所有動詞 V^{POSS} の項は一般に [±最下位] の次元においてのみ評価されることになる。すると, 所有物の y が [+最下位] と評価される一方, 所有者の x は [-最下位] の評価を受けることになる。その結果, y は最下位項として VP 補部へと投射されるのに対し, x は中位項として, VP 指定部へと投射されることになる。



haben 型所有動詞では所有者が主格で表されるのに対し, gehören 型所有動詞では所有物が主格で表される。Fujinawa (2009) および藤縄 (2013) によれば, この違いは動詞の意味の違いによるものではなく, 動詞の形態的な屈折形によって表される法と時制を解釈する手続きの違いによるものである。動詞は形態的な屈折形によって法と時制を表すが, その際, 項の人称と数の素性を参照することが必要となる。例えば, habe という屈折形は 1 人称・単数に鑑みれば直説法現在だが, 3 人称・単数に鑑みれば接続法 I 式である。

(101) a. Ich **habe** ein Auto.

I.NOM have.1SG.PRS a car.ACC

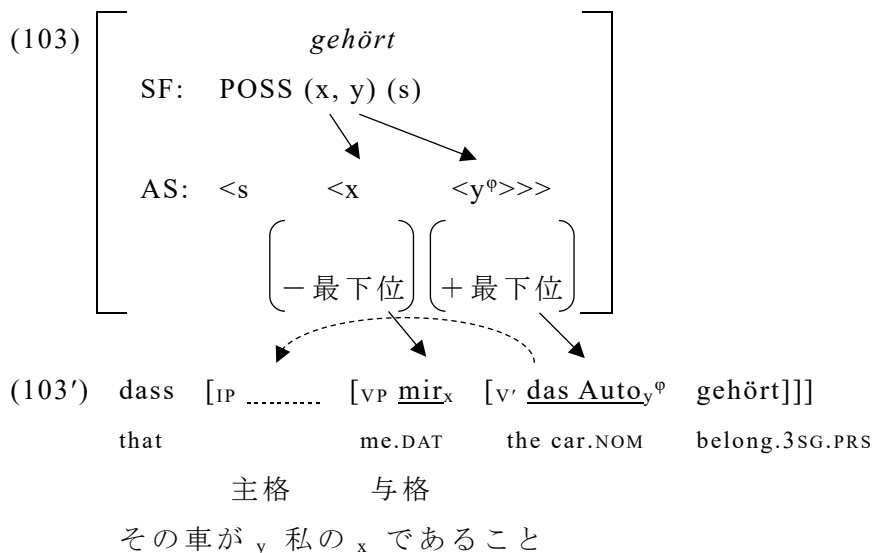
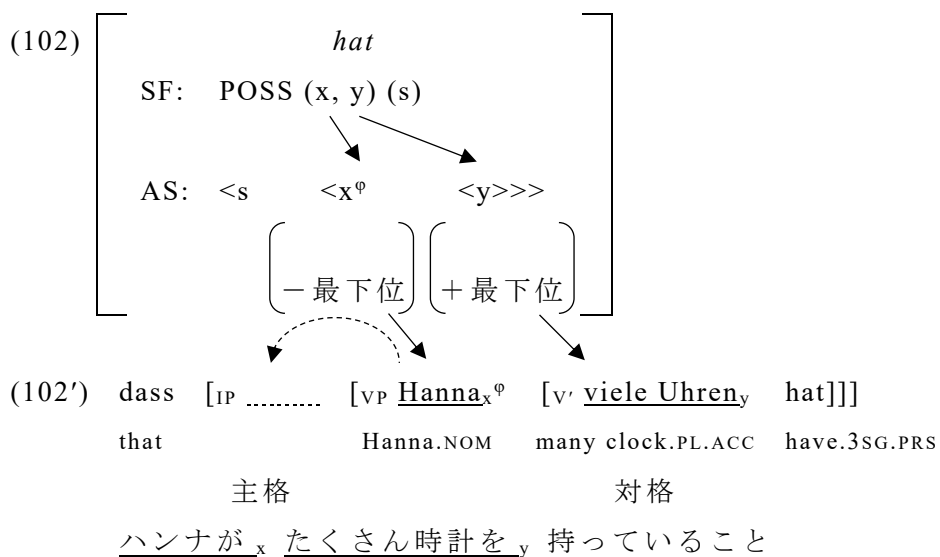
私は車を持っている

b. Er **habe** ein Auto.

he.NOM have.3SG.SBJ1 a car.ACC

彼が車を持っていると

この時、どの項の人称と数が参照されるのかは、動詞とその形態的な屈折形によって決まる。この項は、*hat* では所有者、*gehört* では所有物である。人称と数に性を加えた名詞の属性を表す素性は一般に ϕ 素性と呼ばれるので人称と数を参照される項に ϕ を付すことにすれば、*hat* と *gehört* の違いは、*hat* では (102) のように ϕ が VP 指定部に振り当てられるのに対し、*gehört* では (103) のように ϕ が VP 補部に振り当てられるという形でとらえることができる。



法と時制の解釈のために人称と数を参照される項は、主格によって明示される。主格は、IP 指定部の項に直接与えられるか、あるいは IP 指定部を埋める虚辞によって束縛された項に与えられる (cf. Grewendorf 1988: 157)。そのため、 ϕ を

与えられた項は、IP 指定部に移動するか、IP 指定部の虚辞に束縛されることで可視的または不可視的に IP 指定部に繰り上がり、主格を得るのである。(102')/(103') の破線矢印は、この可視的・不可視的な IP 指定部への繰り上げを表している。もう一方の項は基底の位置にとどまり、その階層的評価に相応しい格を受け取る。すると、*hat* では所有物に対格が与えられ、*gehört* では所有者に与格が与えられることが自然と導かれる。

4.3.4. 並列された意味形式における項の合成的評価

動詞における項の振る舞いを写像論的にとらえるために必要な最後の道具立てが、並列された意味形式における項の合成的な評価である。この道具立ては、*helfen* 「手伝う」などの与格支配の活動動詞をとらえるのに有効である。

helfen のような与格支配の活動動詞を巡っては、従来、*helfen* に対する *unterstützen* 「支援する」のような類似の意味を持つ動詞との対比において、与格支配であることが「予見できない」として、与格が語彙的に指定された語彙格であるとされることがあった (cf. Czepluch 1987: 8)。しかし、*helfen* のような与格支配の活動動詞でも、与格の主格への格上げの手段として (104) のような *bekommen* 受動が有効であるとする判断があることに鑑みれば (cf. Leirbukt 1997), これらの動詞の与格も構造格とみなす余地がある。

(104) a. Der Vater half ihm.

the father.NOM help.3SG.PST him.DAT

父が彼を手伝った

b. Er bekam vom Vater geholfen. (Leirbukt 1997: 144)

the.NOM get.3SG.PST by_the father.DAT help.3.PTCP

彼は父に手伝ってもらった

Blume (2000: 40; 194) は、ドイツ語と北ヨーロッパ・東ヨーロッパのいくつかの言語の対照から、*helfen* などの活動動詞が与格支配であることは「予見できない」ものではなく、これらの動詞 (e.g. *helfen* 「手伝う」、*folgen* 「従う」、*applaudieren* 「拍手喝采する」) に「与格項が単なる被動者ではなく、それ自体も何かを行う動作主的な存在である」という共通の特徴が認められ、そのような特徴を持つ動詞は通言語的にも典型的な目的語とは異なる形式で項を表示すると指摘している。例えば *helfen* の場合、類似した意味を持つ *unterstützen* とは違い、*beim Kochen* 「料理を」のような表現を補足することで、与格の項が行

う行動を明示することができることから、この項がそれ自体も何かを行う存在であることが見てとれる。

(105) a. Er half ihr beim Kochen.

he.NOM help.3SG.PST her.DAT at_the cooking.DAT

彼は彼女の料理を手伝った

b. *Das Kind unterstützt die Mutter beim Abwaschen.

the child.NOM support.3SG.PRS the mother.ACC at_the washing.DAT

(Wegener 1985: 283)

藤縄 (2010) は, *helfen* の与格項が単なる被動者ではなく, それ自体も動作主として行動するような存在であるという認識を, ふたつの DO 関数が並列された (106) の意味形式に反映している。(106) において, 与格項に対応する *y* は, 並列されたふたつの DO 関数の一方では第 2 項の被動者となっているが, もう一方では第 1 項の動作主となっている。

(106) $\exists s$ [[DO (*x*, *y*) & DO (*y*)] (*s*)]

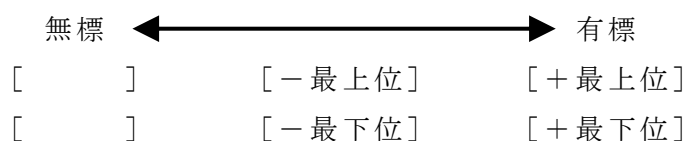
Das Kind_{*x*} hilft der Mutter_{*y*}

the child.NOM help.3SG.PRS the mother.DAT

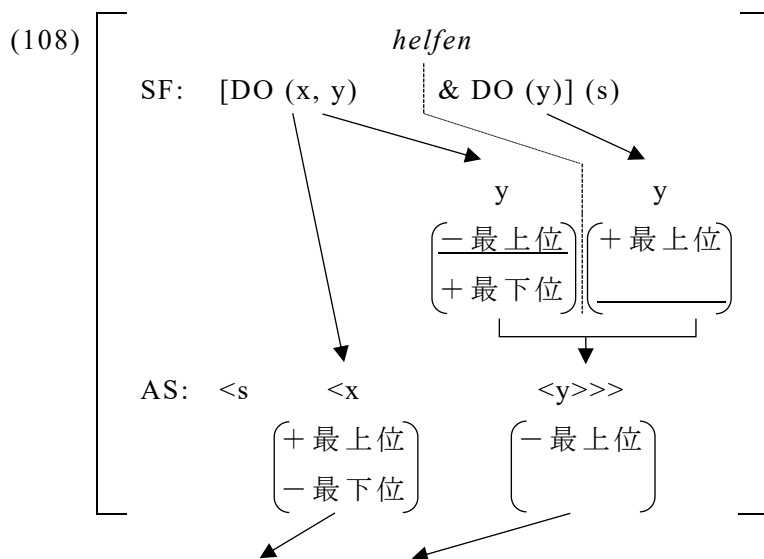
子供が_{*x*} 母を_{*y*} 手伝う

(106) のように並列された意味形式における項の階層性の評価について, 藤縄 (2010) は, 連言を境界とした局所的構造における階層関係が個別に評価された後, 各局所構造における項の評価が突き合せられて, ひとつの項構造に統合されるというプロセスを提案している。その際, ひとつの項が異なる評価を持つ場合には, [±最上位] と [±最下位] のそれぞれにおいて, (107) の有標性のスケールに従いより無標な値が選択されるとする。

(107) 階層的特徴の有標性



この仕組みに基づくと、*helfen* では (108) のように、*x* が [+最上位, -最下位] と一意に評価される一方、*y* は並列された片方の構造では [-最上位, +最下位], もう片方では [+最上位] という評価を受ける (破線は局所構造の境界を表す)。¹⁰ すると、*y* には [-最上位, +最下位] と「+最上位」という 2 通りの評価から最上位性と最下位性のそれぞれについて最も無標な値が選択されて、[-最上位] という中間的な評価が与えられる。



(108') dass [IP er_x [VP mir_y half]]
 that he.NOM me.DAT help.3SG.PST
 主格 与格
 彼が_x 私を_y 手伝ったこと

結果として、*helfen* では、*x* が最上位項として IP の指定部に投射されて主格を受け取る一方、*y* は中位項として VP の指定部へと投射され、最終的に与格の付与を受けることになるのである。

4.4. まとめ

本章では、文における動詞の項と形式の関係について、LDG の枠組みに基づく定式化を行った。LDG では、意味的な特徴の共通する動詞のグループについて、その意味を DO や BECOME といった要素的な意味を表す基本関数の組み合わせによって語彙分解することで、項と形式の関係が写像論的に説明される。構造項は、語彙分解された意味形式における埋め込みの深度を [±最上位] と [±

¹⁰ *y* の行動がどのようなものなのか (つまり、自動詞的なのか、他動詞的なのか) は *helfen* の意味からは与えられないため、*y* は [±最下位] については無指定である。

最下位] の 2 つの素性によって評価され、その評価とともに項構造に記録される。すると、構造項はその階層的評価に応じた統語的位置へと投射され、最終的に、その統語的位置に応じた構造格が与えられるのである。

5. 名詞化の項候補の観察

名詞化に現れる諸成分のうち、状況の参与者を表す成分は、潜在的に名詞化の主題項として分析し得る名詞化の項候補とみなすことができる。名詞化の項候補には、(109a–f) に挙げるような成分が該当する。これらの成分は、それぞれ、(109'a–f) の基盤動詞の文における太字でマークされた項と意味的に対応している。

(109)a. 属格：

Die Verfolgung **des Einbrechers** dauert noch an.
the persecution.NOM the burglar.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL
泥棒の追跡が続いている

b. 前置詞句：

Der Sprung **ins Wasser** ist gestattet
the leap.NOM into_the water.ACC be.3SG.PRS permitted

(DWDS: Der Tagesspiegel, 19.12.2000)

水への飛び込みは認められている

c. 主語的 durch 句：

Die Übersetzung des Werks **durch einen Schüler** dauerte nur 5
the translation.NOM the work.GEN by a student.ACC take.3SG.PST only 5
Monate.
month.PL.ACC

生徒によるその作品の翻訳は5か月しかかからなかった。

d. 所有冠詞：

Meine Arbeit beginnt etwa zwei Monate vor den Schauen.
my work.NOM begin.3SG.PRS about two month.PL.ACC before the show.PL.DAT

(DWDS: Die Zeit, 23.07.2016)

私の仕事はショーの2か月ほど前に始まる

e. 補文：

Der Versuch, **die Pflanze aus reifen Samenkörnern wachsen zu lassen**, misslang.
the attempt.NOM the plant.ACC from ripe seed.PL.DAT grow.INF to
let.INF fail.3SG.PST

(DWDS: Die Zeit, 03.01.2013)

成熟した種子から植物を成長させようとする試みは失敗した

- (109') a. **Der Polizist** verfolgt **den Einbrecher.**
 the policeman.NOM persecute.3SG.PRS the burglar.ACC
 警察官が泥棒を追跡する
- b. Er hat **ins Wasser** gesprungen.
 he.NOM PRF.3SG.PRS into_the water.ACC jump.PTCP
 彼は水に飛び込んだ
- c. **Ein Schüler** übersetzte **das Werk.**
 a student.NOM translate.3SG.PST the work.ACC
 生徒がその作品を翻訳した。
- d. **Ich** arbeite.
 I.NOM work.1SG.PRS
 私は働いている
- e. Sie versuchten, **die Pflanze aus reifen Samenkörnern wachsen**
 they.NOM attempt.3PL.PST the plant.ACC from ripe seed.PL.DAT grow.INF
zu lassen.
 to let.INF
 彼らは成熟した種子から植物を成長させようと試みた

本章では、これら名詞化の項候補について、形式ごとに、項と項付加語の経験的峻別の可能性を検討し、基盤動詞の項との対応関係について観察する。5.1 節では属格および所有冠詞、5.2 節では前置詞句、5.3 節では補文、5.4 節では N1 + N2 型の名詞化複合語を扱う。5.5 節ではこの章のまとめを行う。

5.1. 属格

属格は、名詞句の項候補として第一に挙げられる代表的な形式である。例えば、(110) の名詞化において、属格の *des Einbrechers* 「泥棒の」と *des Außenministers* 「外務大臣の」は、それぞれ (110') の文における目的語と主語に対応している。

- (110) a. **Die Verfolgung** **des Einbrechers** dauert noch an.
 the persecution.NOM the burglar.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL
 泥棒の追跡が続いている

- b. **Die Reise des Außenministers** soll Teil einer
 the trip.NOM the foreign-minister.GEN should.3SG.PRS part.NOM a
 diplomatischen Offensive sein (DWDS: Die Zeit, 17.11.2013)
 diplomatic offensive.GEN be.INF
 外務大臣の外遊は外交上の攻撃の一環のつもりだ

- (110') a. **Der Polizist** verfolgt **den Einbrecher.**
 the police_officer.NOM persecute.3SG.PRS the burgler.ACC
 警察官が泥棒を追跡している

- b. **Der Außenminister** reist nach Deutschland.
 the foreign-minister.NOM travel.3SG.PRS to Germany.DAT
 外務大臣がドイツに外遊する

5.1.1. 属格項と属格付加語

名詞を対象とした統語論・意味論の研究において、属格が項にあたるのか付加語にあたるのかは論争の絶えない問題である。というのも、属格は、(111) や (112) のように名詞化や機能名詞・関係名詞において名詞が求める項の情報を満たす表現となる一方で、(113) のように種族名詞では名詞の意味から独立した所有者を表すのにも用いられるためである。(111) や (112) の属格は一見して項であるように思われるが、(113) の属格は、付加語であると考えるのがもっともらしく思われる。

(111) 名詞化

- a. **die Reise des Mannes**
 the trip.NOM the man.GEN
 その男の旅
- b. **Pauls Reise**
 Paul.GEN trip.NOM
 パウルの旅

(112) 機能名詞・関係名詞

- a. **die Mutter des Mädchens**
 the mother.NOM the girl.GEN
 その少女の母
- b. **Paulas Mutter**
 Paula.GEN mother.NOM
 パウラの母

(113) 種族名詞

- a. **der Hund des Mädchens**
 the dog.NOM the girl.GEN
 その少女の犬

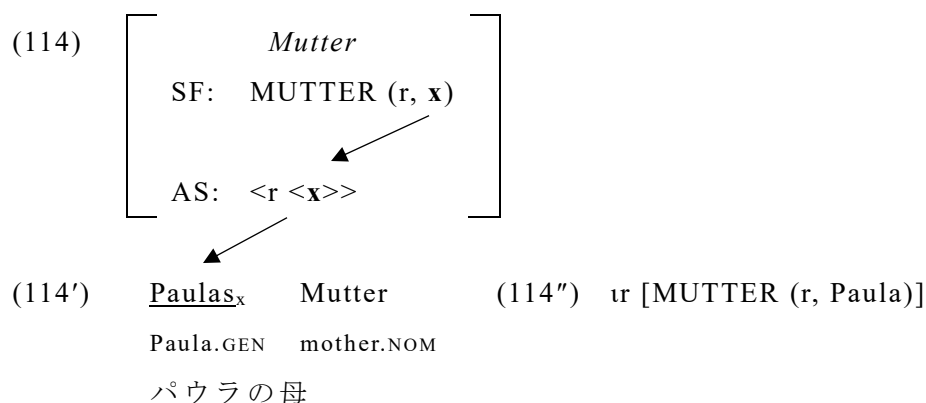
- b. *Paulas Hund*
Paula.GEN dog.NOM
 パウラの犬

こうした背景から、先行研究では、属格の地位を巡って3通りの立場が存在している。すなわち、属格を一貫して項として分析する立場（画一的項分析）と一貫して付加語として分析する立場（画一的付加語分析）、そして、項としての属格と付加語としての属格が並立するとする立場（二重性分析）である。画一的項分析としては、Partee & Borschev (2000, 2003), Vinker & Jensen (2002), Asher & Denis (2004) が、画一的付加語分析としては Kaufmann (2003), Solstad (2010), Bücking (2012) が、二重性分析としては Hartmann & Zimmermann (2003) が代表的な研究である。

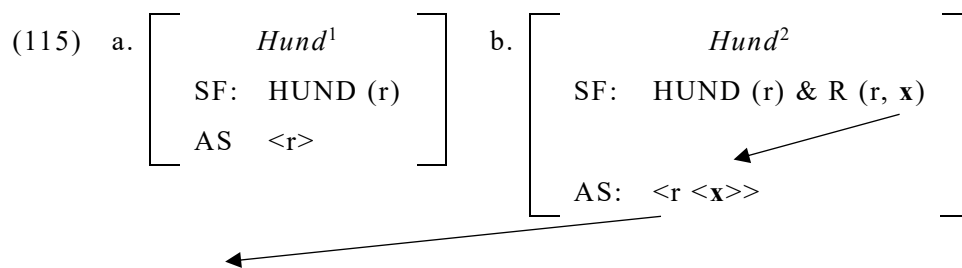
5.1.1.1. 属格の画一的項分析

属格の統語論的・意味論的地位を巡る第一の立場が、属格を一貫して項とみなす立場である。この立場をとる研究には、Partee & Borschev (2000, 2003), Vinker & Jensen (2002), Asher & Denis (2004) など、ドイツ語ではなく英語や北ゲルマン語を主な対象言語としている研究が多いものの、その分析はドイツ語にも当てはめることが可能である。

この立場をとる研究では、機能名詞や関係名詞を主要部とする名詞句の属格が分析の基本となる。機能名詞である *Mutter* 「母」は、(114) の語彙登録を持った2価述語として分析できる。属格を項と考えると、*Paulas Mutter* 「パウラの母」のような名詞句は *Mutter* の関係項が属格で具現化したものとして分析され、「パウラの母である唯一の個体」という (114'') の意味形式を与えることができる。



画一的項分析の立場では、種族名詞を主要部とする名詞句について、属格の存在によって主要部名詞が二次的に関係名詞に変質すると考える。例えば、*Hund*「犬」は本来種族名詞であるから (115a) のような 1 価述語として分析されるが、属格が付されることで、造語論的な手続きによって、新たに (115b) のような関係名詞 *Hund*² が規則的に派生されるとする。



(115') Paulas_x Hund
 Paula.GEN dog.NOM
 パウラの犬 (パウラが飼っている犬)

(115'') ur [HUND (r) & R<POSSESSUM> (r, x)]

*Hund*² には、名詞本来の意味形式に、R で表される関係が並列された意味形式が仮定される。R が表す具体的な関係は、その名詞に関して話し手と聞き手が持っている概念的な知識によって決定する。*Paulas Hund* の場合、例えば「犬は人に飼われる」という知識から、「パウラが飼っている犬」と解釈される。

画一的項分析の問題点は、関係 R が名詞の意味として派生される点である。*Paulas Hund* が「パウラが飼っている犬」と解釈される場合、「犬は人に飼われる」という知識は確かに犬に関する知識と考えられるので、R が名詞の意味として派生されることはもっともらしく思われる。しかし、*Paulas Hund* は必ずしも「パウラが飼っている犬」という意味で解釈されるわけではなく、(116) のような非常に限定された文脈の下では、「パウラが夢中になっている犬」のように解釈されることもある。

(116) Kontext: A und B reden über Paula und wissen, dass Paula ständig vom Hund aus ihrer Nachbarschaft schwärmt, selbst aber keinen Hund besitzt.

文脈：A と B はパウラについて話している。2 人は，パウラが近所からやってくる犬についていつも夢中になって語っているが，自分では犬を飼っていないことを知っている

A:) **Paulas Hund** war übrigens in der Tierklinik.

Paula.GEN dog.NOM be.3SG.PST incidentally in the veterinary-clinic.DAT

ところで，パウラの犬（パウラが夢中になっている犬）が入院したそうだ (Bücking 2012: 81f.)

しかし、「夢中になる」のような関係が，犬に関する知識に含まれているとは考え難い。したがって，関係 R が，名詞の意味として派生されると考えるのは適当ではない。

5.1.1.2. 属格の画一的付加語分析

属格の統語論的・意味論的地位を巡る第二の立場が，属格を一貫して付加語とみなす立場である。この立場をとる先行研究としては Kaufmann (2003) や Solstad (2010) が代表的である。Bücking (2012) も，一部の属格に例外的に項としての地位を認めてはいるものの，¹¹ 機能名詞・関係名詞のすべてと名詞化のほとんどにかかる属格を画一的に付加語とみなす立場をとっている。

画一的付加語分析では，画一的項分析のように名詞の意味として関係 R を導入する代わりに，「属格」を一種の語彙項目として分析し，「属格」の語彙的な意味として，関係 ρ を導入する。「属格」を (117a) のように分析すると，例えば *Paulas* 「パウラの」という属格には，(117b) の分析が得られる。

$$(117) \quad \text{a.} \left[\begin{array}{l} \text{属格} \\ \text{SF: } \rho(v, v) \\ \text{AS: } \langle v \langle v \rangle \rangle \end{array} \right] \quad \text{b.} \left[\begin{array}{l} \textit{Paulas} \\ \text{SF: } \rho(v, \textit{Paula}) \\ \text{AS: } \langle v \rangle \end{array} \right]$$

すると，*Paulas Hund* には，(118) の意味形式を与えることができる。

¹¹ Bücking (2012) は，不定詞名詞化の義務的な属格についてのみ属格項としての地位を認めている。

(118) a. Paulas Hund
Paula.GEN dog.NOM

パウラの犬

b. ur [HUND (r) & ρ (r, Paula)]

ρ は、前節で見た R と違い、名詞ではなく「属格」の意味として与えられる。 ρ (r, x) は、無標の場合には所有関係を表す関数 (= POSSESSUM (r, x)) となる。*Paulas Hund* が通常「パウラの飼っている犬」と解釈されるのは、(118') のように ρ が所有関係として解釈された結果である。

(118') ur [HUND (r) & POSSESSUM (r, Paula)]

ρ は、文脈上の関係を通じて解釈することもできる。前節の (116) のような文脈では、 ρ は文脈から、(118'') のように「r は x が夢中になっているものである」という関係 (= SCHWARM (r, x)) となることができる。その結果、*Paulas Hund* は「パウラが夢中になっている犬」と解釈できるようになる。

(118'') ur [HUND (r) & SCHWARM (r, Paula)]

画一的付加語分析では、機能名詞・関係名詞や名詞化を主要部とする名詞句でも、属格は項ではなく付加語であると考えられる。*Mutter* を前節と同様 2 価述語として分析すると、*Paulas Mutter* 「パウラの母」には、 ρ を並列した (119b) の意味形式が与えられる。

(119) a. Paulas Mutter
Paula.GEN mother.NOM

パウラの母

b. ur [MUTTER (r, x) & ρ (r, Paula)]

このとき、多価の述語に並列された ρ は、並列された関係を参照し、その関係と同じ値をとると考える (cf. Solstad 2010: 21)。*Paulas Mutter* では、 ρ が「母である」という関係 (= MUTTER (r, x)) と同じ値をとることで、(119'b) の意味形式が導かれる。

(119') a. $\text{ur} [\text{MUTTER} (r, x) \ \& \ \boxed{\rho} (r, \text{Paula})]$
 $\rho = \text{MUTTER}$

b. $\text{ur} [\text{MUTTER} (r, \text{Paula}) \ \& \ \text{MUTTER} (r, \text{Paula})]$

画一的付加語分析は、既知の経験的事実について一通り整合的に扱うことができるという意味で「可能な」分析である。この分析の問題点は、機能名詞・関係名詞・名詞化にかかる属格を「項でない」と考える積極的な根拠がないことである。ρ が被修飾名詞の意味形式を参照し、その中の関係と同じ値をとると想定すれば、機能名詞・関係名詞・名詞化にかかる属格を付加語として分析することは確かに可能ではあるものの、機能名詞・関係名詞・名詞化を多価の述語として分析するのであれば、属格を項構造に媒介された項とみる方がシンプルで無駄がない。そもそも、どんな経験的事実であっても恣意的に道具を用意すれば説明は可能となるわけで、あえてシンプルな説明を避けて複雑な仕組みを採用するからには、そのアプローチが恣意的でないことを示す相応の根拠が求められる。画一的付加語分析の場合、属格が名詞の項構造ではなく ρ を通じて解釈されるということを示す積極的な根拠が求められるが、そのようなデータは管見の限り存在しない。

5.1.1.3. 二重性分析

属格の統語論的・意味論的地位に関する第三の立場が、属格に項としての属格項と付加語としての属格付加語の2種類を認めるアプローチである。この立場をとる研究としては、Hartmann & Zimmermann (2003) が代表的である。この立場では、属格項は機能名詞・関係名詞・名詞化の項構造に指定された関係項・主題項の統語的な具現形であり、その解釈は主要部名詞の意味に依存すると考える。一方、属格付加語は、連体修飾句として名詞句を修飾する自立した付加語であると考えられる。例えば、(120a) の *des Mädchens* は属格項であるのに対し、(120b) の *des Mädchens* は属格付加語である。

(120) a. *der Geburtsort des Mädchens*

the birthplace.NOM the girl.GEN

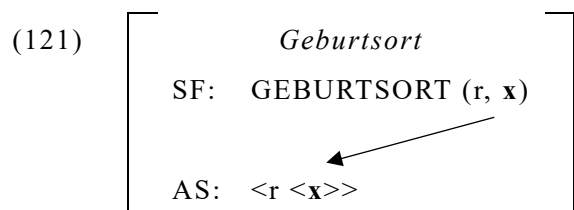
その少女の出生地

b. *der Hund des Mädchens*

the dog.NOM the girl.GEN

その少女の犬

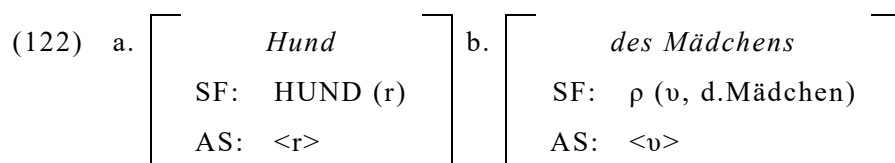
二重性分析では、属格項と属格付加語に、それぞれ異なる意味解釈のプロセスが仮定される。属格項は機能名詞・関係名詞の関係項または名詞化の主題項を埋めるものである。したがって、例えば、*Geburtsort*「出生地」という機能名詞を(121)のように分析すれば、*der Geburtsort des Mädchens*「その少女の出生地」という名詞句には、(121')の意味形式が与えられる。(121'')のd.Mädchenは、属格の*des Mädchens*の指示対象である文脈上唯一の少女を表している。



(121') *der Geburtsort* *des Mädchens*^x
 the birthplace.NOM the girl.GEN
その少女の_x 出生地

(121'') $\text{tr} [\text{GEBURTSORT (r, d.Mädchen)}]$

一方、属格付加語は、1 価述語として分析される名詞に並列された 1 価述語として分析される。この述語は、「属格」の意味として与えられる関係 ρ を通じて解釈される。例えば、*Hund*「犬」を(122a)のように 1 価述語として分析し、属格の名詞句 *des Mädchens*「その少女の」を(122b)のような述語として分析すれば、(122'a)の名詞句には、(122'b)の意味形式が与えられる。



(122') a. *der Hund* *des Mädchens*
 the dog.NOM the girl.GEN
 その少女の犬

b. $\text{tr} [\text{HUND (r) \& } \rho (\text{r, Paula})]$
 = $\text{tr} [\text{HUND (r) \& POSSESSUM (r, Paula)}]$

$\rho(r, x)$ は、無標の場合には所有関係を表す関数 (= POSSESSUM (r, x)) となり、(122') は「その少女が所有する (飼っている) 犬」と解釈される。

二重性分析の根拠となるのは、属格項と属格付加語に、分布の点で異なる特徴が認められるという事実である。ドイツ語において、属格は、主要部名詞に前置されることも後置されることもある (cf. 5.1.3 節)。無冠詞の固有名詞の属格は主要部名詞に前置されるのが無標の語順である一方、冠詞の付された名詞句の属格は主要部名詞に後置されるのが無標の語順である (cf. (123))。

(123) a. **der Hund des Mädchens**

the dog.NOM the girl.GEN

その少女の犬

b. **Paulas Hund**

Paula.GEN dog.NOM

パウラの犬

属格項と属格付加語の違いは、無冠詞固有名詞の属格を主要部名詞に後置することができるか否かということにも関係している。

Hartmann & Zimmermann (2003: 198ff.) によれば、属格項は無冠詞の固有名詞であっても問題なく後置することができるのに対し、属格付加語は、1 音節や 2 音節の固有名詞の場合、無冠詞では主要部名詞に後置され難いという。例えば、*Computer* 「コンピューター」は種族名詞で、これを修飾する属格は属格付加語と考えられるが、この場合、(124) に示すように、*Ulf's* 「ウルフの」のような 1 音節の固有名詞の属格は後置することが難しい。

(124)a. **Der Computer des Mannes ist kaputt.**

the computer.NOM the man.GEN be.3SG.PRS broken

その男のコンピューターが壊れた

b. **Ulf's Computer ist kaputt.**

Ulf.GEN computer.NOM be.3SG.PRS broken

ウルフのコンピューターが壊れた

c. ***Der Computer Ulf's ist kaputt.**

the computer.NOM Ulf.GEN be.3SG.PRS broken

(Hartmann & Zimmermann 2003: 199)

一方、(125) のような機能名詞・関係名詞を主要部とする名詞句にかかる属格項は、1 音節や 2 音節の固有名詞であっても、後置が可能である。¹²

- (125) a. **Die Freundin Ulf** kann wunderbar kochen.
 the girlfriend.NOM Ulf.GEN can.3SG.PRS wonderful cook.INF
 ウルフのガールフレンドは素晴らしく料理ができる
- b. Dann wurde **das Gesicht Putins** plötzlich betonhart.
 then become.3SG.PST the face.NOM Putin.GEN suddenly hard
 するとプーチンの表情は急にコンクリートのように硬くなった
- c. **Der Geburtsort Pauls** liegt auf halber Strecke zwischen den
 the birthplace.NOM Paul.GEN lie.3SG.PRS on half way.DAT between the
 beiden Städten.
 two city.PL.DAT
 パウルの出生地はその 2 つの町の間にある
- d. **Die Größe Berlins** fasziniert die jungen Menschen.
 the size.NOM Berlin.GEN fascinate.3SG.PRS the young people.PL.ACC
 ベルリンの大きさは若者を魅了している

後置することができないのは、2 音節以下の固有名詞の属格付加語で、冠詞のないものである。1 音節の固有名詞であっても、(126) のように冠詞がある場合には、問題なく後置することができる。

- (126) **Der Computer des Ulf** ist kaputt.
 the computer.NOM the Ulf.GEN be.3SG.PST broken
 そのウルフのコンピューターが壊れた

また、後置することができないのは、無冠詞固有名詞の属格付加語のうち、1 音節または 2 音節のものである。すなわち、(127) に示すように、*Alexanders* など 3 音節以上の固有名詞の属格付加語は、無冠詞でも後置することができる。

¹² ただし、*Vater* と *Mutter* は例外的に、機能名詞でありながら、2 音節以下の無冠詞固有名詞を後置属格とはし難いようである。

i. **Ulf Mutter/ [?]Die Mutter** Ulf konnte wunderbar kochen.
 Ulf.GEN mother.NOM/the mother.NOM Ulf.GEN can.3SG.PST wonderful cook.INF
 ウルフの母は見事に料理ができた (Bücking 2012: 48)

- (127) a. ***Der Computer Ulfs**
 b. *?**Der Computer Peters**
 c. ***Der Computer Sophies**
 d. (?)**Der Computer Ursulas**
 e. **Der Computer Paulines**
 f. **Der Computer Montesquieus**
 g. **Der Computer Alexanders**
- } ist kaputt.
- the computer.NOM PROPER-NAME.GEN be.3SG.PRS broken
- [固有名詞] のコンピューターが壊れた

なお、(127abg) の容認度の判断は Hartmann & Zimmermann (2003: 199) によるもので、(127cef) の容認度の判断は筆者が行ったインフォーマントへの聞き取りによるものである。¹³ (127d) については、Hartmann & Zimmermann (2003: 199) では疑問符が付されているものの、筆者の調査では「問題なし」との回答が得られたため、疑問符を括弧に入れている。

このように、属格項と属格付加語には経験的な違いが認められることから、この論文では二重性分析の立場に立ち、属格には、項としての属格項と付加語としての属格付加語が並存すると考える。その際、属格項と属格付加語は、(128) の音韻論的な基準によって峻別される。

(128) 属格項と属格付加語の峻別：

属格を無冠詞の 1 音節または 2 音節の固有名詞で置き換え、主要部名詞に後置することができるならば、その属格は属格項である

5.1.2. 主語属格と目的語属格

属格の様々な用法のうち、伝統的に、名詞化に現れる「動詞の主語に対応する属格」を主語属格 (Genitivus subjectivus) と呼び、「動詞の目的語に対応する属格」を目的語属格 (Genitivus objectivus) と呼ぶ (cf. Helbig & Buscha 2001: 498)。例えば、(129a) の名詞化の *des Profis* 「プロの」は主語属格、(129b) の名詞化の *dieses Werks* 「この作品の」は目的語属格である。(129ab) の名詞化は、それぞれ (129'ab) の文が表す状況に対応している。

¹³ インフォーマントはノルトライン・ヴェストファーレン州出身の 20 代男性 2 名。

(129) a. 主語属格：

Der Tanz des Profis wurde von einem betrunkenen Zuschauer
the dance.NOM the pro.GEN PASS.3SG.PST by a drunk spectator.DAT
unterbrochen.
interrupt.PTCP

プロのダンスが酔っぱらった観客によって中断された

b. 目的語属格：

Die Übersetzung dieses Werks dauerte nur 5 Monate.
the translation.NOM this work.GEN last.3SG.PST only 5 month.PL.ACC

この作品の翻訳には5か月しかかからなかった

(129') a. Der Profi tanzte.

the pro.NOM dance.3SG.PST

プロが踊った

b. Sie übersetzte dieses Werk nur in 5 Monaten.

she.NOM translate.3SG.PST this work.ACC only in 5 month.PL.DAT

彼女はその作品をたった5か月で翻訳した

「主語属格」と「目的語属格」という伝統的な術語は、簡便でわかりやすいものの、無批判に用いるには瑕疵のある術語でもある。というのも、*brechen* など使役的にも反使役的にも用いられる動詞では、(130)/(131)のように、動作主の有無に応じて、同じ意味役割の項が、ある時は主語として、ある時は目的語として実現するからである。

(130) 反使役動詞

Die Vorderachse bruch.

the front-axle.NOM break.3SG.PST

前輪軸にひびが入った

(131) 使役動詞

Er bruch **die Vorderachse**.


he.NOM break.3SG.PST the front-axle.ACC

彼は前輪軸にひびを入れた

そのため、「主語属格」・「目的語属格」という術語を伝統的な定義のまま用いるなら、(132) のような名詞化では、属格の *der Vorderachse* 「前輪軸の」が (130) の主語に対応する「主語属格」なのか、(131) の目的語に対応する「目的語属格」なのかは、文脈に応じてケースバイケースに判断しなくてはならないことになってしまう。

- (132) **Der Bruch der Vorderachse geschah mit einem merklichen**
 the breakage.NOM the front-axle.GEN happen.3SG.PST with a noticeable
 Ruck.
 jerk.DAT
 前輪軸の損傷は大きな揺れとともに起きた

しかし、現代の言語学では、統語論的な主語・目的語の区別は、表層の統語構造だけで行われるのではなく、基底の構造にも注目して行われるようになっている。この考え方によれば、(130) のような反使役動詞の主語は、表層の統語構造においてこそ主語として、すなわち IP 指定部に可視的・不可視的に繰り上がって現れるものの、基底の統語構造では目的語、すなわち VP 補部であるとされる (cf. (133))。

- (133)
- 
- dass [IP [VP [V' **die Vorderachse** bruch]]]
- 主格

そこで筆者は、「主語属格」という術語を「動詞の基底の統語構造における IP 指定部に対応する属格」という意味で用いる。同様に、「目的語属格」という術語は「動詞の基底の統語構造における VP 補部に対応する属格」という意味で用いる。この新たな定義では、(132) の *der Vorderachse* は、文脈によらず、一貫して「目的語属格」として扱われる。

上述の新しい定義では、(134) のようないわゆる非対格動詞の名詞化に見られる属格も「目的語属格」として扱われる。

(134) **die Erkrankung Castros [hat] in Havanna eine Menge**
 the disease.NOM Castro.GEN PRF.3SG.PRS in Havana.DAT a lot_of
Spekulationen ausgelöst. (DWDS: Die Zeit, 11.08.2006, Nr. 33)
 speculation.PL.ACC cause.PTCP
 カストロの病気はハバナで様々な憶測を呼んだ

(134') **Castro ist erkrankt.**
 Castro.NOM PRF.3SG.PRS fall_ill.PTCP
 カストロは病気になった

erkranken は自動詞なので、「病気になる人」は表層の統語構造において常に主語である。しかし、この項も基底の統語構造では VP 補部（非対格主語）とされるので、(134) の属格は「目的語属格」である。

また、上述の定義に従うと、名詞化における属格項には、主語属格とも目的語属格とも言い難いものが出てくる。具体的には、(135) の *der Kunsthalle* 「美術館の」のような属格である。

(135) **Die vier obigen Werke gelangten in den Besitz der Kunsthalle.**
 the four above work.PL.NOM come.3PL.PST into the possession.ACC the Gallery.GEN
 (DWDS: Die Zeit, 11.03.2016)
 上の 4 つの作品は美術館が所有することになった

この属格は、(135') の文の所有者の主語に対応するが、4.3.3 節で論じたように、*besitzen* のような所有動詞では、所有者はもともと VP 指定部にあり、IP 指定部に可視的・不可視的に繰り上がることで表層の統語構造の主語となっていると考えられる (cf. (135'')). つまり、この属格項は、動詞の基底の統語構造における VP 指定部に対応しており、基底構造の IP 指定部でも VP 補部でもないから、上述の意味では「主語属格」でも「目的語属格」でもないことになる。

(135') **Die Kunsthalle besitzt die Werke.**
 the Art_Gallery.NOM possess.3SG.PRS the work.PL.ACC
 美術館がその作品を所有している

(135")

dass [IP [VP **die Kunsthalle** [V_i die Werke besitzt]]]
主格

5.1.2.1. 属格と主格・対格の対応

Duden (2006: 825) をはじめとして、文法書では、「名詞化にかかる属格は文において主格または対格を与えられる項にのみ対応し得る」という記述がなされている。この記述は、「名詞化にかかる属格は動詞の与格項や前置詞項には対応しない」という (136) や (137) の観察を一般化したものである。

(136) 与格項：

- a. Er begegnete **seiner Frau** zufällig auf der Straße.
he.NOM encounter.3SG.PST his wife.DAT accidentally on the street.DAT
彼は妻に偶然通りで会った。
- b. *Die Begegnung **seiner Frau** war ein Zufall.
the encounter.NOM his wife.GEN be.3SG.PST an accident.NOM
- c. Die Begegnung **mit seiner Frau** war ein Zufall.
the encounter.NOM with his wife.DAT be.3SG.PST an accident.NOM
彼の妻との遭遇は偶然だった

(137) 前置詞項：

- a. Der Autor verzichtet **auf eine ausführliche Diskussion.**
the author.NOM do_without.3SG.PRS on a detailed discussion.ACC
著者は詳細な議論を行っていない
- b. *Der Verzicht **einer ausführlichen Diskussion** wird
the doing_without.NOM a detailed discussion.GEN PASS.3SG.PRS
kritisiert.
critize.PTCP
- c. Der Verzicht **auf eine ausführliche Diskussion** wird
the doing_without.NOM on a detailed discussion.ACC PASS.3SG.PRS
kritisiert.
critize.PTCP
詳細な議論を行っていないことが批判されている

この記述は大半の事例について当てはまる。しかし、名詞化において属格に対応しないということが「動詞において与格である」のような項の形式に関する特徴に起因するものなのか否かについては、慎重な判断を要する。というのも、例は限られるが、(138)の *Mangel*「欠如」など、動詞の与格項に対応する属格を認める名詞化もあるからである。

- (138) a. **Der Mangel des Schülers am Ernst** wurde von
 the lack.NOM the student.GEN at_the seriousness.DAT PASS.3SG.PST by
 allen kritisiert.
 everyone.PL.DAT criticize.PTCP
 その生徒に真面目さが欠けていることが皆から批判された
- b. **Es mangelt dem Schüler am Ernst.**
 it.NOM lack.3SG.PRS the student.DAT at_the seriousness.DAT
 その生徒には真面目さが欠けている

(138a) のような与格項に対応する属格の存在は、(136b) の属格の不適合性が、問題の項が動詞の与格項であるという項の形式的な特徴に起因するものではないことを示唆している。

5.1.2.2. 主語属格と目的語属格の項としてのステータス

目的語属格は、一般に、属格項であると考えられる。というのも、目的語属格は基本的に無冠詞の1音節や2音節の固有名詞に置き換えても後置することができるからである。目的語属格は、(139)のように様々な意味関係の動詞の名詞化に現れる。(139a)は使役的状态変化動詞の名詞化、(139b)は活動動詞の名詞化、(139c)は所有状態動詞の名詞化である。(139)の属格は、それぞれ(139')の文の目的語に対応している。これらの属格はすべて、(140a-d)のように、無冠詞の1音節ないし2音節の固有名詞に置き換え、後置することができる。

- (139) a. **Die Erschießung der Terroristen** erfolgte sofort.
 the shooting.NOM the terrorist.PL.GEN take_place.3SG.PST immediately
 テロリストの射殺は直ちに行われた
- b. **Die Prüfung der Bilanz** wird fortgesetzt.
 the auditing.NOM the balance_sheet.GEN PASS.3SG.PRS continue.PTCP
 決算の監査が続けられている

- c. **Der Besitz der illegalen Droge** soll in Berlin bald
 the possession.NOM the illegal drug.GEN should.3SG.PRS in Berlin.DAT soon
 straffrei werden (DWDS: Berliner Zeitung, 25.09.2003)
 unpunishable become.INF
 違法薬物の所持がベルリンではまもなく罪に問われなくなる

(139') a. **Die Geheimpolizei hat die Terroristen erschossen.**
 the secret-police.NOM PRF.3SG.PRS the terrorists.ACC shoot.PTCP
 秘密警察がテロリストを射殺した

b. **Der Rechnungshof prüft die Bilanz.**
 the Court_of_Auditors.NOM check.3SG.PRS the balance_sheet.ACC
 会計監査院が決算を監査している

c. **Der Drogensüchtige besitzt die irregale Droge.**
 the drug_addict.NOM own.3SG.PRS the irrational drug.ACC
 薬物中毒者が違法薬物を所持している

(140) a. **Die Erschießung Peters erfolgte sofort.**
 the shooting.NOM Peter.GEN take_place.3SG.PST immediately
 ペーターの射殺は直ちに行われた

b. **Die Unterstützung Saddams ist längst als geopolitischer
 Fehltritt verbucht worden.** (DWDS: Berliner Zeitung, 20.12.2002)
 misstep.NOM record.PTCP PASS.PTCP

サダムを支援したことはとっくに地政学的失政だったとされている

c. **Zwischen beiden hat sich eine Entwicklung vollzogen,**
 between both.PL.DAT PRF.3SG.PRS REF.ACC a development.NOM make.PTCP
die durch Kulturkatastrophen gestört, aber nie unterbrochen
 which.NOM by cultural_disaster.PL.ACC disturb.PTCP but never interrupt.PTCP
worden ist, die beide verbindet und Hofmannsthal
 PASS.PTCP PRF.3SG.PRS which.NOM both.ACC bind.3SG.PRS and Hofmannsthal.ACC
den Besitz Homers ermöglicht. (DWDS: Die Zeit, 09.12.1948)
 the possession.ACC Homer.GEN allow.3SG.PRS

ホメーロスからホフマンスタールまでの間には、文化危機により阻ま
 れながらも決して途絶えず、両者を結び付け、ホフマンスタールがホ
 メーロス（の詩）を所有することを可能とする文化の発展があった

一方、主語属格は、属格項と属格付加語の区別に関して注意を要する。というのも、「基盤動詞の（基底）主語に対応する属格」には、属格項だけでなく、属格付加語もあるからである。例えば、(141) の属格は 2 音節の無冠詞の固有名詞として後置されているので、属格項である。

- (141) Er wolle **die Unterstützung Ryans** gar nicht, [...]
 he.NOM want.3SG.SBJ1 the support.ACC Ryan.GEN at_all not,
 sagte Trump. (DWDS: Die Zeit, 12.10.2016)
 say.3SG.PST Trump.NOM
 ライアン下院議員に支援を受けることは全く望んでいないとトランプ氏は述べた

これに対し、(142) の属格は、一見して主語的な解釈を持っているものの、(142') に示すように後置することができないので、属格付加語である。

- (142) **Peters Geislerschießung** ereignete sich vor Mitternacht.
 Peter.GEN hostage-shooting.NOM happen.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT
 ペーターの捕虜射殺は夜半前に起こった
- (142') ***Die Geislerschießung Peters** ereignete sich vor Mitternacht.
 the hostage-shooting.NOM Peter.GEN happen.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT

主語的な属格のうち、属格項のみを主語属格と呼ぶとすれば、(141) の属格項は主語属格であるのに対し、(142) の属格付加語は主語属格ではないことになる。

5.1.2.3. 主語属格が認められる名詞化

主語属格が認められるか否かには、基盤動詞の種類が関係している。*Erschießung* 「射殺」のような使役的状态変化動詞の名詞化では、通常、主語属格は認められない (cf. Ehrich & Rapp 2000)。例えば、(143) の名詞化は、「誰かがハンターを射殺すること」という意味では解釈できるものの、「ハンターが何かを仕留めること」という意味での解釈は認められない。

- (143) **Die Erschießung des Jägers geschah unerwartet.**
 the shooting.NOM the hunter.GEN occur.3SG.PST unexpectedly
 ≠ [ハンターが何かを仕留めること] は予期せず起きた
 = [誰かがハンターを射殺すること] は予期せず起きた

主語属格が認められるのは、(144) のような活動動詞の名詞化である。

- (144) a. **Die Arbeit der Staatsanwälte wird voraussichtlich noch mehr**
 the work.NOM the prosecutor.PL.GEN FUT.3SG.PRS probably much more
als ein Jahr dauern. (DWDS: Berliner Zeitung, 06.12.1999)
 than a year.ACC last.INF

検察の仕事は1年以上かかることが見込まれる

- b. Er wolle **die Unterstützung Ryans** gar nicht, [...] sagte
 he.NOM want.3SG.SBJ1 the support.ACC Ryan.GEN at_all not, say.3SG.PST
Trump. (DWDS: Die Zeit, 12.10.2016)

Trump.NOM

ライアン下院議員に支援を受けることは全く望んでいないとトランプ氏は述べた

- (144') a. **Die Staatsanwälte arbeiten.**
 the prosecutor.PL.NOM work.3PL.PRS
 検察が働いている

- b. Ryan **unterstützt Trump.**
 Ryan.NOM support.3SG.PRS Trump.ACC

ライアン下院議員がトランプ氏を支援する

ただし、通常主語属格が認められない使役状態変化動詞の名詞化でも、(145) のように対比的な文脈にある場合や、(146) のように名詞化が複数形となっている場合には、主語属格が可能となる。

- (145) **Die Erschießung des Anführers/Hugos** war grausamer als
 the shooting.NOM the boss.GEN/Hugo.GEN be.3SG.PST more_cruel than
 die seines Gegners. (Hartmann & Zimmermann 2002: 192)
 that.NOM his opponent.GEN

[ボスが／フーゴが人を射ち殺すこと]は彼の抗争相手のよりも残酷
 だった

- (146) **Die Erschießungen des Jägers/Peters** geschahen immer des
 the shooting.PL.NOM the hunter.GEN/Peter.GEN happen.3PL.PST always the
 Nachts. (Ehrich 2002b: 33)
 night.GEN

[ハンターが／ペーターが何かを仕留めること]はいつも夜間に起こ
 った

5.1.3. 前置属格と後置属格

属格には、主要部名詞に後置される後置属格 (cf. (147)) と、前置される前置属格 (cf. (148)) がある。無冠詞の固有名詞の属格は主要部名詞に前置されるのが無標の語順である一方、冠詞の付された名詞句の属格は、主要部名詞に後置されるのが無標の語順である。

- (147) 後置属格

- a. **Die Arbeit der Schüler** wurde unterbrochen.

the work.NOM the student.PL.GEN PASS.3SG.PST interrupt.PTCP

生徒たちの仕事は中断された。

- b. Ich bewundere **die Eroberung der Stadt.**

I.NOM criticize.1SG.PRS the conquest.ACC the city.GEN

私はその都市の征服に感動している

- (148) 前置属格

- a. **Julias Arbeit** wurde unterbrochen.

Julia.GEN work.NOM PASS.3SG.PST interrupt.PTCP

ユリアの仕事は中断された。

- b. Ich bewundere **Dresdens Eroberung.** (Lattewitz 1994: 123)

I.NOM criticize.1SG.PRS Dresden.GEN conquest.ACC

私はドレスデンの征服に感動している

5.1.1.3 節で述べたように、1音節や2音節の固有名詞が無冠詞のまま後置属格として認められるか否かということは、属格項と属格付加語を経験的に判別する基準となる。属格項は1音節・2音節の無冠詞の固有名詞でも後置属格として認められるが、属格付加語は、1音節・2音節の無冠詞の固有名詞の場合、常に前置属格となり、後置属格とはならない。

(149) a. 属格項

Die Erschießung Peters erfolgte sofort.
 the shooting.NOM Peter.GEN take_place.3SG.PST immediately
 ペーターの射殺は直ちに行われた

b. 属格付加語

***Die Geiselschießung Peters** ereignete sich vor Mitternacht.
 the hostage-shooting.NOM Peter.GEN happen.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT

(149b') **Peters Geiselschießung** ereignete sich vor Mitternacht.

Peter.GEN hostage-shooting.NOM happen.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT
 ペーターの捕虜射殺は夜半前に起こった

現代ドイツ語では、前置属格はもっぱら人名や地名など無冠詞の固有名詞に限られており、冠詞のある普通名詞の前置属格は容認度に揺れがある。例えば、Demske (2001) は、普通名詞の前置属格の容認度を否定的に評価している一方、Lindauer (1995) や Bücking (2012) は、これを有標ながらも認められる表現として扱っている。実際のところ、(150) のような実例をコーパスから見つけることは難しくないことから、普通名詞の前置属格は、有標であることは確かとしても、全く不可能な表現というわけではないと言えそうである。

(150) a. **Des Japaners Reise** freilich endet [...] nicht erfolgslos

the Japanese.GEN trip.NOM of_course end.3SG.PRS not unsuccessfully

(DWDS: Die Zeit 19.05.2015, Nr. 19)

その日本人の出張はもちろん実りなくは終わらない。

b. **Des Riesen Entnazifizierung findet** also nicht statt.

the giant.GEN denazification.NOM occur.3SG.PRS so not PTCL

(DWDS: Die Zeit 10.09.1965, Nr. 37)

巨人像の脱ナチ化（ブレーメンのローラント像内の空洞にしまわれて
いるとされるナチス時代の文書の取り出し）は行われぬ。

前置属格には、後置属格には認められない解釈が認められることがある (cf. Lattewitz 1994)。例えば、*Erschießung* のような使役的状态変化動詞の名詞化では、通常、後置属格には主語的な解釈は認められない (cf. (151a))。一方、同じ *Erschießung* にかかる属格でも、前置属格には、(151b) のように主語的な解釈が認められる。これは、前置属格が後置属格とは異なる手続きで解釈されることを示唆している。

(151) a. **Die Erschießung Peters** ereignete sich vor Mitternacht

the shooting.NOM Peter.GEN occur.3SG.PST REF.ACC bevor night.DAT

≠ [ペーターが誰かを射殺すること] が夜半前に起こった

= [誰かがペーターを射殺すること] が夜半前に起こった

b. **Peters Erschießung** ereignete sich vor Mitternacht.

Peter.GEN shooting.NOM occur.3SG.PST REF.ACC bevor night.DAT

= [ペーターが誰かを射殺すること] が夜半前に起こった

= [誰かがペーターを射殺すること] が夜半前に起こった

上述のように、属格の配置は、その属格が属格項なのか否かということと関係している。*Peter* のような 2 音節の無冠詞固有名詞は、属格項であれば後置属格となれるが、属格項でなければ後置属格とはなれない。したがって、(151b) の属格に認められる主語的な解釈は、属格項が持つ主語属格としての解釈とは異なるものである。

前置属格と後置属格はひとつの名詞化に同時に現れることもある。他動詞の名詞化に前置属格と後置属格が共起した場合、2 つの属格項の解釈には、語順が関係する。例えば、(152) の名詞化は、通常、「ペーターがマリアを治療すること」という意味で解釈され、「マリアがペーターを治療すること」という解釈は不可能ではないものの、¹⁴ 極めて有標である (cf. Bhatt 1989; 1990, Lindauer 1995, Zifonun et al. 1997: 2031ff.)。

¹⁴ このような解釈が有標ながらも不可能ではないという観察は、Bücking (2012: 56) が

(152) **Peters Behandlung Marias** wird fortgesetzt.
 Peter.GEN Treatment.NOM Maria.GEN PASS.3SG.PRS continue.PTCP
 = [ペーターがマリアを処置すること] が続けられている
 ≠ [マリアがペーターを処置すること] が続けられている

(152') **Peter behandelt Maria.**
 Peter.NOM treat.3SG.PRS Maria.ACC
 ペーターがマリアを処置する

5.1.4. 所有冠詞

所有冠詞も、状況の参与者を表す名詞化の項候補である。(153) の名詞化において、所有冠詞の *meine* は (153') の文の主語 *ich* に対応している。このように、所有冠詞は同じ性・数・人称の人称代名詞によって表される項に対応する。

(153) **Meine Arbeit** beginnt etwa zwei Monate vor den Schauen.
 my work.NOM begin.3SG.PRS about two month.PL.ACC before the show.PL.DAT
 (DWDS: Die Zeit, 23.07.2016)
 私の仕事はショーの 2 か月ほど前に始まる

(153') **Ich** arbeite.
 I.NSOM work.1SG.PRS
 私は働いている

名詞化における所有冠詞の振る舞いは、前置属格と共通している。名詞化において状況の参与者を表す前置属格は、常に同じ個体を指示する所有冠詞によって置き換えることができる (cf. (154))。

(154) a. **Julias/ Ihr Tanz** wurde von einem betrunkenen Zuschauer unterbrochen.
 Julia.GEN/ her dance.NOM PASS.3SG.PST by a drunk spectator.DAT
 interrupted.PTCP
 ユリアの / 彼女のダンスは酔っぱらった観客によって中断された。

Claudia Maienborn 氏および Veronika Ehrich 氏からの個人談話における指摘として報告している。ただし、この解釈が可能となる具体的な文脈などは挙げられていない。

- b. **Peters/ seine Entlassung** war der Höhepunkt der Affäre.
 Peter.GEN/ his dismissal.NOM be.3SG.PST the highlight.NOM the affair.GEN
 ペーターの／彼の罷免がスキャンダルのピークだった

前節で述べたように、前置属格には、後置属格には認められない主語的な解釈が認められることがある。この主語的な解釈は、所有冠詞にも認められる。例えば、*Erschießung* のような使役の状態変化動詞の名詞化では、後置属格には主語的な解釈が認められないが、前置属格と所有冠詞には主語的な解釈が認められる (cf. (155))。

- (155) a. **Die Erschießung Peters** ereignete sich vor Mitternacht
 the shooting.NOM Peter.GEN happen.3SG.PST REF.ACC bevor night.DAT
 ≠ [ペーターが誰かを射殺すること] が夜半前に起こった
 = [誰かがペーターを射殺すること] が夜半前に起こった
- b. **Peters/ Seine Erschießung** ereignete sich vor Mitternacht.
 Peter.GEN/ his shooting.NOM happen.3SG.PST REF.ACC bevor night.DAT
 = [ペーターが／彼が誰かを射殺すること] が夜半前に起こった
 = [誰かがペーターを／彼を射殺すること] が夜半前に起こった

他動詞の名詞化において後置属格と共起した場合にも、所有冠詞には前置属格と同じ性質が当てはまる。すなわち、(156) の名詞化は通常「ペーターが／彼がマリアを治療すること」という意味で解釈され、「マリアがペーターを／彼を治療すること」という解釈は極めて有標となる (cf. Bhatt 1989; 1990, Lindauer 1995, Zifonun et al. 1997: 2031ff.)。

- (156) **Peters/ Seine Behandlung Marias** wird fortgesetzt.
 Peter.GEN/ his Treatment.NOM Maria.GEN PASS.3SG.PRS continue.PTCP
 = [ペーターが／彼がマリアを処置すること] が続けられている
 ≠ [マリアがペーターを／彼を処置すること] が続けられている

5.1 節の要点を (157) にまとめる：

- (157) a. 属格項と属格付加語の峻別 (= (128))：
 属格を無冠詞の 1 音節または 2 音節の固有名詞で置き換え、主要部名詞に後置することができるならば、その属格は属格項である

b. 主語属格と目的語属格：

「動詞の基底の統語構造における IP 指定部に対応する属格」を主語属格、「動詞の基底の統語構造における VP 補部に対応する属格」を目的語属格と呼ぶ。目的語属格が基本的に属格項であるのに対し、主語的な解釈は属格付加語にも認められることがあるため、主語属格の認定には、属格項と属格付加語の峻別が不可欠である

c. 後置属格と前置属格・所有冠詞：

前置属格・所有冠詞には、後置属格にはない主語的な解釈が認められることがある。したがって、前置属格・所有冠詞の解釈は、後置属格とは異なる手続きによって行われると考えられる。また、前置属格・所有冠詞が持つ主語的な解釈は、属格項が持つ主語属格としての解釈とは異なるものであると考えられる

5.2. 前置詞句

前置詞句は、状況の参与者を表す名詞化の項候補として、属格項に次いで中心的な成分である。例えば、(158a–c) の名詞化では、前置詞句の *nach Dresden-Neustadt*, *auf ein Familienleben* および *für die Kriegsoffer* が、それぞれ、(158') の文における動詞の前置詞句や与格の項に対応している。

- (158) a. **Die Reise nach Dresden-Neustadt beginnt freitags und**
the journey.NOM to Dresden-Neustadt.DAT start.3SG.PRS on_Fridays and
sonnabends um 18.09 Uhr. (DWDS: Berliner Zeitung, 11.08.2005)
on_Saturdays at 18.09

ドレスデン新市街へのツアーは毎週金曜日・土曜日 18 時 09 分に開始する

- b. **Der Verzicht auf ein Familienleben ist vielen katholischen**
the doing_without.NOM on a family-life.ACC be.3SG.PRS many Catholic
Männern ein zu hoher Preis. (DWDS: Die Zeit, 08.05.2002, Nr. 20)
man.PL.DAT a too high price.NOM

家族との生活を放棄しなくてはならないことは多くのカトリックの男性にとってあまりにも高い代償である

- c. Die Bundesregierung unterstützt die Hilfe an die
 the federal_government.NOM support.3SG.PRS the help.ACC to the
Kriegsopfer. (Duden 2006: 825)
 war_wictim.PL.ACC
 連邦政府は戦災者への援助を支援している

(158') a. Sie reisen nach Dresden-Neustadt.

they.NOM travel.3PL.PRS to Dresden-Neustadt.DAT

彼らはドレスデン新市街に向けて旅行する

b. Katholische Priester müssen auf ein Familienleben verzichten.

Catholic priest.PL.NOM must.3PL.PRS on a family-life.ACC do_without.INF

カトリックの聖職者は家族との生活を放棄しなくてはならない

c. Das Rote Kreuz hilft den Kriegsopfern.

the red cross.NOM help.3SG.PRS the war_wictim.PL.DAT

赤十字が戦災者を援助する

属格に属格項と属格付加語が並立するように、前置詞句にも、項として機能する前置詞項と、付加語として機能する前置詞付加語が並立すると考えられる。Zifonun et al. (1997: 1974-1977) は、名詞句における前置詞句の項と付加語の区別に、その前置詞句の解釈が不変かどうかということが基準となるとしている。Zifonun et al. (1997: 1974f.) によれば、前置詞項は解釈が不変的で、ある特定の解釈と厳に結びついているのに対し、前置詞付加語には文脈に依存した自由解釈 (freie Lesart) が認められるという。例えば、(159a) の *für Tanja* には「ターニャを招待する」という項的な解釈に加え、「ターニャのために別の人物（例えばエリック）を招待する」などの自由解釈が認められるから、この前置詞句は前置詞付加語である。一方、(159b) の *an Tanja* は一貫して「ターニャを招待すること」と解釈されるので、前置詞項である。

(159) a. Einladung für Tanja (Zifonun et al. 1997: 1975)

invitation.NOM for Tanja.ACC

ターニャのための招待

= [ターニャを招待すること]

= [ターニャのために、誰かを招待すること (自由解釈)]

b. *Einladung* *an Tanja* (Zifonun et al. 1997: 1975)

invitation.NOM to Tanja.ACC

ターニャ宛の招待

= 「ターニャを招待すること」

≠ 「ターニャのために、誰かを招待すること（自由解釈）」

前置詞句の中には、(160) に示す *Schutz* 「保護」の *vor* や *gegen* の前置詞句のように、主要部の名詞によって形式的な選択を受けているものもある。こうしたケースでは、前置詞句が前置詞項であることが特に明らかである。

(160) a. *Schutz* *vor Kälte/* *gegen Kälte* (Zifonun et al. 1997: 1976)

Protection.NOM for cold.DAT/ against cold.ACC

寒さに対する保護

b. **Schutz* *an Kälte* (Zifonun et al. 1997: 1976)

Protection.NOM at cold.DAT

5.2.1. 前置詞項（名詞化）と前置詞項（動詞）の対応

動詞における前置詞項は、一般に、名詞化においても、動詞と同じ種類の前置詞句による前置詞項となる (cf. Hölzner 2007: 47)。例えば、*verzichten* 「断念する」は *auf* の前置詞句を前置詞項として求める動詞であるが、(161a) に示すように、名詞化した *Verzicht* も *auf* の前置詞句を項に求める。また、*fahren* 「(乗り物で) 行く」は、方向の前置詞句を項として要求するが、(161b) に示すように、名詞化した *Fahrt* も方向の前置詞句を前置詞項とする (cf. Zifonun et al. 1997: 1976ff.)。

(161) a. *Ich* *finde* ***den Verzicht des Bundespräsidenten auf die***

I.NOM find.1SG.PRS the waiver.ACC the Federal_President.GEN on the

Sotschi-Reise *sehr schade.* (DWDS: Die Zeit, 17.12.2013)

Sochi-trip.ACC very pity

私は連邦大統領がソチへの外遊を取りやめたことを大変残念に思う

b. **Die Fahrt nach Kassel/über Kassel/in den Zoo/zur Tante** ist für heute geplant.

the journey.NOM to Kassel.DAT/via Kassel.ACC/into the zoo.ACC/to_the aunt.DAT
be.3SG.PRS for today plan.PTCP

カッセルに／カッセルを経由して／動物園へ／伯母のところへ行く
ことが今日予定されている

(161') a. Der Bundespräsident hat auf die Sotchi-Reise verzichtet.

the Federal_President.NOM PRF.3SG.PRS on the sochi-trip.ACC renounce.PTCP

連邦大統領はソチへの外遊を取りやめた

b. Sie fahren nach Kassel/ über Kassel/ in den Zoo/ zur

they.NOM go.3PL.PRS to Kassel.DAT/ via Kassel.ACC/ into the zoo.ACC/ to_the

Tante.

aunt.DAT

彼らはカッセルに／カッセルを経由して／動物園へ／伯母のところへ行く

Verzicht のように前置詞項をある特定の前置詞として指定するのではなく、*Fahrt* のように前置詞句の意味的なグループとして指定する名詞化には、(162)に挙げるような、移動動詞の名詞化が多く含まれる (cf. Zifonun et al. 1997: 1978)。移動動詞は一般に方向の前置詞句を項にとるが、これらの名詞化も、方向の前置詞句を項にとる。

(162) a. Flug nach Berlin/ über Berlin/ zum Mond

flight.NOM to Berlin.DAT/ via Berlin.ACC/ to_the moon.DAT

ベルリンへの／ベルリン上空の／月への飛行

b. Gang in die Stadt/ durch den Park/ zum Arzt

Walk.NOM into the town.ACC/ through the park.ACC/ to_the doctor.DAT

町への／公園を通過の／医者への歩行

c. Aufstieg auf den Berg/ zum Gipfel

Climb_up.NOM on the mountain.ACC/ to_the summit.DAT

山に／山頂に登ること

- (162') a. nach Berlin/ über Berlin/ zum Mond fliegen
 to Berlin.DAT/ vir Berlin.ACC/ to_the moon.DAT fly.INF
 ベルリンへ／ベルリン上空を／月へ飛行すること
- b. in die Stadt/ durch den Park/ zum Arzt gehen
 into the town.ACC/ through the park.ACC/ to_the doctor.DAT walk.INF
 町へ／公園を／医者へ歩いていく
- c. auf den Berg/ zum Gipfel aufsteigen
 on the mountain.ACC/ to_the summit.DAT climb_up.INF
 山に／山頂に登る

方向の前置詞句を項にとる名詞化に比べ、場所の前置詞句を項に求める名詞化は数が少ない。これは、移動動詞が語幹名詞化や e 名詞化と相性の良い動詞クラスであるのに対し、場所の前置詞句を項にとる動詞として中心的な動詞クラスである所在動詞 (e.g. *liegen*「横たわっている」、*stehen*「立っている」、*hängen*「掛かっている」etc.) が名詞化され難いという語彙的な事情によるものである。したがって、名詞化の項として場所の前置詞句が現れないということはなく、(163) の *Verankerung*「係留」のように場所の前置詞句を項にとる動詞に対応した名詞化さえ語として存在すれば、その名詞化は場所の前置詞句を項にとる。

- (163) *Verankerung der Windräder im Meeresboden*
 anchoring.NOM the windmill.PL.GEN in_the seabed.DAT
 風車の海底への固定

- (163') *die Windräder im Meeresboden verankern*
 the windmill.PL.ACC in_the seabed.DAT anchor.INF
 風車を海底に固定する

5.2.2. 前置詞項（名詞化）と非前置詞項（動詞）の対応

名詞化の前置詞項が、動詞の前置詞句以外の形式の項に対応することもある。その代表例が、動詞の与格項に対応する前置詞項である。5.1.2.1 節でも述べたように、動詞の与格項は、*Mangel* などの少数のケースを除き、名詞化の属格には対応しない。例えば、(164) の文に示すように、*helfen*「手伝う」は与格支配の 2 項動詞、*überreignen*「相続させる」は主格・与格・対格の項をとる 3 項動詞であるが、*Hilfe* や *Überreignung* では、(164') に示すように、与格項に対応する属格は認められない。

(164) a. Das Rote Kreuz hilft **den Kriegsopfern.** (Duden 2006: 825)

the red cross.NOM help.3SG.PRS the war_wictim.PL.DAT

赤十字が戦災者を援助する

b. Sie **übereigneten ihrem Enkel** das Haus.

they.NOM give.3PL.PST their grandson.DAT the house.ACC

彼らは孫にその家を相続させた

(164') a. *Die Bundesregierung unterstützt **die Hilfe der Kriegsopfer.**

the federal_government.NOM support.3SG.PRS the help.ACC the war_wictim.PL.GEN

b. ***Die Übereignung ihres Enkels** erfolgte auf diese Weise.

the transfer.NOM their grandson.GEN take_place.3SG.PST in this way.ACC

名詞化においてこれらの項を表現したい場合、(164") のように、前置詞句が用いられる。

(164") a. Die Bundesregierung unterstützt **die Hilfe an die**

the federal_government.NOM support.3SG.PRS the help.ACC to the

Kriegsopfer.

war_wictim.PL.ACC

連邦政府は戦災者への援助を支援している

b. **Die Übereignung an ihren Enkel** erfolgte auf diese Weise.

the transfer.NOM to their grandson.ACC take_place.3SG.PST in this way.ACC

彼らの孫への相続はそのようにして行われた

与格項をとる動詞は、*helfen*「手伝う」、*begegnen*「遭遇する」、*zustimmen*「賛成する」などの与格支配の2項動詞と *übereignen*「相続させる」、*übergeben*「引き渡す」、*liefern*「納入する」などの3項動詞に大別できる。与格支配の2項動詞の名詞化では、動詞の与格項を前置詞句により表す際、名詞化ごとに語彙的に決まった前置詞が用いられる。例えば、*Hilfe* では *an* または *für*、*Begegnung* では *mit*、*Zustimmung* では *zu* である。つまり、これらの前置詞句は主要部の名詞化によって形式的な選択を受ける前置詞項である。

- (165) a. **Die Begegnung mit dem Feuerschlucker** war unterhaltsam.
 the encounter.NOM with the fire-eater.DAT be.3SG.PST entertaining
 (Duden 2006: 825)
 火食い芸人と遭遇したのは面白かった
- b. **Die Zustimmung zum Aufnahmeantrag** erfolgte durch Akklamation.
 the consent.NOM to_the application.DAT occur.3SG.PST by acclamation.ACC
 受け入れ動議の承認は発声投票で行われた
- (165') a. Gestern bin ich **einem Feuerschlucker** begegnet.
 yesterday PRF.1SG.PRS I.NOM a fire-eater.DAT meet.PTCP
 昨日私は火食い芸人に遭遇した (Duden 2006: 825)
- b. Sie haben **dem Aufnahmeantrag** zugestimmt.
 they.NOM PRF.3PL.PRS the application.DAT approve.PTCP
 彼らは受け入れ動議を承認した。

3項動詞の名詞化の場合、動詞の与格項に対応するのは基本的に *an* の前置詞句である。*übergeben* や *liefern* がそうであるように、3項動詞の多くは、動詞においても与格項に代わって *an* の前置詞句が認められる。そのため、これらの動詞の名詞化では、*an* 前置詞句が動詞の与格項に対応しているのか、前置詞項に対応しているのかは判然としない。

- (166) a. **Die Übergabe des Schlüssels an Peter** erfolgte termingemäß.
 the handover.NOM the key.GEN to Peter.ACC take_place.3SG.PST on_schedule
 ペーターへの鍵の引き渡しは期日通り行われた
- b. **Die Lieferung des Gemüses an das Hotel** erfolgt jeden Tag.
 the delivery.NOM the vegetable.GEN to the hotel.ACC take_place.3SG.PRS every day.ACC
 そのホテルへの野菜の供給は毎日行われている
- (166') a. Er hat mir die Schlüssel/die Schlüssel an mich
 he.NOM PRF.3SG.PRS me.DAT the key.PL.ACC/ the key.PL.ACC to me.ACC
 übergeben.
 give.PTCP
 彼は私に鍵束を引き渡した

- b. Die Firma liefert dem Hotel Gemüse/ Gemüse
 the company.NOM deliver.3SG.PRS the hotel.DAT vegetable.ACC/ vegetable.ACC
 an das Hotel.
 to the hotel.ACC
 その会社はそのホテルに野菜を供給している

しかし、an 前置詞句は、*Überlassung*「譲渡」(<*überlassen*「譲る」)など、an 前置詞項をとらない 3 項動詞の名詞化にも認められる (cf. (167)/(167'))。したがって、この an 前置詞句は単に動詞の an 前置詞項に対応するものというわけではなさそうである。

- (167) a. Er hat mir die Wohnung überlassen.
 he.NOM PRF.3SG.PRS me.DAT the apartment.ACC leave.PTCP
 彼は私に住居を譲った

- b. *Er hat die Wohnung an mich überlassen.
 he.NOM PRF.3SG.PRS the apartment.ACC to me.ACC leave.PTCP

- (167') **Die Überlassung der Ostzone an [...] Deutschland** würde für
 the granting.NOM the East-Zone.GEN to Germany.ACC FUT.3SG.SBJ2 for
 die Sowjetunion also einer Verstärkung der von ihr als
 the Soviet-Union.ACC so an intensification.DAT the by her.DAT as
 potenziellen Aggressor betrachteten westlichen Gemeinschaft
 potential aggressor.ACC regard.PTCP Western community.GEN
 gleichkommen. (Die Zeit, 04.09.1952, Nr. 36)
 be_equal.INF

東側をドイツに移譲することは、ソ連にとって、潜在的脅威である西側を強化することと同義である

3 項動詞の名詞化にかかる an 前置詞句は、一貫して動詞の与格項に対応する項として解釈される。(168b) のように、für の前置詞句にも一見して動詞の与格項に対応するような解釈が認められるが、こちらは項的な解釈に加えて、自由解釈も認められる。したがって、これらの名詞化の an 前置詞句は前置詞項、(168b) のような für の前置詞句は前置詞付加語であると考えられる。

- (168) a. **Die Übergabe des Schlüssels an Tanja** erfolgte termingemäß.
 the handing_over.NOM the key.GEN to Tanja.ACC occur.3SG.PST on_schedule
 = [ターニャに鍵を引き渡すこと] は期日通り行われた
 ≠ [ターニャのために, 他の誰かに鍵を引き渡すこと (自由解釈)] は
 期日通り行われた
- b. **Die Übergabe des Schlüssels für Tanja** erfolgte termingemäß.
 the handing_over.NOM the key.GEN for Tanja.ACC occur.3SG.PST on_schedule
 = [ターニャに鍵を引き渡すこと] は期日通り行われた
 = [ターニャのために, 他の誰かに鍵を引き渡すこと (自由解釈)] は
 期日通り行われた

名詞化の前置詞項が動詞の前置詞項以外の項に対応するケースの別のパターンとして, 動詞の対格項と対応する前置詞項がある。これにはさらに 2 通りのパターンがあり, ひとつは *Schlag* 「殴打」のように, 問題の項が名詞化において前置詞句でのみ表され, 属格では表せないパターン (cf. (169a)), もうひとつは *Forderung* 「要求」のように, 問題の項が名詞化において前置詞句でも属格でも表せるパターンである (cf. (169b))。

- (169) a. **Der Schlag *seines Nachbarn/ gegen seinen Nachbarn** ereignete
 the hit.NOM his neighbor.GEN/ against his neighbor.ACC happen.3SG.PST
 sich vor Mitternacht.¹⁵
 REF.ACC before midnight.DAT
 [誰かが隣人を殴ること] は夜半前に起こった
- b. **Die Forderung eines EU-Austritts/ nach einem EU-Austrit**
 the demand.NOM an EU-exit.GEN/ for a EU-exit.DAT
 wurde von anderen Parteien kritisiert.
 PASS.3SG.PST by other party.PL.DAT criticize.PTCP
 EU からの離脱の要求は他の党から批判された

- (169') a. **Der Mann schlug seinen Nachbarn.**
 the man.NOM hit.3SG.PST his neighbor.ACC
 その男は彼の隣人を殴った

¹⁵ この例のアスタリスクは, 「誰かが隣人を殴ること」という解釈の表現として認められないことを示す。

- b. Die Partei hat einen EU-Austritt gefordert.
 the party.NOM PRF.3SG.PRS an EU-exit.ACC demand.PTCP
 その党は EU からの離脱を要求した

動詞の対格項が名詞化において前置詞句と対応する場合、用いられる前置詞の種類は名詞化ごとに語彙的に決まっている。例えば、*Schlag* では *gegen* が用いられ、*Forderung* では *nach* が用いられる。つまり、これらの前置詞句は名詞化によって形式的な選択を受けた前置詞項である。

5.2.3. 主語的 durch 句

前置詞句の形をとる名詞化の項候補には、5.2.1 節と 5.2.2 節で扱ったものの他に、(170) の *durch einen Schüler* 「ある生徒による」のような *durch* の前置詞句がある。この *durch* の前置詞句は、(170') の文における主語の項に対応する。以下ではこれを「主語的 *durch* 句」と呼ぶ。

- (170) Die Übersetzung des Werks **durch einen Schüler** dauerte nur 5
 the translation.NOM the work.GEN by a student.ACC take.3SG.PST only 5
 Monate.
 month.PL.ACC

生徒によるその作品の翻訳は 5 か月しかかからなかった。

- (170') **Ein Schüler** übersetzte das Werk.
 a student.NOM translate.3SG.PST the work.ACC
 生徒がその作品を翻訳した。

主語的 *durch* 句と対応するのは、動詞の主語の中でも、典型的には動作主の主語である。したがって、(171) のように動作主を主語とする使役動詞や活動動詞の名詞化には、主語的 *durch* 句がよく現れる。

(171) a. 使役動詞の名詞化

Nach der Zerstörung durch den babylonischen Herrscher

after the destruction.DAT by the Babylonian ruler

Nebukadnezar wurde ein zweiter Tempel errichtet,

Nebuchadnezzar.ACC PASS.3SG.PST a second temple.NOM build.PTCP

(DWDS: Der Tagesspiegel, 17.12.2000)

バビロニア王ネブカドネザルによる破壊の後、第二神殿が建てられた

b. 活動動詞の名詞化

Die in Haft erkrankte ukrainische Oppositionsführerin Julia

the in custody.DAT fall_ill.PTCP Ukrainian opposition_leader Julia

Timoschenko hat [...] die Behandlung durch einen Berliner Arzt

Tymoshenko.NOM PRF.3SG.PRS the treatment.ACC by a Berlin doctor.ACC

abgebrochen.

(DWDS: Die Zeit, 15.05.2012)

stop.PTC

拘留中に病気になったウクライナの野党指導者ユリア・ティモシェンコはベルリンの医師による処置を取りやめた

(171') a. Der babylonische Herrscher Nebukadnezar zerstörte den

the babylon ruler Nebuchadnezzar.NOM destroy.3SG.PST the

ersten Tempel.

first temple.ACC

バビロン王ネブカドネザルは第一神殿を破壊した

b. Ein Berliner Arzt behandelt Julia Timoschenko.

a Berlin doctor.NOM treat.3SG.PRS Julia Timoschenko.ACC

ベルリンの医師がユリア・ティモシェンコを処置する

しかし、動作主の主語をとる動詞でも、自動詞の名詞化には、主語的 **durch** 句は用いられない (cf. Helbig & Buscha 2001: 499)。例えば、(172) の名詞化は「生徒たちが働くこと」や「子供たちが走ること」という意味では容認されない。

(172) a. ***Die Arbeit durch die Schüler** wird von Peter überwacht.

the work.NOM by the student.PL.ACC PASS.3SG.PRS by Peter.DAT observe.PTCP

- b. ***Der Lauf durch die Kinder** dauert den ganzen Tag.¹⁶
 the run.NOM by the child.PL.ACC last.3SG.PRS the whole day.ACC

(172') a. Die Schüler arbeiten.
 the student.PL.NOM work.3PL.PRS

生徒たちが働いている

b. Die Kinder laufen.
 the child.PL.NOM run.3PL.PRS

子供たちが走っている

主語的 *durch* 句は、動作主でない項を主語とする動詞の名詞化にも認められる。ただしこの場合、主語的 *durch* 句が認められる名詞化と認められない名詞化が混在し、分布の規則性は一見しただけではわからない。例えば、*besitzen*「持っている」と *verlieren*「失う」はともに所有関係を基盤とした意味をもち、主語の意味役割は共通していると考えられるが、(173) に示すように、*Besitz* は主語的 *durch* 句をとるのに対し、*Verlust* は主語的 *durch* 句をとらない。

(173) a. So kann **der Besitz** **der Wasserstoffbombe durch die**
 thus can.3SG.PRS the possession.NOM the hydrogen_bomb.GEN by the
Sowietunion verhindern, daß überhaupt Wasserstoffbomben in
 Soviet_Union.ACC prevent.INF that at_all hydrogen_bomb.PL.NOM in
 einem Kriege zur Explosion gebracht werden.
 a war.DAT to_the exploding.DAT bring.PTCP PASS.3PL.PRS

(DWDS: Neues Deutschland, 08.12.1953)

だからソ連が水爆を保有することが、水爆が戦争で使用されることを防ぐことになり得る

b. ***Der Verlust des Vermögens durch diesen Mann** geschah auf
 the loss.NOM the wealth.GEN by this man.ACC happen.3SG.PST in
 diese Weise.
 this way.ACC

¹⁶ 「子供たちの間を走り抜けること」という全く別の解釈は可能。

(173') a. Die Sowietunion besitzt die Wasserstoffbombe.

the Soviet_Union.NOM possess.3SG.PRS the hydrogen_bomb.ACC

ソ連が水爆を保有する

b. Dieser Mann hat das Vermögen verloren.

this man.NOM PRF.3SG.PRS the wealth.ACC lose.PTCP

その男は財産を失った

筆者は、主語的 *durch* 句が、名詞化の項構造に媒介された項ではなく、項付加語であると考ええる。つまり、主語的 *durch* 句の解釈は、名詞化の意味によるのではなく、前置詞 *durch* の語彙的な意味を基盤とするということである。その根拠は、主語的 *durch* 句と「原因」を表す付加語としての *durch* 句が連続的であるということである。例えば、(174) の2つの名詞化における *durch* 句は、一見して「原因」という共通の意味を持った同種の成分のように見える。

(174) a. **Die Hinrichtung des Rebellen durch einen Schuss** hat

the execution.NOM the rebel.GEN by a shot.ACC PRF.3SG.PRS

gestern erfolgt.

yesterday take_place.PTCP

銃撃による反逆者の処刑は昨日行われた

b. **Wegen der Anschwemmung durch das Wasser** war die

because_of the flood.GEN by the water.ACC be.3SG.PST the

Straße voll mit Schlamm.

road.NOM full of mud.DAT

水によって押し流されて、道は泥だらけだった

しかし、仮に主語的 *durch* 句を項とみなし、「原因」を表す付加語としての *durch* 句と区別するなら、(174a) の *durch einen Schuss* 「銃撃による」は原因の *durch* 付加語にあたる一方、(174b) の *durch das Wasser* 「水による」は主語的 *durch* 句であることになってしまう。というのも、*hinrichten* 「処刑する」の主語は選択制限により人の項に限定されていることから (cf. (175aa')), 「銃撃」のような項は *hinrichten* の主語ではありえないのに対し、*anschwemmen* 「(水などが) 押し流す」は「水」のような原因を主語としてしか表せないためである (cf. (175bb')).

(175) a. ***Ein Schuss** hat ihn hingerichtet.

a shot.NOM PRF.3SG.PRS him.ACC execute.PTCP

a'. Der Geheimpolizist hat ihn durch einen Schuss
 the secret_police.NOM PRF.3SG.PRS him.ACC by a shot.ACC
 hingerichtet.
 execute.PTCP
 秘密警察は彼を銃撃で処刑した

b. Das Wasser hat Schlamm angeschwemmt.
 the water.NOM PRF.3SG.PRS mud.ACC flood.PTCP
 水が泥を押し流した

b'. *Man hat durch das Wasser Schlamm angeschwemmt.
 one.NOM PRF.3SG.PRS by the water.ACC mud.ACC flood.PTCP

また、*töten*「殺害する」という動詞は (176) に示すように原因を主語としても付加語としても表すことができる。そのため、主語的 *durch* 句と原因の *durch* 付加語を区別するなら、(177) の名詞化では *durch einen Schuss* が、動作主がある場合には原因の *durch* 付加語で動作主がない場合には主語的 *durch* 句であるというように、文脈に応じてその地位を変えることになってしまう (cf. Solstad 2007, 2010)。

(176) a. Ein Schuss hat ihn getötet.
 a shot.NOM PRF.3SG.PRS him.ACC kill.PTCP
 銃撃が彼を殺した

b. Der Geheimpolizei hat ihn durch einen Schuss getötet.
 the secret_police.NOM PRF.3SG.PRS him.ACC by a shot.ACC kill.PTCP
 秘密警察は彼を銃撃で殺した

(177) Die Tötung des Rebellen durch einen Schuss hat gestern
 the killing.NOM the rebel.GEN by a shot.ACC PRF.3SG.PRS yesterday
 erfolgt.
 take_place.PTCP
 銃撃による反逆者の殺害は昨日行われた

主語的 *durch* 句を項付加語と考えるなら、上に述べたような分裂は生じない。これらは一貫して付加語であり、付加語としての *durch* 句の解釈が動詞の主語の解釈と重なる限りにおいて、「主語的」にも解釈され得るのである。

5.3. 補文

補文も名詞化の項候補とみなすことのできる成分である。例えば, (178a) の dass 文や (178b) の ob 文, (178c) の zu 不定詞文は, (178'abc) の文における dass 文, ob 文, zu 不定詞文の項に対応している。

- (178) a. **Die Warnung, dass er vorsichtiger sein müsse, hat**
 the warning.NOM that he.NOM more_carefull be.INF must.3SG.SBJ1 PRF.3SG.PRS
 nicht gefruchtet.
 not work.PTCP
 彼はもっと用心深くならなくてはならないという警告は実らなかった
- b. **Der Zweifel, ob etwas wirklich passiert, wird**
 the doubt.NOM whethersomething.NOM really happen.3SG.PRS become.3SG.PRS
 im Krieg noch schärfer. (Axel-Tober 2013: 248)
 in_the war.DAT even sharper
 本当に何かが起こるのかという疑念は戦争の間一層強くなる
- c. **Den Befehl, das nicht zu verwenden, hat sie**
 the command.ACC that.ACC not to use.INF PRF.3SG.PRS her.NOM
 ignoriert.
 ignore.PTCP
 それを使うなという命令を彼女は無視した
- (178') a. Sie haben gewarnt, dass er vorsichtiger sein müsse.
 they.NOM PRF.3PL.PRS warn.PTCP that he.NOM more_carefull be.INF must.3SG.SBJ1
 彼らは, 彼はもっと用心深くならなくてはならないと警告した
- b. Ich zweifle, ob etwas wirklich passiert.
 I.NOM doubt.1SG.PRS weather something.NOM really happen.3SG.PRS
 私は, 本当に何かが起こるのか疑っている
- c. Er befahl ihr, das nicht zu verwenden.
 he.NOM command.3SG.PST her.DAT that.ACC not to use.INF
 彼は彼女にそれを使うなと命令した

名詞句にかかる dass 文や ob 文, zu 不定詞文には, 名詞の項として働く補文の他に, いわゆる同格文 (Apposition) がある (cf. Fabricius-Hansen & Stechow 1989, Holler 2013, Axel-Tober 2013)。同格文は, 命題的な指示対象を持つ名詞句

にかかり，その名詞句の指示対象と同じ命題的存在を表す。例えば，(179) の dass 文や ob 文が同格文である。

- (179) a. Auslöser der steilen Aufwärtsbewegung am Nachmittag war
 trigger.NOM the steep upward_movement.GEN in_the afternoon.DAT be.3SG.PST
die Mitteilung, dass Volkswagen seine Beteiligung am Lkw-
 the announcement.NOM that Volkswagen.NOM its stake.ACC in_the truck-
Hersteller knapp über die Schwelle von 75 Prozent erhöht
 manufacturer.DAT just over the threshold.ACC of 75 percent.DAT increase.PTCP
hat. (DWDS: Die Zeit, 05.06.2012)
 PRF.3SG.PRS

午後に株価が急上昇するきっかけとなったのは，フォルクスワーゲン
 がそのトラックメーカーへの出資を 75 パーセントの大台をわずかに
 越えるところまで高めたという知らせだった

- b. **Die Frage,** ob der Stein eine Seele besitze, ist für
 the question.NOM whether the stone.NOM a soul.ACC have.3SG.SBJ1 be.3SG.PRS for
 den Künstler nicht relevant. (Axel-Tober 2013)
 the artist.ACC not relevant

石に魂はあるかどうかという問いは，その芸術家にとって重要ではな
 い

補文と同格文は，それがかかる名詞句を削除することができるか否かを基準
 として経験的に区別することができる。同格文は，命題的存在を指示する名詞
 句の指示対象を具体的に述べたものである。したがって，同格文はそれ自体も
 名詞句の指示対象と同じものを表すので，名詞句を削除しても，容認性は損な
 われない (cf. Fabricius-Hansen & Stechow 1989: 184)。例えば，(179ab) から同格
 文のかかる名詞句を削除した (179'ab) は，ともに問題のない文である。

- (179') a. ^{OK}Auslöser der steilen Aufwärtsbewegung am Nachmittag war,
 trigger.NOM the steep upward_movement.GEN in_the afternoon.DAT be.3SG.PST
dass Volkswagen seine Beteiligung am Lkw-Hersteller knapp
 that Volkswagen.NOM its stake.ACC in_the truck-manufacturer.DAT just
über die Schwelle von 75 Prozent erhöht hat.
 over the threshold.ACC of 75 percent.DAT increase.PTCP PRF.3SG.PRS
 午後に株価が急上昇するきっかけとなったのは、フォルクスワーゲン
 がそのトラックメーカーへの出資を 75 パーセントの大台をわずかに
 越えるところまで高めたことだった
- b. ^{OK}Ob der Stein eine Seele besitze, ist für den Künstler
 whether the stone.NOM a soul.ACC have.3SG.SBJ1 be.3SG.PRS for the artist.ACC
 nicht relevant. (Axel-Tober 2013)
 not relevant
 石に魂はあるかどうかは、その芸術家にとって重要ではない

一方、補文は名詞が要求する項であるから、主要部の名詞を削除してしまうと、補文の存在理由も失われる。したがって、補文をとる名詞化から名詞化を削除すると非文となるか、元の文との意味的な同一性が損なわれる。例えば、上述の (178abc) から名詞化を削除した (178"abc) は、どれも容認されない文である。

- (178") a. *Dass er vorsichtiger sein müsse, hat nicht
 that he.NOM more_carefull be.INF must.3SG.SBJ1 PRF.3SG.PRS not
 gefruchtet.
 work.PTCP
- b. *Ob etwas wirklich passiert, wird im
 whether something.NOM really happen.3SG.PRS become.3SG.PRS in_the
 Krieg noch schärfer.
 war.DAT even sharper
- c. *Das nicht zu verwenden, hat sie ignoriert.
 that.ACC not to use.INF PRF.3SG.PRS she.NOM ignore.PTCP

5.4. 名詞化複合語

(180) の *Ölförderung* 「石油産出」や *Wetterbeobachtung* 「気象観測」のように名詞化とその基盤動詞の項からなる N+N 型の複合語を、この論文では名詞化複合語と呼ぶ。

- (180)a. Wann mit **der Ölförderung** begonnen werden könne, sei
when with the oil-production.DAT begin.PTCP PASS.INF can.3SG.SBJ1 be.3SG.SBJ1
derzeit noch nicht klar. (DWDS: Die Zeit, 28.06.2010)
currently yet not clear
石油産出をいつ開始できるかは今のところ明らかでないとのことだ
- b. **Die Wetterbeobachtung** wird weitgehend automatisiert
the weather-monitoring.NOM PASS.3SG.PRS largely automate.PTCP
(DWDS: Berliner Zeitung, 12.07.1977)
気象観測は広範にわたって自動化されている

この論文では、名詞化複合語の第一成分を N1, 第二成分を N2 と呼ぶ。例えば、*Ölförderung* では *Öl-*が N1, *-förderung* が N2 である。名詞化複合語は、N1 が基盤動詞の項、N2 が名詞化という構造をしている。例えば、(180) の *Ölförderung* と *Wetterbeobachtung* は、(180') の文に対応している。

- (180') a. Sie werden Öl fördern.
they.NOM FUT.3PL oil.ACC produce.INF
彼らは石油を算出する予定だ
- b. Sie beobachten das Wetter.
they.NOM monitor.3PL.PRS the weather.ACC
彼らは気象を観測している

5.4.1. N1 の解釈

名詞化複合語として想起される例の多くは、(180) のように、N1 が動詞の対格項に対応する例である。そのため、Rivet (1999) など、先行研究の中には「名詞化複合語の N1 は動詞の対格項にのみ対応する」という記述を出発点としているものがある。Rivet (1999: 308; 316) はこの記述の根拠として (181) の例を挙

げ，これらの名詞化複合語では，N1 が (181') の文における主格項・与格項・前置詞項には対応しないと述べている。¹⁷

- (181) a. ***Bürgermeistereröffnung** (der Ausstellung) (Rivet 1999: 316)
 mayor-opening.NOM the exhibition.GEN
- b. ***Enkelübergabung** (des Hauses) (Rivet 1999: 308)
 grandchild_transference.NOM the house.GEN
- c. ***Drogendurchsuchung** (des Gepäcks) (Rivet 1999: 308)
 drug-search.NOM the luggage.GEN

- (181') a. **Der Bürgermeister** eröffnet die Ausstellung.
 the mayor.NOM open.3SG.PRS the exhibition.ACC
 市長が展覧会を開催する
- b. Er übergibt **dem Enkel** das Haus.
 he.NOM transfer.3SG.PRS the grandchild.DAT the house.ACC
 彼は孫に家を相続させる
- c. Sie suchen das Gepäck **nach Drogen** durch.
 they.NOM search.3PL.PRS the luggage.ACC for drug.ACC PTCL
 彼らは薬物を探して荷物を調べる

しかし，Rivet (1999) の記述は経験的に誤りである。N1 が対格項に対応する名詞化複合語は確かに多いものの，決して他の種類の項が名詞化複合語の N1 にならないということはない (cf. Engel 1988: 619, 624)。例えば，(182a) の *Arzt-* は，(182'a) の主格項に，(182b) の *Vertrags-* は (182'b) の与格項に，(182c) の *Öl-* は (182'c) の前置詞項に対応している。

¹⁷ Rivet (1999) はこの例における括弧の意味を明らかにしておらず，容認度の判断が括弧内の要素を含む表現を対象としているのか，括弧内の要素の除いた名詞化複合語の部分のみを対象としているのか定かでない。

- (182) a. Der Rentner R. konnte sich wegen starker, auf eine fehlerhafte
 the pensioner R.NOM can.3SG.PST REF.ACC due_to severe to an incorrect
Arztbehandlung zurückzuführender Rückenschmerzen zwei Wochen
 doctor-treatment.ACC take_back.PTCP back-pain.GEN two weak.PL.ACC
 nicht selbst versorgen. (DWDS: Der Tagesspiegel, 17.08.2000)
 not alone take_care_of.INF
 年金生活を送る R さんは、医師の誤った処置が原因の強い背の痛みの
 ために、2 週間にわたり身の回りのことを自分で行うことができな
 かった
- b. daß eine vorgezogene Autonomiedebatte im Jerusalemer Parlament
 that an early autonomy-debate.NOM in_the Jerusalem Parliament.DAT
 die **Vertragszustimmung** gefährden würde.
 the contract-agreement.ACC jeopardize.INF FUT.3SG.SBJ2
 (DWDS: Die Zeit, 30.03.1979)
 エルサレムの議会における自治を巡る議論の前倒しが、協定の承認を
 脅かしかねないこと
- c. Durch eine Fehlkonstruktion kann die **Ölversorgung** des
 by a incorrect_construction.ACC can.3SG.PRS the oil-supplyment.NOM the
 Getriebes unterbrochen werden.
 transmission.GEN interrupt.PTCP PASS.INF
 (DWDS: Berliner Zeitung, 17.03.1999)
 組み立てを誤ればその装置へのオイル供給が中断されることがある
- (182') a. **Der Arzt** behandelte den Rentner R.
 the doctor.NOM treat.3SG.PST the pensioner R.ACC
 医者が年金生活を送る R さんを処置した
- b. Das Jerusalemer Parlament wird **dem Vertrag** zustimmen.
 the Jerusalem Parliament.NOM FUT.3SG.PRS the contrag.DAT agree.INF
 エルサレムの議会が協定を承認する見込みだ
- c. Sie versorgen das Getrieb **mit Öl.**
 they.NOM supply.3PL.PRS the transmission.ACC with oil.DAT
 彼らはその装置にオイルを供給する

むしろ、名詞化複合語に関しては「N1 となりやすい項・なりにくい項」という程度の差こそあるものの、潜在的にはどの項も、N1 となり得るとというのが経験的事実に即した記述である (cf. Rapp 2001, 小林 2018)。

5.4.2. 名詞化複合語における属格の解釈

名詞化複合語では、N1 の解釈によって、属格の解釈も影響を受ける。第一に、名詞化複合語において属格は N1 と同じ項には対応しない (cf. Rapp 2001: 270)。これは、 θ 基準 (cf. (183)) から直接的に導かれる帰結である。

(183) θ 基準 (Chomsky 1981: 36):

各項は意味役割を一つだけ担い、また各意味役割は、一つの項にのみ付与される

これに対し、Solstad (2010: 22) は、(184) において N1 項と属格項がどちらも *beschreiben* 「記述する」の被動者に当たると反論している。

(184) a. **die Personenbeschreibung der Täter** (Solstad 2010: 22)

the person-description.NOM the delinquent.PL.GEN

犯人の人相書き

b. **die Strukturbeschreibung des einfachen Arraymodells** (Solstad 2010: 22)

the structure-description.NOM the simple array-model.PL.GEN

単純な配列モデルの構造記述

しかし、(184) の名詞化複合語では N1 が関係名詞となっている。*Person* には「人物」のような種族名詞としての用法もあるものの、*die Person von x beschreiben* 「x の人相を記述する」という場合には「人相」という意味であり、この用法での *Person* は、誰の人相なのかということが特定されて初めて意味的に完成する関係名詞である。そのため、(184a) の *der Täter* 「犯人の」は、*beschreiben* の項ではなく、*Person* の項であると考えることができる。同様に、*Struktur* 「構造」も、何の構造なのかということが特定されて初めて意味を成す関係名詞である。そのため、(184b) の *des einfachen Arraymodells* 「単純な配列モデルの」も、*beschreiben* の項ではなく、*Struktur* の項であると考えることができる。つまり、(184) の名詞化複合語は、(184') の文が表す事態に対応しているのであって、N1 と属格がともに *beschreiben* の被動者であるという Solstad (2010: 22) の主張は当たらない。

(184') a. Man beschreibt die Person der Täter.

one.NOM describe.3SG.PRS the person.ACC the delinquent.PL.GEN

犯人の人相を描写する

b. Man beschreibt die Struktur des einfachen Arraymodells.

one.NOM describe.3SG.PRS the structure.ACC the simple array-model.GEN

単純な配列モデルの構造を記述する

第二に、他動詞を基盤動詞とする名詞化複合語に属格が付された場合、N1が動詞の対格項、属格が動詞の主格項に対応し、N1を動詞の主格項、属格を動詞の対格項とする解釈は認められない。例えば、(185ab)の名詞化複合語は、それぞれ「ローマ人がキリスト教徒を迫害すること」および「市議会が市長を罷免すること」という、(185'ab)の文に対応する意味では解釈されるのに対し、「キリスト教徒がローマ人を迫害すること」ないし「市長が市議会を解散すること」という(185''ab)の文に対応する解釈は認められない。

(185)a. Die **Christenverfolgung** der Römer endete im 4. Jahrhundert.

the Christian-persecution.NOM the Roman.GEN end.3SG.PST in_the 4th century.DAT

= [ローマ人によるキリスト教徒の迫害] は4世紀に終わった

≠ [キリスト教徒によるローマ人の迫害] は4世紀に終わった

b. Die **Bürgermeisterabsetzung** des Stadtrats erfolgte sofort.

the mayor_deputation.NOM the city_council.GEN occur.3SG.PST immediatly

= [市議会による市長の罷免] は直ちに行われた

≠ [市長による市議会の解散] は直ちに行われた

(185') a. Die Römer verfolgten **die Christen**.

the Roman.PL.NOM persecute.3PL.PST the Christian.PL.ACC

ローマ人はキリスト教徒を迫害した

b. Der Stadtrat hat **den Bürgermeister** abgesetzt.

the city-council.NOM PRF.3SG.PRS the mayor.ACC depose.PTCP

市議会が市長を罷免した

(185'') a. **Die Christen** verfolgten die Römer.

the Christian.PL.NOM persecute.3PL.PST the Roman.PL.ACC

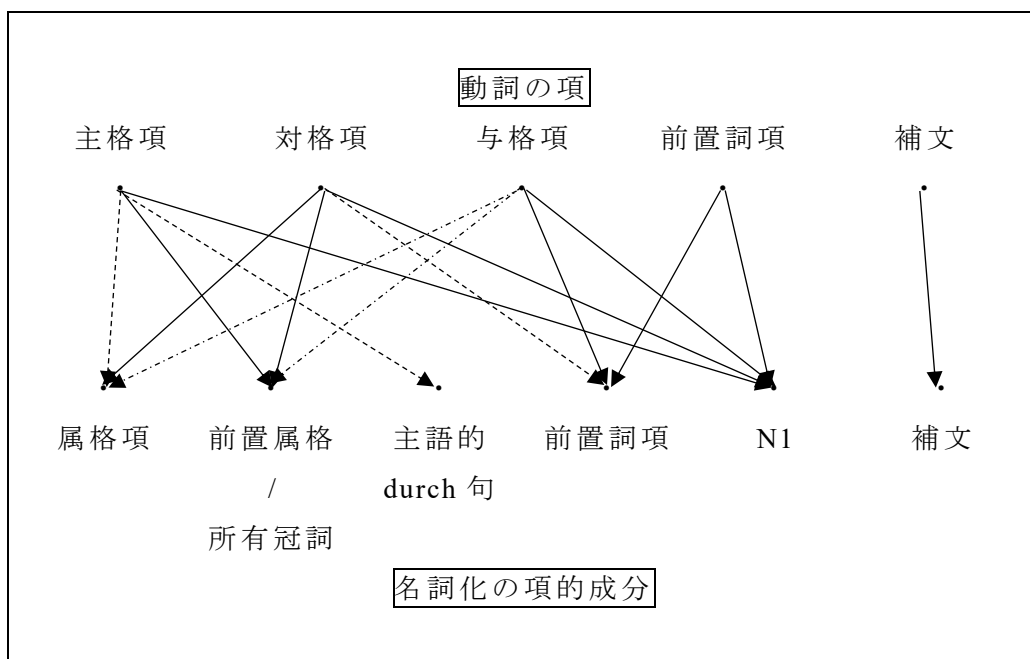
キリスト教徒はローマ人を迫害した

b. **Der Bürgermeister** hat den Stadtrat abgesetzt.
 the mayor.NOM PRF.3SG.PRS the city_council.ACC depose.PTCP
 市長が市議会を解散した

5.5. まとめ

本章では、状況の参加者を表す名詞化の項候補について、形式ごとに、項と項付加語の経験的な峻別方法を検討した上で、動詞の項との対応関係について観察した。本章で取り上げた各形式について、動詞の項との対応関係を矢印で表せば、(186)のようにまとめることができる。(186)において、実線の矢印は原則的な対応を、破線の矢印は部分的な対応を、一点鎖線の矢印は極めて限定的な対応を意味している。

(186) 動詞の項と名詞化の項的成分の主な対応関係



このように、動詞の項と名詞化の項的成分の関係は、規則的ながらも、単純ではないものとなっている。

6. 名詞化の項構造を巡る先行研究の理論モデル

本章では、先行研究で提案された名詞化の項に関する理論化の試みを取り上げ、その妥当性について批判的に検証する。6.1 節では Bierwisch (1989) の項構造の継承モデル、6.2 節では Ehrich & Rapp (2000) の意味形式の継承モデル、6.3 節では Bücking (2012) の属格付加語モデルを取り上げる。6.4 節では本章のまとめを行う。

6.1. Bierwisch (1989) の項構造の継承モデル

名詞化における項の実現と解釈の仕組みを理論化する試みとしては Bierwisch (1989) が先駆的である。Bierwisch (1989) は、動詞の項構造と名詞の項構造に (187)/(188) のような違いがあると想定する。

(187) 動詞の項構造：

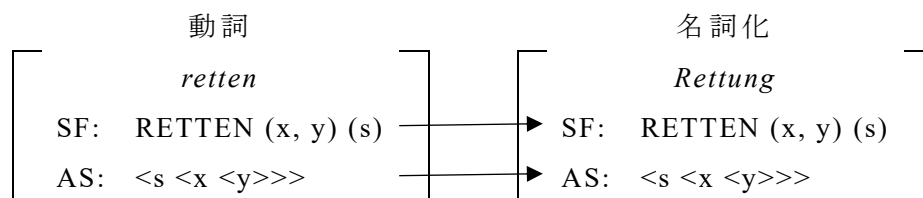
動詞の項構造では、主題項の義務性は、述語の語彙的な情報によって決まる

(188) 名詞の項構造：

名詞の項構造では、非指示項（機能名詞・関係名詞の関係項、名詞化の主題項）の実現は基本的に義務的でない

Bierwisch (1989) のモデルの根幹をなすのは、名詞化により、動詞から名詞に意味形式と項構造が受け継がれるという想定である。この手続きは、項構造の継承 (Argumentvererbung) と呼ばれる。項構造の継承は、(189) のように図示することができる。

(189) 項構造の継承



動詞の項構造には主題項と状況項が含まれる。4.1.3 節でも述べた通り、状況項は項構造において、最上位の主題項よりもさらに上位に位置づけられる。動詞から名詞化へ項構造が継承されると、状況項はその上位性を保ったまま名詞化の項となる。状況項が動詞の項構造で最も上位に位置づけられるように、名詞

の項構造では指示項が最も上位に位置づけられる。したがって、項構造の継承により、動詞の状況項は名詞化の指示項に転じることとなり、名詞化を「動詞の状況項を指示項とする名詞」としてあつかうことができる。例えば、(190)の文は「ペーターが乗客を救出する事態を例示する劇的な状況が存在する」という命題を表し、様態を表す副詞 *dramatisch* 「劇的に」は状況を修飾すると考えられるが、項構造の継承を想定すれば、この文に対応した (191a) の名詞化を「ペーターが乗客を劇的に救出する文脈で唯一の状況」という (191b) の意味形式によって分析することができる。すると、形容詞 *drammatisch* は、指示項に転じた状況項を修飾する述語として分析することができる。

- (190)a. Peter hat die Passagiere dramatisch gerettet.
 Peter.NOM PRF.3SG.PRS the passenger.PL.ACC dramatic rescue.PTCP
 ペーターが乗客を劇的に救出した
- b. \exists s [RETTEN (Peter, d.Passagiere) (s)] & DRAMATISCH (s)

- (191)a. Peters dramatische Rettung der Passagiere
 Peter.GEN dramatic rescue.NOM the passenger.PL.GEN
 ペーターの劇的な乗客の救出
- b. is [RETTEN (Peter, d.Passagiere) (s)] & DRAMATISCH (s)

Bierwisch (1989) は名詞化の項構造を基盤動詞の項構造と同一のものとみなすので、両者の違いは、上の (187)/(188) に示した動詞の項構造と名詞の項構造の相違に限られる。つまり、動詞の項構造と名詞化の項構造の違いは、動詞では語彙的な情報として任意項と指定されない限り義務的な主題項が、名詞化では基本的に義務的でないという点に集約される。例えば、*retten* では「救出される人」の項は義務的で、(192) のように省略は認められないのに対し、*Rettung* ではこの項は任意で、省略が認められる。

- (192) Peter rettete *(die Passergiere)
 Peter.NOM rescue.3SG.PST the passenger.PL.ACC
 ペーターが * (乗客を) 救助した

- (193) Die Rettung ^{OK}(der Passergiere) war dramatisch.
 the rescue.NOM the passenger.PL.GEN be.3SG.PST dramatic
 (乗客の) 救出は劇的だった

Bierwisch (1989) の項構造の継承モデルの評価点は、状況名詞化において動詞の状況項が指示項となることを規則的にとらえている点である。この想定は、3.4.1 節で述べたように、Bierwisch (1989) 以降のほとんどの名詞化研究の理論的基盤となっている。一方、Bierwisch (1989) の問題点は、名詞化において動詞のどの項が実現し、どの項が実現しないのかという点にあまり注目が払われていないことである。例えば、*Behandlung* 「処置」のような活動動詞の名詞化では動詞の主語の項も目的語の項も後置属格として実現でき、(194) の名詞化は「その男が誰かを治療すること」という意味でも「誰かがその男を治療すること」という意味でも解釈されるのに対し、*Erschießung* 「射殺」などの使役的状态変化動詞の名詞化では、通常、後置属格として認められるのは動詞の目的語の項のみで、(195) の名詞化は「誰かがハンターを射殺すること」という意味では解釈されるが「ハンターが何かを仕留めること」という意味では解釈されない。

(194) **Die Behandlung des Mannes** dauert noch an.
 the treatment.NOM the man.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL
 = [誰かがその男を治療すること] が続いている
 = [その男が誰かを治療すること] が続いている

(195) **Die Erschießung des Jägers** geschah unerwartet.
 the shooting.NOM the hunter.GEN occur.3SG.PST unexpectedly
 ≠ [ハンターが何かを仕留めること] が予期せず起きた
 = [誰かがハンターを射殺すること] が予期せず起きた

Bierwisch (1989) のモデルは、名詞化の項を「任意に実現できる」と想定するのみで、(195) のような「実現できない項」を予見する仕組みを備えていないのである。

6.2. Ehrich & Rapp (2000) の意味形式の継承モデル

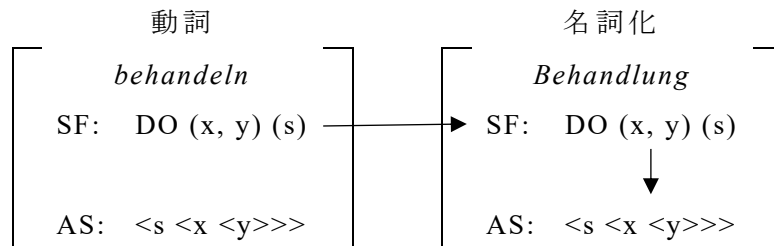
Bierwisch (1989) の項構造の継承モデルに代わるモデルとして、Ehrich & Rapp (2000) は意味形式の継承 (cf. (196)) というモデルを提案している。

(196) 意味形式の継承：

- a. 名詞化において，動詞から名詞に意味形式が継承される。
- b. 名詞化の項構造は，継承された意味形式から規則的に導かれる

意味形式の継承が項構造の継承と決定的に異なる点は，動詞の項構造と名詞化の項構造の間に直接の関係を想定しないことである。すなわち，意味形式の継承モデルでは，名詞化の項構造が，動詞から継承された意味形式を基盤としながらも，動詞の項構造とは独立に導かれると考える。このモデルは (197) のように図示することができる。意味形式の継承は，Ehrich (2002b)，Rapp (2001, 2006) といった研究の理論的基盤となっている。

(197) 意味形式の継承



6.2.1. BECOME 関数の重要性

Ehrich & Rapp (2000) は LDG の手法を用いて動詞の意味形式を分析した上で，名詞化の項構造が，語彙分解された意味形式に応じて規則的に導かれるとしている。その際，Ehrich & Rapp (2000: 276) は意味形式中の BECOME 関数の有無を重要視し，名詞化の項構造規則として (198) を設定している。

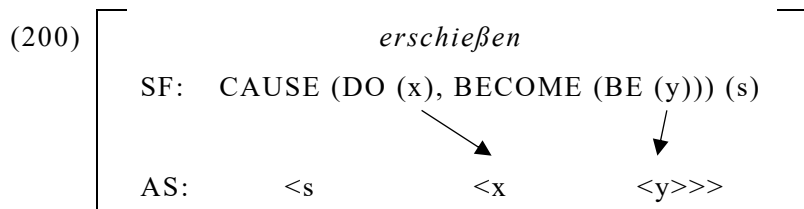
(198) 名詞化の項構造規則

意味形式に BECOME 関数を持つ名詞化では，最下位の個体項のみが，構造項として項構造に記録される

Ehrich & Rapp (2000) は，後置属格が，名詞句における唯一の構造格 (cf. 4.2 節) であるとする。すなわち，Ehrich & Rapp (2000) の枠組みでは，名詞化の項構造に記録された構造項のみが統語的に後置属格として実現し得る。すると (198) の規則により，*Erschießung* 「射殺」など使役の状態変化動詞の名詞化において動詞の主語の項が後置属格とならないという事実 (cf. (199)) がとらえられる。

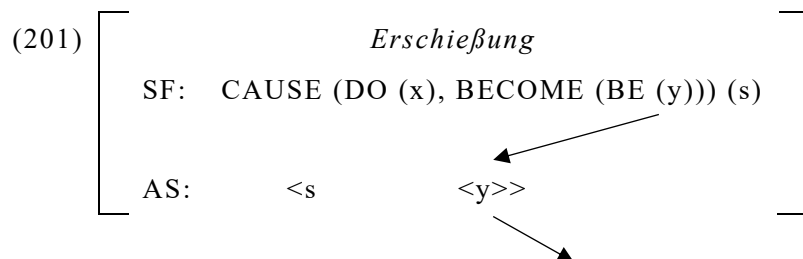
- (199) **Die Erschießung des Jägers geschah unerwartet.**
 the shooting.NOM the hunter.GEN occur.3SG.PST unexpectedly
 ≠ [ハンターが何かを仕留める事態] は予期せず起きた
 = [誰かがハンターを射殺する事態] は予期せず起きた

4.1.1 節で述べたように、*erschießen*「射殺する」などの使役的状态変化動詞の意味形式は、BECOME 関数を用いて (200) のように語彙分解される。この意味形式には状況項の他に動作主と Theme の 2 項が含まれる。*erschießen* では、この 2 項がともに構造項として項構造に写し取られ、それぞれ主格と対格で実現する。



- (200') dass [IP der Jäger_x [VP [V' den Hasen_y erschoss]]]
 that the hunter.NOM the hare.ACC shoot.3SG.PST
ハンターが_x 野ウサギを_y 仕留めたこと

意味形式の継承により、*Erschießung* は、*erschießen* と同じ意味形式を得るが、項構造では、(198) の項構造規則によって、最下位の Theme のみが構造項となる。つまり、*erschießen* では構造項として項構造の一角を占め主語として実現する動作主は、*Erschießung* では項構造に含まれないのである。すると、*Erschießung* では、Theme は後置属格として実現できるのに対し、動作主は後置属格とはならないことになり、その結果、*Erschießung des Jägers* という名詞化は「誰かがハンターを射殺すること」という意味でのみ解釈されることになる。



(201') die Erschießung *des Jägers_x/ des Jägers_y
 the shooting.NOM the hunter.GEN/ the hunter.GEN
 *ハンターの_x/ハンターの_y 射殺

(198) の項構造規則には、一見して、(202) のデータが反例となるように思われる。*kürzen*「短くする」は使役の状態変化動詞であるから、その意味形式には BECOME 関数が含まれていると考えられる。しかし (202) に示すように、*Kürzung*「短縮」では、動詞の目的語の項だけでなく主語の項も後置属格として認められるのである。

(202) a. **Die Kürzung des Redakteurs muss unterbrochen werden.**
 the reduction.NOM the editor.GEN must.3SG.PRS interrupt.PTCP PASS.INF
 編集者による切り詰めは中断されなくてはならない

b. **Die Kürzung des Artikels muss unterbrochen werden.**
 the reduction.NOM the article.GEN must.3SG.PRS interrupt.PTCP PASS.INF
 記事の切り詰めは中断されなくてはならない

(202') Der Redakteur kürzte den Artikel.
 the editor.NOM shorten.3SG.PST the article.ACC
 編集者が記事を切り詰めた

これに対し、Ehrich & Rapp (2000) は、*kürzen* という動詞が文脈によって telic にも atelic にもなり得るということに注目し、*kürzen* に、telic な *kürzen^{telic}* と atelic な *kürzen^{atelic}* の 2 通りの語彙登録があるとしている。Ehrich & Rapp (2000) によれば、*kürzen^{telic}* は (203a) の意味形式をもつ使役の状態変化動詞であるのに対し、*kürzen^{atelic}* は (203b) の意味形式をもつ活動動詞である。

(203) a. *kürzen*^{telic}

∃s [CAUSE (DO (x, y), BECOME (BE (y))) (s)]

Der Redakteur_x kürzte den Artikel_y in einer Stunde.

the editor.NOM shorten.3SG.PST the article.ACC in one hour.DAT

編集者が_x 記事を_y 一時間で短くした

b. *kürzen*^{atelic}

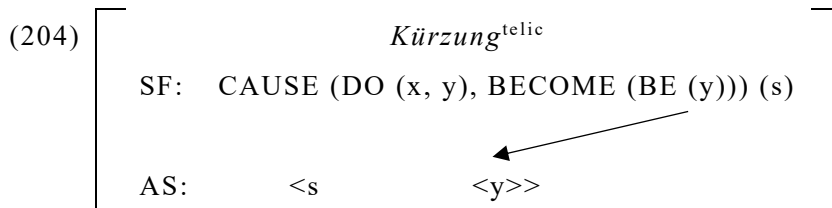
∃s [DO (x, y) (s)]

Der Redakteur_x kürzte den Artikel_y eine Stunde lang.

the editor.NOM shorten.3SG.PST the article.ACC one hour.ACC long

編集者が_x 記事を_y 一時間短くしていた

意味形式の継承により, *Kürzung* にも, *kürzen*^{telic} と *kürzen*^{atelic} に対応した *Kürzung*^{telic} と *Kürzung*^{atelic} の 2 通りの語彙登録が想定される。*Kürzung*^{telic} は使役的状态変化動詞の名詞化であるから意味形式に BECOME 関数を持ち, 構造項となるのは最下位の Theme のみである (cf. (204))。

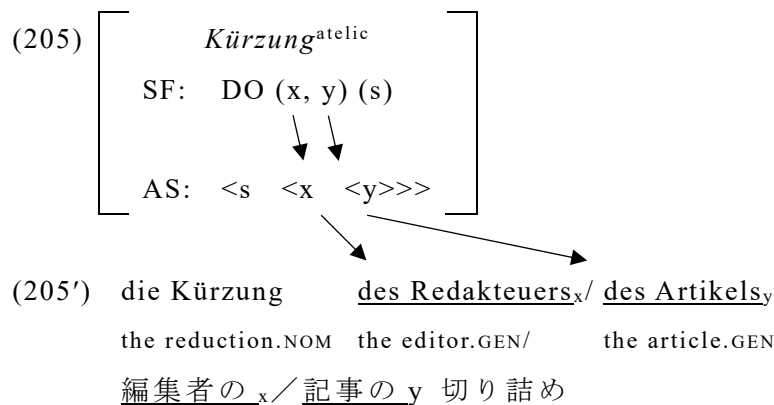


(204') die Kürzung *des Redakteurs_x/ des Artikels_y

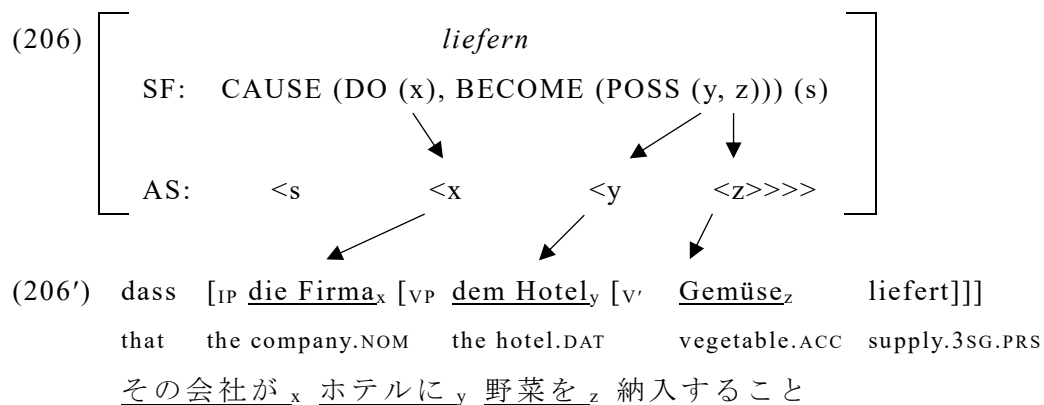
the reduction.NOM the editor.GEN/ the article.GEN

*編集者の_x/ 記事の_y 切り詰め

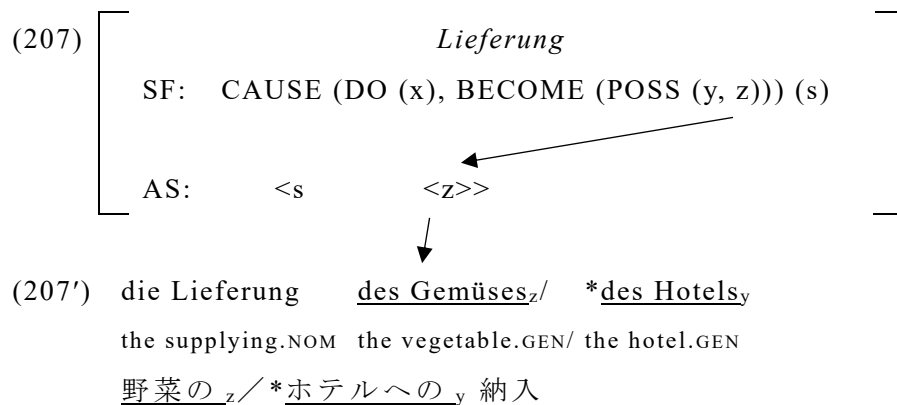
一方, *Kürzung*^{atelic} は活動動詞の名詞化で, 意味形式に BECOME 関数はないから, 意味形式に含まれる動作主と被動者の 2 項がどちらも構造項となる (cf. (205)). Ehrich & Rapp (2000) によれば, (202a) は活動動詞 *kürzen*^{atelic} が名詞化された *Kürzung*^{atelic} で, それゆえ動作主が後置属格となり得るのだという。



Ehrich & Rapp (2000) は, *liefern* のような使役的所有変化動詞の名詞化において動詞の与格項が後置属格とならないことも (198) の項構造規則によって説明できるとする。*liefern* の意味形式は, (206) のように語彙分解され, 動詞ではこの意味形式に含まれる個体項 *x*, *y*, *z* が 3 つとも構造項となる。



意味形式の継承により, *Lieferung* は (207) の意味形式を得る。この意味形式には BECOME 関数が含まれるので, (198) の項構造規則により, 最下位の *z* のみが構造項となる。



すると、動詞において与格項となる *y* は構造項とならないので、この項が後置属格とならないことがとらえられる。

6.2.2. 名詞化複合語における項の排斥効果 (Ausschlusseffekt) と後継効果 (Nachrückeffekt)

Rapp (2001) は、Ehrich & Rapp (2000) の意味形式の継承モデルを土台として、名詞化複合語における N1 の解釈と、N1 の解釈に応じて制約される属格の解釈に関する定式化を試みている。この定式化の要点は、(208)–(210) にまとめられる。

(208) N1 の解釈

N1 は、意味形式の中の任意の項に対応する

(209) 排斥効果 (Ausschlusseffekt)

- a. N1 に対応する項は名詞化の項構造から排斥される
- b. 名詞化の項構造において、N1 よりも下位の構造項は項構造から排斥される

(210) 後継効果 (Nachrückeffekt)

排斥効果により項構造から構造項が排斥されると、排斥された項よりも上位の意味形式中の項が、排斥された項の代わりに構造項となる

(208) は 5.4.1 節で述べた通り、 θ 基準の直接の反映である。重要なのは (209) の排斥効果で、これにより、「後置属格は N1 よりも上位の項には対応しない」という一般化が導かれる。5.4.2 節で述べたように、(211) の名詞化複合語は「ローマ人がキリスト教徒を迫害すること」という (211'a) の文に対応する意味で

は解釈されるものの、「キリスト教徒がローマ人を迫害すること」という (211'b) の文に対応する意味では解釈されないが、これは排斥効果からの帰結と考えることができる。

(211) Die Christenverfolgung der Römer endete im 4.
 the Christian-persecution.NOM the Roman.PL.GEN end.3SG.PST in_the 4th
 Jahrhundert.
 century.DAT

= [ローマ人がキリスト教徒を迫害すること] は 4 世紀に終わった
 ≠ [キリスト教徒がローマ人を迫害すること] は 4 世紀に終わった

(211') a. Die Römer verfolgten die Christen.
 the Roman.PL.NOM persecute.3PL.PST the Christian.PL.ACC

ローマ人はキリスト教徒を迫害した

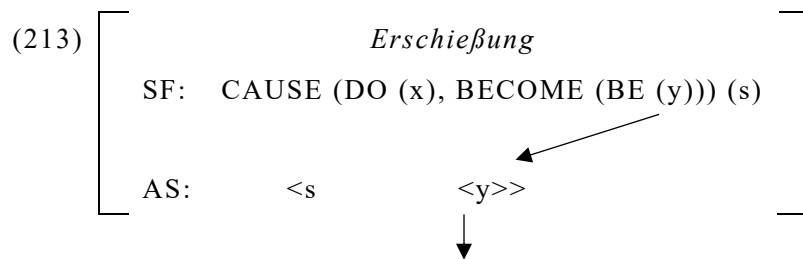
b. Die Christen verfolgten die Römer.
 the Christian.PL.NOM persecute.3PL.PST the Roman.PL.ACC

キリスト教徒はローマ人を迫害した

(210) の後継効果は、使役的狀態変化動詞の名詞化を N2 とする名詞化複合語に関係する規則である。前節で述べた通り、Ehrich & Rapp (2000) は、以下に (212) として再掲する項構造規則により、BECOME を含む意味形式を持った動詞の名詞化では最下位の個体項のみが構造項であるとする。

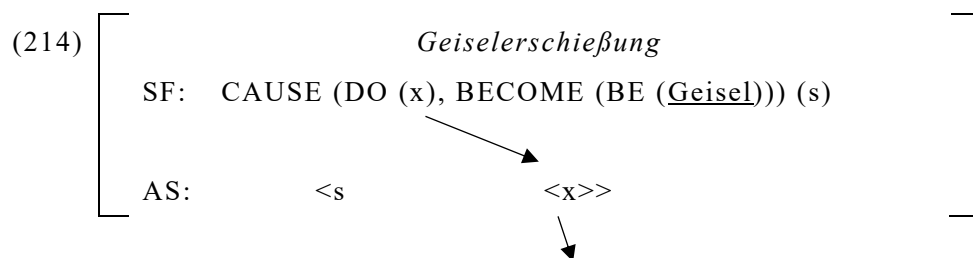
(212) 名詞化の項構造規則 (= (198))
 意味形式に BECOME 関数を持つ名詞化では、最下位の個体項のみが、
 構造項として項構造に記録される

ゆえに、*Erschießung* 「射殺」のような使役的狀態変化動詞の名詞化では最下位の項のみが後置属格として認められ、(213') の名詞化は常に「誰かがハンターを射殺すること」という意味で解釈される。



- (213') **Die Erschießung des Jägers_y geschah unerwartet.**
 the shooting.NOM the hunter.GEN occur.3SG.PST unexpectedly
 ≠ [ハンターが何かを仕留めること] が予期せず起きた
 = [誰かがハンターを射殺すること] が予期せず起きた

Rapp (2001) は, *Geislerschießung* 「捕虜射殺」のように N1 が Theme に対応する使役的状态変化動詞の名詞化複合語において, Theme が項構造から排斥されると同時に, 後継効果により動作主が Theme に代わる構造項となるとする。すると, *Geislerschießung* では (214) のように, *Erschießung* では後置属格として認められなかった動作主に, 後置属格としての実現が認められることになる。



- (214') **Die Geislerschießung der Soldaten_x ereignete sich vor**
 the hostage-shooting.NOM the soldier.PL.GEN occur.3SG.PST REF.ACC before
 Mitternacht.
 midnight.DAT
 [兵士たちが捕虜を射殺すること] が夜半前に起こった

Rapp (2001) によれば, この後継効果の結果として, (214') の名詞化複合語は「兵士たちが捕虜を射殺すること」という意味で解釈されるのだという。

6.2.3. 意味形式の継承モデルの問題点

Ehrich & Rapp (2000) の意味形式の継承モデルの評価点は, 項構造ではなく意味形式が動詞から名詞化に継承されると想定することで, 動詞の状況項が名詞化の指示項に転じる仕組みを維持したまま, 「統語的に実現できない項」の扱いを可能としている点にある。

一方, Ehrich & Rapp (2000) の定式化には, どの項が統語的に実現できない項となるのかを予見する規則に問題がある。具体的には, Ehrich & Rapp (2000) が telic/atelic という相的特徴を, BECOME 関数の有無に還元してしまっている点である。6.2.1 節で述べたように, Ehrich & Rapp (2000: 286) は, 文脈に応じて telic にも atelic にもなる *kürzen* のような動詞を, 使役的狀態変化動詞の *kürzen*^{telic} と活動動詞の *kürzen*^{atelic} の 2 通りの語彙登録によって分析し, *kürzen*^{telic} に BECOME を含む (215a) の意味形式を与える一方, *kürzen*^{atelic} には BECOME のない (215b) の意味形式を与えている。2 通りの *kürzen* を仮定することで, 「編集者が (記事を) 短くすること」という意味で解釈される (216) の名詞化が, 活動動詞 *kürzen*^{atelic} を名詞化した *Kürzung*^{atelic} によるものとして説明される。

(215) a. *kürzen*^{telic}

∃s [CAUSE (DO (x, y), BECOME (BE (y))) (s)]

Der Redakteur_x kürzte den Artikel_y in einer Stunde.

the editor.NOM shorten.3SG.PST the article.ACC in one hour.DAT

編集者が_x 記事を_y 一時間で短くした

b. *kürzen*^{atelic}

∃s [DO (x, y) (s)]

Der Redakteur_x kürzte den Artikel_y eine Stunde lang.

the editor.NOM shorten.3SG.PST the article.ACC one hour.ACC long

編集者が_x 記事を_y 一時間短くしていた

(216) **Die Kürzung des Redakteurs** muss unterbrochen werden.

the reduction.NOM the editor.GEN must.3SG.PRS interrupt.PTCP PASS.INF

編集者による切り詰めは中断されなくてはならない

しかし, Blume (2004: 37) も指摘しているように, atelic な *kürzen* を活動動詞として (215b) のように語彙分解するのは適当ではない。というのも, (217) の文が正常な意味をなさないことから, atelic な文脈でも, *Kürzung* はあくまで状態変化を表す意味を持っていると考えられるからである。

- (217) [?]Nach der stundenlangen Kürzung des Redakteurs war der
 after the hour-long cut.DAT the editor.GEN be.3SG.PST the
 Artikel genauso lang wie vorher. (Blume 2004: 37)
 article.NOM as long as before
 lit.「数時間にわたる編集者の短縮の後，記事は依然と変わらない長さ
 だった」

確かに，変化を表す動詞は通常 *telic* であり，*telic/atelic* という相的特徴は，一般的な条件下では *BECOME* 関数の有無と連動する。とはいえ，相的特徴と *BECOME* 関数の有無は，本質的には別のものである。このことは，(218) のように *lesen* 「読む」のような通常 *atelic* な活動動詞でも「読まれる本」を数量的に限定すれば *telic* となり得る一方，*erschließen* 「射殺する」のような通常 *telic* な使役的状态変化動詞でも，「射殺される人」が数量化されない無冠詞複数形の場合には *atelic* となり得ることからもわかる。

- (218) a. ^{OK}Er las ein Buch in einer Woche.
 he.NOM read.3SG.PST a book.ACC in one week.DAT
 彼は一冊の本を一週間で読んだ
- b. ^{OK}Der Diktator erschoss oppositionelle Kräfte zehn Jahre lang.
 the dictator.NOM shoot.3SG.PST opposition force.PL.ACC ten year.PL.ACC long
 その独裁者は抵抗勢力を 10 年間射殺し続けた

第二の，より重要な問題は，Ehrich & Rapp (2000) が「名詞化にかかる後置属格は属格項である」ということを，十分な検証を行わないまま出発点としてしていることである。すなわち，Ehrich & Rapp (2000) では，名詞化にかかる後置属格を属格項ではなく属格付加語として分析する可能性が始めから考慮されていないのである。しかし，5.1.1.3 節で論じたように，ドイツ語の後置属格には，属格項と属格付加語が並行して存在すると考えられる。後置属格は，1 音節や 2 音節の無冠詞の固有名詞が認められるかどうかということを経験的基準として，属格項と属格付加語に峻別される。この基準に照らすと，Ehrich & Rapp (2000) に関連する研究，具体的には Rapp (2001) において論じられている属格の中には，(219) のように属格付加語と判断されるようなものも含まれているのである。

- (219) a. **Die Geislerschießung der Soldaten** ereignete sich vor
 the hostage-shooting.NOM the soldier.PL.GEN happen.3SG.PST REF.ACC before
 Mitternacht.
 midnight.DAT
 兵士たちの捕虜射殺は夜半前に起こった
- b. ***Die Geislerschießung Peters** ereignete sich vor Mitternacht.
 the hostage-shooting.NOM Peter.GEN happen.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT

第三に、Ehrich & Rapp (2000) の枠組みは、ある動詞の名詞化においてどの項が属格項となるかという事実は予見するものの、「なぜその項が属格項となるのか」という、背景の原理を説明するものとはなっていない。つまり、例えば使役的狀態変化動詞の名詞化では最下位項の **Theme** のみが属格項となることが予見されたとして、なぜそうなるのかということは、別途説明が必要なのである。

6.3. Bücking (2012) の属格付加語モデル

Bücking (2012) は、名詞化において状況の参与者を表す属格を属格付加語として分析することを試みている。Bücking (2012:166) は Ehrich & Rapp (2000) と同じように、動詞から名詞化に項構造ではなく意味形式が継承されると想定している。Ehrich & Rapp (2000) との違いは名詞化の項構造の扱いであり、Ehrich & Rapp (2000) が名詞化にも構造項を含んだ項構造を想定するのに対し、Bücking (2012) は、名詞化に状況項と語彙的に指定された項（すなわち前置詞項）のみからなる項構造を想定する。

(220) 意味形式と状況項の継承

- a. 名詞化において、動詞から名詞化に意味形式が継承される
- b. 名詞化の項構造は、状況項と、語彙的に指定された項（前置詞項）からなる

例えば、活動動詞の *behandeln* には、状況項の他に構造項の 2 つある (221) の項構造が想定されるのに対し、名詞化の *Behandlung* には、状況項のみからなる (222) の項構造が仮定される。

(221)	<p style="text-align: center;"><i>behandeln</i></p> <p>SF: BEHANDELN (s) & AGENS (s, x) & PATIENS (s, y)</p> <p>AS: <s <x <y>>></p>
-------	---

(222)	<p style="text-align: center;"><i>Behandlung</i></p> <p>SF: BEHANDELN (s) & AGENS (s, x) & PATIENS (s, y)</p> <p>AS: <s></p>
-------	--

なお、Bücking (2012) は LDG の手法を用いず、意味役割の名称をそのまま関数として利用し、並列して列挙するいわゆる「デイヴィドソン式」の表記法で意味形式を記述している。¹⁸ また、Bücking (2012) の議論には形式的・技術的に複雑で難解な理論装置が用いられているが、ここでは筆者の判断により、大幅な単純化を行っている。

6.3.1. 後置属格の属格付加語としての分析

Bücking (2012) と Ehrich & Rapp (2000) の本質的な違いは、Ehrich & Rapp (2000) が後置属格を属格項として分析しているのに対し、Bücking (2012) がこれを属格項ではなく属格付加語として分析している点である。この背景には、属格を一貫して付加語として分析する画一的属格付加語分析 (cf. 5.1.1.2 節) の考え方があある。Bücking (2012) の狙いは、名詞化における属格の振る舞いが、かなりの程度、画一的属格付加語分析によってもとらえられることを示すことにある。

Bücking (2012) は、語彙項目としての「属格」に (223a) のような語彙登録を仮定する。*P* は属格の名詞句、*P* は被修飾名詞に相当する述語変項である。¹⁹ 「女性である」ということが当てはまる文脈で唯一の個体を *d.Frau* と表記すれば、*der Frau* 「その女性の」のような属格の名詞句には、(223b) の分析を与えることができる。

(223)	<p style="text-align: center;">属格</p> <p>SF: <i>P</i> (v) & ρ (v, <i>P</i>)</p> <p>AS: <v <<i>P</i> <<i>P</i>>>></p>	b.	<p style="text-align: center;"><i>der Frau</i></p> <p>SF: <i>P</i> (v) & ρ (v, <i>d.Frau</i>)</p> <p>AS: <v <<i>P</i>>></p>
-------	--	----	---

¹⁸ この表記法では、例えば AGENS (s, x) は「s が x を動作主とする状況である」ことを表す。

¹⁹ *P* を述語変項とする背景には、冠詞の付された名詞句が厳密には <<e, t> t>タイプの述語であるという認識がある。このことは本節の内容に関係しないので、ここではわかりやすさを重視し、*P* を e タイプの項に見立てている。

(223b) の *der Frau* と (222) の *Behandlung* から, *die Behandlung der Frau* には (224) の意味形式が導かれる。

- (224) *die Behandlung der Frau*
 the treatment.NOM the woman.GEN
 その女性の治療
 is [BEHANDELN (s) & AGENS (s, x) & PATIENS (s, y) & ρ (s, d.Frau)]

ρ は属格付加語の解釈を決定する関数である (cf. 5.1.1.2 節)。Bücking (2012) は, 属格付加語が名詞化にかかる場合, ρ が名詞化の意味形式を参照し, 並列された関係のうちの一つと同じ関係となるとする。(224) の *die Behandlung der Frau* では, ρ がとりうる関係は AGENS または PATIENS である (cf. (225a)/(226a))。

- (225) a. is [BEHANDELN (s) & AGENS (s, x) & PATIENS (s, y) & ρ (s, d.Frau)]
 b. is [BEHANDELN (s) & AGENS (s, d.Frau) & PATIENS (s, y) & AGENS (s, d.Frau)]
- (226) a. is [BEHANDELN (s) & AGENS (s, x) & PATIENS (s, y) & ρ (s, d.Frau)]
 b. is [BEHANDELN (s) & AGENS (s, x) & PATIENS (s, d.Frau) & PATIENS (s, d.Frau)]
-

すると, ρ が AGENS となれば「その女性が誰かを治療すること」という (225b) の意味形式が導かれ, ρ が PATIENS となれば「誰かがその女性を治療すること」という (226b) の意味形式が導かれる。

6.3.2. デフォルト規則

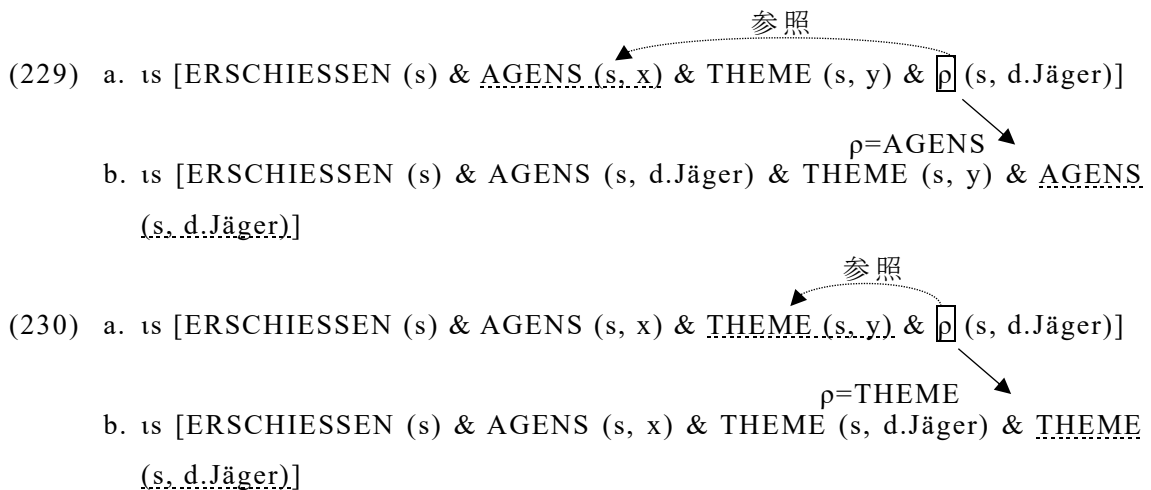
Bücking (2012) の分析は, 現に可能な属格の解釈を導くことはできるものの, 一見して, 認められない解釈の排除に問題を抱えているように思われる。例えば, *Erschießung* のような使役の状態変化動詞の名詞化では, 属格は動作主として解釈されず, (227) の名詞化は「ハンターが何かを仕留めること」という意味にはならない。

- (227) **Die Erschießung des Jägers** geschah unerwartet.
 the shooting.NOM the hunter.GEN occur.3SG.PST unexpectedly
 ≠ [ハンターが何かを仕留める事態] は予期せず起きた
 = [誰かがハンターを射殺する事態] は予期せず起きた

「ハンターである」ということが当てはまる文脈で唯一の個体を d.Jäger と置けば、(227) の名詞化は (228) の意味形式により分析することができる。

- (228) tr [ERSCHIESSEN (s) & AGENS (s, x) & THEME (s, y) & ρ (s, d.Jäger)]

ρ が名詞化の意味形式を参照して並列された関係のうち任意のものと同じ関係となることができるとすれば、ρ が AGENS となることで (229) の意味形式が、ρ が THEME となることで (230) の意味形式が導かれるはずである。



この時、(229) は「ハンターが何かを仕留めること」、(230) は「誰かがハンターを射殺すること」という解釈に対応する。しかし、(229) の解釈は、実際には認められない解釈である。

この問題に対処するため、Bücking (2012:171) は (231) のデフォルト規則を設定している。

(231) デフォルト規則

telic な状況を表す名詞化では、 ρ は THEME²⁰ をデフォルトの関係とする

Erschießung は telic な状況を表す名詞化なので、 ρ は THEME をデフォルトの関係とする。すると、(227) の名詞化には (230) の意味形式のみが導かれ、(229) の意味形式は導かれなくなる。

6.3.3. 属格付加語モデルの問題点

Bücking (2012) の属格付加語モデルは属格の画一的付加語分析を背景とする。したがって、このモデルには画一的属格付加語分析の問題がそのまま当てはまる。すなわち、属格を「項でない」とする積極的な経験的根拠の不在である。5.1.1.2 節で述べたように、属格の画一的な付加語分析は、既知の経験的事実を一通り扱うことのできる「可能な」分析には違いないが、属格を項構造に媒介された項とみるアプローチに比べると、 ρ に関する規則を必要とする分、経済性に劣る。そのため、あえてこのアプローチを採用するのであれば、これらの道具立てが恣意的なものでないことを示す経験的な根拠が求められるが、そのような根拠は管見の限り存在しないのである。

5.1.1.3 節で述べたように、後置属格は、無冠詞の 1 音節・2 音節の固有名詞による置き換えが可能かどうかを基準として属格項なのか属格付加語なのかを判別することができる。例えば、*Freundin* のような関係名詞にかかる後置属格は *Ulfs* のような 1 音節の無冠詞固有名詞であり得るのに対し、*Computer* のような種族名詞では、1 音節の無冠詞固有名詞は後置属格として認められない。

(232) a. **Die Freundin Ulfs** kann wunderbar kochen.

the girlfriend.NOM Ulf.GEN can.3SG.PRS wonderful cook.INF

ウルフのガールフレンドは素晴らしく料理ができる

b. ***Der Computer Ulfs** ist kaputt.

the computer.NOM Ulf.GEN be.3SG.PRS broken

(Hartmann & Zimmermann 2003: 199)

b'. **Ulfs Computer** ist kaputt.

Ulf.GEN computer.NOM be.3SG.PRS broken

ウルフのコンピューターが壊れた

²⁰ Bücking (2012) は意味役割を細分化せず、この論文でいう所在物や所有物も Theme に含めている。

名詞化において状況の参与者を表す後置属格は、固有名詞によって表される人や地名の項であり得る限りにおいて、多くの場合で1音節・2音節の無冠詞固有名詞による置き換えが可能である。したがって、上述の基準に照らせば、名詞化において状況の参与者を表す後置属格は、その多くが属格付加語ではなく、属格項である。

- (233) a. **Die Erschießung Peters** erfolgte sofort.
 the shooting.NOM Peter.GEN take_place.3SG.PST immediately
 ペーターの射殺は直ちに行われた
- b. **Die Arbeit Biskys** hat erst begonnen.
 the work.NOM Bisky.GEN PRF.3SG.PRS just begin.PTCP
 (DWDS: Berliner Zeitung, 31.01.2004)
 ビスキーの仕事はようやく始まった
- c. Er wolle **die Unterstützung Ryans** gar nicht, [...]
 he.NOM want.3SG.SBJ1 the support.ACC Ryan.GEN at_all not,
 sagte Trump. (DWDS: Die Zeit, 12.10.2016)
 say.3SG.PST Trump.NOM
 ライアン下院議員に支援を受けることは全く望んでいないとトランプ氏は述べた

とはいえ、名詞化において状況の参与者を表す属格の中には、確かに属格付加語であると考えられるものもある。例えば、使役的状态変化動詞の名詞化をN2とする名詞化複合語における主語的な属格は、1音節・2音節の無冠詞固有名詞によって置き換えられないことから属格付加語である。

- (234) a. **Die Geiselerchießung der Soldaten** ereignete sich vor
 the hostage-shooting.NOM the soldier.PL.GEN happen.3SG.PST REF.ACC before
 Mitternacht.
 midnight.DAT
 兵士たちの捕虜射殺は夜半前に起こった
- b. ***Die Geiselerchießung Peters** ereignete sich vor
 the hostage-shooting.NOM Peter.GEN happen.3SG.PST REF.ACC before
 Mitternacht.
 midnight.DAT

したがって、このような属格に関しては、Bücking (2012) のような属格付加語としての分析が有効であろう。

6.4. まとめ

本章では、先行研究における名詞化の項構造の理論化として、Bierwisch (1989) の項構造の継承モデル、Ehrich & Rapp (2000) の意味形式の継承モデル、Bücking (2012) の属格付加語モデルを取り上げ、それぞれを批判的に検討した。

この3つのモデルは、「名詞化において、動詞から名詞化に意味形式が継承される」という想定と、「名詞化において、動詞の状況項が、指示項に転じる」という想定に関して共通している。

(235) 意味形式の継承：

名詞化において、動詞から名詞化に意味形式が継承される

(236) 状況項の指示項への変換：

名詞化において、動詞の状況項は指示項に転じる

この2つの想定は、名詞化の項構造を理論化する上で、適切なものであると考えられる。

一方、上述の3つのモデルは、名詞化の項構造の扱いに違いがある。Bierwisch (1989) のモデルが動詞から名詞化への項構造の継承を想定するのに対し、Ehrich & Rapp (2000) のモデルと Bücking (2012) のモデルは意味形式のみの継承を想定し、名詞化の項構造が動詞の項構造とは異なるとする。Ehrich & Rapp (2000) のモデルと Bücking (2012) のモデルの違いは、状況の参与者を表す後置属格を属格項として分析するか、属格付加語として分析するかという点にある。

実際のところ、名詞化にかかる属格には、属格項と属格付加語が混在している。名詞化において状況の参与者を表す後置属格は、その多くが属格項であると考えられるが、属格付加語と考えられるものも存在する。したがって、名詞化の項構造に関する理論は、属格項と属格付加語の両者を区別して扱うことのできるものでなくてはならない。

7. 指示表現としての名詞化における構造項の実現

本章では、名詞化における項の実現について、この論文独自の理論化を試みる。その際、名詞という統語範疇の中心的な機能である「指示」に注目し、名詞の項実現が「指示対象の同定」という動機のもとに行われ、名詞化では、指示対象となる状況の同定を可能とする項が構造項となることを主張する。

7.1 節では、生成文法の枠組みに基づき、ドイツ語の名詞句の統語構造を分析する。7.2 節では、名詞の項と指示という機能の関係を明らかにする。7.3 節では、様々な種類の動詞の名詞化を観察しながら、「状況の同定を可能とする項」が名詞化の構造項となることを示す。7.4 節では、構造項の具現形とは考えられない前置属格と所有冠詞が項的解釈を得る仕組みについて論じる。7.5 節では、項に関して派生名詞化とは異なる性質を持つ不定詞名詞化について考察する。7.6 節では本章のまとめを行う。

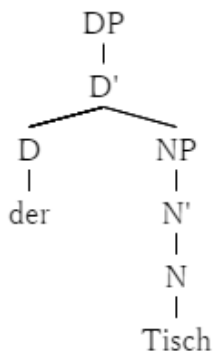
7.1. 名詞句の統語構造

名詞化における項実現の規則を定式化する上で、名詞句がどのような統語構造をなし、項、特に構造項が統語構造のどの位置に置かれるのかということは根本的な意味を持っている。そこで本節では、生成文法の枠組みに基づき、ドイツ語の名詞句の統語構造について考察する。

7.1.1. 属格項と前置詞項の位置関係と NP シェル

ドイツ語の名詞句については、Abney (1987) による DP 仮説の提唱以来、(237) のように、冠詞などの決定詞 (Determinierer; determiner) を主要部とする DP として分析するのが通例である。この論文でも、ドイツ語の名詞句は DP をなすと考える。

(237)



名詞化や機能名詞・関係名詞を主要部とする名詞句の統語構造を考える上で最初に問題となるのが、後置属格として現れる属格項と前置詞句として表される語彙的な前置詞項の配列を巡る問題である。一般に知られているように、ドイツ語の名詞句には、後置属格が主要部の名詞に隣接してはいなくてはならないという制約がある (cf Bhatt 1990, Lindauer 1995, Demske 2001, Sternefeld 2007)。例えば、後置属格（下線）が主要部名詞（太字）の直後にある (238) は可能な配列であるのに対し、(238') の配列は、主要部と後置属格の間に前置詞句が割り込むことで隣接性が阻害されるため容認されない。

(238) a. die **Verankerung** der Windräder im Meeresboden.

the anchoring.NOM the windmill.PL.GEN in_the seabed.DAT

風車の海底への固定

b. der **Wurf** des Mülls in die Tonne

the through.NOM the garbage.GEN into the bin.ACC

ごみのゴミ箱への投げ入れ

(238') a. *die **Verankerung** im Meeresboden der Windräder

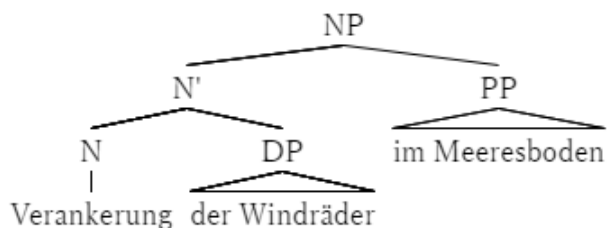
the anchoring.NOM in_the seabed.DAT the windmill.PL.GEN

b. *der **Wurf** in die Tonne des Mülls

the through.NOM into the bin.ACC the garbage.GEN

この制約は、ドイツ語の名詞句を (239) のような右上がりの構造によって分析する動機となる (cf. Bhatt 1990, Lindauer 1995)。 (239) のように名詞と属格項が N' の節点を作り、N' と前置詞項が NP を形成すると考えると、主要部の N と属格項の DP の姉妹関係によって主要部と後置属格の隣接が保証される。

(239)



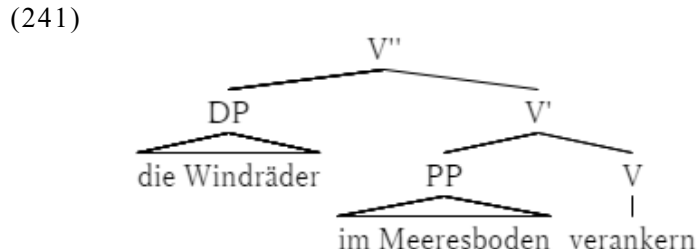
しかし、(239) の句構造には、対応する動詞句との構造的な対称性が保たれないという問題がある。ドイツ語の文は項の配列が柔軟であるが、無標の語順

は決まっており、*Was ist passiert?*「何があったの」という疑問文に答える全焦点の文では、(240)のように、前置詞項が対格項よりも後方に置かれる〔対格項—前置詞項—動詞〕という語順が自然である。

(240)A: Was ist passiert?
 what.NOM PRF.3SG.PRS happen.PTCP
 何があったの？

B: Ein Bauunternehmen hat die Windräder im Meeresboden
 a construction_company.NOM PRF.3SG.PRS the windmill.PL.ACC in_the seabed.DAT
 verankert.
 anchor.PTCP
 ある建設業者が風車を海底に固定しました

そのため、生成文法の標準的な立場では、動詞句の基底の統語構造として、動詞がまず前置詞項と結びついて V' の節点をなし、対格の項が V' の姉妹位置を占める (241) の構造が想定される。

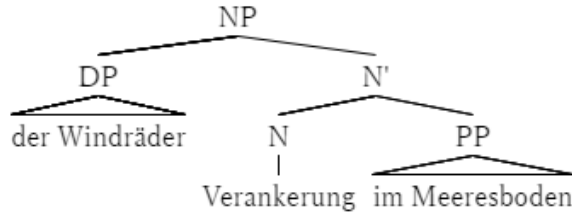


ドイツ語では、動詞句が主要部後置型の語順をなすのに対し、名詞句は主要部前置型の語順を示すことから、動詞句とそれに対応する名詞化の名詞句は対称的な句構造となることが望まれる。ところが、名詞がまず属格項と結びつく (239) の構造により名詞化を分析すると、動詞がまず前置詞項と結びつく (241) の動詞句の構造と対称的な構造とはならなくなってしまうのである。

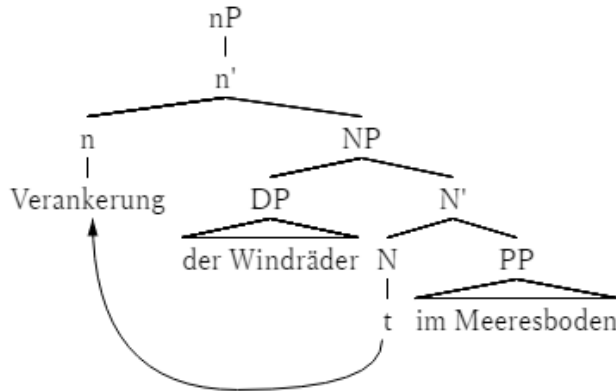
このジレンマを解消することを狙い、Haider (1993, 2000, 2009) は、属格項と前置詞項を持つ名詞句に (242a) の基底構造を仮定している。(242a) では、名詞と前置詞項が N' の節点をなし、属格項は NP の指定部に置かれている。Haider (1993, 2000, 2009) はこの基底構造から、N が NP の上へと移動して新しい投射 (区別のため、この投射を nP と呼ぶ) を形成するとする。すると、動詞句と名詞句の対称性を損なうことなく、表層の統語構造に「名詞—属格項—前置詞項」

という正しい配列を導くことができる (cf. (242b))。この分析を NP シェル分析と呼ぶ。

(242) a.



b.



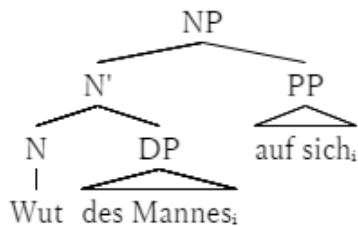
Haider (1993, 2000, 2009) は、NP シェル分析を支持する独立の経験的根拠が束縛関係の観察から得られると述べている。(243) の観察から、属格項は前置詞項を束縛することがわかる。

(243) a. die Wut des Mannes_i auf sich_i
 the anger.NOM the man.GEN on REF.ACC
 その男の自身への憤り

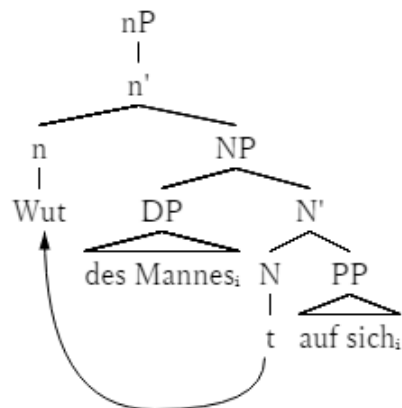
b. der Stolz jedes Vaters_i auf seinen_i Sohn
 the pride.NOM every father.GEN on his son.ACC
 それぞれの父親の自分の息子への誇り

したがって属格項は前置詞項を C 統御 (cf. Grewendorf 2002: 21) する位置にあると考えられるが、nP を仮定しない右上がりの構造では前置詞項の方が属格項よりも高い統語的位置となってしまう (cf. (244a))。一方、NP シェル分析では属格項が前置詞項よりも高い統語的位置となり、属格項は前置詞項を正しく C 統御する。

(244) a.



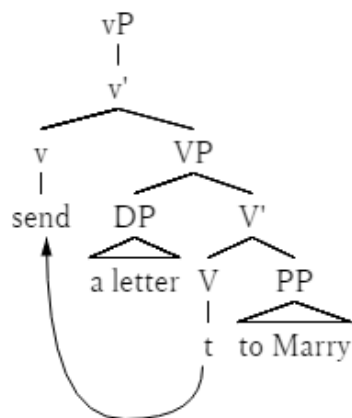
b.



また NP シェル分析には、経験的に妥当な統語構造を導くことができるというばかりでなく、Larson (1988) が提唱した英語などの主要部前置型言語の動詞句の分析と合致するという理論的な利点もある (cf. (245))。

(245) a. (to) send a letter to Mary.

b.



すなわち、(242) は、ドイツ語の名詞句に特有の構造というわけではなく、主要部前置型の語彙範疇の投射にユニバーサルな構造と考えることができるのである。この点でも、NP シェル分析はドイツ語の名詞句に関する有望な分析であると言える。

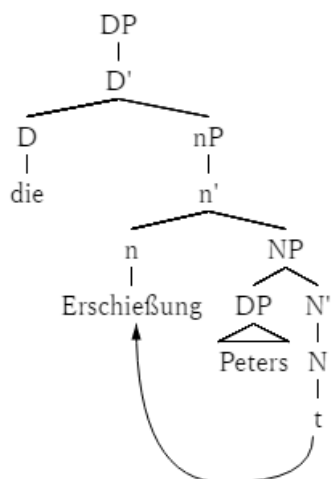
7.1.2. 名詞の構造格としての後置属格

属格項に加えて語彙的な前置詞項をとる名詞句では、経験的に妥当な分析に NP シェル分析が不可欠である。一方、前置詞項のない名詞句では、NP シェルを仮

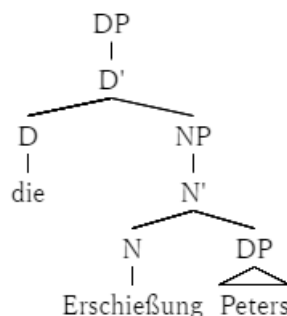
定してもしなくても、経験的に妥当な分析が可能である。例えば、(246) の名詞句は NP シェル分析では (246'a) のように分析されるが、nP を仮定しなくても、属格項を N の姉妹位置に置き、(246'b) のように分析することができる。(246'b) は、N から n への移動がない分、一見すると (246'a) よりもシンプルな分析であるように思われる。

(246) **Die Erschießung Peters** erfolgte sofort.
 the shooting.NOM Peter.GEN occur.3SG.PST immediately
 ペーターの射殺は直ちに行われた

(246') a.



b.



しかし、属格項の位置に注目すると、(246'b) の分析を採用した場合には、語彙的な前置詞項の有無に応じて、前置詞項がある場合には属格項を NP 指定部に置き、前置詞項がない場合には属格項を NP 補部に置くという、統一的でない扱いが必要となる。

(247) a. [_{NP} [_{n'} Wut_i [_{NP} **Peters** [_{N'} t_i auf die Regierung]]]]

b. [_{NP} [_{N'} Erschießung **Peters**]]

一方、(246'a) のように前置詞項のない名詞句にも nP を仮定すれば、属格項を一貫して NP 指定部というひとつの統語的位置に位置づけることができる。

(248) a. [_{NP} [_{n'} Wut_i [_{NP} **Peters** [_{N'} t_i auf die Regierung]]]]

b. [_{NP} [_{n'} Erschießung_i [_{NP} **Peters** [_{N'} t_i]]]]

したがって、前置詞項のない名詞句にも nP を仮定することで、名詞句において属格項に与えられる属格を、(249) の構造条件において与えられる構造格と考えることが可能となる。

(249) 構造的属格が付与される構造条件

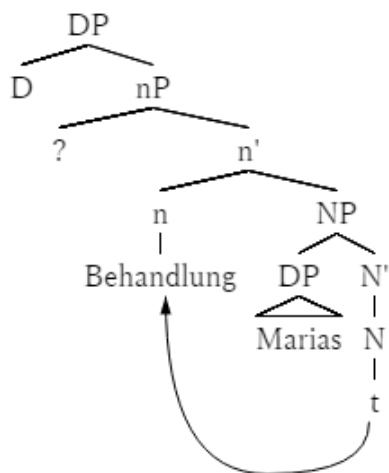
... [nP [n' n [NP GEN [N' N ...]]] ...

こうした合理性から、筆者は、前置詞項のない名詞句にも nP を仮定し、属格項に与えられる属格を、nP 配下の NP 指定部に付与される構造格と考える。

7.1.3. nP 指定部

NP シェル分析において、nP の指定部は (250) のように空となっている。このことは、名詞句において、NP 指定部に加えて、nP 指定部にも構造項が置かれるのではないかという着想をもたらす。

(250)



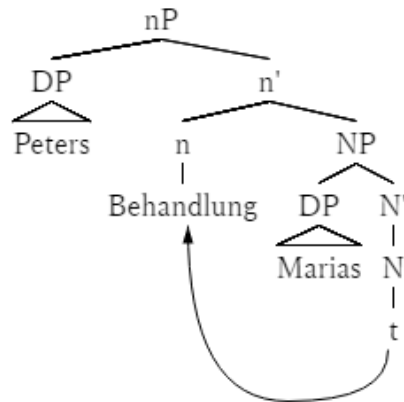
NP 指定部に加えて nP 指定部にも構造項が置かれると考えれば、(251) のような前置属格をもつ名詞化に、(251') のような統語的分析を行うことができるかも知れない。

(251) **Peters Behandlung Marias** war erfolgreich.

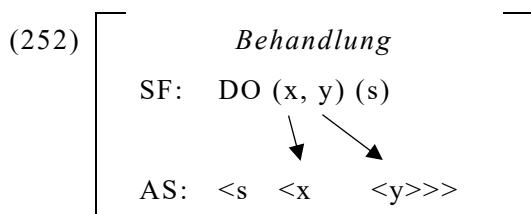
Peter.GEN treatment.NOM Maria.GEN be.3SG.PST successful

ペーターのマリアの治療が成功した

(251')



5.1.3 節で述べたように、(251) の名詞化は、通常「ペーターがマリアを治療すること」という意味で解釈され、「マリアがペーターを治療すること」という解釈は極めて有標である (cf. Bücking 2012: 56)。仮に、nP 指定部にも構造項が置かれるとすれば、この解釈の非対称性を「意味論の関係において上位の項が、統語論の構造においても高い位置に表される」という写像論的なアプローチによってとらえることも考えられる。すなわち、*Behandlung* は、意味形式に x と y の 2 つの個体項があり、この 2 項には、 x が上位、 y が下位という関係がある (cf. 4.1.3 節)。また、nP 指定部は NP 指定部よりも高い統語的位置である。そのため、 x が nP 指定部、 y が NP 指定部にマッピングされることで、*Peters Behandlung Marias* が「ペーターがマリアを治療すること」という解釈を持つという考え方である。



(252') [nP Peter _{x} [n' Behandlung _{i} [NP Marias _{y} t_i]]]

Peter.GEN treatment.NOM Maria.GEN

ペーターの _{x} マリアの _{y} 治療

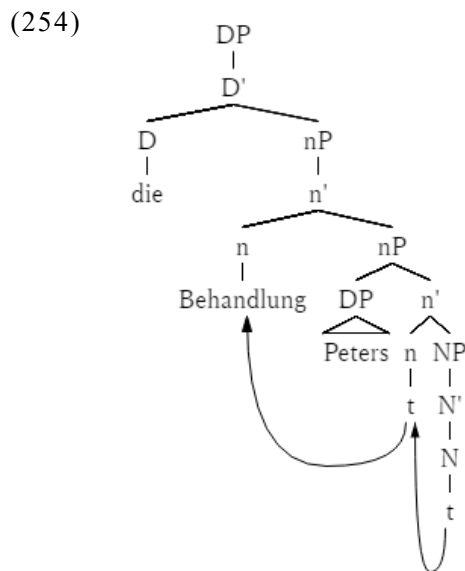
しかし、NP 指定部に加えて nP 指定部にも構造項を置く分析では、動作主的に解釈される後置属格が問題となる。例えば、(253) の名詞化において、属格の

Peters は、治療される人（被動者）としてだけでなく、治療する人（動作主）としても解釈され得る。

- (253) **Die Behandlung Peters** dauert noch an.
 the treatment.NOM Peter.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL
 = [ペーターが（誰かを）治療する出来事] が続いている
 = [(誰かが) ペーターを治療する出来事] が続いている

「意味論の関係において上位の項が、統語論の構造においても高い位置に表される」という写像的な関係が名詞句にも成り立つとすれば、動作主のような意味論的に上位の項 (cf. 4.3.3 節) は、低い統語的位置である NP 指定部ではなく、高い統語的位置である nP 指定部に表されるはずである。しかし、(253) の *Peters* が動作主としても解釈され得るということは、動作主のような意味論的に上位の項も、低い統語的位置である NP 指定部に現れ得ることを示している。

動作主を nP 指定部に位置づけたまま (253) の名詞化を導くために、(254) のように、N から n へ移動した名詞が、nP の上にもう一つ投射を作って移動すると考えることもできるかも知れない。



しかし、そのようなアドホックな移動は経済性の観点で望ましくない。また、名詞が (254) のように 2 度移動するならば、(255) のように、名詞の後方に属格項が 2 つ並ぶことができてもよさそうだが、このような構造が認められないことから、(254) のような 2 つ目の nP があるとは考え難い。

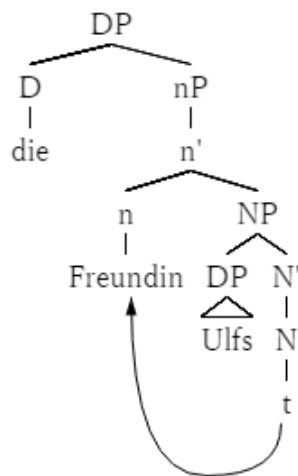
(255) * $[_{DP} \text{ die } [_{nP} \text{ Behandlung}_i \text{ } [_{nP} \text{ Peters}' t_i \text{ } [_{NP} \text{ Marias}' t_i]]]]]$
 the treatment.NOM Peter.GEN Marias.GEN

以上の考察から、NP 指定部に加えて nP 指定部にも構造項を置くことは妥当ではない。名詞句において構造項が現れる統語的位置は nP 配下の NP 指定部ただ一つであり、nP 指定部には構造項は置かれぬのである。

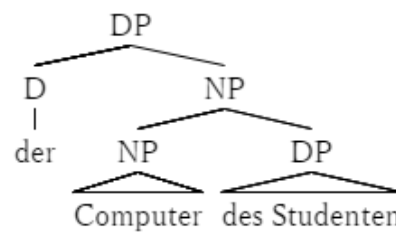
7.1.4. 属格付加語

5.1.1.3 節で論じたように、後置属格には、項としての属格項と付加語としての属格付加語が並存すると考えられる。前節で述べたように、属格項は nP 配下の NP 指定部に位置づけられる (cf. (256a))。一方、属格付加語は (256b) のように、NP の付加語位置に位置づけられる (cf. Hartmann & Zimmermann 2003, Solstad 2010)。

(256) a. 属格項



b. 属格付加語



5.1.1.3 節でも述べたように、後置属格には、属格項であれば無冠詞の固有名詞が認められるのに対し、属格付加語では 1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞が認められないという音韻論的な違いがある。

(257) a. **Die Freundin Ulf** kann wunderbar kochen.
 the girlfriend.NOM Ulf.GEN can.3SG.PRS wonderful cook.INF
 ウルフのガールフレンドは素晴らしく料理ができる

b. ***Der Computer Ulf** ist kaputt.
 the computer.NOM Ulf.GEN be.3SG.PRS broken

(Hartmann & Zimmermann 2003: 199)

b'. **Ulf Computer** ist kaputt.
 Ulf.GEN computer.NOM be.3SG.PRS broken
 ウルフのコンピューターが壊れた

この音韻論的な相違については、現象そのものについての認知度の低さもあり、管見の限り、ほとんど研究がないようである。そのため、この違いがどのようなメカニズムで生じているのかについては、現在のところ、これからの課題と位置付けることになる。

もっとも、項と付加語の相違が音韻論にも反映すること自体は、従来から知られていることである。例えば、Truckenbrodt (2007) および Truckenbrodt & Darcy (2010) では、項と付加語の違いが強勢を置かれる位置の違いという形で音韻論的にも顕現することが、(258) の規則とともに論じられている。

(258) 句強勢：

- a. 語彙範疇を主要部とする句はそれぞれが句強勢を持つ
- b. 線形語順における最も右の句強勢に最大強勢が置かれる

(258) の規則からは、「述語 X と項 YP からなる句 XP では、句である YP には句強勢が置かれる一方、X は句ではないから強勢が置かれない」という一般化が導かれる。例えば (259) では、*ein Buch* が動詞の項、すなわち動詞句の一部をなす句であるため、これが動詞句の句強勢の担い手となる。一方、*verkauft* は、それ自体は主要部であって句ではないから、句強勢の担い手とはならない。これに対し、(260) では、*während eines Seminars* が項ではなく付加語である。付加語は動詞句とは独立した句であるから、*Seminars* に句強勢が置かれるとともに *geschlafen* にも句強勢が置かれる。この時、*geschlafen* に置かれるのは、この文の最大強勢である。

(259) A: Was ist passiert?
 what.NOM PRF.3SG.PRS happen.PTCP
 何があったの？

B: Peter hat [VP [NP ein Buch] verkauft] (Truckenbrodt & Darcy 2010: 190)
 Peter.NOM PRF.3SG.PRS a book.ACC sell.PTCP
 ペーターが本を売りました

(260) A: Was ist passiert?
 what.NOM PRF.3SG.PRS happen.PTCP
 何があったの？

B: Peter hat [VP während [NP eines Seminars] geschlafen]
 Peter.NOM PRF.3SG.PRS in a seminar.GEN sleep.PTCP
 (Truckenbrodt & Darcy 2010: 190)
 ペーターがゼミナール中に居眠りしました

Bücking (2012: 234f.) は名詞句にかかる前置詞句を例に, (258) の規則が名詞句にも当てはまることを論じている。²¹ したがって, 「述語 X と項 YP からなる句 XP では, 句である YP に句強勢が置かれ, 句でない X には強勢が置かれない」という一般化は属格にも当てはまると考えられる。すなわち, 属格項は名詞句の一部をなすから, これが名詞句の句強勢の担い手となる一方, 主要部名詞はそれ自体は句ではないので, 句強勢の担い手とはならないということである。例えば, (261) では, 句強勢は *Alexanders* に置かれ, *Geburtsort* には置かれない。²²

(261) A: Worum geht's?
 about_what.ACC go.3SG.PRS=it.NOM
 何が話題になっているの？
 B: Um den [NP Geburtsort [NP Alexanders]].
 about the birthplace.ACC Alexander.GEN
 アレクサンダーの出生地について

²¹ Bücking (2012) が論じているのは項と付加語の違いではなく, 場所の付加語のうち, 名詞句を修飾し状況の所在地を表す (e.g. *ein Pfeifen auf der Treppe* 「階段の上で口笛を吹くこと」) ものと, 付加語でありながら名詞句内部の主要部名詞を修飾し, 状況の中の場所を表すもの (e.g. *ein Pfeifen auf den Fingern* 「指を口につけて口笛を吹くこと」) の違い (cf. Maienborn 2001, 2003) である。

²² ここに挙げた名詞句の強勢についての判断はノルトライン・ヴェストファーレン州出身の 20 代男性による。ただし, この判断は「自信がない」という留保を付けられた証言である。

一方、属格付加語は被修飾名詞句とは独立した句である。したがって、属格付加語と被修飾名詞句はどちらも句強勢の担い手となる。例えば、(262) では、句強勢は *Computer* と *Alexanders* に置かれる。

- (262) A: Worum geht's?
about_what.ACC go.3SG.PRS=it.NOM
何が話題になっているの？
- B: Um den [NP [NP Computer] [NP Alexanders]].
about the computer.ACC Alexander.GEN
アレクサンダーのコンピューターについて

ただし、名詞句は動詞句と違い主要部前置型の構造をなすため、線形語順では後置属格が常に右に現れる。そのため、項と付加語の音韻論的な相違は、動詞句ほど明確には現れないようである (cf. Bücking 2012: 232)。

とはいえ、項と付加語の違いによる句強勢の違いは、属格ではなく、主要部名詞および被修飾名詞句に表れる違いである。そのため、句強勢の違いと、属格付加語に2音節以下の無冠詞固有名詞が認められないという後置属格の音韻論的制約の関係は明らかでない。この点に関しては、今後、より詳しい研究が求められる。

7.2. 名詞の項と指示

名詞句の最も基本的な用法は、文における動詞の項としての用法である。例えば (263) の *Fido bellt* 「フィドーが吠えている」という文において、名詞句 *Fido* は、動詞 *bellen* の主語の項となっている。

- (263) **Fido** bellt.
Fido.NOM is_barking.3SG.PRS
フィドーが吠えている

Fido のような特定の個体を表す固有名詞は単独で動詞の項となることができるのに対し、*Hund* のような普通名詞は、新聞の見出しなどを別とすれば、単独では項となることができず、冠詞などの決定詞の助けを借りることで初めて動詞の項となるようになる。

(264) a. ***Hund** bellt.

dog.NOM is_barking.3SG.PRS

b. **Der Hund** bellt.

the dog.NOM is_barking.3SG.PRS

犬が吠えている

固有名詞が特定の個体を表すのに対し、普通名詞は、個体ではなく個体が所属する概念のカテゴリーを表す。例えば、*Hund* が表すのは「犬」という概念のカテゴリー、言い換えれば「犬である」ということが当てはまる個体の集合 (cf. (265)) である。

(265) *Hund* ⇒ {Bob, Felix, Fido, Hachi, Lucy, ...} (犬の集合)

普通名詞は、冠詞などの決定詞が付されて名詞句となることで、個体を指示することができるようになる。*der Hund* の場合、「犬である」ということが当てはまる文脈上唯一の個体が指示される。つまり、名詞は、名詞句として個体の指示が行えるようになることで、初めて動詞の項となることができるのである。

したがって、名詞という統語範疇の基本的な役割である「動詞の項」としての役割には、「個体を指示する」という機能が密接に関わっていると考えられる。そこで本節では、名詞という統語範疇の中心的な機能が「個体を指示する」という働きにあるという考えの下、この「指示」という機能と名詞化や機能名詞・関係名詞の項実現の関係を明らかにする。

7.2.1. 動詞項の義務性と法・時制の解釈

動詞において、項は、中には義務的でない項もあるとはいえ、基本的に義務的である。したがって、通常は文法性や意味的同一性を損なうことなく項を削除することはできない。

(266) Ich rolle *(das Fass) in den Keller.²³

I.NOM roll.1SG.PRS the barrel.ACC into the cellar.ACC

私は *(樽を) 地下室に転がして入れる

²³ この例のアスタリスクは項の削除によって意味的同一性が損なわれることを表す。

動詞の項の義務性には、動詞が文において法と時制を表すために人称と数を参照する必要があるということが関係している。(266)の文は直説法現在である。この時、直説法現在という情報を持っているのは *rolle* という動詞の屈折形であるが、*rolle* という屈折形が直説法現在として解釈されるのは 1 人称単数に鑑みる限りであって、3 人称単数に鑑みれば、*rolle* は接続法 I 式である (cf. (267))。

(267) a. Ich **rolle** das Fass in den Keller.

I.NOM roll.1SG.PRS the barrel.ACC into the cellar.ACC

私は樽を地下室に転がして入れる

b. Der Ball **rolle** über die Seitenlinie.

the ball.NOM roll.3SG.SBJ1 over the side_line.ACC

ボールがアウトラインの向こうに転がっていくと

項が持つ人称・数・性の素性を ϕ 素性と言う。動詞の屈折形は、法と時制の解釈を可視化するために、項が持つ ϕ 素性を必要とするのである。そのため、動詞は ϕ 素性を参照すべき項の統語的な実現を求める。

複数項が参与する状況では、状況に参与する項のうち、どの項の ϕ 素性に鑑みて法と時制を解釈すればよいのかということが問題となる。上の (267a) では、*rolle* が 1 人称・単数の *ich* に鑑みて直説法現在と解釈されるが、この状況にはもう一つ、*das Fass* という項も参与している。仮に、*rolle* という屈折形を *das Fass* に鑑みて解釈しようとするれば、*das Fass* は 3 人称・単数なので、*rolle* は (267b) のように接続法 I 式となってしまう。この問題は、 ϕ 素性を参照すべき項が格によって示されることで解消される。すなわち、 ϕ 素性を参照すべき項は、常に主格で明示されるのである。(267a) の場合、*ich* が主格であるのに対し、*das Fass* は対格であるから、*rolle* は主格である *ich* の 1 人称・単数に鑑みて直説法現在と解釈される。

ところで、人間の認知において、状況のとらえ方というのは一様ではない。つまり、人はある状況を他動詞的にとらえることも自動詞的にとらえることもできる。*rollen* という動詞は、状況を (268a) のように動作主を主語として他動詞的にとらえられることもあれば、(268b) のように所在物を主語として自動詞的にとらえられることもある。

(268) a. $\exists s$ [CAUSE (DO (x, y), BECOME (LOC (y, Place))) (s)]

Klaus_x rollte das Fass_y in den Keller_{Place}

Klaus.NOM roll.3SG.PST the barrel.ACC into the cellar.ACC

クラウスは_x 樽を_y 地下室に_{Place} 転がして入れた

b. $\exists s \exists e$ [CAUSE (e, BECOME (LOC (y, Place))) (s)]

Der Ball_y rollte über die Seitenauslinie_{Place}

the ball.NOM roll.3SG.PST over the side_line.ACC

ボールが_y アウトラインの向こうに_{Place} 転がっていった

この時、(268a)において主語の *Klaus* が動作主であるということは、所在物の *das Fass* が対格で表されていることによって読み取ることができるようになっている。もし所在物が対格で明示されなければ、(268a) は、全く異なる状況を表す (269) の文と区別することができなくなってしまう。

(269) $\exists s \exists e$ [CAUSE (e, BECOME (LOC (y, Place))) (s)]

Klaus_y rollte in den Keller_{Place}

Klaus.NOM roll.3SG.PST into the cellar.ACC

クラウスが_y 地下室に_{Place} 転がり落ちていった

そのような曖昧性を避けるため、動詞では、法と時制の解釈のために ϕ 素性を参照される主語に加え、当該の状況に参加する主だった項についても、状況のとらえ方に応じて実現が求められるのである。

7.2.2. 項の実現による指示対象の同定

名詞にも、項の ϕ 素性に鑑みて解釈される範疇として格がある。例えば、*der Schüler* という名詞句が主格であることは、*der* という冠詞の屈折形によって示されるが、*der* が主格なのは男性・単数に鑑みる限りであって、女性・単数に鑑みれば、*der* は与格ないし属格である。

(270) a. *der* Schüler

the.M.SG.NOM male_student

その男子生徒が

b. *der* Schülerin

the.F.SG.DAT/GEN female_student

その女子生徒に／の

格の解釈と法・時制の解釈の違いは、 φ 素性を参照される項の種類にある。動詞の法・時制解釈は、動詞の主題項の φ 素性に鑑みて行われるが、名詞の格解釈において φ 素性を参照されるのは、名詞の指示項である。そのため、名詞は指示項の解釈を何らかの方法で処理することが不可欠となる。指示項さえ適切に処理されている限り、格解釈のために主題項や関係項の明示が必要となることはない。

機能名詞や関係名詞では、関係項の明示が、指示項の処理と密接に関係する。機能名詞を主要部とする名詞句は、関係項が明示されると、通常、定冠詞が付される (cf. (271))。

- (271) a. **der Geburtsort des Mannes; der Vater des Mädchens; der Kopf**
 the birthplace.NOM the man.GEN; the father.NOM the girl.GEN; the head.NOM
der Frau
 the woman.GEN
 その男の出生地；その少女の父；その女性の頭
- b. **#ein Geburtsort des Mannes; #ein Vater des Mädchens; #ein Kopf**
 a birthplace.NOM the man.GEN; a father.NOM the girl.GEN; a head.NOM
der Frau
 the woman.GEN

このことは、機能名詞の定義から明らかである。機能名詞とは、関係項に対して指示対象が1対1に定まるような名詞を言うので、関係項が明示されれば、その名詞句は必然的に唯一の個体を指示することになるのである。例えば *Geburtsort* 「出生地」は、ある人の出生地はひとつしかあり得ないので、誰の出生地なのかが明らかとなれば、指示対象も必然的に唯一に定まる。*Vater* 「父」や *Kopf* 「頭」も、ある人の父は一人しかあり得ず、ある人の頭もひとつしかあり得ないので、関係項が明示されれば指示対象は当然唯一に定まるのである。

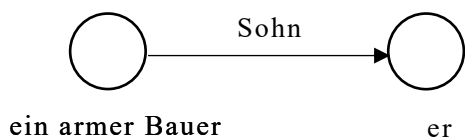
一方、広義の関係名詞から機能名詞を除いた狭義の関係名詞では、関係項が明示されたからと言って、必ずしも指示対象が唯一に定まるわけではない。例えば *Sohn* 「息子」は、ある人に息子は何人いてもかまわないので、誰の息子なのかが明らかであっても、その人の息子がただ一人に定まるわけではない。にもかかわらず、関係名詞を主要部とする名詞句では、項が明示されることで、指示対象が唯一であるという含意がなくても定冠詞が付されることがある。例えば、(272) の例がこれに該当する。この文は農夫の息子がただ一人であると

いうことは含意していないにもかかわらず、*Sohn* には定冠詞が付されるのが普通である。

- (272) a. Er war **der** Sohn eines armen Bauern. (Löbner 1985: 324)
 he.NOM be.3SG.PST the son.NOM a poor farmer.GEN
 彼は貧しい農夫の息子だった
- b. ?Er war **ein** Sohn eines armen Bauern.²⁴
 he.NOM be.3SG.PST a son.NOM a poor farmer.GEN

Löbner (1985: 305) は、(272) において定冠詞が使用される理由が、この文が、「彼」と「農夫」の2項のみを含み、他の個体、とりわけ「農夫の他の息子」の存在が捨象された抽象的な状況 (abstract situation) に鑑みて解釈されることにあるとする。²⁵ (272) において、主語の *er* は世界の中のある個体を指し示すという意味で指示的であるのに対し、*Sohn* はコピュラの述語として用いられており、それ自体が個体を指し示しているわけではない。Löbner (1985) によれば、このような場合、*Sohn* のような関係名詞は「抽象的な状況」における個体と個体の一対一の関係を表す述語として解釈されるのだという。すなわち、(272) の文では、*Sohn* は「彼」と「農夫」の間に成り立つ「息子である」という関係を表しているのである。このように一対一的の関係を表す関係名詞は関係項から唯一の個体を同定する機能名詞的な関数とみなされるので (cf. (273)), 定冠詞が付されるのである。

(273)



(Löbner 1985: 305)

以上の観察は、機能名詞や関係名詞の関係項の明示が、「指示対象の同定」という形で指示項の処理に寄与することを示している。機能名詞では、関係項を明示することで名詞句の指示対象が唯一に同定される。関係名詞では、機能名詞のように関係項から名詞句の指示対象が唯一に同定されるわけではないものの、その名詞句自体が指示的でないような場合には、抽象的な状況における個

²⁴ 判断は Ulrike Demske 氏による口頭での指摘による。

²⁵ Löbner (1985: 305) はこの「抽象的な状況」を配座 (configuration) と名付けている。

体と個体の一対一の関係を表す述語とみなされ、指示項が処理される。したがって、機能名詞・関係名詞の関係項には (274) の一般化が当てはまる。

(274) 機能名詞・関係名詞の関係項

機能名詞・関係名詞の関係項は、それを明示することが、指示対象の同定という形で指示項の処理に寄与するような存在である

7.3. 名詞化の項と状況の同定

機能名詞や関係名詞では、そもそも指示対象の同定を可能とする存在が関係項となっている。一方、名詞化の場合、動詞から名詞化への意味形式の継承 (cf. 6.2 節) を仮定すると、潜在的には状況の参加者がすべて主題項の候補となる。いま、機能名詞や関係名詞の関係項に認められる「指示対象の同定という形で指示項の処理に寄与する」という特徴が、構造項となる名詞化の主題項にも当てはまるものと仮定しよう。潜在的に主題項の候補となる状況の参加者は、必ずしも指示対象、すなわち状況の同定を可能とする存在であるとは限らない。名詞化では、状況の参加者のうち、「状況の同定を可能とする項」だけが構造項として項構造に記録されるのである。

(275) 名詞化の主題項

名詞化では、意味形式中の構造項の資格を持つ項 (cf. 4.3.1 節) のうち、「状況の同定を可能とする項」のみが構造項として項構造に記録される

以下では、様々な種類の名詞化について、基盤動詞の意味的な特徴ごとに、属格項として実現される構造項が「状況の同定を可能にする項」であることを明らかにする。

7.3.1. 使役的状态変化の名詞化

使役的状态変化動詞が表す状況には、動作主と Theme の 2 つの個体項が参与する。動詞では、この 2 項はそれぞれ主格と対格の項として構造的に実現する (cf. (276))。

(276) $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y)))] (s)

Der Jäger_x erschoss den Hasen_y

the hunter.NOM shoot.3SG.PST the hare.ACC

ハンターが_x 野ウサギを_y 撃ち仕留めた

一方、使役的状态変化動詞の名詞化では、状況の一回的な生起を表す限り、属格項として実現するのは常に Theme の項であり、動作主は属格項としては実現しない (cf. (277))。

(277) **Die Erschießung Peters** geschah **unerwartet.**

the shooting.NOM Peters.GEN occur.3SG.PST unexpectedly

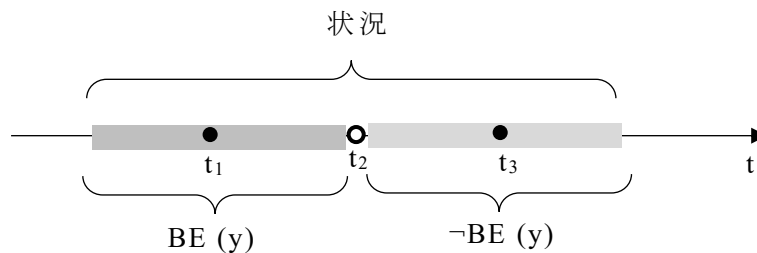
≠ [ペーターが何かを撃ち仕留めること] は予期せず起きた

= [誰かがペーターを射殺すること] は予期せず起きた

名詞化において「状況の同定を可能とする項」だけが構造項となるのだとすると、この観察は、使役的状态変化動詞が表す状況（使役的状态変化）では Theme が状況の同定を可能とする項である一方、動作主は状況の同定を可能とする項ではないということを意味するものと解釈できる。

使役的状态変化という状況の同定に Theme が有効であることは、状況に対してユニークな時間点が Theme に依存するということを通じて説明することができる。使役的状态変化という状況において、Theme は状態の変化を被る項である。erschließen の場合、Theme には、状況の前段階において「生きている」という性質が当てはまり、状況の後段階では、この性質が当てはまらなくなる。Theme を y と置けば、y の状態が変化する時点 t_2 を境界として、それより前の時点 t_1 には BE (y) が、後の時点 t_3 には \neg BE (y) が当てはまるという形で抽象化することができる。

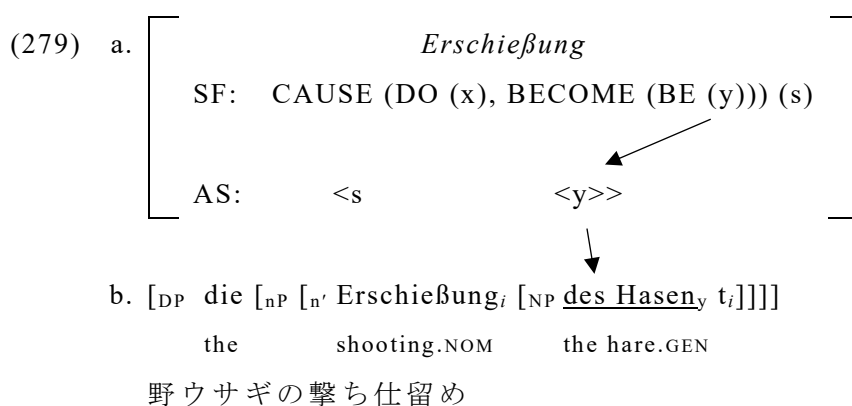
(278)



この時、 t_2 は状況に対してユニークな時点である。つまり、ある一回の使役的状态変化に、 t_2 という時点はただ一度だけ存在する。「野ウサギを撃ち仕留める」

という状況の場合、 t_2 はその野ウサギが絶命する時点であるが、この時点が当該の状況にただ一度だけ存在することは明らかであろう。そのため、Themeが特定されれば t_2 が特定され、 t_2 が特定されれば状況も特定されるのである。

一方、動作主は、これを特定しても必ずしも状況の同定には結びつかない。例えば、あるハンターが何かを撃ち仕留めた場合、ハンターを特定しても、その人に関する「何かを撃ち仕留める状況」はひとつには限定されない。結果として、使役的状态変化動詞の名詞化では、Themeのみが構造項となり、属格項として実現するのである。



統語的に具現化しない動作主は、文脈に応じて、(280a)のように所与でない個体として解釈されるか、あるいは(280b)のように、文脈上の個体として解釈される。

- (280) a. $ts \exists x [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (Lorca)))) (s)]$
- 1948 schrieb Pemán, keine öffentliche Instanz habe mit
- 1948 write.3SG.PST Pemán.NOM no public authority.NOM have.3SG.SBJ1 with
- der Erschie\ss}ung Lorcás** zu tun gehabt: (Die Zeit, 11.06.1976, Nr. 25)
- the shooting.DAT Lorca.GEN to do.INF have.PTCP
- ペマンは1948年に、ロルカ(銃殺された詳しい経緯がわかっていないスペインの詩人)の銃殺に公的機関は関与していなかったと記している

b. is [CAUSE (DO (er), BECOME (BE (Kennedy)))) (s)]

Er wußte, daß er durch **die Erschießung Kennedys**
he.NOM know.3SG.PST that he.NOM by the shooting.ACC Kennedy.GEN
nicht die Lieferung von Phantom-Düsenjägern an Israel verhindern
not the delivery.ACC of phantom-jet-fighter.PL.DAT to Israel.ACC prevent.INF
konnte, (DWDS: Die Zeit, 25.04.1969, Nr. 17)
can.3SG.PST

彼 (=ロバート・ケネディを暗殺したサーハン) は、(彼が) ケネディ
を射殺してもジェット戦闘機ファントム II のイスラエルへの供給を防
ぐことはできないと知っていた

(280a) の名詞化が指示しているのは事実関係の明らかでない事件であるから、動作主は存在こそ暗示されるものの、具体的には特定されない非所与の項である。これは、形式的には動作主の存在量化としてとらえられる。(280b) では、文脈から動作主が母文の主語と同一であることが明らかなので、この項が名詞化の動作主を埋めている。どちらの名詞化も、Theme の明示により状況が唯一に同定されるため、定冠詞が付されている。

7.3.1.1. 対比的文脈における習慣的状況の同定

Hartmann & Zimmermann (2002: 192) は、*Erschießung* のような使役的状态変化動詞の名詞化でも、(281) のように対比的な文脈では Theme ではなく動作主が後置属格として実現できると指摘している。この属格は、(281') に示すように、*Hugo* のような 2 音節の無冠詞固有名詞と置き換えられることから、属格項である。

(281) **Die Erschießung des Anführers** war grausamer als die seines
the shooting.NOM the boss.GEN be.3SG.PST more_cruel than that.NOM his
Gegners. (Hartmann & Zimmermann 2002: 192)
opponent.GEN

ボスの射殺の仕方は抗争相手より残虐だった

(281') **Die Erschießung Hugos** war grausamer als die Peters.
the shooting.NOM Hugo.GEN be.3SG.PST more_cruel than that.NOM Peter.GEN
フーゴの射殺の仕方はペーターより残虐だった

(281) のような対比的な文脈では、状況の生起が一次的ではなく、習慣的であるということが含意される。つまり、(281) は「ボスが特定の誰かを射殺した」という一次的な状況が残虐であったことを表しているわけではなく、「ボスが人を射殺する」という状況が習慣的に起きており、それらが決まって残虐であるということを表している。これは、(281) における *die Erschießung des Anführers* 「ボスの射殺」が、一回一回の状況を越えて「ボスが人を射殺する」という種類の状況を包括的にとらえた「状況の種類」を表しているということである。

使役的状态変化という状況を「状況の種類」として包括的にとらえる場合、Theme は特定の個体ではありえない。というのも、前節で述べたように、Theme は一回一回の使役的状态変化に対してユニークであることから、Theme が特定の個体であれば、ある一回の状況が同定されてしまうからである。このことは、(281) の名詞化と同じように「状況の種類」を表す基盤動詞の文 (282) においても、本来 *erschießen* は Theme を義務的な項として要求する動詞であるにもかかわらず、Theme が表現されなくなることからわかる。

(282) *Der Anführer erschießt grausamer als sein Gegner.*
 the leader.NOM shoot.3SG.PRS more_cruelly than his opponent.ACC
 ボスは抗争相手よりも残虐に人を撃ち殺す

つまり、(281) のような対比的文脈の名詞化は、一回一回の状況を越えて「状況の種類」を表すことができるように、状況の同定につながってしまう Theme をあえて実現しないのである。

一方、動作主は Theme と違い、「状況の種類」を特定することができる。「状況の種類」を特定できるのは、一連の状況に一貫して参与する項である。例えば、 $s_1, s_2, s_3 \dots s_n$ という一連の状況が「ボスが人を撃ち殺す」という「状況の種類」としてまとめられる場合、動作主の「ボス」は、状況に一貫して参与しているから、これらの状況をまとめて特定する情報となり得るのである。

- | | | |
|----------|--|--|
| (283) a. | ∃y [CAUSE (DO (d.Anführer), BECOME (BE (y)))) (s ₁)] | } <i>die Erschießung des Anführers</i> |
| b. | ∃y [CAUSE (DO (d.Anführer), BECOME (BE (y)))) (s ₂)] | |
| c. | ∃y [CAUSE (DO (d.Anführer), BECOME (BE (y)))) (s ₃)] | |
| d. | : | |

7.3.1.2. 複数形名詞化における状況の同定

使役的状态変化動詞の名詞化でも、名詞化が複数形となっている場合には、動作主が後置属格となり得る (cf. Schäublin 1972, Ehrich 2002b)。例えば、(284) の名詞化は、属格の *des Jägers* を動作主として、「ハンターが何かを仕留めること」という意味で解釈される。この例では、「誰かがハンターを射殺すること」という属格を Theme とする解釈は認められない。

- (284) **Die Erschießungen des Jägers** geschahen immer des Nachts.
 the shooting.PL.NOM the hunter.GEN happen.3PL.PST always the night.GEN
 (Ehrich 2002b: 33)
 = [ハンターが何かを仕留めること] はいつも夜間に起こった
 ≠ [誰かがハンターを射殺すること] はいつも夜間に起こった

この属格は、*Hugo* のような 2 音節の無冠詞固有名詞と置き換えることができることから、属格項である。

- (284') **Die Erschießungen Hugos** geschahen immer des Nachts.
 the shooting.PL.NOM the Hugo.GEN occur.3PL.PST always the night.GEN
 = [フーゴが何かを仕留めること] はいつも夜間に起こった
 ≠ [誰かがフーゴを射殺すること] はいつも夜間に起こった

(284) のような複数形の名詞化は、一回的ではなく、反復的な状況を表す。使役的状态変化という状況において、Theme は、ただ一度だけ状態変化を被り、一度状態が変化した Theme は、再び元の状態に復元されない限り、同じ状態変化を被ることはない。したがって、(284) の属格が Theme として解釈できないのは、一度しか状態変化を被らない Theme の特徴と、複数形の反復的な解釈が矛盾することの帰結であると考えられる。例えば (284) では、一人の人物を何

度も射殺することはできないので、属格を Theme としては解釈しようがないのである。

同じ状態変化は普通、同じ個体には起こらないが、一度変化した状態が再び元の状態に復元される場合には、同じ個体が同じ状態変化を繰り返し被ることも考えられる。そのような場合には、使役的状态変化動詞の名詞化の複数形でも、属格を Theme として解釈することが可能である。例えば、ローマという都市は、歴史上、実際に何度も破壊され、再建されている。そのため (285) の名詞化は、「ローマが破壊されること」という意味で解釈することができる。

- (285) **Die Zerstörungen Roms** geschahen **mehrmals** in der
 the distruction.PL.NOM Rom.GEN happen.3PL.PST several_times in the
Geschichte. (Ehrich 2002b: 34)
 history.DAT
 = [ローマが何かを破壊すること] は歴史上何度も起こった
 = [ローマが破壊されること] は歴史上何度も起こった

反復的な状況の同定を可能とするのは、反復される一連の状況に一貫して参与する個体である。使役的状态変化の場合、Theme は通常一度しか状況に参加しないので、状況の同定を可能とする項とはならない。一方、動作主は、反復される一連の状況を同定する項となる。例えば、*Erschießungen Hugos* では、フーゴが動作主として一貫して参与する「フーゴが y_1 を撃ち仕留める状況」、「フーゴが y_2 を撃ち仕留める状況」、「フーゴが y_3 を撃ち仕留める状況」という反復的状況が動作主を通じて同定される (cf. (286))。

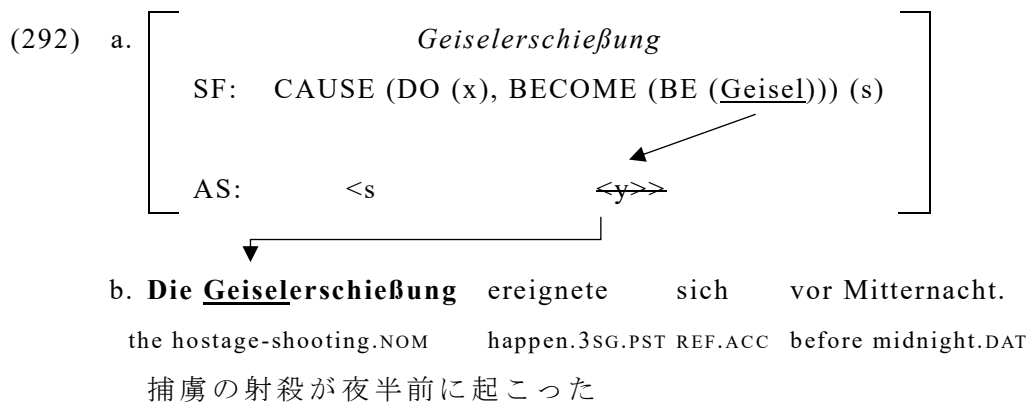
- | | | | |
|-------|----|--|--|
| (286) | a. | CAUSE (DO (Hugo), BECOME (BE (y_1)))) (s ₁) | } <i>die Erschießungen</i>
<i>Hugos</i> |
| | b. | CAUSE (DO (Hugo), BECOME (BE (y_2)))) (s ₂) | |
| | c. | CAUSE (DO (Hugo), BECOME (BE (y_3)))) (s ₃) | |
| | d. | ⋮ | |

一度状態変化した個体が再び元の状態に復元される場合には、Theme が反復された一連の状況に一貫して参与する個体であることがあり得る。そのような場合、Theme が状況の同定を可能とする項として構造項となる。そのため、*Zerstörungen Roms* は「ローマが破壊されること」という意味でも解釈されるのである。

しかし、(288) の主語的な属格は、(291) に示すように、1 音節や 2 音節の無冠詞の固有名詞によって置き換えることができない。したがって、この属格は Rapp (2001) の分析に反し、属格項ではなく、属格付加語である。

(291) ***Die Geislerschießung Peters** ereignete sich vor
 the hostage-shooting.NOM Peter.GEN happen.3SG.PST REF.ACC before
 Mitternacht.
 midnight.DAT

つまり、使役的状态変化動詞の名詞化では、名詞化複合語として Theme が N1 となると、構造項は項構造から失われ、種族名詞と同じような 1 価述語となると考えられる。



そもそも、(一回的な) 使役的状态変化という状況の同定を可能とする項が Theme であり、動作主ではないということは、名詞化複合語だからといって変わるわけではない。したがって、Theme が N1 となった名詞化複合語にはすでに指示対象の同定に必要な情報がそろっており、冠詞を付すだけで指示が可能となると考えられる。名詞化の項構造には「状況の同定を可能とする項」が構造項として記録されるのだとすれば、すでに指示対象を同定可能な状態にある名詞化複合語の項構造に新しく構造項を組み入れる後継効果なる仕組みは機能的に無駄であり、そのような仕組みがあるとは考え難い。

7.3.2. 活動動詞の名詞化

活動動詞が表す状況（活動）には、動作主のみ、または動作主と被動者のふたつの個体項が参与する。動詞では、動作主は主格、被動者は対格の項として実現する。

(293) a. $\exists s$ [DO (x) (s)]

Hans_x arbeitet.

Hans.NOM work.3SG.PRS

ハンスが_x 働いている

b. $\exists s$ [DO (x, y) (s)]

Peter_x unterstützt Maria_y.

Peter.NOM support.3SG.PRS Mary.ACC

ペーターが_x マリアを_y 支える

活動動詞の名詞化では、(294) のように、動作主も被動者も後置属格として実現し得る。また、(294) の後置属格はどれも 2 音節の無冠詞固有名詞であることから、これらの属格は属格項であると考えられる。

(294) a. **Die Arbeit Biskys** hat erst begonnen.

the work.NOM Bisky.GEN PRF.3SG.PRS just begin.PTCP

(DWDS: Berliner Zeitung, 31.01.2004)

ビスキーの仕事はようやく始まった

b. Er wolle **die Unterstützung Ryans** gar nicht, [...]

he.NOM want.3SG.SBJ1 the support.ACC Ryan.GEN at_all not,

sagte Trump.

(DWDS: Die Zeit, 12.10.2016)

say.3SG.PST Trump.NOM

ライアン下院議員に支援を受けることは全く望んでいないとトランプ氏は述べた

c. **Die Unterstützung Saddams** ist längst als geopolitischer

the support.NOM Saddam.GEN PRF.3SG.PRS longst as geopolitical

Fehltritt verbucht worden. (DWDS: Berliner Zeitung, 20.12.2002)

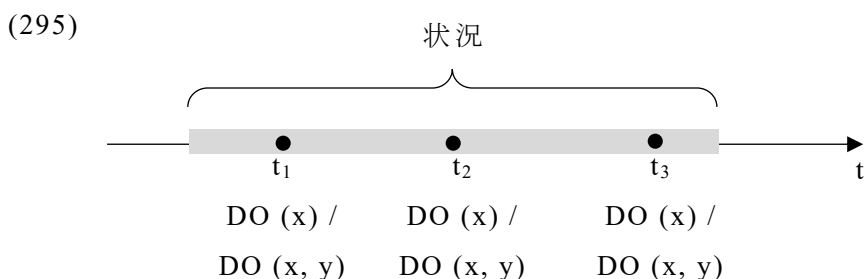
misstep.NOM record.PTCP PASS.PTCP

サダムを支援したことはとっくに地政学的失政だったとされている

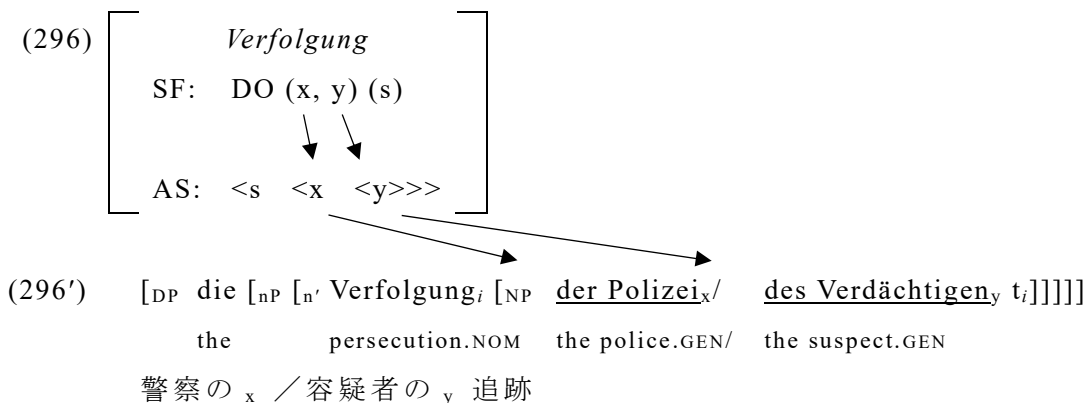
名詞化の項構造に構造項として記録されるのが「状況の同定を可能とする項」だとすれば、このデータは、活動という状況が動作主によっても被動者によっても同定可能であるということだと解釈できる。

活動という状況には、使役的狀態変化における状態変化の時点のような、状況に対してユニークな時間点は存在しない。というのも、動作主を x, 被動者

を y と置けば，活動という状況では，状況を通じて，どの時点 ($t_1, t_2, t_3 \dots t_n$) を取り出しても，DO (x) または DO (x, y) という同じ関係が当てはまるからである。



活動という状況の同定は，この状況の一部始終を通じて，一貫して状況に参加する項によって可能となる。活動では，状況のどの時点についても DO (x) ないし DO (x, y) という関係が当てはまることから，この関係を成り立たせる x ないし y の項は，どちらも一部始終を通じて状況に参加する項であり得る。そのため，x と y はどちらも状況の同定を可能とする項であり，どちらも構造型となるのである。



結果として，活動動詞の名詞化では，文脈に応じて，属格項が動作主としても被動者としても解釈される。例えば，(297a) のように被動者が文脈から明らかな場合，属格項は動作主として解釈される。反対に，(297b) のように動作主が文脈から明らかな場合，属格項は被動者としての解釈が自然となる。

(297) a. Um **der Verfolgung** **der Behörden** zu entgehen,
 in_order the persecution.DAT the authority.PL.GEN to escape.INF
 löste sich Kadek inzwischen auf
 dissolve.3SG.PST REF.ACC Kadek.NOM in_the_meantime PTCL

(DWDS: Berliner Zeitung, 29.05.2004)

当局の追跡を逃れるため、クルディスタン自由民主会議はやがて解散した

b. Die Polizisten nahmen **die Verfolgung des Sportwagens**
 the plice_officer.PL.NOM begin.3PL.PST the persecution.ACC the sports_car.GEN
 auf (DWDS: Berliner Zeitung, 25.02.1998)
 PTCL

警察官たちはスポーツカーの追跡を開始した

7.3.3. 使役的所有変化動詞の名詞化

使役的所有変化動詞が表す状況（使役的所有変化）には、動作主、所有者、所有物という3つの個体項が参与する。そのため、*geben*「与える」に代表される使役的所有変化動詞は3項動詞である。この3項は、動詞ではそれぞれ、動作主が主格、所有者が与格、所有物が対格の形で具現化する。

(298) $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)]
Paul_x hat Anna_y das Buch_z geschenkt.
 Paul.NOM PRF.3SG.PRS Anna.DAT the book.ACC give.PTCP
 パウルは_x アンナに_y 本を_z 贈った

使役的所有変化動詞の名詞化では、上述の3項のうち、所有物のみが後置属格として実現できる。例えば、所有物は普通、物であって、「ペーター」のような人の項は所有物として一般的でないにも関わらず、(299)の名詞化は「ペーターを引き渡すこと」という意味でのみ解釈される。現実の状況としては「ペーターが誰かに何かを引き渡すこと」や「誰かがペーターに何かを引き渡すこと」という状況の方がより普通であるにもかかわらず、(299)の名詞化はそのような意味では解釈されない。Peterは2音節の固有名詞であるから、この属格は属格項である。

(299) **Die Übergabe Peters erfolgte termingemäß.**

the handover.NOM Peter.GEN take_place.3SG.PST on_schedule

≠ [ペーターが誰かに何かを引き渡すこと] が期日通り行われた

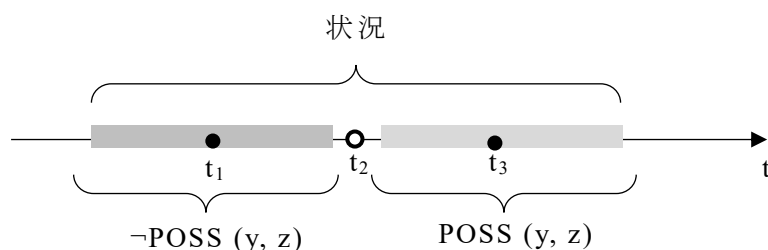
≠ [誰かがペーターに何かを引き渡すこと] が期日通り行われた

= [誰かが誰かにペーターを引き渡すこと] が期日通り行われた

名詞化において「状況の同定を可能とする項」が構造項となるとすれば、このデータは、使役的所有変化という状況の同定を可能とする項が所有物であり、動作主や所有者ではないということを示していると解釈することができる。

使役的所有変化という状況が所有物によって同定可能となることは、状況に対してユニークな時間点が所有物によって特定されるということを通じて説明することができる。使役的所有変化という状況では、時点 t_2 を境界として、所有者と所有物の関係が変化する。例えば、「人に本を贈る」という状況では、 t_2 よりも前の時点 t_1 では、「本を贈られる人」と「贈られる本」の間に所有関係は成り立たないが、 t_2 よりも後の時点 t_3 では、両者の間に所有関係が成り立つ。所有者を y 、所有物を z と置いて一般化すれば、 t_2 を境界として、 t_2 より前の時点 t_1 には $\neg\text{POSS}(y, z)$ という関係が当てはまり、 t_2 より後の時点 t_3 には $\text{POSS}(y, z)$ という関係が当てはまるという形で抽象化することができる。

(300)



この時、 t_2 は状況に対してユニークな時間点で、ある一回の使役的所有変化に t_2 はただ一度だけ存在する。したがって、 t_2 が特定されれば、状況も自ずと同定される。また、使役的状态変化の場合、 t_2 は、所有物に依存する形で定まる。

「人に本を贈る」というケースを考えると、「贈られる本」が特定されれば、 t_2 は、その本の所有者が変化する時点として特定することができるのである。したがって、使役的所有変化では、所有物を特定することで状況に対してユニークな時点 t_2 が特定され、 t_2 が特定されることで、状況そのものも同定することができるのである。一方、動作主や所有者の特定は、使役的所有変化という状況の同定には結びつかない。例えば、「パウルがアンナに日々いろいろな物を贈っている」というケースを考えれば、動作主と所有者が特定されていたとして

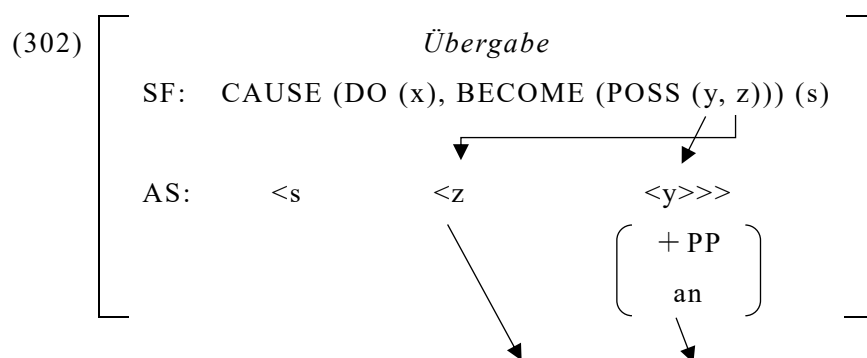
も、どの贈り物についての状況なのかが特定されなければ、状況は同定できない。そのため、使役的所有変化動詞の名詞化では、所有物だけが状況の同定を可能とする項として構造項となるのである。

所有者は、状況の同定を可能とする項ではないことから構造項とはならないものの、語彙的な指定を受けて、an の前置詞項として名詞化の項構造に記録される。5.2.2 節で観察したように、この前置詞項は使役的所有変化動詞の名詞化に一般的に認められる。そのため、所有者を表す an の前置詞項については、(301) の規則を立てて一般化することができる。

(301) 所有者の語彙的实现：

CAUSE 関数内部の BECOME 関数に埋め込まれた所有者は、an の前置詞項として名詞化の項構造に記録される

結果として、使役的所有変化動詞の名詞化では、所有物のみが属格項として実現し、所有者が an の前置詞項として語彙的に表される。



(302') [DP die [_{NP} [_{N'} Übergabe_i [_{NP} Peters_z [_{N'} t_i an die Polizei_y]]]]]]

the handover.NOM Peter.GEN to the police.ACC

ペーターの_z 警察への_y 引き渡し

7.3.4. 所有動詞の名詞化

ドイツ語の所有動詞には、所有者を主格、所有物を対格で表す haben 型動詞と、所有者を与格、所有物を主格で表す gehören 型動詞がある。

(303) ∃s [POSS (x, y) (s)]

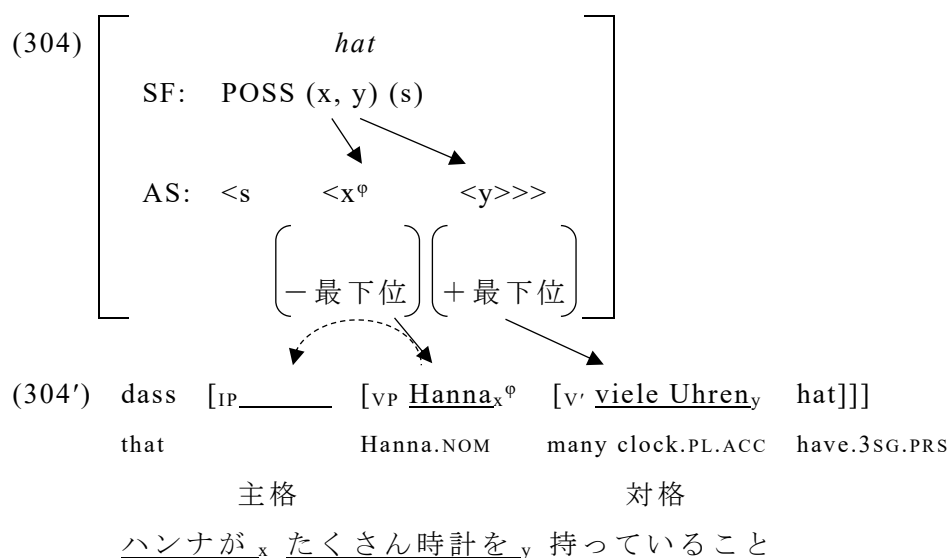
- a. Hanna_x hat viele Uhren_y (haben 型動詞)
- Hanna.NOM have.3SG.PRS many clock.3PL.ACC
- ハンナはたくさん時計を持っている

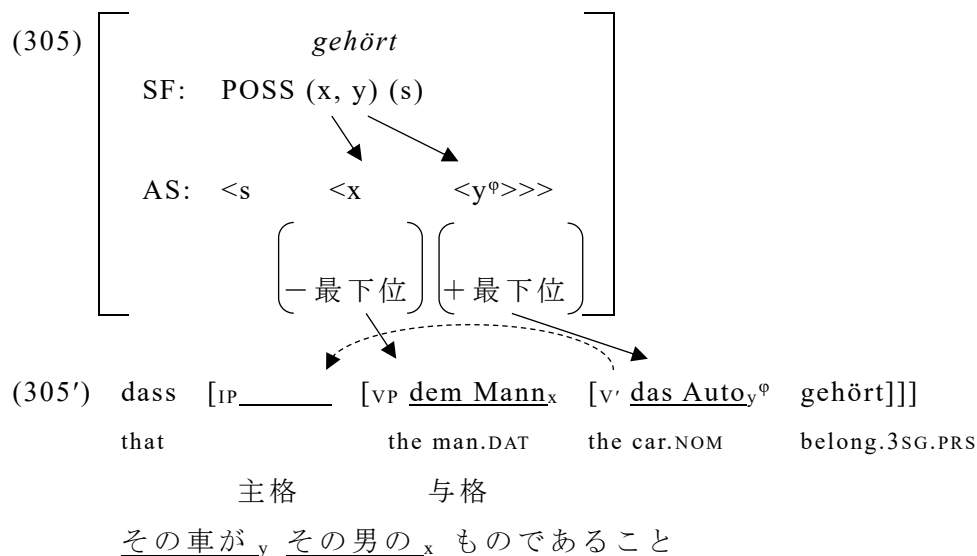
b. Das Auto_y gehört mir_x (gehören 型動詞)

the car.NOM belong.3SG.PRS me.DAT

その車は私のだ

gehören 型動詞を巡っては、高橋 (2010) のように POSS とは異なる意味形式をもった動詞として分析する立場もあるが、藤縄 (2010, 2013) では、haben 型動詞と gehören 型動詞が概念的な意味形式においてはあくまで同じ意味形式を有しているとする分析が提案されている。haben 型動詞と gehören 型動詞には、haben 型動詞では所有者が主題となり、gehören 型動詞では所有物が主題となるという情報構造の違いが認められることから、両タイプの所有動詞に同じ意味形式を与えることは、両動詞の構文的な違いを意味形式とは別の要因に帰すことにつながる点でも都合がよい。藤縄 (2013) は両タイプの所有動詞の相違を、それぞれの形態的な屈折形が法と時制の解釈を可視化するためにどの項の φ 素性を参照するのかという性質の違いととらえている。すなわち、haben 型動詞では、例えば *hat* という屈折形の法と時制の解釈が VP 指定部の φ 素性に鑑み行われるのに対し、gehören 型動詞では、例えば *gehört* という屈折形の法と時制が VP 補部の φ 素性に鑑みて解釈されるということである。7.2.1 節で述べたように、法と時制の解釈のために φ 素性を参照される項は主格で示されるので、*hat* では所有者、*gehört* では所有物が、IP 指定部へと移動するか、あるいは IP 指定部を埋める虚辞によって束縛されることで (cf. Grewendorf 1988: 157) 可視的ないし不可視的に IP 指定部へと繰り上げられ、主格を付与される (cf. 4.3.3 節)。主格とならないもう一方の項は基底の位置にとどまり、*hat* では所有物に対格が、*gehört* では所有者に与格が与えられる。





haben 型動詞である *besitzen*「所有する」の名詞化 *Besitz*「所有」では, (306ab) に示すように,所有者も所有物も後置属格としての実現が認められる。この時,どちらの解釈の属格にも,2音節以下の無冠詞固有名詞が認められることから,この属格は属格項であると考えられる。

- (306) a. Siemens habe selbst darum gebeten, daß die "Privatstraße öffentlichen Verkehrs" **in den Besitz Berlins** übergehe. (DWDS: Berliner Zeitung, 05.09.1995)

Siemens.NOM have.3SG.SBJ1 even for_that ask.PTCP that the "private_road.NOM public transport.GEN" into the possession.ACC Berlin.GEN pass.3SG.SBJ1

ジーメンス自身, その「自由な通行を認めている私道」がベルリン市のものとなることを望んでいた

- b. Zwischen beiden hat sich eine Entwicklung vollzogen, die durch Kulturkatastrophen gestört, aber nie unterbrochen worden ist, die beide verbindet und Hofmannsthal **den Besitz Homers** ermöglicht. (DWDS: Die Zeit, 09.12.1948)

between the both.PL.DAT PRF.3SG.PRS REF.ACC a development.NOM take_place.PTCP which.NOM by cultural_disaster.PL.ACC disturb.PTCP but never interrupt.PTCP PASS.PTCP

PRF.3SG.PRS which.NOM both.ACC bind.3SG.PRS and Hofmannsthal.ACC the
possession.ACC Homer.GEN allow.3SG.PRS

ホメーロスからホフマンスタールまでの間には，文化危機により阻ま
れながらも決して途絶えず，両者を結び付け，ホフマンスタールがホ
メーロス（の詩）を所有することを可能とする文化の発展があった

(306') a. Berlin besitzt die Straße.

Berlin.NOM possess.3SG.PRS the street.ACC

ベルリン市がその道路を所有している

b. Hofmanstahl besaß Homor.

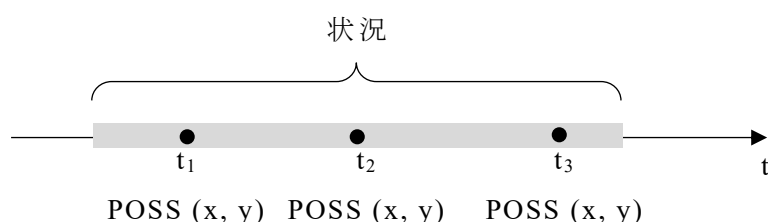
Hoffmanstahl.NOM possess.3SG.PST Homor.ACC

ホフマンスタールはホメーロス（の詩）を所有していた

名詞化の項構造では「状況の同定を可能とする項」が構造項となるのだとす
ると，このデータは，所有動詞が表す状況（所有）が，所有者によっても所有物
によっても同定できるということを表しているものと解釈できる。

所有という状況には，活動と同じように，状況に対してユニークな時点は存
在せず，状況の始めから終わりまでどの時点 ($t_1, t_2, t_3 \dots t_n$) にも同じ関係
(POSS (x, y)) が当てはまる。

(307)



したがって，所有という状況の同定を可能とするのは，この状況の一部始終を
通じて状況に参加する項，すなわち所有者あるいは所有物の両方ということに
なる。そのため，haben 型所有動詞の名詞化では，所有者も所有物も，構造項と
なるのである。

(308) $\left[\begin{array}{c} \textit{Besitz} \\ \text{SF: POSS (x, y) (s)} \\ \downarrow \quad \downarrow \\ \text{AS: } \langle s \ \langle x \ \langle y \rangle \rangle \rangle \end{array} \right]$

興味深いのは、所有動詞のもう一方のグループである *gehören* 型動詞の名詞化である。(309) の例から、*mangeln*「欠けている」を名詞化した *Mangel* において、所有者が属格項として実現されることがわかる。²⁶ *mangeln* は所有者を与格項で表す動詞であるから、(309) のデータは、属格項としての実現の可否が、動詞における項の形式により決まるわけではないことを示している。

(309) **Der Mangel Peters** wurde von allen kritisiert.
 the lack.NOM Peter.GEN PASS.3SG.PST by all.PL.DAT criticize.PTCP
 ペーターに（何か）欠けていることが皆から批判された

(309') Peter mangelt der Ernst.
 Peter.DAT lack.3SG.PRS the seriousness.NOM
 ペーターには真面目さが欠けている

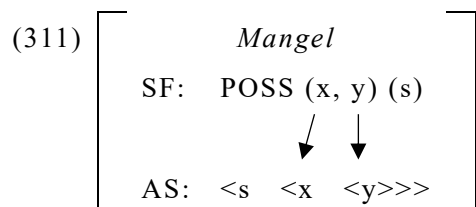
一方、所有物についても、(310) のような後置属格の例が認められる。*mangeln* では固有名詞で表されるような人や地名が所有物とならないため、この属格が属格項なのか属格付加語なのかについては断定できないものの、仮にこれが属格項であるとすれば、*gehören* 型動詞の名詞化でも *haben* 型動詞の名詞化と同じように、所有者と所有物がともに属格項として認められるということになる。

(310) **Der Mangel der Infrastruktur** ist eine schwere Behinderung
 the lack.NOM the infrastructure.GEN be.3SG.PRS a serious impediment.NOM
 für anhaltendes Wachstum. (DWDS: Berliner Zeitung, 26.11.1996)
 to continued growth.ACC
 インフラの不足が成長の妨げとなっている

名詞化の項構造において「状況の同定を可能とする項」のみが構造項となるとすれば、*gehören* 型動詞と *haben* 型動詞の意味形式があくまで共通しているという想定が正しい限り、*gehören* 型動詞の名詞化でも所有者と所有物がともに属格項として認められるのは当然と言える。というのも、所有という状況を表している限り、所有者と所有物がどちらも状況の同定を可能とする項であることに変わりはないからである。そのため、所有動詞の名詞化では、*haben* 型動詞

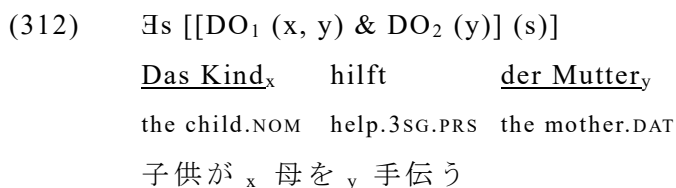
²⁶ *gehören* 型動詞の名詞化は数が少なく、管見の限り、*Mangel* が唯一の例である。

の名詞化であれ、gehören 型動詞の名詞化であれ、所有者と所有物がともに構造項として項構造に記録されるのである。



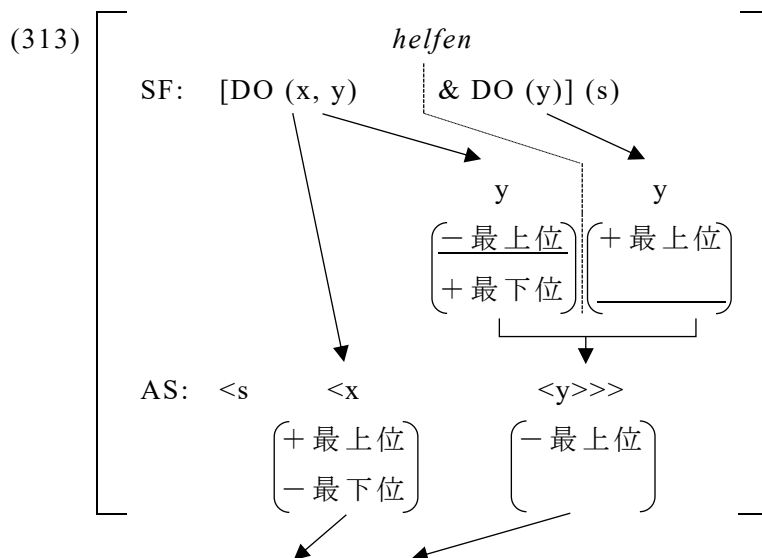
7.3.5. 与格支配の活動動詞の名詞化

4.3.4 節で述べたように、*helfen* など与格支配の活動動詞は、与格項が単なる被動者ではなく、それ自体も何かを行う動作主的な存在であるという洞察 (cf. Blume 2000) を反映して、DO 関数をふたつ並列した (312) のような意味形式で分析することができる (cf. 藤縄 2010)。



並列されたふたつの DO を区別するため、主語となる x をとる方の DO を DO₁、もう一方の DO を DO₂ と呼ぶことにする。また、意味役割について、一意に動作主である x との区別のため、DO₁ において被動者、DO₂ において動作主である y を共動作主 (Co-Agens) と呼ぶことにする。

与格支配の活動動詞では、(312) の意味形式に含まれる個体項の x と y が構造項となる。その際、x は [+最上位, -最下位] という一意の評価とともに項構造に記録される一方、y は、DO₁ の関係において [-最上位, +最下位]、DO₂ の関係において [+最上位] という評価を受けることから、この評価が [-最上位] に統合されて、中位項として項構造に記録される (cf. 4.3.4 節)。結果として、x は IP 指定部へと投射されて主格を受け取る一方、y は中位項として VP 指定部へと投射され、与格が与えられる。



(313') dass [IP er_x [VP mir_y half]]
 that he.NOM me.DAT help.3SG.PST
 主格 与格
彼が_x 私を_y 手伝ったこと

与格支配の活動動詞の名詞化では、動作主にのみ後置属格としての実現が認められ、共動作主は後置属格としては実現しない。例えば、*die Hilfe Peters* は「ペーターが誰かを手伝えること」という意味でのみ解釈され、「誰かがペーターを手伝えること」という意味とはならない。2音節の無冠詞固有名詞であるから、この属格は属格項である。

(314) **Die Hilfe Peters wurde nicht benötigt.**

the help.NOM Peter.GEN PASS.3SG.PST not need.PTCP

= [ペーターが誰かを手伝えること] は必要とされていなかった

≠ [誰かがペーターを手伝えること] は必要とされていなかった

名詞化において「状況の同定を可能とする項」のみが構造項となるのだとすると、このデータは、*helfen* のような動詞が表す状況（共動作活動）の同定が、動作主によって可能となるのに対し、共動作主によっては可能とならないということの意味しているものと解釈できる。

動作主が共動作活動という状況の同定を可能にする項であることは、動作主が、通常の活動動詞の名詞化において状況の同定を可能とする項であるのと同じ理由によって説明される。状況に対してユニークな時点を持たない共動作活

動という状況では、一部始終を通じて状況に参加する項によって状況の同定が可能となることから、動作主による状況の同定が可能である。

問題は、共動作主による状況の同定が可能でない理由である。始めから終わりまで一貫して状況に参加するという性質は、動作主と同じく、共動作主にも当てはまるものである。したがって、一見すると、共動作主が属格項として実現できないことは、終始状況に参加する項により状況の同定が可能となることと矛盾するようにも思われる。

共動作活動という状況が共動作主によって同定できない理由は、動作主と状況の関係が DO₁ という関係のみによって定まるのに対し、共動作主と状況の関係が DO₁ という関係と DO₂ という関係のふたつの関係を通じて初めて定まるということと関係している。

(315) 共動作活動における動作主／共動作主と状況の関係

動作主と状況の関係： DO₁ (x, y) (s)

共動作主と状況の関係： DO₁ (x, y) (s) & DO₂ (y) (s)

共動作活動という状況では、動作主を特定すれば、DO₁ という関係に鑑みて状況の同定が可能となる。一方、共動作主をもとに状況を同定するには、DO₁ という関係と DO₂ という関係のふたつの関係を参照する必要があるのである。

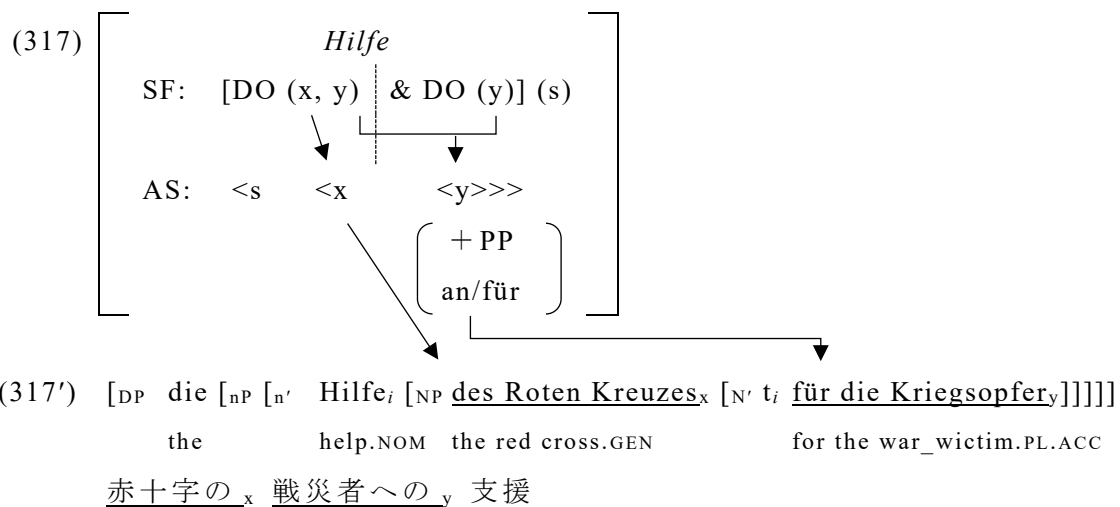
ところが、DO₂ という関係の意味的な内実は、*helfen* などの動詞それ自体としては完全には与えられない。この関係は、第1項を動作主とする「活動」という関係であることこそ確かであるものの、具体的にどのような活動なのかは、文脈によって様々である。

(316) Das Kind hilft der Mutter **beim Kochen/ beim Waschen/ beim Aufräumen.**

the child.NOM help.3SG.PRS the mother.DAT at_the cooking.DAT/ at_the washing.DAT/
at_the cleaning.DAT

その子供は母が 料理するのを／洗濯するのを／掃除するのを 手伝う

そのため DO₂ は、状況の同定のために参照する関係としては心もとなく、この関係に鑑みる必要のある共動作主は、状況を同定する項として適さないのである。結果として、*helfen* などの動詞の名詞化では、動作主のみが構造項として項構造に記録される。共動作主は語彙的な指定を受けて前置詞項となる。



7.3.6. 効果動詞の名詞化

効果動詞 (Wirkungsverben) とは, Rapp (1997a:68) によって導入された動詞クラスで, (318) に挙げるような動詞が該当する。

- (318) 効果動詞 :
gefährden 「危険にさらす」, *verschmutzen* 「汚染する」, *schonen* 「保護する」, *behindern* 「妨害する」, *strapazieren* 「傷める」 etc.

これらの動詞は, ある種の状態と, その状態を惹起する効果をもった状況の同時的・連鎖的な状況を表すという特徴を持っている。例えば (319) の例は, 「交通が危険な状態にある」という状態と, 「逆走ドライバーがいる」という状況が同時的あるいは連鎖的に生じていることを表している。

- (319) Der Geisterfahrer gefährdet den Verkehr.
 the wrong-way-driver.NOM endanger.3SG.PRS the traffic.ACC
 逆走ドライバーが交通を危険にさらしている

効果動詞が表す状態を惹起する状況を刺激 (Stimulus) と呼ぶ (Rapp 1997: 2001)。刺激は, その状況に典型的に参与する項を通じて, *mit* や *durch* の前置詞句として表すことができる。例えば, (320) では, 「新しいシャンプー」が刺激である。この場合, 「シャンプー」は典型的に「洗髪」という状況に参与する存在であることから, 「洗髪」という状況が刺激であることが, 典型的関係 (cf. Fanselow 1981: 192–202) を通じて読み取られる。

(320) a. Er strapazierte die Haare mit dem neuen Shampoo.

he.NOM strain.3SG.PST the hair.PL.ACC with the new shampoo.DAT

b. Er strapazierte die Haare durch das neue Shampoo.

he.NOM strain.3SG.PST the hair.PL.ACC by the new shampoo.ACC

彼は新しいシャンプーで髪を傷めた

効果動詞における刺激と状態の関係は、一見して、使役動詞における原因と結果に似ている。そのため、効果動詞には、因果関係を表す CAUSE 関数を用いた語彙分解が可能であるようにも思われる。しかし、効果動詞と使役動詞には、使役動詞が通常 telic であるのに対し、効果動詞は基本的に atelic であるという違いがある。

(321) 効果動詞

Der Geisterfahrer gefährdete den Verkehr *in 10 Minuten/

the wrong-way-driver.NOM endanger.3SG.PST the traffic.ACC in 10 minut.PL.DAT/

10 Minuten lang.

(Rapp 2001: 252)

10 minut.PL.ACC long

逆走ドライバーが交通を *10 分で / 10 分間 危険にさらした

(322) 使役動詞

Sie vollendete das Bild in 10 Minuten/ *10 Minuten

she.NOM complete.3SG.PST the picture.ACC in 10 minut.PL.DAT/ 10 minut.PL.ACC

lang.

long

彼女はその絵を 10 分で / *10 分間 完成させた

BECOME 関数を含む意味形式によって語彙分解される動詞は一般的な条件下において telic となるので、効果動詞が基本的に atelic であるという事実は、これらの動詞には、BECOME を含まない意味形式による語彙分解が適当であるということを示唆する。したがって、効果動詞の意味形式を CAUSE によって語彙分解するなら、CAUSE の第 2 項の変域に BECOME 以外の状況を認めることになる。しかし、効果動詞のような周辺的な動詞クラスのために、「使役動詞は変化を含む意味を持つ」という他の多くの場合に妥当する想定を崩すことは好ましくない。

そもそも、Rapp (1997) がこれらの動詞を *Wirkungsverben* 「効果動詞」と名付けた背景には、これらの動詞が表す刺激と状態の関係が「因果関係」と呼ぶには緩やかなものであるという認識があるものと思われる。そこで、筆者はこの認識を意味形式に反映し、効果動詞を (323) のように状態と活動の並列として語彙分解することを提案する。

(323) 効果動詞

$\exists s$ [[BE (z) & DO (x)] (s)]

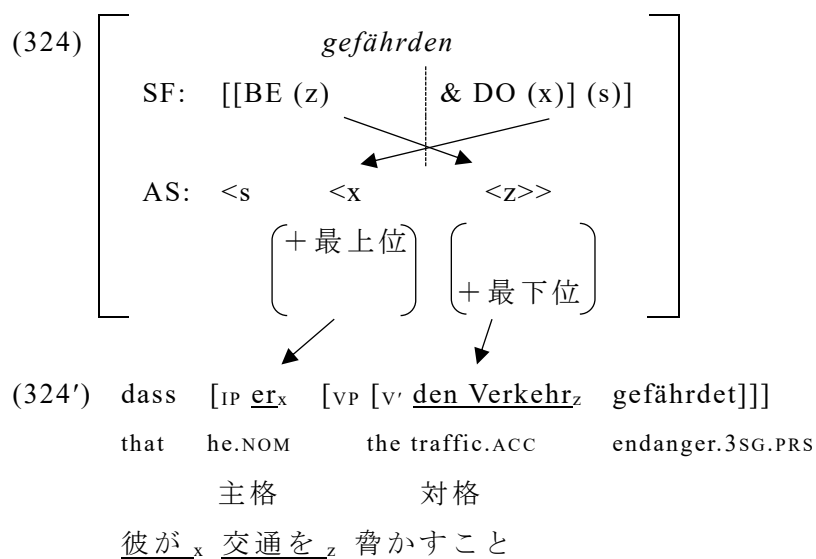
Er_x gefährdete den Verkehr_z

he.NOM endanger.3SG.PST the traffic.ACC

彼は_x 交通を_z 危険にさらしている

(323) において、BE (z) は各動詞が表す状態を抽象化した述語で、*gefährden* の場合、「z が危険だ」という状態を表す。並列された DO 関数は刺激の状況に対応し、x は、その状況の動作主に当たる。一般に、並列の演算子 & は対称的で、P & Q も Q & P も等価であるとされる (& を非対称的な演算子として分析する Wunderlich (2000) に対する藤縄 (2010) の反論も参照)。したがって、(323) は BE & DO としても DO & BE としても論理的に等価であるが、ここでは効果動詞の意味の構成要素として状態が刺激よりも本質的であるという認識 (後述) を反映して、BE を & の左に置いている。

効果動詞に (323) の意味形式を想定すると、z には [+最下位] の評価が与えられる一方、x には [+最上位] の評価が与えられる。すると、x は最上位項なので IP 指定部に投射されて主格の付与を受け、z は最下位項なので VP 補部に投射されて対格の付与を受けることになる。



効果動詞は、刺激の状況における動作主だけでなく、その状況に典型的に参与する項も主語とすることがある。例えば、(325) では、対応する (325') において *mit* の前置詞句で表されている「新しいシャンプー」が、主語となっている。

(325) **Das neue Shampoo** strapazierte die Haare.
 the new shampoo.NOM strain.3SG.PST the hair.PL.ACC
 新しいシャンプーが髪を痛めた

(325') Er strapazierte die Haare **mit dem neuen Shampoo**.
 he.NOM strain.3SG.PST the hair.PL.ACC with the new shampoo.DAT
 彼は新しいシャンプーで髪を傷めた

その場合、意味形式の表示では、(326) のように動作主が所与でない項として存在量化されていると考えられる。

(326) $\exists s \exists x [[\text{BE } (z) \quad \text{\& DO } (x, y)] \text{ (s)}]$
Das neue Shampoo_y strapazierte die Haare_z
 the new shampoo.NOM strain.3SG.PST the hair.PL.ACC
新しいシャンプーが_y 髪を_z 傷めた

(326) の意味形式では、*z* は [+最下位] の最下位項であるが、*y* の評価については検討が必要である。*y* は、[±最上位] の素性に関しては、*y* よりも上位

(328) **Die Gefährdung Peters** wurde **bewiesen.**

the endangering.NOM Peter.GEN PASS.3SG.PST prove.PTCP

≠ [ペーターが何かを危険にさらしていること] が証明された

= [何かはペーターを危険にさらしていること] が証明された

(329) **Die Gefährdung des Alkohols** wurde **bewiesen.**

the endangering.NOM the alcohol.GEN PASS.3SG.PST prove.PTCP

≠ [アルコールが何かを危険にさらしていること] が証明された

= [何かはアルコールを危険にさらしていること] が証明された

名詞化において「状況の同定を可能とする項」が構造項になるのだとすると、このデータは、効果動詞によって表される状況が、Theme によっては同定できるのに対し、刺激の動作主や、刺激に典型的に参与する項によっては同定できないということを表していると解釈することができる。

状態と刺激の並列として語彙分解される効果動詞の意味形式において、状態は動詞自体の意味として与えられるのに対し、刺激の意味的な内実は効果動詞自体の意味としては与えられない。言い換えると、効果動詞の意味を構成する要素として、状態は本質的であるのに対し、刺激は本質的ではない。このことは、効果動詞の命令文の解釈に顕著に表れる。効果動詞の命令文は、その動詞が表す状態を惹起するような任意の状況の発生を願う、ないし禁止する発話となる。そのため、効果動詞の命令文では、具体的に何をすることで応じればよいのかが明確とならない。例えば、*Gefährde deine Mitschüler nicht!*「学友を危険にさらすな」と言われた場合、具体的に何を行ってはならないのかは、明示的には示されない。

(330) 効果動詞の命令文

Gefährde **deine Mitschüler** **nicht!**

endanger.2SG.IMP your classmate.PL.ACC not

学友を危険にさらすな (=学友を危険にさらすことになるようなことをするな)

一方、通常の動詞の命令文 (cf. (331)) は、動詞の表す状況それ自体の生起を願う、あるいは禁止する文となり、何をすることで応じればよいのかは明確である。

(331) 通常の動詞の命令文

a. Schneide das Brot!

cut.2SG.IMP the bread.ACC

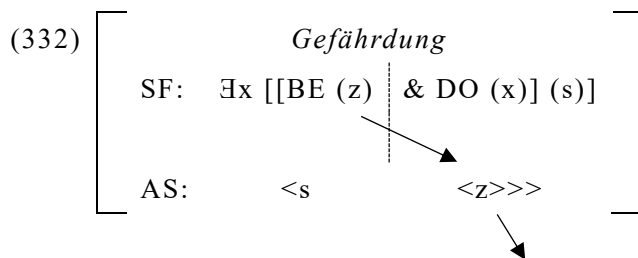
パンを切れ (≠パンを切ることになるようなことをせよ)

b. Lauf!

run.2SG.IMP

走れ (≠走るようになるようなことをせよ)

そのため、効果動詞によって表される状況では、Theme と状況の関係は状態を通じて定まるのに対し、刺激に参与する動作主や他の項と状況の関係は定まらない。結果として、効果動詞の名詞化では Theme のみが状況の同定を可能とする項として構造項となるのである。



(332') [DP die [_{nP} [_{n'} Gefährdung [_{NP} Peters_z t]]]]
 the endangering.NOM Peter.GEN
ペーターの_z 危機

7.4. 前置属格と所有冠詞の項的解釈

7.1.2 節と 7.1.3 節で述べたように、ドイツ語の名詞句において、構造項が現れる統語的位置は、nP 配下の NP 指定部ただ一つである。この位置は nP 主要部のすぐ右に隣接し、ここに置かれた構造項は、後置属格となる。

(333) 名詞句における構造項の統語的位置:

[DP [D' D [_{nP} [_{n'} n [_{NP} GEN [_{N'} N ...]]]]]

したがって、前置属格や所有冠詞といった成分は、構造項の統語的具現形ではない。しかし、前置属格や所有冠詞には、属格項としての後置属格と似通った解釈が認められる。例えば *Behandlung* では、(334) のように、後置属格として具現化した属格項に動作主としての解釈と被動者としての解釈が認められる

が、(335)/(336) に示すように、前置属格や所有冠詞にも、これと重なる解釈が認められる。

(334) **Die Behandlung Peters** dauert noch an.
the treatment.NOM Peter.GEN go_on.3SG.PST still PTCL
= [ペーターが誰かを治療すること] が続いている
= [誰かがペーターを治療すること] が続いている

(335) **Peters Behandlung** dauert noch an.
Peter.GEN treatment.NOM go_on.3SG.PSTstill PTCL
= [ペーターが誰かを治療すること] が続いている
= [誰かがペーターを治療すること] が続いている

(336) **Seine Behandlung** dauert noch an.
his treatment.NOM go_on.3SG.PSTstill PTCL
= [彼が誰かを治療すること] が続いている
= [誰かが彼を治療すること] が続いている

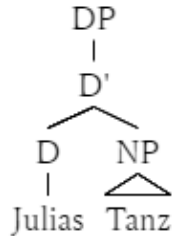
前置属格や所有冠詞が構造項の具現形ではないとすれば、これらの成分がどのようにして、構造項と似通った解釈を得るのかということが問題となる。そこで本節では、前置属格と所有冠詞の解釈の仕組みについて考察する。

7.4.1. 前置属格と所有冠詞の統語論

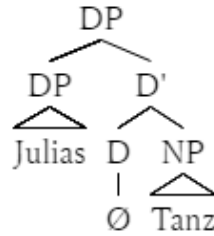
前置属格の統語論的な位置づけは、Abney (1987) による DP 仮説の提唱以来、ドイツ語の名詞句に関する統語論の議論において特に盛んに論じられてきた問題のひとつである。この問題を巡っては、大きく 2 つの立場が対立している。すなわち、前置属格を DP の主要部に位置づける Demske (2001) や Hartmann & Zimmermann (2002) の立場 (D⁰ 仮説) と、前置属格を DP の指定部に位置づける Sternefeld (2007) や Bücking (2012) の立場 (DP-Spec 仮説) である。例えば、(337) の名詞句は、D⁰ 仮説では (337'a) のように分析されるのに対し、DP-Spec 仮説では (337'b) のように分析される。また、DP-Spec 仮説では DP の主要部に発音されない決定詞 \emptyset が仮定される。

(337) Julias Tanz
 Julia.GEN dance.NOM
 ユリアの踊り

(337') a.



b.



7.4.1.1. 前置属格の句としての性質

D⁰ 仮説と DP-Spec 仮説の対立は、(338) のような普通名詞の前置属格を容認するか否かという判断の相違に根差している。

- (338) a. [?]des Königs Krone (Demske 2001: 210)
 the king.GEN crown.NOM
 lit. 「王の冠」
- b. des Rätsels Lösung (Sternefeld 2007: 212)
 the puzzle.GEN solution.NOM
 パズルの解答

現代ドイツ語において、前置属格はもっぱら無冠詞の固有名詞に限られており、(338) のような普通名詞の前置属格は有標である。D⁰ 仮説をとる Demske (2001) や Hartmann & Zimmermann (2002) はこの有標性から、普通名詞の前置属格を「有標であり容認されない」と評価している。一方、DP-Spec 仮説をとる Sternefeld (2007) や Bücking (2012) は普通名詞の前置属格を「有標ながらも容認できる」と評価している。

生成文法の基本的な想定として、句は主要部には生起しないとされる。普通名詞の前置属格を不適格とみなす Demske (2001) や Hartmann & Zimmermann (2002) は、前置属格が DP の主要部を占めると想定することで、(338) に対する否定的な評価を「句は主要部に生起しない」ということの反映とみる。一方、Sternefeld (2007) や Bücking (2012) は、普通名詞の前置属格を有標ながらも可能とみるので、前置属格は句が生起しない主要部ではなく、句が生起できる指定部に位置づけられる。

D⁰ 仮説では普通名詞の前置属格を扱いようがないのに対し、DP-Spec 仮説には、普通名詞の前置属格の有標性を、他の理由によって説明する余地が残されている。この点で、DP-Spec 仮説は D⁰ 仮説よりも柔軟である。また、5.1.3 節でも述べたように、普通名詞による前置属格は、(339) のような実例を見つけることが難しくないことから、実情としても全く認められないというわけではなさそうである。

(339) a. **Des Japaners Reise** freilich endet [...] nicht erfolglos
 the Japanese.GEN trip.NOM of_course end.3SG.PRS not unsuccessfully
 (DWDS: Die Zeit 19.05.2015)

その日本人の出張はもちろん実りなくは終わらない。

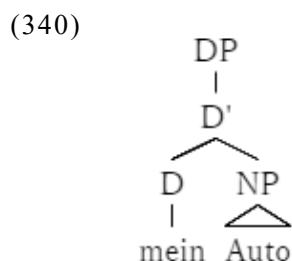
b. **Des Riesen Entnazifizierung** findet also nicht statt.
 the giant.GEN denazification.NOM occur.3SG.PRS so not PTCL
 (DWDS: Die Zeit 10.09.1965)

巨人像の脱ナチ化（ブレーメンのローラント像内の空洞にしまわれているとされるナチス時代の文書の取り出し）は行われない。

そのため、この論文では、DP-Spec 仮説を採用し、前置属格を DP の指定部に位置付ける。

7.4.1.2. 決定詞の範疇としての所有冠詞

前置属格の位置づけを巡って D⁰ 仮説と DP-Spec 仮説が対立しているのに対し、所有冠詞の統語論的な位置づけについては、(340) のように決定詞として DP の主要部を占めるという分析が定説的な見解となっている (cf. Demske 2001, Hartmann & Zimmermann 2002, Sternefeld 2007, Bücking 2012)。



所有冠詞が決定詞の範疇に属すとされる根拠は、第一に、所有冠詞が他の決定詞と相補的に分布すること (cf. (341)), 第二に、所有冠詞を付された名詞句

が定名詞句としてパラフレーズできるのに対し，不定名詞句としてはパラフレーズできないことから，所有冠詞に [+定] の決定詞としての機能が内在すると考えられること (cf. (342))，そして第三に，所有冠詞が他の決定詞と同様，形態論的な屈折形を通じた性・数・格の表示を行うこと (cf. (343)) の 3 点である。

(341) *ein mein Auto; *mein ein Auto; *das mein Auto; *mein das
 a my car.NOM; my a car.NOM; the my car.NOM; my the
 Auto
 car.NOM

(342) **Sein Buch** gefällt mir.
 his book.NOM please.3SG.PRS me.DAT
 彼の本が私は好きだ
 ≠ Ein Buch von ihm gefällt mir. 「ある彼の本が私は好きだ」
 = Das Buch von ihm gefällt mir. 「その彼の本が私は好きだ」

(343) a. mit **d-em** Auto b. mit **mein-em** Auto
 with the-N.SG.DAT car.M.SG.DAT with my-N.SG.DAT car.M.DAT
 その車で 私の車で

所有冠詞と前置属格の違いを示す重要な特徴が，この 3 点目の特徴である。所有冠詞と違い，前置属格は，付される名詞句の格とは関係なく，常に属格である。例えば，与格の名詞句に付される際，所有冠詞は (343b) のように与格の形になるのに対し，前置属格は (344) に示すように，あくまで属格の形をとる。

(344) a. mit **Peters** Auto
 with Peter.GEN car.DAT
 ペーターの車で

b. Am 29. April 1429 gelangte sie **mit des Königs Soldaten**
 on_the 29.DAT April 1429 arrive.3SG.PST she.NOM with the King.GEN soldier.PL.DAT
 an die Loire nahe Orléans. (DWDS: Die Zeit, 05.01.2012)
 to the Loire.ACC near Orléan.GEN
 1429 年 4 月 29 日に彼女は王の兵士たちとともにオルレアン近くのロワール川の岸に到着した

この事実は、所有冠詞が NP の性・数・格の情報を読みとることのできる位置にあるのに対し、前置属格は NP の性・数・格の情報を読みとることのできる位置にはないということを示していると考えることができる。

7.4.1.3. 決定詞 Ø

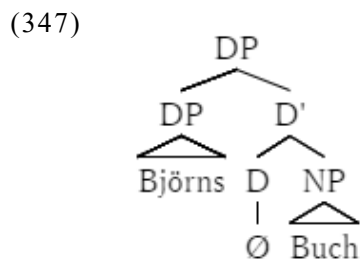
所有冠詞が決定詞の範疇に属すとされる 3 つの根拠のうち、他の決定詞との分布の相性・不定名詞句としてのパラフレーズの不可能性の 2 点に関しては、前置属格にも当てはまる特徴である。

- (345) *ein Peters Auto; *Peters ein Auto; *das Peters Auto;
 a Peter.GEN car.NOM; Peter.GEN a car.NOM; the Peter.GEN car.NOM;
 *Peters das Auto
 Peter.GEN the car.NOM

- (346) **Björns Buch** gefällt mir. (Bücking 2012: 65)
 Björn.GEN book.NOM please.3SG.PRS me.DAT
 ビョルンの本が私は好きだ
 ≠ Ein Buch von Björn gefällt mir. 「あるビョルンの本が私は好きだ」
 = Das Buch von Björn gefällt mir. 「そのビョルンの本が私は好きだ」

したがって、前置属格を DP 指定部に位置づける DP-Spec 仮説では、この 2 点について、所有冠詞とは異なる説明が必要となる。²⁷

Sternefeld (2007) と Bücking (2012) は、前置属格をもつ DP の主要部に発音されない決定詞 Ø を仮定することで、上述の 2 点の特徴を、前置属格が常に Ø とともに用いられることの帰結として説明している。

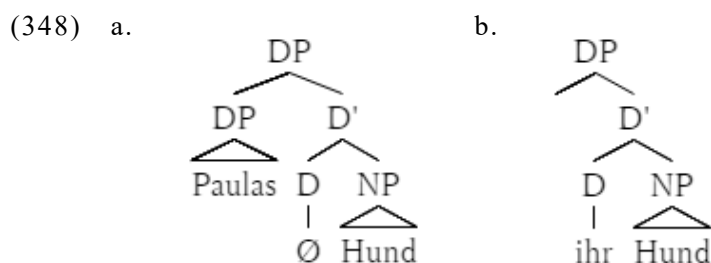


²⁷ D⁰ 仮説では、前置属格と所有冠詞のこうした類似性も、前置属格が所有冠詞と同じく DP 主要部を占めることの反映とみなされる。

すなわち、前置属格をもつ DP の主要部は \emptyset によって占められていることから、前置属格が \emptyset 以外の決定詞と共起できないということが導かれる。すると、結果として、前置属格は決定詞と相補分布をなすことになる。また、 \emptyset は [+定] の決定詞であると仮定される。すると、前置属格をもつ名詞句が不定名詞句によってパラフレーズできないことが、 \emptyset を主要部とする DP が定の表現であることからの帰結としてとらえられる。

7.4.2. 前置属格・所有冠詞の解釈

筆者が想定する前置属格と所有冠詞の統語構造は、(348) である。



(348) の統語構造は、DP の主要部である決定詞 \emptyset や所有冠詞が、DP 補部の NP や DP 指定部の前置属格を項とする関手 (Funktör; functor) となっていることを示唆するものである。この関係は、関手である \emptyset と所有冠詞を述語に見立て、(349) のように抽象化することができる。

- (349) a. \emptyset ([_{DP} Paula], [_{NP} Hund])
 b. IHR ([_{NP} Hund])

そこで筆者は、関手である \emptyset と所有冠詞を (350) の意味形式と項構造により分析することを試みる。 \emptyset は、NP と属格の DP の 2 つの項をとり、文脈で唯一の個体を指示する DP となる。その際、この個体と属格の DP の指示対象は、後述する π という関係をなす。所有冠詞は、NP を 1 つ項にとり、文脈で唯一の個体を指示する DP となる。この個体は、所有冠詞の人称・性・数に応じた個体と π の関係をなす。

$$(350) \quad \text{a.} \left[\begin{array}{c} \emptyset \\ \text{SF: } \iota x [P(x) \ \& \ \pi(x, y)] \\ \text{AS: } \langle y \quad \langle P \rangle \rangle \\ \left(\begin{array}{c} +DP \\ +GEN \end{array} \right) \left(\begin{array}{c} +NP \end{array} \right) \end{array} \right] \quad \text{b.} \left[\begin{array}{c} \text{ihr} \\ \text{SF: } \iota x [P(x) \ \& \ \pi(x, \text{sie})] \\ \text{AS: } \langle P \rangle \\ \left(\begin{array}{c} +NP \end{array} \right) \end{array} \right]$$

すると、NP レベルの $[_{NP} \text{Hund}]$ に (351) の分析を与えれば、*Paulas Hund* には (352a) の意味形式、*ihr Hund* には (352b) の意味形式を導くことができる。

$$(351) \left[\begin{array}{c} [_{NP} \text{Hund}] \\ \text{SF: } [\text{HUND}(r)] \\ \text{AS: } \langle r \rangle \end{array} \right]$$

$$(352) \quad \text{a. } \iota r [\text{HUND}(r) \ \& \ \pi(r, \text{Paula})] \quad \text{b. } \iota r [\text{HUND}(r) \ \& \ \pi(r, \text{sie})]$$

<p><i>Paulas Hund</i> Paula.GEN dog.NOM パウラの犬</p>	<p><i>ihr Hund</i> her dog.NOM 彼女の犬</p>
---	---

π は、個体と個体の関係を表すパラメータ化された関数である。 π の第 1 項は、前置属格・所有冠詞が付される名詞句の指示対象である。 π の第 2 項は、所有冠詞の場合、人称・性・数の一致する文脈上の個体、 \emptyset の場合、 \emptyset の構造項に指定された項 y である。 y は、 \emptyset の項構造に媒介されて、DP 指定部に属格で実現する。

$$(353) \left[\begin{array}{c} \emptyset \\ \text{SF: } \iota x [P(x) \ \& \ \pi(x, y)] \\ \text{AS: } \langle y \quad \langle P \rangle \rangle \\ \left(\begin{array}{c} +DP \\ +GEN \end{array} \right) \left(\begin{array}{c} +NP \end{array} \right) \end{array} \right]$$

$$(353') \quad [_{DP} \text{Paulas}_y \ [_{D'} \emptyset \ \underline{\text{Hund}}_P]]$$

π はパラメータ化されており、 π が具体的な値に設定されることで、前置属格や所有冠詞の解釈が決定する。前置属格・所有冠詞が物を表す名詞に付される

とき、 π の無標の値は所有関係である。そのため、(354)は標準的には「パウラが飼っている犬」と解釈される。

(354) ur [HUND (r) & POSSESSUM (r, Paula)]

Paulas Hund

Paula.GEN dog.NOM

パウラが飼っている犬

π の値は、文脈上の関係に対しても開かれており、文脈に鑑みて解釈されることもある。例えば、(355)の文脈では、*Paulas Hund*は「パウラが飼っている犬」ではなく、「パウラが夢中になっている犬」と解釈される。

(355) [A und B reden über Paula und wissen, dass Paula ständig vom Hund aus ihrer Nachbarschaft schwärmt, selbst aber keinen Hund besitzt.]

[AとBはパウラについて話している。2人は、パウラがいつも近所からやってくる犬について夢中になって話しているが、自分では犬を飼っていないことを知っている]

A:) **Paulas Hund** war übrigens in der Tierklinik.

Paula.GEN dog.NOM be.3SG.PST incidentally in the veterinary-clinic.DAT

(Bücking 2012: 81f.)

ところで、パウラの犬（パウラが夢中になっている犬）が入院したそう

この解釈は、 π が文脈上の関係を参照して「夢中になっている」という関係に設定された結果として得られる。

(355') ur [HUND (r) & SCHWARM (r, Paula)]

Paulas Hund

Paula.GEN dog.NOM

パウラが夢中になっている犬

7.4.2.1. 前置属格・所有冠詞の主語的解釈

前置属格や所有冠詞は、名詞化に付された場合、主語的な解釈をもつ。

(356) **Peters/ Seine Behandlung dauert noch an.**
 Peter.GEN/ his treatment.NOM go_on.3SG.PST still PTCL
 = [ペーターが／彼が誰かを治療すること] が続いている

(356) のような前置属格・所有冠詞の主語的解釈を巡り，Bücking (2010) は，この解釈が厳密には基盤動詞の主語に対応するものなのではなく，物を表す名詞に付された前置属格・所有冠詞が表す所有関係の解釈の延長線上にあるものであるという考えを示している。Bücking (2010) の主張の根拠は，(357) における主語的解釈の前置属格が，必ずしも「ゲオルクが男性たちに聞き取りを行う」という (357') の文の動作主の主語に対応するわけではないという事実である。(358) に示す通り，*Georgs Befragung der Männer* は「ゲオルクが助手に聞き取りを行わせること」という (358') の文に対応した解釈を持つこともある。(358) の *Georgs* の解釈は，(358') の文の主語，すなわち使役主である。²⁸

(357) **Georgs Befragung der Männer gilt bis heute**
 Georg.GEN questioning.NOM the man.PL.GEN is_regarded.3SG.PRS up_to today
 als Meilenstein in der Konsumforschung.
 as a milestone.NOM in the consumer_research.DAT
 ゲオルクが行った男性の聞き取りは今日まで消費調査のマイルストーンとみなされている

(357') **Georg befragte die Männer.**
 Georg.NOM ask.3SG.PST the man.PL.ACC
 ゲオルクが男性たちに聞き取りを行った

²⁸ この例は，Bücking (2010: 51) では，*Befragung* ではなく，不定詞名詞化の *Befragen* となっている。しかし，インフォーマントの証言によると，このような文脈では不定詞名詞化の *Befragen* は不適格で，*Befragung* とすべきであるとのことである。

(358) Georg wollte wissen, welchen Einfluss das Wetter auf das Einkaufsverhalten von Männern hat. Er ließ somit seine Hilfskräfte Probanden bei unterschiedlichen Witterungsverhältnissen befragen.

ゲオルクは雨が男性の購買行動に与える影響を知りたかった。そこで彼は自分の助手に、様々な気象条件のもとで被験者たちへの聞き取りを行わせた

Georgs Befragung der Männer gilt bis heute
 Georg.GEN questioning.NOM the man.PL.GEN is_regarded.3SG.PRS up_to today
 als Meilenstein in der Konsumforschung.

as a milestone.NOM in the consumer_research.DAT

ゲオルクが行わせた男性の聞き取りは今日まで消費調査のマイルストーンとみなされている

(358') Georg ließ von seinen Hilfskräften die Männer befragen.

Georg.NOM let.3SG.PST by his assistant.PL.DAT the man.PL.ACC ask.INF

ゲオルクが助手に男性たちへの聞き取りを行わせた

所有者、動作主、使役主を包括した連続的關係として、「xがyにコントロールされる」という關係を考へることが出来る (cf. Partee & Borschev 2003: 70, Primus 2012: 23–27)。そこで筆者は、この關係を CONTROLLEE (x, y) として抽象化し、この關係を、 π がいつでも選択可能な π のデフォルトの値と考へる。

(359) π のデフォルト規則:

π (x, y) は CONTROLLEE (x, y) という關係がデフォルトである

π は、文脈上の何らかの關係をコピーしない限り、CONTROLLEE として解釈される。すると、本節冒頭の (356) に挙げた *Peters/seine Behandlung* 「ペーターの／彼の治療」や、前節で挙げた *Paulas Hund* 「パウラが飼っている犬」は、 π を CONTROLLEE に設定することで、(356'c)/(356''c)/(354'c) のように分析することができる。

(356') a. Peters Behandlung

Peter.GEN treatment.NOM

ペーターが誰かを治療すること

b. is [[DO (x, y) (s)] & π (s, Peter)]

c. is [[DO (x, y) (s)] & CONTROLEE (s, Peter)]

(356") a. seine Behandlung

his treatment.NOM

彼が誰かを治療すること

b. is [[DO (x, y) (s)] & π (s, er)]

c. is [[DO (x, y) (s)] & CONTROLEE (s, er)]

(354') a. Paulas Hund

Paula.GEN dog.NOM

パウラが飼っている犬

b. ir [HUND (r) & π (r, Paula)]

c. ir [HUND (r) & CONTROLEE (r, Paula)]

7.3.1 節で論じたように、*Erschießung* のような使役的状态変化動詞の名詞化では、一回的な状況を表す限り、動作主は後置属格の形をとる構造項とはならない (cf. (360))。しかし、(361ab) に示すように、前置属格や所有冠詞には構造項にはない動作主的な解釈が認められる (cf. Lattewitz 1994: 119)。

(360) **Die Erschießung Peters** ereignete sich vor Mitternacht.
the shooting.NOM Peter.GEN take_place.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT
≠ [ペーターが誰かを射殺する事態] が夜半前に起こった

(361) a. **Peters Erschießung** ereignete sich vor Mitternacht.
Peter.GEN shooting.NOM occur.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT
= [ペーターが誰かを射殺する事態] が夜半前に起こった
b. **Seine Erschießung** ereignete sich vor Mitternacht.
his shooting.NOM occur.3SG.PST REF.ACC before midnight.DAT
= [彼が誰かを射殺する事態] が夜半前に起こった

CONTROLEE という関係が、いつでも選択可能な π のデフォルトの値であると考え、(361ab) の動作主的な解釈も、自然にとらえることができる。すなわち、(361a)/(361b) では π が CONTROLEE に設定されることで、(361'ab) の意味形式から動作主的な解釈が得られるのである。

- (361') a. *is* [[CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)] & CONTROLEE (s, Peter)]
 b. *is* [[CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)] & CONTROLEE (s, er)]

7.4.2.2. 前置属格・所有冠詞の目的語的解釈

名詞化に付された前置属格・所有冠詞は、目的語的な解釈を持つこともある。例えば (362) では、前置属格・所有冠詞が、基盤動詞の目的語である Theme に対応している。

- (362) a. **Dresdens/ Seine Zerstörung** wurde von Harris durchgeführt.
 Peter.GEN/ his destruction.NOMPASS.3SG.PST by Harris.DAT carry_out.PTCP
 ドレスデンの／その破壊はハリスによって実行された
- b. **Peters/ Seine Erschießung** wurde von seinem Gegner durchgeführt.
 Peter.GEN/ his shooting.NOM PASS.3SG.PST by his opponent.DAT
 durchgeführt.
 carry_out.PTCP
 ペーターの／彼の射殺は彼の敵によって実行された

(362) の前置属格・所有冠詞が目的語的に解釈されることは、*von Harris* 「ハリスによって」や *von seinem Gegner* 「彼の敵によって」のような成分が母文に含まれていることから明らかである。

しかし、動作主や使役主と違い、「状況が Theme によってコントロールされる」とは考え難い。したがって、(362) の前置属格・所有冠詞の解釈は、 π のデフォルト値である CONTROLEE によるものとは考えられない。すなわち、前置属格・所有冠詞が目的語的な解釈を持つことをとらえるためには、主語的解釈の場合とは別の仕組みが必要となる。

7.2 節および 7.3 節で論じたように、名詞化や機能名詞・関係名詞の構造項は、指示対象の同定を可能とする項である。そのため、指示対象がすでに同定されている場合には、構造項が後置属格の形で実現していなくても、文脈などから相応の情報が理解され得る。例えば (363) では、*Ernennung* 「任命」の Theme は属格項としては明示されていないものの、指示対象が同定されているために、直前の文脈の *der Kandidat* 「その候補者」であることが理解される。

- (363) **Der Kandidat** erklärte wegen der Kritik seinen
 the candidate.NOM explain.3SG.PST because_of the criticism.GEN his
Verzicht auf das Amt. **Die Ernennung** wurde nun von der
 decline.ACC on the office.ACC the nomination.NOM PASS.3SG.PST now from the
Tagesordnung genommen.
 agenda.DAT remove.PTCP
 その候補者は批判のためにポストへの就任の辞退を表明した。(その
 候補の) 任命は進行表から取り除かれた

7.4.1.2 節および 7.4.1.3 節で述べたように、前置属格や所有冠詞が付された名詞句は、不定の名詞句によってパラフレーズすることができない (cf. (364))。そのため、前置属格や所有冠詞が付されると、名詞句の指示対象は唯一に特定されると考えられる。

- (364) **Björns/ Sein Buch** gefällt mir.
 Björn.GEN/ his book.NOM please.3SG.PRS me.DAT
 ビョルンの／彼の本が私は好きだ
 ≠ Ein Buch von Björn/ von ihm gefällt mir. 「あるビョルンの／彼の本が私は好きだ」
 = Das Buch von Björn/ von ihm gefällt mir. 「そのビョルンの／彼の本が私は好きだ」

筆者は、名詞化に付された前置属格・所有冠詞の目的語的解釈が、前置属格・所有冠詞の効果として名詞句の指示対象が特定されることで生じると考える。すなわち、名詞化に前置属格や所有冠詞が付されると、指示対象が唯一に特定され、構造項についても相応の情報が得られることが示される。この時、名詞化の構造項と理解されるのは、前置属格・所有冠詞によって導入される個体である。基盤動詞の目的語が名詞化の項構造に構造項として記録されている場合、前置属格・所有冠詞によって導入される個体がこの項として理解されると、前置属格・所有冠詞に目的語的な解釈が導かれるのである。

例えば、(365a) の *Peters Erschießung* が「ペーターを射殺すること」と解釈されるプロセスは次のようになる。前置属格は、[+定] の決定詞 \emptyset を中心として形成される。 \emptyset を付された名詞化は、唯一に同定された状況を指示する。すると、構造項についても相応の情報の存在が暗示される。7.3.1 節で述べたように、*Erschießung* では **Theme** が構造項である。前置属格により導入される「ペ

ーター」がこの項を埋める相応の情報として理解されることで (y=Peter), *Peters Erschießung* に「ペーターを射殺すること」という (365c) の解釈が与えられることになる。

- (365) a. [DP Peters [D' Ø [NP Erschießung]]]
 b. *is* [[CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s))] & y=Peter]
 c. *is* [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (Peter))) (s)]

同様に, *Seine Erschießung* が「彼を射殺すること」と解釈されるプロセスは次のようになる。所有冠詞を付された名詞化は, 唯一に同定された状況を指示する。すると, 構造項についても相応の情報の存在が暗示される。所有冠詞により導入される3人称・男性・単数の個体がこの項を埋める相応の情報として理解されることで (y=er), *seine Erschießung* に「彼を射殺すること」という (366c) の解釈が導かれることになる。

- (366) a. [DP [D' seine [NP Erschießung]]]
 b. *is* [[CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)] & y=er]
 c. *is* [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (er))) (s)]

7.4.2.3. 前置属格・所有冠詞と後置属格の共起

5.1.3 節と 5.1.4 節で述べたように, 他動詞の名詞化に前置属格・所有冠詞と後置属格が共起した場合, 前置属格・所有冠詞と後置属格の解釈は非対称的となる。例えば, (367) の名詞化は通常「ペーターがマリアを治療すること」という意味で解釈され, 「マリアがペーターを治療すること」という解釈は, 不可能ではないという報告もあるものの (cf. Bücking 2012: 56), 非常に有標である。同様に, (368) は通常「彼がマリアを治療すること」という意味で解釈され, 「マリアが彼を治療すること」という解釈は非常に有標である (cf. Bhatt 1989; 1990, Lindauer 1995, Zifonun et al. 1997: 2031ff.)。

- (367) **Peters Behandlung Marias** wird fortgesetzt.
 Peter.GEN treatment.NOM Maria.GEN PASS.3SG.PRS continue.PTCP
 = [ペーターがマリアを治療する出来事] は続けられている
 ≠ [マリアがペーターを治療する出来事] は続けられている

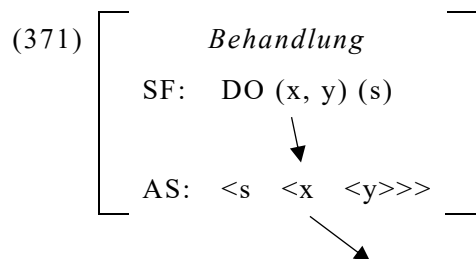
- (368) **Seine Behandlung Marias** wird fortgesetzt.
 his treatment.NOM Maria.GEN PASS.3SG.PRS continue.PTCP
 = [彼がマリアを治療する出来事] は続けられている
 ≠ [マリアが彼を治療する出来事] は続けられている

後置属格を構造項の統語的な具現形とみなし、前置属格と所有冠詞を、NPを項にとる関手を中心とする表現として分析した場合、「ペーターがマリアを治療すること」および「彼がマリアを治療すること」という解釈は容易に導かれる。すなわち、まず *Behandlung* の項構造に構造項として記録された被動者が属格項として実現する。その上で、前置属格・所有冠詞が、 π のデフォルト値である CONTROLEE により、動作主的に解釈される。すると、「ペーターがマリアを治療すること」、「彼がマリアを治療すること」という (369) と (370) の意味形式が得られるのである。

- (369) is [[DO (x, Maria) (s)] & CONTROLEE (s, Peter)]
 Peters Behandlung Marias
 Peter.GEN treatment.NOM Maria.GEN
 ペーターがマリアを治療する出来事

- (370) is [[DO (x, Maria) (s)] & CONTROLEE (s, er)]
 seine Behandlung Marias
 his treatment.NOM Maria.GEN
 彼がマリアを治療する出来事

これに対し、「マリアがペーターを治療すること」あるいは「マリアが彼を治療すること」という解釈は、導くことができないわけではないにしても、導くために自然な流れに背くプロセスが必要となる。*Behandlung* のような活動動詞の名詞化の項構造には、動作主と被動者がともに状況の同定を可能とする構造項として記録されている (cf. 7.3.2 節)。したがって、「マリアがペーターを治療すること」あるいは「マリアが彼を治療すること」という解釈では、被動者ではなく動作主が後置属格の形をとる属格項として実現していると考えられる (cf. (371))。



(371') [n_P *Behandlung*_i [n_P Marias_x t_i]]

前置属格・所有冠詞の目的語的な解釈は、前節で述べたように、 \emptyset や所有冠詞によって名詞化の指示対象が唯一に同定され、構造項についても相応の情報の存在が暗示されることで導かれる。この時、前置属格・所有冠詞によって導入された個体がこの項として理解される。*Behandlung* の項構造には構造項として動作主の他に被動者が記録されているから、動作主が後置属格の形をとる属格項として実現していても、所有冠詞・前置属格により導入される「ペーター」や「彼」を、もう一つの構造項である被動者を埋める情報として理解する余地がある (y=Peter; y=er)。すると、「マリアがペーターを治療すること」および「マリアが彼を治療すること」という (372c)/(373c) の解釈を導くことができるのである。

- (372) a. [DP Peters [D' \emptyset [n_P *Behandlung*_i [n_P Marias_x t_i]]]]
 b. ιs [[DO (Maria, y) (s)] & y=Peter]
 c. ιs [DO (Maria, Peter) (s)]

- (373) a. [DP [D' seine [n_P *Behandlung*_i [n_P Marias_x t_i]]]]
 b. ιs [[DO (Maria, y) (s)] & y=er]
 c. ιs [DO (Maria, er) (s)]

しかし、「指示対象の同定が可能となるように、構造項を統語的に実現する」という手続きと、「指示対象がすでに同定されている名詞化について、所有冠詞・前置属格により導入される個体を、構造項を埋める情報として理解する」という手続きは、一方は指示対象を同定しようとするものであるのに対し、他方は指示対象が同定されていることを出発点とするものであり、相反するものである。わざわざ相反するプロセスを組み合わせる意味解釈を行う動機がないことから、「マリアがペーターを治療すること」あるいは「マリアが彼を治療すること」という解釈は、不可能ではないとしても、明らかに有標な解釈となるのである。

7.5. 不定詞名詞化における項の義務性と指示

すでに繰り返し述べたように、名詞化において、項の統語的な実現は基本的に任意であり、削除しても文法性は損なわれない。

- (374) Die Prüfung ^{OK}(des Schülers) beginnt um 2 Uhr.
 the test.NOM the student.GEN begin.3SG.PRS at 2 o'clock.ACC
 (その生徒の) 試験は 2 時に始まる

ところが、2.3 節でも述べたように、名詞化の中には義務的な項をもつものも存在する。すなわち、不定詞名詞化である。例えば、ung 名詞化である *Fertigstellung* は (375a) のように属格項の削除が認められるが、不定詞名詞化である *das Fertigstellen* は (375b) のように属格項を削除することができない。不定詞名詞化は、基盤動詞が目的語を義務的に求める他動詞である限り、目的語に対応する項の属格による実現も義務的である。

- (375)a. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Die Fertigstellung** ^{OK}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completing.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

- b. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Das Fertigstellen** ^{??}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completings.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

残念ながらそのショーケースは一月より前には届けられません。高い需要のため、一か月以内で(その家具を)仕上げることはできません。

本節では、不定詞名詞化に義務的な項が存在する理由について、名詞化における項の実現と指示の関係という観点から考察する。

7.5.1. 名詞項の任意性と個体指示

名詞の項が基本的に任意である背景には、名詞の構造項が「指示対象の同定を可能とする項」であり、その統語的実現が、個体の指示を可能とするのに必要な情報を与えるために行われるということが関係していると考えられる。

種族名詞が定冠詞とともに個体指示を行う仕組みは、次のように分析される。種族名詞は、単独では個体でなく、個体の所属する概念のカテゴリー、つまり個体の集合を表す。例えば、*Hund* という種族名詞が表すのは、「犬である」という性質が当てはまる個体の集合、つまり「犬の集合」である。この集合にはフィドーやハチなど無数の個体が含まれ、そのままでは特定の個体を唯一に同定することはできない。しかし、唯一の個体を同定するに足るような情報が文脈上に存在するような場合には、当該の個体以外の個体は背景化されるので、その個体（例えばフィドー）を文脈上唯一の犬として同定することが可能となる。このような場合、名詞に定冠詞を付すことで名詞句の指示対象が文脈上唯一の個体であることが示され、個体指示が行われる。例えば、フィドーを指していることが明らかな文脈では、フィドー以外の犬は背景化されて、*der Hund* という定名詞句によって、文脈上の唯一の犬であるフィドーが指示される。

(376) a. *Hund* ⇒ {Bob, Felix, Fido, Hachi, Lucy, ...} (犬の集合)

b. *der Hund* ⇒ {~~Bob-Felix~~**Fido** Hachi-Lucy} (同定可能)

派生名詞化や機能名詞・関係名詞では、指示対象となる個体や状況の同定を可能とする項が構造項である。そのため、これらの名詞を主要部とする名詞句では、構造項を属格項として実現し、明示することで、唯一の個体や状況が同定できるようになる。つまり、これらの名詞では、構造項の実現によって、個体指示の要件である「唯一の個体・状況を同定するに足る情報の存在」が満たされることになる。

この時、個体指示を可能とするには、唯一の個体・状況を同定するに足る情報があればよいのであって、その情報が後置属格の形をとる属格項によって得られたものなのか、文脈などから得られたものなのかということは問題とならない。したがって、たとえ構造項が属格項として明示的には実現していなくても、相応の情報が文脈などを通じて与えられていれば、定冠詞を付すことで個体指示が可能となる。例えば (377) では、「任命される人」は属格項としては明示されていないものの、相応の情報が直前の文に存在するため、定冠詞を付すことで状況の指示がなされている。

- (377) **Der Kandidat_i** erklärte wegen der Kritik seinen
 the candidate.NOM explain.3SG.PST because_of the criticism.GEN his
 Verzicht auf das Amt. **Die Ernennung_i** wurde nun von der
 decline.ACC on the office.ACC the nomination.NOM PASS.3SG.PST now from the
 Tagesordnung genommen.²⁹
 agenda.DAT remove.PTCP
 その候補者は批判のためにポストへの就任の辞退を表明した。(その
 候補の) 任命は進行表から取り除かれた

このように、唯一の個体・状況を同定するに足る情報が文脈上に存在する場合、名詞の構造項は、統語的実現が求められないのである。

7.5.2. 不定詞名詞化における項実現の動機

2.3 節でも述べたように、特定の具体的な状況を指示する (378) のような派生名詞化は、一般的状況を表す (379) のような派生名詞化とは異なり、不定詞名詞化によってパラフレーズすることが難しい (cf. (378')/(379'))。

- (378) a. Als wir in Geschichte **über die Ermordung John F. Kennedys**
 as we.NOM in History.DAT about the murder.ACC John F. Kennedy.GEN
 sprachen, fragten wir uns, ob es einen solchen
 talk.3PL.PST wonder.3PL.PST we.NOM REF.ACC if it.NOM a such
 Aufschrei wie damals auch geben würde, wenn so etwas
 outcry.ACC as that_time also give.INF FUT.3SG.SBJ2 if such a_thing.NOM
 mit Trump passieren würde. (DWDS: Die Zeit, 09.04.2017, Nr. 15)
 to Trump.DAT happen.INF FUT.3SG.SBJ2
 私たちは歴史の授業でジョン・F・ケネディの殺害について話した際、
 もし同じことがトランプ大統領に起きたら、当時のような悲鳴が起き
 るだろうかと考えた

²⁹ この例のインデックスは、die Ernennung の非明示的な項が der Kandidat と同一であることを表す

- b. Im kommenden Jahr jährt sich **die Besteigung des Mount Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay** zum 50sten Mal. (DWDS: Der Tagesspiegel, 22.12.2002)
- in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the 50th times.DAT
- 来年にはサー・エドモント・ヒラリーとテンジン・ノルゲイによるエベレスト山登頂から 50 年を迎える

- (379) a. In Syrien und Aleppo geht es, anders als in Ruanda oder Srebrenica, nicht um **die Ermordung einer bestimmten Volksgruppe**. (DWDS: Die Zeit, 22.12.2016)
- in Syria.DAT and Aleppo.DAT is_going.3SG.PRS it.NOM differently as in Rwanda.DAT or Srebrenica.DAT not about the murder.ACC a certain ethnic_group.GEN
- シリアとアレppoで起きているのは、ルワンダやスレブレニツァと違い、特定の民族集団の殺害ではない

- b. Für **die Besteigung des Mount Kinabalu** gilt der März als günstigster Monat. (DWDS: Der Tagesspiegel, 13.08.1999)
- for the climbing.ACC the Mount Kinabalu.GEN is.3SG.PRS the March.NOM as favorable month.NOM
- キナバル山に登るには 3 月はよい月だ

- (378') a. ??Als wir in Geschichte **über das Ermorden John F. Kennedys** sprachen, fragten wir uns, ob es einen solchen Aufschrei wie damals auch geben würde, wenn so etwas mit Trump passieren würde.
- as we.NOM in History.DAT about the murder.ACC John F. Kennedy.GEN talk.3PL.PST wonder.3PL.PST we.NOM REF.ACC if it.NOM a such outcry.ACC as that_time also give.INF FUT.3SG.SBJ2 if such a_thing.NOM to Trump.DAT happen.INF FUT.3SG.SBJ2

b. ^{??}Im kommenden Jahr jährt sich **das Besteigen des Mount Everest** durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay zum 50sten Mal.
 in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the 50th times.DAT

(379') a. ^{OK}In Syrien und Aleppo geht es, anders als in Ruanda oder Srebrenica, nicht um **das Ermorden einer bestimmten Volksgruppe**.
 in Syria.DAT and Aleppo.DAT is_going.3SG.PRS it.NOM differently as in Rwanda.DAT or Srebrenica.DAT not about the murder.ACC a certain ethnic_group.GEN

b. ^{OK}Für **das Besteigen des Mount Kinabalu** gilt der März als günstigster Monat.
 for the climbing.ACC the Mount Kinabalu.GEN is.3SG.PRS the March.NOM as favorable month.NOM

もつとも、2.3節でも述べたように、これは不定詞名詞化が特定の具体的状況を指示しないというだけで、(380)のように、不定詞名詞化に対応する具体的状況が存在してはならないというわけではない。(380)では文脈上、「チームが決勝に進む」という具体的状況が存在していることは明らかであるが、*trotz*の与格支配を認める話者はこの文を書き換えるならば、冠詞のない(380'a)への書き換えが(380'b)のような定の表現への書き換えよりも自然であることから、(380)の不定詞名詞化はこの状況を文脈で唯一の状況として指示しているわけではないと考えられる。

(380) **Trotz des Erreichens des Finales der Champions League** hält sich Klopp mit Europacup-Prognosen zurück.
 despite the reaching.GEN the final.GEN the Champions League.GEN hold.3SG.PRS REF.ACC Klopp.NOM with European-Cup_prediction.PL.DAT PTCL

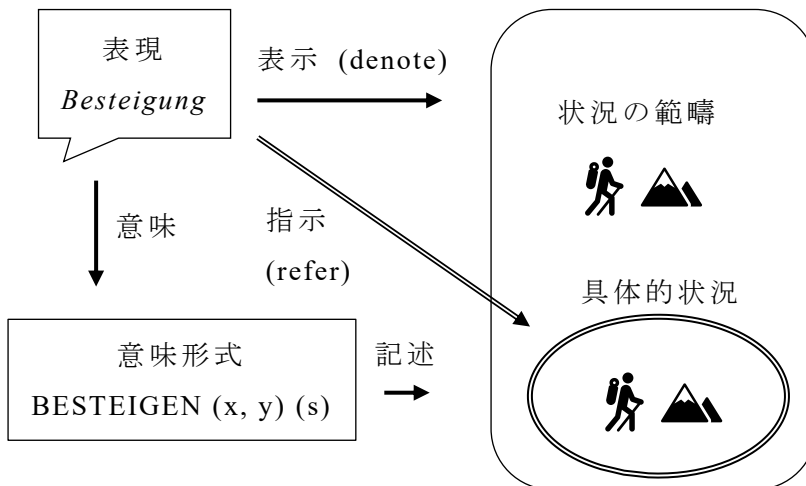
(DWDS: Die Zeit, 29.05.2013)

チャンピオンズリーグの決勝に到達しても Klopp は優勝の見込みについて意見を差し控えている

- (380') a. **Trotz Erreichen des Finales der Champions League** hält
 despite reaching.DAT the final.GEN the Champions League.GEN hold.3SG.PRS
 sich **Klopp** mit Europacup-Prognosen zurück.
 REF.ACC Klopp.NOM with European-Cup_prediction.PL.DAT PTCLS
- b. [?]**Trotz dem Erreichen des Finales der Champions League** hält
 despite the reaching.DAT the final.GEN the Champions League.GEN hold.3SG.PRS
 sich **Klopp** mit Europacup-Prognosen zurück.³⁰
 REF.ACCKlopp.NOM with European-Cup_prediction.PL.DAT PTCL

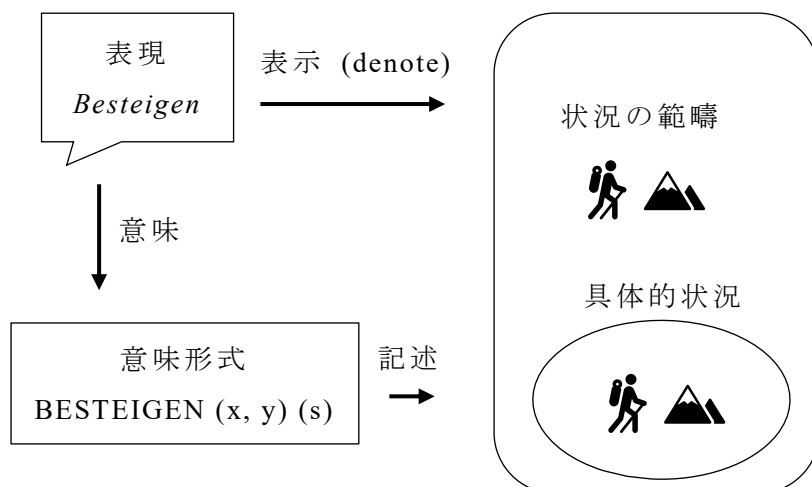
筆者は、派生名詞化が指示対象を唯一に同定することで具体的状況を指示 (refer) することができるのに対し、不定詞名詞化は具体的状況を表示 (denote) はしても、指示は行わないのだと考える。言い換えれば、派生名詞化は「状況の外延的表現」となり得るのに対し、不定詞名詞化は文脈上具体的状況が念頭にある場合でも、「状況の内包的表現」ととどまるということである。「状況の外延的表現」としての派生名詞化と意味形式・状況の範疇・具体的状況の関係および「状況の内包的表現」としての不定詞名詞化と意味形式・状況の範疇・具体的状況は (381)/(382) のように図示できる。

(381) 派生名詞化と意味形式・状況の範疇・具体的状況の関係



³⁰ この例の疑問符は、上の例の書き換えとしての不適格性を表す。この判断はノルトライン・ヴェストファーレン州出身の 20 代男性による。

(382) 不定詞名詞化と意味形式・状況の範疇・具体的状況の関係



語彙項目は、語彙的な情報として概念的な意味形式を持つ。意味形式は世界中の様々な存在や概念のカテゴリーを記述する。名詞化の場合、意味形式が記述するのは状況の概念である。派生名詞化では、それが表す概念に当てはまる状況の中から、唯一の具体的状況を同定することで、この状況を指示することができる。一方、不定詞名詞化は状況の概念を表すのみで、その中には具体的な状況も含まれるものの、具体的な状況を唯一に同定して指示するわけではないのである。

派生名詞化が「状況の外延的表現」となり得るのに対し、不定詞名詞化が「状況の内包的表現」とどまると考えると、派生名詞化と不定詞名詞化の構造項の義務性の違いは次のように説明することができる。すなわち、具体的な状況には現にその状況に参加している参加者が存在する。そのため、具体的状況を指示する派生名詞化では、その状況の参加者は、たとえ表現されていなくても存在が含意され、文脈などから相応の情報を得ることができる。一方、不定詞名詞化は具体的状況を指示するわけではないので、状況の参加者も存在は含意されない。そのため、不定詞名詞化では、状況の参加者に関する情報は明示的に表現されなければどこからも与えられず、構造項が削除されると情報が不足してしまうのである。

不定詞名詞化において義務的となるのは、他動詞の目的語の項である。他動詞の主語の項は、構造項として実現するのではなく、不定詞名詞化の解釈上の「主語」として、母文の項によって束縛される (cf. Ehrich 2002a: 83f.)。例えば、(383a) では *der Maler* 「塗装業者」が *Renovieren der Wohnung* 「住宅をリフォームすること」の「主語」であり、(383b) では *der Richter* 「裁判官」が *Verlesen*

des Urteils 「判決を読み上げること」の「主語」である。つまり、(383) では、不定詞名詞化がこれらの「主語」が行う行為を表す述定の表現となっている。

- (383) a. Vor **dem Renovieren_i der Wohnung** legt der Maler_i
 before the renovating.DAT the apartment.GEN submit.3SG.PRS the painter.NOM
 einen Kostenvoranschlag vor. (Ehrich 2002a: 84)
 a cost_estimate.ACC PTCL

(塗装業者が) 住宅のリフォームを始める前に、塗装業者は費用の見積もりを提示する

- b. Vor **dem Verlesen_i des Urteils** begann der Richter_i zu husten.
 before the reading.DAT the verdict.GEN begin.3SG.PST the judge.NOM to cough.INF
 (Ehrich 2002a: 84)

(裁判官が) 判決を読み上げる前、裁判官は咳を始めた

解釈上の「主語」が母文の項とは異なる存在であることが明らかな (384) の不定詞名詞化は、母文の項による「主語」の束縛が成り立たないため、(383) に比べて容認度が低下する (cf. Ehrich 2002a)。³¹

- (384) a. [?]Vor **dem Renovieren_i der Wohnung** kann sie_j nicht
 before the renovating.DAT the apartment.GEN can.3SG.PRS she.NOM not
 einziehen. (Ehrich 2002a: 83)
 move_in.INF

- b. [?]Vor **dem Verlesen_i des Urteils** darf der Angeklagte_j den
 before the reading.DAT the verdict.GEN may.3SG.PRS the defendant.NOM the
 Saal nicht verlassen. (Ehrich 2002a: 83)
 hall.ACC not leave.INF

不定詞名詞化では、項の情報は明示的に表現されなければ与えられないが、7.1節で述べたように、名詞句の統語構造に構造項の現れる位置は nP 支配下の NP 指定部しかない。そのため、他動詞の不定詞名詞化では、常に一方の項 (目的語) が nP 配下の NP 指定部で属格項となる。そこで、もう一方の項については、属格項とならない代わりに、「主語」として母文の項に束縛されることで満たされるのである。

³¹ 例文の名詞化に付されたインデックスは、解釈上の主語を表す。

一方、自動詞の不定詞名詞化では、基盤動詞の主語にあたる項が、(385a) のように属格項として実現することも、(385b) のように母文の項に束縛されることもある。

- (385) a. Die [...] Tollwut [...] verhindert **das Arbeiten der Hunde** auf
the rabies.NOM prevent.3SG.PRS the working.ACC the dog.PL.GEN on
öffentlichen Straßen und Plätzen. (DWDS: Berliner Zeitung, 17.12.1953)
public street.PL.DAT and square.PL.DAT
狂犬病は公の通りや広場で犬が働くことを妨げている
- b. Manchmal vermisse ich_i **das Arbeiten**_i
sometimes miss.3SG.PRS I.NOM the working.ACC
(DWDS: Zeit Magazin, 30.09.2010, Nr. 40)
ときどき私は（私が）働くことが恋しくなる

(385a) では項の情報が属格項として実現することで与えられ、(385b) では母文の項による束縛によって与えられているのである。

7.6. まとめ

この章では、名詞化の項に関するこの論文独自の理論化を試みた。その際、動詞の項となる場合に名詞が冠詞などの決定詞とともに用いられることから、名詞という統語範疇の中心的な機能が「個体を指示する」ことにあると考え、この機能が、名詞化の項とも密接に関係していることを主張した。

派生名詞化や機能名詞・関係名詞では、構造項は、指示対象の同定を可能とするために実現される。派生名詞化の指示対象は状況である。そのため、派生名詞化では、潜在的な項候補となる状況の参加者のうち、「状況の同定を可能とする項」が構造項となる。ドイツ語の名詞句では、構造項は nP 配下の NP 指定部に投射され、後置属格の形で実現する。結果として、派生名詞化では、基盤動詞の種類によって異なる「状況の同定を可能とする項」が、後置属格の形で実現する。

派生名詞化が「状況の外延的表現」であり得るのに対し、不定詞名詞化は「状況の内包的表現」にとどまり、不定詞名詞化は具体的状況を唯一に同定して指示することを行わない。具体的状況では状況の参加者の存在が含意されるので、具体的状況を指示する派生名詞化では、明示的に表現されなくても、項が文脈などを通じて理解され得る。一方、「状況の内包的表現」である不定詞名詞化で

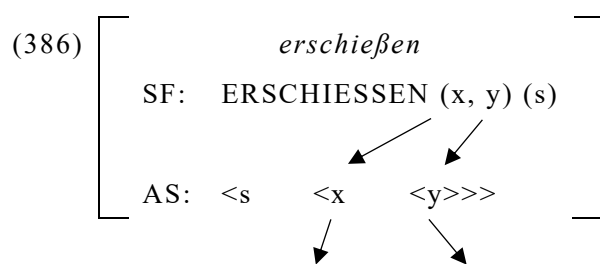
は、状況の参加者の存在は含意されない。そのため不定詞名詞化では、表現されない項に関する情報は与えられず、義務的な項を持つことになる。

名詞の構造項は後置属格の形をとる。前置属格や所有冠詞は構造項の具現形ではなく、関手である発音されない決定詞 \emptyset や所有冠詞を中心とする表現である。決定詞 \emptyset や所有冠詞は関手として名詞句を項にとり、名詞句の指示対象と、前置属格・所有冠詞により導入される個体の関係を表す。前置属格・所有冠詞はデフォルトの解釈として常に **CONTROLEE** という関係を表すことができ、名詞化に付された場合には、この関係によって、主語的解釈が導かれる。前置属格・所有冠詞の目的語的解釈は、決定詞 \emptyset や所有冠詞の効果として指示対象の状況が唯一に同定されることで、前置属格・所有冠詞により導入される個体が名詞化の構造項として理解されることによって導かれる。

8. 第I部のまとめ

第I部では、ドイツ語の派生名詞化（ung 名詞化，語幹名詞化，e 名詞化；cf. 2.1 節）と不定詞名詞化（cf. 2.3 節）について，項の実現という観点から観察し，理論化を行った。

項は，述語の語彙的な情報として，語彙項目を構成する情報のひとつである項構造 (AS) に記録されている (cf. 3.1 節)。項構造中の項は，同じく語彙項目を構成する情報のひとつである意味形式 (SF) に含まれる項と対応しており，意味形式は，項構造に媒介される形で，統語構造に結び付けられる。



(386') dass [IP der Jäger_x [VP [V' den Hasen_y erschießt]]]
 that the hunter.NOM the hare.ACC shoot.3SG.PRS
 ハンターが_x 野ウサギを_y 撃ち仕留めること

(386'') Es [ERSCHIESSEN (d.Jäger, d.Hase) (s)]

動詞の項構造には，状況の参加者を表す主題項に加えて，状況項 (cf. 3.2 節) が含まれている。状況項は動詞が表す状況に対応し，主題項が主語や目的語として実現するのと違い，文（平叙文）では存在量化される。

名詞にも，語彙的な情報として，意味形式と項構造が記録されている。固有名詞や人称代名詞が単独で個体を表すことができるのに対し，*Junge*「少年」などの普通名詞は個体ではなく個体が所属する概念のカテゴリーを表し，冠詞などの決定詞とともに名詞句となることで，個体を指示することができるようになる。そのため，普通名詞の意味形式は「個体の性質」を表す述語として記述され，項構造には名詞句の指示対象に対応する指示項 (cf. 3.3.1 節) が想定される。*Vater*「父」などの機能名詞や *Sohn*「息子」などの関係名詞 (cf. 3.3.2 節) は，「誰の父」あるいは「誰の息子」なのかが示されなければ何（誰）を指すのかが明らかでないことから，項構造に，指示項に加えて関係項が想定される。

- (387) a. $\left[\begin{array}{l} \textit{Junge} \\ \text{SF: JUNGE (r)} \\ \text{AS: } \langle r \rangle \end{array} \right]$ b. $\left[\begin{array}{l} \textit{Vater} \\ \text{SF: VATER (r, x)} \\ \text{AS: } \langle r \langle x \rangle \rangle \end{array} \right]$

名詞化では、動詞から名詞化に意味形式が継承される (cf. 3.4.2 節, 6.2 節) とともに、動詞の状況項が名詞化の指示項に転じる (cf. 3.4.1 節, 6.1 節)。

(388) 意味形式の継承 (= (235))

名詞化において、動詞から名詞化に意味形式が継承される

(389) 状況項の指示項への変換 (= (236))

名詞化において、動詞の状況は指示項に転じる

その結果、名詞化は、(390) に対する (391) のように、基盤動詞と同じ種類の状況を表す表現となり、基盤動詞において主語や目的語として表される状況の参加者は、項として分析され得る名詞化の項候補 (cf. 3.4.2 節) となる。

- (390) a. Peter hat die Passagiere dramatisch gerettet.
Peter.NOM PRF.3SG.PRS the passenger.PL.ACC dramatic rescue.PTCP
ペーターが乗客を劇的に救出した
b. $\exists s$ [[RETTEN (Peter, d.Passagiere) (s)] & DRAMATISCH (s)]

- (391) a. die dramatische Rettung der Passagiere
the dramatic rescue.NOM the passenger.PL.GEN
劇的な乗客の救出
b. $\text{is } \exists x$ [[RETTEN (x, d.Passagiere) (s)] & DRAMATISCH (s)]

動詞の項は基本的に義務的である。動詞の項の義務性は、例えば *rolle* という動詞の屈折形が 1 人称・単数に鑑みれば直説法現在、3 人称・単数に鑑みれば接続法 I 式であるように (cf. (392)), 動詞が法と時制の解釈を可視化するために項の ϕ 素性を必要とし、 ϕ 素性を参照すべき項がどれなのか (つまり、(392a) において *rolle* が *das Fass* ではなく *ich* に鑑みること) を明示するために、他の主な項についても明示する必要があることを背景とする (cf. 7.2.1 節)。

(392) a. Ich **rolle** das Fass in den Keller. (= (267a))

I.NOM roll.1SG.PRS the barrel.ACC into the cellar.ACC

私は樽を地下室に転がして入れる

b. Der Ball **rolle** über die Seitenlinie. (= (267b))

the ball.NOM roll.3SG.SBJ1 over the side_line.ACC

ボールがアウトラインの向こうに転がっていくと

一方、名詞の項実現の動機は、指示対象となる個体や状況の同定を可能とすることにある (cf. 7.2.2 節)。機能名詞では、関係項が特定されると指示対象は唯一に同定される。関係名詞では、関係項が特定されても指示対象が唯一に同定されるわけではないにもかかわらず、定冠詞を付すのが自然となることがある。

(393) a. der Geburtsort des Mannes; der Vater des Mädchens; der Kopf

the birthplace.NOM the man.GEN; the father.NOM the girl.GEN; the head.NOM

der Frau

the woman.GEN

その男の出生地 ; その少女の父 ; その女性の頭

b. #ein Geburtsort des Mannes; #ein Vater des Mädchens; #ein Kopf

a birthplace.NOM the man.GEN; a father.NOM the girl.GEN; a head.NOM

der Frau

the woman.GEN

(394) a. Er war **der** Sohn eines armen Bauern. (Löbner 1985: 324)

he.NOM be.3SG.PST the son.NOM a poor farmer.GEN

彼は貧しい農夫の息子だった

b. [?]Er war **ein** Sohn eines armen Bauern. (= (272b))

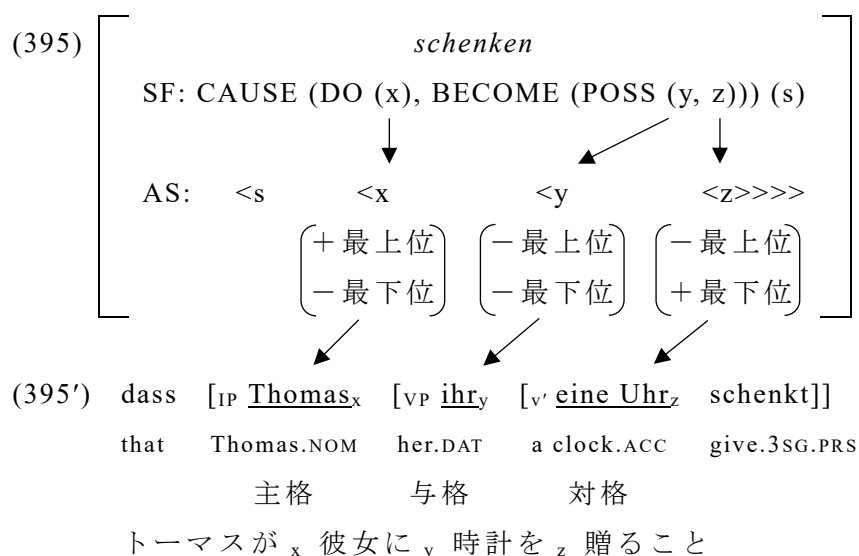
he.NOM be.3SG.PST a son.NOM a poor farmer.GEN

項が指示対象の同定のために実現されるため、文脈などから指示対象が同定可能であるような場合には、名詞の項は実現が求められず、任意の成分となる。すなわち、この論文の4つの問題提起のうち、Q3には、A3の答えが与えられる。

Q3. 動詞の項が基本的に義務的であるのに対し、名詞の項はどうして基本的に任意なのか

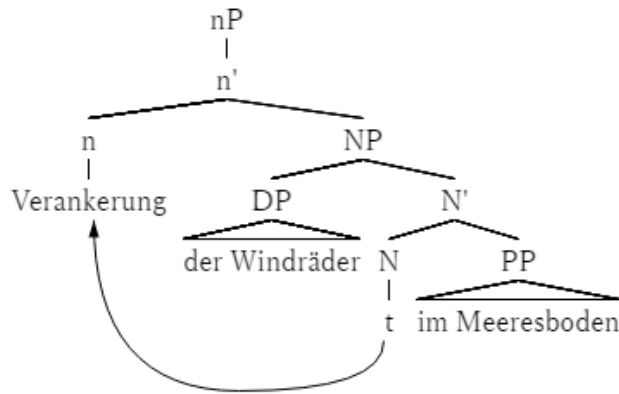
A3. 動詞の項は，動詞が法と時制の解釈を可視化するために項の ϕ 素性を必要とすることから義務的となる。一方，名詞の項は指示対象の同定を可能とするために実現されることから，文脈などを通じて指示対象が同定可能な場合には実現が求められず，任意となる

語彙分解文法 (LDG) の枠組み (cf. 4.1 節) では，動詞の意味形式が DO (活動) や BECOME (変化) といった要素的な意味を表す基本関数の組み合わせとして語彙分解されて構造的に記述され，語彙分解された意味形式への埋め込みの深度に応じて，項に階層的な関係が与えられる。項の階層的な性質は [±最上位] と [±最下位] の 2 つの素性によって最上位・中位・最下位の 3 段階に評価され，「意味形式の関係における上位の項が，統語論の構造においても高い位置に表される」という写像論的な仕組み (cf. 4.3 節) によって統語論の構造に投射される。このようにして投射された構造項には，表層構造での統語的位置に応じた構造格 (cf. 4.2 節) が与えられる。



一方，(396) のように分析される名詞句の統語構造 (cf. 7.1.1 節) には，構造項が現れる統語的位置は，nP 配下の NP 指定部ただひとつしか存在しない (cf. 7.1.2 節，7.1.3 節)。この位置に投射された構造項には，構造格として属格が付与される。

(396)



NP 指定部は nP 主要部のすぐ右に隣接するので，属格を与えられた名詞の構造項は，後置属格の形をとることになる。

(397) [DP die [_{nP} Verankerung_i [_{NP} der Windräder [_{N'} t_i im Meeresboden]]]]
GEN

前置属格や所有冠詞は構造項の具現形ではなく，関手である発音されない決定詞 \emptyset や所有冠詞を中心とした表現である (cf. 7.4.1 節)。 \emptyset と所有冠詞は [+定] の決定詞で，関手として名詞句を項にとり，名詞句の指示対象が前置属格・所有冠詞によって導入される個体と π という関係 (cf. 7.4.2 節) にあることを表す。

(398)a. [DP Peters [_{D'} \emptyset [_{nP} [_{n'} Erschießung_i [_{NP} t_i]]]]]]
Peter.GEN shooting.NOM

ペーターの射殺

a'. is [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)] & π (s, Peter)

b. [DP [_{D'} seine [_{nP} [_{n'} Erschießung_i [_{NP} t_i]]]]]]
his shooting.NOM

彼の射殺

b'. is [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)] & π (s, er)

後置属格には，項としての属格項と付加語としての属格付加語が並存する (cf. 5.1.1 節，7.1.4 節)。属格項と属格付加語は，1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞が認められるか否かという音韻論的な基準によって峻別され，属格項は 1 音節

や 2 音節の無冠詞固有名詞であり得るのに対し、属格付加語には、1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞は認められない。

(399) a. **Die Freundin Ulf** kann wunderbar kochen.

the girlfriend.NOM Ulf.GEN can.3SG.PRS wonderful cook.INF

ウルフのガールフレンドは素晴らしく料理ができる

b. ***Der Computer Ulf** ist kaputt.

the computer.NOM Ulf.GEN be.3SG.PRS broken

(Hartmann & Zimmermann 2003: 199)

b'. **Ulf Computer** ist kaputt.

Ulf.GEN computer.NOM be.3SG.PRS broken

ウルフのコンピューターが壊れた

したがって、この論文の 4 つの問題提起のうち Q2 には、A2 の答えが得られる。

Q2. 動詞において項と付加語はその義務性を第一の基準として峻別されるが、項が基本的に任意であると考えられる名詞において、項と付加語はそもそも、またどのようにして峻別できるのか

A2. 名詞の項のうち、後置属格の形をとる構造項は、音韻論的な基準によって峻別される。属格項には 1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞が認められるのに対し、属格付加語には 2 音節以下の無冠詞固有名詞は認められない。

派生名詞化の項実現の動機は、指示対象となる状況の同定を可能とすることにある (cf. 7.3 節)。そのため、派生名詞化の項構造では、「状況の同定を可能とする項」が構造項となる。状況の同定を可能とする項は、基盤動詞の意味的な種類によって異なる。基盤動詞の種類と状況の同定を可能とする項の関係は、(400) の表にまとめることができる。

(400) 基盤動詞の種類と状況の同定を可能とする項

動詞の種類	意味形式の構造	状況の同定を 可能とする項
活動動詞（自動詞）： e.g. <i>arbeiten</i> etc.	DO (x) (s)	x
活動動詞（他動詞）： e.g. <i>behandeln</i> etc.	DO (x, y) (s)	x または y
所有動詞： e.g. <i>besitzen, gehören</i> etc.	POSS (x, y) (s)	x または y
使役的状态変化動詞： e.g. <i>erschießen</i> etc.	CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)	y
使役的所有変化動詞： e.g. <i>übergeben</i> etc.	CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)	z
共動作主動詞： e.g. <i>helfen</i> etc.	[DO (x, y) & DO (y)] (s)	x
効果動詞： e.g. <i>gefährden</i> etc.	[BE (z) & DO (x)] (s)	z

派生名詞化が状況を唯一に同定して指示する「状況の外延的表現」であり得るのに対し、不定詞名詞化は具体的状況を同定して指示することのない「状況の内包的表現」である（cf. 7.5 節）。そのため (401a) のように具体的状況を指示する派生名詞化は、(401b) のように不定詞名詞化にはパラフレーズすることができない。

- (401) a. Im kommenden Jahr jährt sich **die Besteigung des Mount Everest** durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay zum 50sten Mal. (DWDS: Der Tagesspiegel, 22.12.2002)
- in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the 50th times.DAT
- 来年にはサー・エドモント・ヒラリーとテンジン・ノルゲイによるエベレスト山登頂から 50 年を迎える
- b. ^{??}Im kommenden Jahr jährt sich **das Besteigen des Mount Everest** durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay zum 50sten Mal.
- in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the 50th times.DAT

具体的状況は状況の参加者の存在を含意するので、具体的状況を指示する派生名詞化では、構造項は、仮に明示的に表されなくても文脈などを通じて理解され得る。一方、あくまで「状況の内包的表現」である不定詞名詞化では、状況の参加者の存在は含意されず、項に関する情報は明示的に表現されなければ与えられない。そのため、他動詞の不定詞名詞化では、基盤動詞の目的語の項が後置属格の形をとる属格項として義務的に表される。

(402) a. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Die Fertigstellung** ^{OK}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completing.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

b. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Das Fertigstellen** ^{??}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completising.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

残念ながらそのショーケースは一月より前には届けられません。高い
 需要のため、一か月以内で(その家具を)仕上げることはできません。

他動詞の主語の項は、不定詞名詞化では母文の項によって束縛され、解釈上の
 「主語」となることで理解される (cf. 7.5.2 節)。

(403) a. Vor **dem Renovieren_i der Wohnung** legt der Maler_i
 before the renovating.DAT the apartment.GEN submit.3SG.PRS the painter.NOM
 einen Kostenvoranschlag vor. (Ehrich 2002a: 84)
 a cost_estimate.ACC PTCL

(塗装業者が)住宅のリフォームを始める前に、塗装業者は費用の見
 積もりを提示する

b. Vor **dem Verlesen_i des Urteils** begann der Richter_i zu husten.
 before the reading.DAT the verdict.GEN begin.3SG.PST the judge.NOM to cough.INF
 (Ehrich 2002a: 84)

(裁判官が)判決を読み上げる前、裁判官は咳を始めた

(404) a. [?]Vor **dem Renovieren_i der Wohnung** kann sie_j nicht
 before the renovating.DAT the apartment.GEN can.3SG.PRS she.NOM not
 einziehen. (Ehrich 2002a: 83)
 move_in.INF

b [?]Vor **dem Verlesen_i des Urteils** darf **der Angeklagte_j** den
 before the reading.DAT the verdict.GEN may.3SG.PRS the defendant.NOM the
 Saal nicht verlassen. (Ehrich 2002a: 83)
 hall.ACC not leave.INF

以上から，この論文の4つの問題提起のうち，Q1には，A1の答えが与えられる。

Q1. 基盤動詞の項と名詞化の項の対応関係は，どのような原理に基づくどのような規則によって定式化できるか

A1 状況の参与者を表す基盤動詞の項は，名詞化の潜在的な項候補となる。派生名詞化では，基盤動詞の種類に応じた「状況の同定を可能とする項」が構造項となり，指示される状況の同定に寄与する限りにおいて，nP配下のNP指定部に属格項として任意に表される。「状況の内包的表現」にとどまる不定詞名詞化では，状況の参与者の情報は，属格項として表されるか，母文の項によって束縛されることで与えられる。

第 II 部：目的語属格の欠如と状況の同定

9. 目的語属格の欠如

第 I 節で取り上げた活動動詞，所有動詞，使役的状态変化動詞，使役的所有変化動詞，効果動詞の名詞化では，いずれも基盤動詞の対格目的語となる項に後置属格の形をとる属格項としての実現が認められる (cf. (405a-e))。

(405) a. 活動動詞の名詞化：

is [DO (x, y) (s)]

Die Behandlung Peters_y dauert noch an.

the treatment.NOM Peter.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL

ペーターの_y 治療が続いている

b. 所有動詞の名詞化：

is [POSS (x, y) (s)]

Bei diesem Krieg ging es **um den Besitz Schlesiens**_y

in this war.DAT go.3SG.PST it.NOM about the possession.ACC Silesia.GEN

この戦争はシュレージエンの_y 領有を巡るものだった

c. 使役的状态変化動詞の名詞化：

is [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y) (s)))]

Die Erschießung Peters_y geschah des Nachts.

the shooting.NOM Peters.GEN occur.3SG.PST the night.GEN

ペーターの_y 射殺は夜行われた

d. 使役的所有変化動詞の名詞化：

is [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z) (s)))]

Die Übergabe Peters_z erfolgte termingemäß.

the handover.NOM Peter.GEN take_place.3SG.PST on_schedule

ペーターの_z 引き渡しは期日通り行われた

e. 効果動詞の名詞化：

is [[BE (z) & DO (x, y)] (s)]

Die Gefährdung Peters_z wurde bewiesen.

the endangering.NOM Peter.GEN PASS.3SG.PST prove.PTCP

ペーターの_z 危機的状况が証明された

(405') a. 活動動詞 :

∃s [DO (x, y) (s)]

Der Arzt behandelt Peter_y

the doctor.NOM treat.3SG.PRS Peter.ACC

医者がペーターを_y 治療する

b. 所有動詞 :

∃s [POSS (x, y) (s)]

Die Habsburger besaßen Schlesien_y

the Habsburgs.PL.NOM possess.3PL.PST Silesia.ACC

ハプスブルク家がシュレージエンを_y 領有していた

c. 使役的狀態変化動詞 :

∃s [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y) (s)))]

Die Geheimpolizei hat Peter_y erschossen.

the secret_police.NOM PRF.3SG.PRS Peter.ACC shoot.PTCP

秘密警察がペーターを_y 射殺した

d. 使役的所有変化動詞 :

∃s [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z) (s)))]

Er hat der Polizei Peter_z übergeben.

he.NOM PRF.3SG.PRS the police.DAT Peter.ACC hand_over.PTCP

彼は警察にペーターを_z 引き渡した

e. 効果動詞 :

∃s [[BE (z) & DO (x, y)] (s)]

Seine Familie gefährdet Peter_z

his family.NOM endanger.3SG.PRS Peter.ACC

彼の家族はペーターを_z 危険にさらしている

したがって、名詞化の項には、一見して (406) の一般化が成り立つように思われる。

(406) 目的語属格の一般性

名詞化において、基盤動詞の対格目的語は、一般に後置属格の形をとる属格項として実現できる

しかし、名詞化の中には (406) の一般化が当てはまらず、基盤動詞の対格目的語を属格項として実現しないものが存在することが知られている。これには、

例えば、*Schlag*「殴打」という名詞化が該当する。*Schlag*がとる属格は、一見して目的語属格として解釈できてもよさそうな場合であっても、常に主語属格として解釈される (cf. (407)/(407'))。以下ではこの現象を「目的語属格の欠如」と呼ぶ。

- (407) **Der Schlag des Nachbarn hat sich vor Mitternacht ereignet.**
 the hit.NOM the neighbor.GEN PRF.3SG.PRS REF.ACC before midnight
 happen.PTCP
 = [隣人が誰かを殴ること] が夜半前に起こった
 ≠ [誰かが隣人を殴ること] が夜半前に起こった

- (407') a. **Der Nachbar schlug das Opfer.**
 the neighbor.NOM hit.3SG.PST the victim.ACC
 隣人は被害者を殴った
- b. **Der Täter schlug den Nachbarn.**
 the offender.NOM hit.3SG.PST the neighbor.ACC
 犯人は隣人を殴った

目的語属格の欠如は、先行研究において、しばしば周辺的で一般的な規則から外れた例外的なもののみなされ (cf. Lindauer 1995, Bücking 2012 etc.), 積極的な関心は向けられてこなかった。しかし、言語学の研究はこれまで往々にして周辺的な現象の観察から多くの示唆を得ることで発展してきただけに、周辺のだからといって目的語属格の欠如という現象の研究上の価値を低く見積もる理由とはならない。むしろ、一見例外的と思える現象であるからこそ、これを例外とみなさず、他の一般的な事例と同じように扱うことができれば、そのような枠組みは、一般性の高い優れた理論化と評価することができよう。

第II部では、この目的語属格の欠如という現象に注目し、この現象が第I部で行った理論化から自然に予見されるものであることを明らかにする。派生名詞化の構造項が「状況の同定を可能とする項」であるというこの論文の立場に立てば、目的語属格の欠如という現象は、決して例外的とはみなされないのである。

第II部の構成は以下の通りである。10章では、目的語属格の欠如を巡って先行研究において提案されたアプローチである形態論仮説について、その問題点を指摘する。11章では、目的語属格を欠く名詞化の典型例である物理作用動詞

の名詞化に注目する。12章では、形態論仮説に対する反証となる「目的語属格を欠く ung 名詞化」である *Warnung* と *Mahnung* について論じる。13章では、11章と12章で得られた「目的語属格の欠如が、『二次的』な対格の付与を背景とする」という洞察から、「二次的な対格目的語」というキーワードの下で論じられることの多い動詞クラスである適用動詞の名詞化に注目する。14章では、目的語属格を欠くと考えられる名詞化に少数ながら認められる目的語属格の実例について考察する。15章では第II部のまとめを行う。最後に16章において、この論文全体についてまとめ、この論文が言語学の研究にもたらす示唆と展望について述べる。

10. 形態論仮説

目的語属格の欠如を巡っては、Lindauer (1995), Ehrich (2002ab), Rapp (2006) といった先行研究において、名詞化の形態論的な種別との関連性が指摘されている。このアプローチを「形態論仮説」と呼ぶ。形態論仮説では、目的語属格の欠如という現象を、動詞語幹をそのまま (e.g. *schlagen*「殴る」> *Schlag*「殴打」) あるいは幹母音の変音 (e.g. *treten*「蹴る」> *Tritt*「蹴り」) によって名詞化する語幹名詞化と関係づける。例えば (408) について、この例に目的語属格が認められないのは、*Tritt* という名詞化が語幹名詞化であることに起因するという説明がなされる。

(408) **Der Tritt des Gegenspielers** ereignete sich in der 85.
 the kick.NOM the opponent.GEN occur.3SG.PST REF.ACC in the 85th
 Minute.
 minut.DAT

= [相手選手が誰かを蹴ること] が試合開始後 85 分に起きた
≠ [誰かが相手選手を蹴ること] が試合開始後 85 分に起きた

(408') **Der Mann trat seinen Nachbarn.**
 the man.NOM kick.3SG.PST his neighbor.ACC
 男が隣人を蹴る

本章では、この形態論仮説の妥当性について批判的に検証する。10.1 節では、形態論仮説の基本的な考え方である語幹名詞化の関与性について述べる。10.2 節では、語幹名詞化が「ゼロ接尾辞名詞化」と「転成名詞化」に分けられるとする Rapp (2006) の仮説を取り上げる。10.3 節では、形態論仮説が抱える問題点を指摘する。10.4 節では、この章の内容を要約する。

10.1. 語幹名詞化の関与性

形態論仮説の先駆けとなった研究が Lindauer (1995) および Ehrich (2002ab) である。Lindauer (1995) と Ehrich (2002ab) は、目的語属格の欠如と名詞化の形態論的な種別を、「語幹名詞化において目的語属格が欠如する」という形で関係づけている。例えば、Ehrich (2002b) は、(409) の名詞化において目的語属格が欠如する一方、(410) の名詞化では目的語属格が認められるという対比から、目的語属格の欠如は語幹名詞化の特徴であると論じている。

- (409) 語幹名詞化
- a. *der Kuss des Rings (Ehrich 2002b: 75)
 the kiss.NOM the ring.GEN
- b. *der Stoß des Diebs von der Mauer (Ehrich 2002b: 71)
 the push.NOM the burglar.GEN out_of the wall.DAT
- (409') a. Er küsst den Ring.
 he.NOM kiss.3SG.PRS the ring.ACC
 彼は指輪に口づけする
- b. Er stößt den Dieb von der Mauer.
 he.NOM push.3SG.PRS the burglar.ACC out_of the wall.DAT
 彼は泥棒を塀から突き落とす
- (410) ung 名詞化
- a. die Behandlung des Patienten (Ehrich 2002b: 75)
 the treatment.NOM the patient.GEN
 患者の処置
- b. die Messung der Emission (Ehrich 2002b: 75)
 the measuring. NOM the emission.GEN
 放出量の測定
- (410') a. Der Arzt behandelt den Patienten.
 the doctor.NOM treat.3SG.PRS the patient.ACC
 医師が患者を処置する
- b. Er misst die Emission.
 he.NOM measure.3SG.PRS the emission.ACC
 彼は放出量を測定する

しかし、「語幹名詞化において目的語属格が欠如する」という想定が正しくな
 いことは、経験的に明らかである。というのも、語幹名詞化だからといって、
 必ずしも目的語属格の欠如が認められるというわけではないからである。例え
 ば、*Kauf*「購入」、*Abschuss*「撃墜」、*Besuch*「訪問」といった名詞化はどれも語
 幹名詞化であるが、(411) に示すように、目的語属格を容認する。

- (411) a. **Der Kauf der Software** sei zu spät erfolgt
 the purchase.NOM the software.GEN PRF.3SG.SBJ1 too late take_place.PTCP
 ソフトウェアの購入は遅すぎた (DWDS: Berliner Zeitung, 06.06.1998)
- b. daß **der Abschuss des RB-47-Flugzeugs** über internationalen
 that the shooting_down.NOM the RB-47-aircraft.GEN on international
 Gewässern erfolgt sei (DWDS: Archiv der Gegenwart, 2001 [1960])
 waters.DAT occur.PTCP PRF.3SG.SBJ1
 RB-47 航空機の撃墜が国際水域上で起こったと
- c. **Der Besuch des Museums** ist kostenlos.
 the visit.NOM the museum.GEN be.3SG.PRS free
 その博物館への入館は無料だ。 (DWSD: Die Zeit, 17.02.2000)

- (411') a. Sie kauften die Software.
 they.NOM buy.3PL.PST the software.ACC
 彼らはソフトウェアを購入した
- b. Sie haben das RB-47-Flugzeug abgeschossen.
 they.NOM PRF.3PL.PRS the RB-47-aircraft ACC shoot_down.PTCP
 彼らは RB-47 航空機を撃墜した
- c. Sie besuchten das Museum.
 they.NOM visit.3PL.PST the museum.ACC
 彼らは博物館を訪ねた

なお、(411) の属格は、(412) のように 1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞³² に置き換えることができることから、確かに属格項である。

- (412) a. **Mit dem Kauf Daeis** schließt der Hauptstadtclub
 with the purchase.DAT Daei.GEN close.3SG.PRS the capital_city_club.NOM
 vorerst seine Transferaktivitäten für die kommende Spielzeit
 for_the_time_being his transfer_activity.ACC for the next season.ACC
 ab. (DWDS: Berliner Zeitung, 23.06.1999)
 PTCL
 ダーイー選手の購入でもって、その首都のクラブチーム（ヘルタ・ベルリン）は翌シーズンのための移籍活動をひとまず締めくくった

³² Daei 「ダーイー」の発音は ['da:ji:] で 2 音節である。

- b. Haben einflussreiche republikanische Spender **den Abschuss**
 PRF.3PL.PRS influential republican promoter.PL.NOM the knocking_out.ACC
Trumps befohlen? (DWDS: Webkorpus 2016c)
 Trump.GEN order.PTCP
 影響力のある共和党の後援者たちはトランプの追い落としを命じた
 のだろうか
- c. **Mit dem Besuch Kubas** könnte Franziskus den
 with the visit.DAT Cuba.GEN can.3SG.SBJ2 Francis.NOM the
Annäherungsprozess weiter vorantreiben.
 process_of_rapprochement.ACC forward push.INF
 (DWDS: Die Zeit, 22.04.2015, Nr. 16)
 キューバを訪問することで、教皇フランシスコは（キューバとアメリカの）歩み寄りをさらに推し進めることができるかもしれない

したがって、「語幹名詞化において目的語属格が欠如する」という一般化は経験的に成り立たない。

10.2. ふたつの語幹名詞化

目的語属格が欠如する *Schlag* や *Tritt* などの名詞化と、目的語属格が認められる *Kauf*, *Abschuss*, *Besuch* などの名詞化の違いを巡って、Rapp (2006) は、これらが「語幹名詞化」という単一の形態論的種別に属すのではなく、派生プロセスの異なる 2 種類の名詞化に分類されると主張している。Rapp (2006) によれば、*Kauf* や *Abschuss* などの目的語属格を認める名詞化は、発音されない派生接尾辞（ゼロ接尾辞）をもったゼロ接尾辞名詞化 (Nullsuffigierung) であるのに対し、*Schlag* など目的語属格を欠く名詞化は、派生接尾辞をもたない転成名詞化 (Konversion) であるという (cf. (413))。

- (413) a. [N [V Schlag]] ... 転成名詞化
 b. [N [V Kauf] -Ø] ... ゼロ接尾辞名詞化

Rapp (2006: 425ff.) は、転成名詞化では基盤動詞に、①atelic であること、②「接頭辞」のない動詞であることという 2 つの条件が課せられるとしている。ここで言う「接頭辞」には、*be-* や *ver-* のようないわゆる非分離の接頭辞だけでなく、*ab-* や *an-* のような分離する動詞不変化詞も含まれる (cf. Rapp 2006: 429)。

一つ目の条件を支持するのは、目的語属格を欠く名詞化が現に *atelic* な動詞を基盤とするという事実である。例えば *schlagen* や *treten* は、(414) に示すように *atelic* な動詞である。

- (414) a. Sie schlugen den Mann ^{OK}fünf Minuten lang/ *in fünf Minuten.
 they.NOM hit.3PL.PST the man.ACC five munit.PL.ACC long/ in five munit.PL.DAT
 彼らは男を ^{OK}5 分間 / *5 分で 殴った
- b. Sie traten den Mann ^{OK}fünf Minuten lang/ *in fünf Minuten.
 they.NOM kick.3PL.PST the man.ACC five munit.PL.ACC long/ in five munit.PL.DAT
 彼らは男を ^{OK}5 分間 / *5 分で 蹴った

他方、目的語属格の可能なゼロ接尾辞名詞化とされる *Kauf*「購入」や *Raub*「強盗」は、(415) に示すように *telic* な動詞を基盤としている。

- (415) a. Er kaufte das Haus *eine Stunde lang/ ^{OK}in einer Stunde.
 he.NOM buy.3SG.PST the house.ACC one hour.ACC long/ in one hour.DAT
 彼は家を *一時間 / ^{OK}一時間で 購入した
- b. Er raubte das Geld *eine Stunde lang/ ^{OK}in einer Stunde.
 he.NOM rob.3SG.PST the money.ACC one hour.ACC long/ in one hour.DAT
 彼はそのお金を *一時間 / ^{OK}一時間で 盗んだ

第二の条件に関しては、*Beschuss*「爆撃」や *Besuch*「訪問」といった語幹名詞化が目的語属格をとるという事実がこれを支持するとされる (cf. (416))。 *Beschuss* や *Besuch* は *atelic* な動詞を基盤動詞としているが (cf. (417))、接頭辞をもち第二の条件を満たさないことから、Rapp (2006) の基準に照らせばゼロ接尾辞名詞化に該当するのである。

- (416) a. der Beschuss der Stadt (Rapp 2006: 430)
 the shootinge.NOM the city.GEN
 都市の爆撃
- b. der Besuch des Museums (Rapp 2006: 430)
 the visit.NOM the museum.GEN
 博物館の訪問

- (417) a. Sie beschossen die Stadt ^{OK}eine Stunde lang/*in einer Stunde.
 they.NOM shoot.3PL.PST the city.ACC one hour.ACC long/ in one hour.DAT
 彼らはその都市を ^{OK}一時間/*一時間で 爆撃した
- b. Sie besuchte das Museum eine Stunde lang/ in einer Stunde.
 she.NOM visit.3SG.PST the museum.ACC one hour.ACC long/ in one hour.DAT
 彼女は博物館を ^{OK}一時間/*一時間で 訪問した

Rapp (2006) によれば、目的語属格の欠如は、ふたつの語幹名詞化のうち、転成名詞化に見られるという。

10.3. 形態論仮説の問題点

しかし筆者は、目的語属格の欠如を語幹名詞化ないし転成名詞と関係づける形態論仮説には問題があると考えます。形態論仮説のもっとも大きな問題は、Lindauer (1995) や Ehrich (2002ab) にしても Rapp (2006) にしても、「ung 名詞化では目的語属格が常に可能である」という誤った前提を出発点としていることである。というのも、話者によって判断に差はあるものの、(418) のように、ung 名詞化にも目的語属格を欠くものが存在するからである。³³

- (418) **Die Warnung des Mannes hat nicht gefruchtet.**
 the warning.NOM the man.GEN PRF.3SG.PRS not work.PTCP
 = [男が警告すること] は成果がなかった
 ≠ [男に警告すること] は成果がなかった

- (418') Der Arzt warnte den Mann.
 the doctor.NOM warn.3SG.PST the man.ACC
 医者は男に警告した

加えて、Rapp (2006) が転成名詞化の条件とする 2 つの条件は、第二の条件、すなわち接頭辞の関与性という点に関して誤っている。Rapp (2006) は *be-*, *er-*,

³³ この例については、判断に異を唱える話者もあり、実際に i. のような実例も認められる。しかし 14 章で詳述するように、i. のような例は規則的な分布をなすことから、これはあくまで一定の条件下において二次的に認められるものであると考えられる。

i. **Zur Warnung der Bevölkerung kann der integrierte Lautsprecher für Durchsagen verwendet werden.** (DWDS: Webkorpus 2016c)
 to_the warning.DAT the citizen.GEN can.3SG.PRS the integrated loudspeaker.NOM for announcement.PL.ACC use.PTCP PASS.INF
 市民を警告するためには内蔵スピーカーをアナウンスに利用することができる

*ver-*などのいわゆる非分離の接頭辞だけでなく、*ab-*, *aus-*, *an-*といった分離の動詞不変化詞も「接頭辞」に含むと述べている (cf. Rapp 2006: 429)。しかし、この条件によってゼロ接尾辞名詞化となっている名詞化の例を、Rapp (2006) は、非分離の接頭辞 *be-*および *ver-*の例である (419) しか示していない。

- (419) a. *der Beschuss* *der Stadt* (Rapp 2006: 430)
 the shootinge.NOM the city.GEN
 都市の爆撃
- b. *der Besuch* *des Museums* (Rapp 2006: 430)
 the visit.NOM the museum.GEN
 博物館の訪問
- c. *der Vertrieb* *der CDs* (Rapp 2006: 430)
 the sale.NOM the CD.PL.GEN
 CDの販売

これらの例は、(419ab) から、*be-*の関与性については支持するものとも言えるかも知れないが、他の接頭辞、まして不変化詞の関与性について、いかなる示唆をもたらすものでもない。(419c) は *ver-*の例であるが、この名詞化に対応する動詞句 *die CDs vertreiben* 「CDを販売する」が *atelic* な状況を表すのは、*CDs* のように数量的に特定されない複数形の項をとっていることによる作用であり、*vertreiben* 自体は *telic* なのが普通の使役的所有変化動詞である。したがって、(419c) は *ver-*という接頭辞の関与性を示す例として適切な例ではない。

Rapp (2006) が分離の動詞不変化詞を「接頭辞」に含めていることは一層問題である。この意味での「接頭辞」を持つがゆえにゼロ接尾辞名詞化である例として、Rapp (2006: 429) は *Abschuss* 「撃墜」を挙げている。

- (420) *der Abschuss* *des Flugzeuges* (Rapp 2006: 430)
 the shooting_off.NOM the aircraft.GEN
 飛行機の撃墜

しかし、*abschießen* はそもそも *atelic* ではなく (cf. (421)), Rapp (2006) が転成名詞化の条件とする 2 つの条件のもう一方の条件である「*atelic* な動詞の名詞化であること」という条件を満たしていない。つまり、*Abschuss* に目的語属格が認められることが、本当に「接頭辞」を有するためにゼロ接尾辞名詞化がなされた結果なのかは定かではない。

- (421) Sie schossen das Flugzeug *eine Stunde lang/ ^{OK}in einer
 they.NOM shoot.3PL.PST the aircraft.ACC one hour.ACC long/ in one
 Stunde ab.
 hour.DAT PTCL
 彼らは飛行機を *一時間 / ^{OK}一時間で 撃墜した

さらに、分離する不変化詞をもつ動詞の語幹名詞化が目的語属格を認めるゼロ接尾辞名詞であるとする主張には、明確な反例も存在する。例えば、*anrufen*「電話を掛ける」と *aufrufen*「呼びたてる」は、(422) に示す通り、ともに *atelic* な動詞で、それぞれ *an-*と *auf-*を持つことから、Rapp (2006) が言う意味において「接頭辞」をもつ動詞である。にもかかわらず、*Anruf*には、(423) に示すように、(423b) の *Aufruf*とは異なり目的語属格が認められないのである。

- (422) a. Sie rief die Frau eine Stunde lang an.
 she.NOM call.3SG.PST the woman.ACC one hour.ACC long PTCL
 彼女はその女性に一時間電話を掛けた
- b. Man rief den Schüler eine Minute lang auf.
 one.NOM call.3SG.PST the student.ACC one minute.ACC long PTCL
 生徒を一分間呼び続けた
- (423) a. **Der Anruf der Frau** erfolgte mit guten Absichten.
 the call.NOM the women.GEN take_place.3SG.PST with good intention.PL.DAT
 = [その女性が誰かに電話をかけること] は善意で行われた
 ≠ [誰かがその女性に電話をかけること] は善意で行われた
- b. „Brahms, Johannes“ hört sich **nach dem Aufruf eines**
 “Brahms Johannes” sound.3SG.PRS REF.ACC like the call.DAT a
Schülers bei der Zeugnisverteilung an.
 student.GEN in the distribution_of_certificate.DAT PTCL

(DEREKO: Wikipedia, 2011)

「ブラームス、ヨハネス」と、成績配布の際に生徒を呼びたてる風に聞こえた

したがって、「接頭辞」を目的語属格の可能なゼロ接尾辞名詞化と関係づける Rapp (2006) の考えは正しくない。

10.4. まとめ

本章では、目的語属格の欠如という現象を巡って先行研究で唱えられたテーゼである形態論仮説について批判的に検証した。形態論仮説では、目的語属格の欠如が、語幹名詞化ないし転成名詞化という名詞化の形態論的な種別と関係づけられる。しかし、*Warnung* のように *ung* 名詞化でも目的語属格の欠如が観察されるという事実に鑑みれば、目的語属格の欠如という現象を名詞化の形態論的な種別と結びつけるのは早計であると言える。

11. 物理作用動詞の名詞化における目的語属格の欠如

先行研究において目的語属格を欠くとされている名詞化を改めて観察すると、*Schlag*「殴打」や *Tritt*「蹴り」など、「標的への物理的作用」を表す動詞（以下、「物理作用動詞」）の名詞化が数多く含まれていることが分かる。その一例を(424)に挙げる。

- (424) *Schlag*「殴打」< *schlagen*「殴る」、*Tritt*「蹴り」< *treten*「蹴る・踏む」、*Kuss*「口づけ」< *küssen*「口づけする」、*Stoß*「突き」< *stoßen*「突く」
usw.

この事実は、目的語属格の欠如という現象に、物理作用動詞という動詞クラスの特徴が関与していることを示唆するものである。そこで本章では、物理作用動詞の名詞化に注目し、名詞化において目的語属格が欠如するメカニズムについて考察する。

11.1 節では物理作用動詞によって表される「人を殴る」などの人を標的とする物理作用において、被動者は「殴られる人」ではなく、身体部位こそが「真の被動者」であることを主張する。11.2 節と 11.3 節では、物理作用動詞が形成する「与格所有者構文」と「対格所有者構文」の2種類の構文に注目し、その背景にある格付与の仕組みとして「二次的格付与」の概念を導入する。11.4 節では、物理作用動詞が表す状況において、身体部位の所有者が状況の同定を可能とする項ではないことを明らかにする。11.5 節ではこの章のまとめを行う。

11.1. 物理作用動詞における真の被動者

10 章で論じた形態論仮説に立脚する Rapp (2006) は、*schlagen* などの動詞を、単純な活動動詞とみなしている。Rapp (2006) の認識では、「隣人が男を殴る」という状況は (425) の意味形式で分析されるような活動の一種であり、意味役割に関して、「隣人」は動作主、「男」は被動者であるとされている。

- (425) $\exists s$ [DO (x, y) (s)]
Der Nachbar_x schlug den Mann_y
the neighbor.NOM hit.3SG.PST the man.ACC
隣人が_x 男を_y 殴った

しかし、「人を殴る」という状況は、全体としての人を被動者とみなすのではなく、あくまでもその人の一部、すなわち身体部位のみを被動者とみなし、人

は身体部位の所有者として間接的に状況に参加しているにすぎないと考えられることもできる。そのような見方をした場合、「隣人が男を殴る」という状況は、(425)ではなく、(426)の意味形式によって分析することができよう。

(426) $\exists s \exists y$ [DO (x, y) (s)] & POSS (z, y)
Der Nachbar_x schlug den Mann_z
 the neighbor.NOM hit.3SG.PST the man.ACC
隣人が_x 男 (の身体部位)_z 殴った

(426) のような分析を行う経験的な根拠は、*schlagen* などの物理作用動詞が、いわば「真の被動者」である身体部位を、(427) のように前置詞句として明示できるということから与えられる。

(427) $\exists s$ [DO (x, y) (s)] & POSS (z, y)
Der Nachbar_x schlug den Mann_z ins Gesicht_y
 the neighbor.NOM hit.3SG.PST the man.ACC into_the face.ACC
隣人が_x 男の_z 顔を_y 殴った

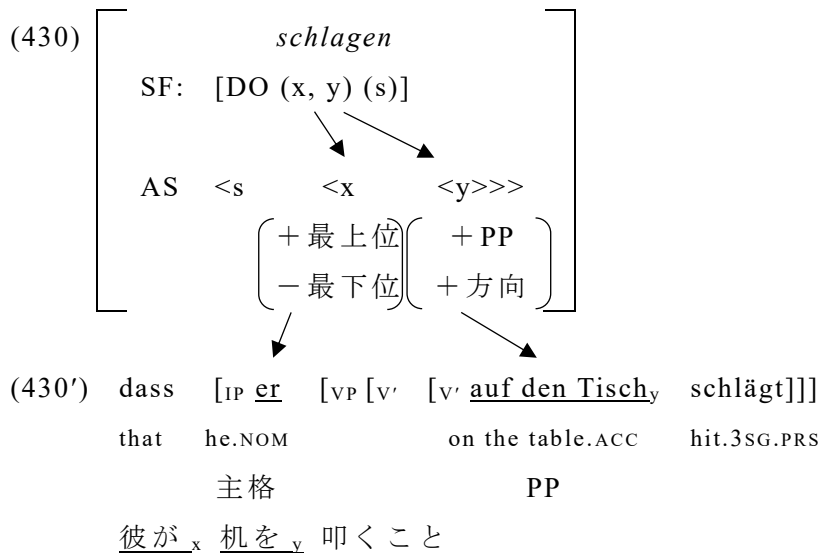
また、(427) において、身体部位を明示する前置詞句が方向の前置詞句であるということも、この項を「真の被動者」として分析する根拠となる。というのも、*schlagen* などの物理作用動詞は、必ずしも人に向けた物理作用を表すわけではなく物に向けた物理作用を表すこともあり、そのような場合、被動者は物理作用が向けられる物であると考えられるが、この時、物理作用が向けられる物は (427) の身体部位と同じように、(428)/(429) に示すような方向の前置詞句として表されるからである。この項は、身体部位の所有者と違い、対格とはならない (cf. 清野 1992)。

(428) a. Er hätte vielleicht so **auf den Tisch** geschlagen,
 he.NOM PRF.3SG.SBJ perhaps in_the_way on the table.ACC hit.PTCP
 dass Gläser zersprungen wären. (DWDS: Bild, 05.11.2002)
 that glass.PL.NOM shatter.PTCP PRF.3PL.SBJ2
 彼はガラスが粉々になる程強く机を叩いたのかも知れない

b. Er habe mehrfach **gegen die Tür** getreten,
 he.NOM PRF.3SG.SBJ1 several_times against the door.ACC kick.PTCP
 彼は何度もドアを蹴り飛ばしたらしい (DWDS: Die Zeit, 04.06.2013)

- (429) a. *Er hat den Tisch getreten. (清野 1992: 31)
 he.NOM PRF.3SG.PRS the table.ACC kick.PTCP
- b. *Er hat den Tisch geklopft. (清野 1992: 31)
 he.NOM PRF.3SG.PRS the table.ACC knock.PTCP

つまり、物理作用動詞は被動者を方向としてとらえる動詞であり、この項は、項構造において、構造項ではなく、前置詞項として語彙的な指定を受けているのだと考えられる。



物理作用動詞の項構造において被動者が前置詞項として指定されているのであれば、先の (427) の文でも、被動者はあくまで前置詞句として表された *ins Gesicht* であって、*den Mann* ではないということになる。

もっとも、(431) のように、一見すると物理作用動詞が被動者を対格で実現しているように思われる例も存在する。

- (431) a. Er trat **den Ball** mit der Innenseite des Schuhs,
 he.NOM kick.3SG.PST the ball.ACC with the inside.DAT the shoe.GEN
 (DWDS: Die Welt, 28.09.2005)
 彼はボールをシューズの内側で蹴った

b. Sie müssen nicht mehr Teppich klopfen,
 you.NOM must.3PL.PRS not anymore carpet.ACC knock.INF

(DWDS: Die Zeit, 06.09.1974)

あなた方はもう絨毯を叩く必要はありません

しかし、(431) のように対格で表すことができるのは、*treten*「蹴る」ならば「ボール」、*klopfen*「叩く」ならば「絨毯」など、物理作用による所在変化や状態変化が含意される項に語彙的に限定されている (cf. 清野 1992)。すなわち、(431a) は蹴ってボールを「飛ばす」ことを含意する表現であり、(431b) は叩いて絨毯から「ホコリを取り除く」ことを含意する表現である。これらは、(432) のようないわゆる結果構文の結果述語が潜在化したものと見なすことができ、対格で表されているのは単なる被動者ではなく、所在物または Theme であると考えられる。

(432) a. \exists s CAUSE (DO (x, y), BECOME (LOC (y, Place))) (s)

Er_x trat den Ball_y ins Tor_{Place}
 he.NOM kick.3SG.PST the ball.ACC into_the goal.ACC
 彼は_x ボールを_y ゴールに_{Place} 蹴り入れた

b. \exists s CAUSE (DO (x, y), BECOME (BE (y))) (s)

Sie_x klopfen den Teppich_y sauber.
 they.NOM knock.3PL.PRS the carpet.ACC clean
 彼らは_x 絨毯を_y 叩いてきれいにする

11.2. 一次的格付与による与格所有者構文の形成

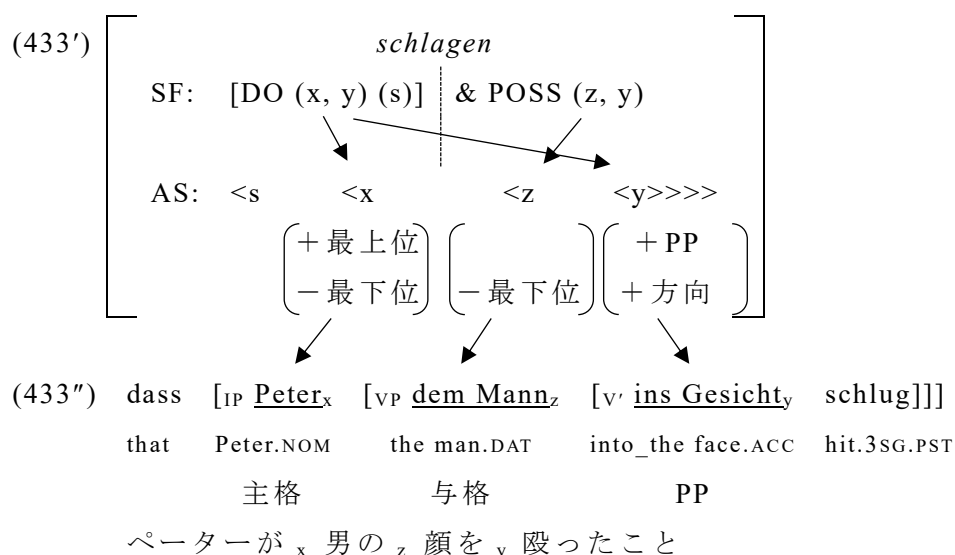
「人を殴る」という状況の「真の被動者」が人ではなく身体部位であると考えられると、この状況は、DO によって表される物理作用動詞本来の意味形式に、POSS によって表される所有関係が並列された (433) の意味形式によって語彙分解することができる。

(433) 人に向けた物理作用：

\exists s [DO (x, y) (s)] & POSS (z, y)

4.1 節で論じた動詞の意味形式と項構造の関係に従えば、(433) の意味形式では x, y, z の 3 項に構造項となる資格があることになるが、y については前節で述べたように語彙的な指定によって構造項ではなく前置詞項として項構造に記録

されていると考えられるので、実際に構造項となるのは x と z の 2 項である。4.3.4 節で述べたように、並列された意味形式では、項の階層性は、並列された局所構造ごとに評価された後、局所構造ごとの評価がつけ合わせられてひとつの項構造に統合される。x は DO 関数の第 1 項であるから [+最上位, -最下位] という評価が与えられるのに対し、z は DO を含まない局所構造にのみ現れていることから、4.3.3 節で述べたように、[±最上位] の素性について指定されない [-最下位] という評価を得る (cf. (433'))。すると、x は最上位項として IP 指定部に、z は中位項として VP 指定部に投射されるので、x には主格、z には与格が与えられる。y は語彙的な指定によって方向の前置詞句として表されるので、(433) の意味形式を反映した統語構造として、(433'') の統語構造が導かれる。身体部位の所有者が与格で表されることから、この統語構造を以下では「与格所有者構文」と呼ぶ。



与格所有者構文は、意味論の関係をストレートに統語論の構造に反映した結果として導かれることから、物理作用動詞が人に向けた物理作用を表す際に形成される統語構造として、基本的な型をなす (cf. 清野 1991)。名詞化において目的語属格が欠如する物理作用動詞は、すべて、この与格所有者構文を形成する動詞である。³⁴

³⁴ 一見して例外と思われる動詞に *küssen* 「キスする」がある。この動詞については、多くの辞書が与格所有者構文の例を記述していない。しかし、Duden (1984: 632) が口語的 (umgangssprachlich) ではあるが i. のような表現が可能としている他、インフォーマント (ノルトライン・ヴェストファーレン州出身の 20 代男性 2 名、女性 1 名、バーデン・ヴェルテンベルク州出身の 20 代男性 1 名) から i. が可能な文であるという

- (434) a. Peter trat dem Mann gegen das Bein.
 Peter.NOM kick.3SG.PST the man.DAT against the leg.ACC
 ペーターは男の脚を蹴った
- b. Peter stieß dem Mann in die Seite.
 Peter.NOM push.3SG.PST the man.DAT into the side.ACC
 ペーターは男の脇腹を小突いた

11.3. 二次的格付与による対格所有者構文の形成

schlagen などの動詞は、身体部位の所有者を常に与格で表すのではなく、(435a) のように対格でも表すことができる。また、その場合には、「真の被動者」である身体部位は任意となり、しばしば (435b) のように明示的には表されなくなる。すると、特に身体部位が明示されない (435b) では、身体部位の所有者が、一見して被動者として対格の目的語となっているようにも見える。

- (435) a. Peter schlug den Mann ins Gesicht.
 Peter.NOM hit.3SG.PST the man.ACC into_the face.ACC
 ペーターは男の顔を殴った
- b. Peter schlug den Mann.
 Peter.NOM hit.3SG.PST the man.ACC
 ペーターは男を殴った

しかし筆者は、(435) でも、あくまで被動者は身体部位であり、対格で表される人の項は、身体部位の所有者として間接的に状況に参加しているものとする。物理作用動詞が (435) のような文を形成する背景には、二次的格付与という格付与の仕組みと、交替と呼ばれる現象が関係している。

11.3.1. 交替現象と一次的・二次的格付与

ひとつの意味形式によって分析される状況に、複数の異なる統語構造が対応することがある。この現象を交替 (Alternation) と呼ぶ (cf. Rappaport & Levin 1988,

証言が得られた。

- i. Er hat ihr auf die Stirn geküßt. (Duden 1984: 632)
 he.NOM PRF.3SG.PRS her.DAT on the forehead.ACC kiss.PTCP
 彼は彼女の額に口づけした

Pinker 1996, Wunderlich 2000 etc.). 例えば, (436) の英語の例のようなものが, 典型的な交替であるとされる。

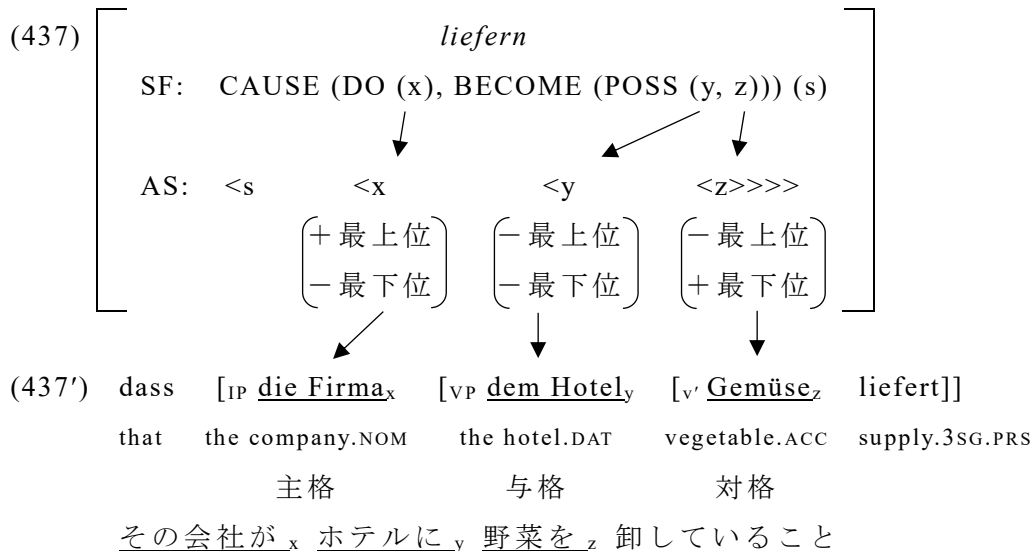
(436) a. John gave the book to Mary.

b. John gave Mary the book.

ジョンがマリーに本を与えた

交替という現象の存在は, 動詞の項と形式を関係づける仕組みが, 概念的な意味形式を通じてとらえられる関係を基盤としながらもそれだけで決まるものではなく, 意味形式の外に位置づけられるような関係による影響を受けながら多元的に決まるものであることを示している。

第 I 部の 4 章で詳細に論じたように, 動詞の項と形式の関係は, 「意味形式の関係における上位の項が, 統語論の構造においても上位の統語位置に表される」という写像論的な仕組みによってとらえられる。この写像論的な仕組みを, 筆者は一次的格付与 (Primäre Kasuszuweisung) と呼ぶ (cf. Kobayashi 2017)。一次的格付与は, 意味形式中の個体項が [±最上位] と [±最下位] の 2 つの素性による評価とともに構造項として項構造に記録され, 各項がその評価に応じた統語的位置へと投射されることで, 最終的に表層での統語的位置に見合った構造格を付与されるという手順で行われる。



一次的格付与は, 概念的な意味形式を通じてとらえられるような関係のみを反映して項と形式を関係づける仕組みである。これに対し, 概念的な意味形式の関係としてはとらえられないような関係を統語構造に反映するための仕組み

を、筆者は二次的格付与 (sekundäre Kasuszuweisung) と呼ぶ (cf. Kobayashi 2017)。また、二次的格付与によって項に対格を与える仕組みを特に二次的対格付与 (sekundäre Akkusativzuweisung) と呼び、二次的対格付与が行われる項を二次的対格項 (sekundärer Akkusativ) と呼ぶことにする。

二次的対格付与が行われる動詞の一例として、*fragen*「尋ねる」が挙げられる。*fragen* が表す状況は動作主たる「質問する人」、所有者 (= 経験者) たる「質問される人」、そして所有物たる「質問の内容」の3項が参与する状況とみなすことができるので、*fragen* の意味形式を、(438) のように語彙分解することにしよう。

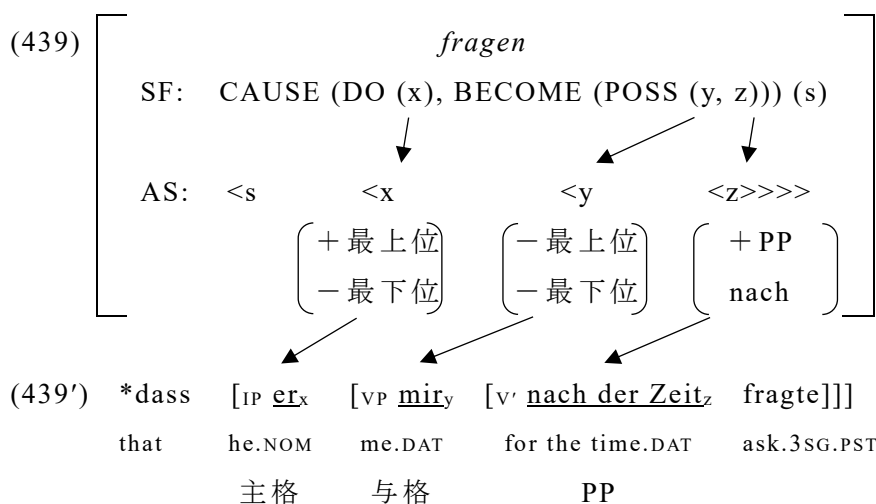
(438) Es [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)]

Er_x fragte mich_y nach der Zeit_z

he.NOM ask.3SG.PST me.ACC for the time.DAT

彼は_x 私に_y 時間を_z 尋ねた

(438) の意味形式には x, y, z の3つの個体項が含まれるが、*fragen* の場合、z は語彙的な指定により、通常 *nach* の前置詞項として実現する。³⁵ したがって、構造項となるのは x と y である。この時、意味形式の関係に厳密に従うなら、x は [+最上位, -最下位], y は [-最上位, -最下位] と評価されるので、x は主格、y は与格の項となることが予見される (cf. (439'))。ところが、実際には、*fragen* は x を主格、y を対格で実現する。



³⁵ この項は対格相当の項となることもあるが、その場合には *das* や *was* などの代名詞か、または対格相当の補文に限定される。

(439") dass [IP er_x [VP mich_y [V' nach der Zeit_z fragte]]]
 that he.NOM me.ACC for the time.DAT ask.3SG.PST
 主格 対格 PP

中位項である y に対して、階層的評価に適った与格ではなく、対格を与える仕組みが二次的対格付与である。fragen において二次的対格付与が行われる背景には、「人に物を尋ねる」という状況における「質問される人」と「質問の内容」の相対的な関係が関わっている。「質問の内容」が 3 人称でしかあり得ない物の項、それも具体的な物ではなく、情報のような抽象物であるのに対し、「質問される人」の項は、潜在的に 1 人称や 2 人称であり得る人の項である。したがって、項と項の相対的な関係において、y は「それについて何かを述べる対象」という意味での文の主題とするのに、z よりも相応しい。この「主題としてとりたてるのにどれほど相応しいか」という観点における項の関係を、以下では卓越性 (Salienz; salience) と呼ぶ。実際に、y は (440) のような受動態の文において主語となり、主題としてとりたてられる。

(440) Ich wurde nach der Zeit gefragt.
 I.NOM PASS.3SG.PST for the time.DAT aks.PTCP
 私は時間を尋ねられた

ドイツ語において、対格は、能動態において対格となる項のみが受動態の主語となり得るという点で、与格などの他の格と決定的に異なっている。³⁶ 主語はたいてい文の主題でもあるから、受動態には、対格項を主語に転じることで優先的に主題化する機能があるということが出来る。ところが、能動態の対格の項にのみ受動態の主語となることが認められるという制約により、受動態により項を主題化するためには、その項がそもそも能動態において対格の付与を受けることが前提となる。つまり、fragen において「尋ねられる人」の卓越性がいかに高かろうとも、もしこの項が能動態で与格の付与を受けていれば、受動態を利用した主題化はできないことになる。そこで、fragen では「尋ねられる人」を主題化できるように、二次的対格付与によって、能動態でも対格を与えているのである (cf. 藤縄 2005)。

³⁶ まさに通常受動文では主語となれない与格の項を主語に取り立てる手段として文法化してきたのが bekommen 受動である。

11.3.2. 二次的対格付与の手続きと ψ 素性

fragen などの動詞において二次的対格付与が行われるという考察は、具体的にどのような手続きによって、問題の項に対格が与えられるのかという問いをもたらす。

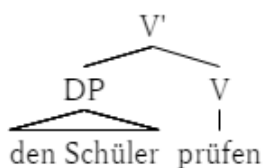
筆者は4章(4.2節)において、構造格としての対格の付与位置を、ひとまずVP補部と仮定した。

(441) 構造格が付与される構造条件 (= (90))

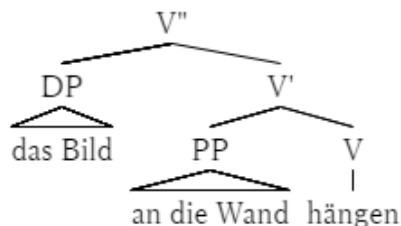
- a. 主格 : ... [_{IP} NOM [_{I'} ... I]] ...
- b. 対格 : ... [_{VP} [_{V'} ACC V]] ...
- c. 与格 : ... [_{VP} DAT [_{V'} ... V]] ...

しかし、対格項が現れる統語的位置は、必ずしもVPの補部、すなわちVの姉妹位置とは限らない。というのも、主要部後置型の語順をなし、[与格項—対格項—前置詞項—動詞]という配列を無標の語順とするドイツ語の動詞句では、前置詞項をとらず対格項をとる他動詞(e.g. *prüfen* 「テストする」)には対格項がVの姉妹位置となる(442a)の構造を想定できるものの、対格項と前置詞項をとる動詞(e.g. *hängen* 「掛ける」)では(442b)のように、対格項がVの姉妹位置ではなく、Vと前置詞項からなる節点V'の姉妹位置を占めると考えられるからである。

(442) a.



b.



そこで筆者は、対格の与えられる構造条件を、(443)のように改める。

(443) 対格が付与される構造条件

対格は、VP内にある素性 ψ を持つ構造項に与えられる

筆者は、動詞の形態的屈折形の法と時制の解釈に主語の ϕ 素性が参照されるように、対格項も、潜在的には項の性・数・人称の素性が動詞によって参照でき

るようになっていると考える。この素性を、主語の ϕ 素性との区別の為、ギリシャ文字の ψ (プサイ) で表すことにする。 ϕ 素性の参照がまず IP 指定部に対して行われるように、 ψ は、まず V の姉妹位置に対して割り当てられる。しかし、V の姉妹位置に ψ を読み取ることのできるような構造項がない場合には、 ψ は、動詞によって語彙的に決まった統語的位置に割り振られるか、そもそも割り振られないと考える。例えば、*hängt* (< *hängen*) は ψ を V' の姉妹位置に割り当てているが、*blickt* (< *blicken* 「視線を向ける」) は ψ をどの項にも割り当てないという具合である。

(444) a. dass [IP **Peter** ^{ϕ} [VP [V' **die Schüler** ^{ψ} [V prüft]]]]

that Peter.NOM the student.ACC test.3SG.PRS

ペーターが生徒たちをテストすること

b. dass [IP **Peter** ^{ϕ} [VP **das Bild** ^{ψ} [V' [PP an die Wand] [V hängt]]]]

that Peter.NOM the picture.ACC at the wall.ACC hang.3SG.PRS

ペーターが絵を壁に掛けること

c. dass [IP **Peter** ^{ϕ} [VP [V' [PP auf die Uhr] [V blickt]]]]

that Peter.NOM at the clock.ACC look.3SG.PRS

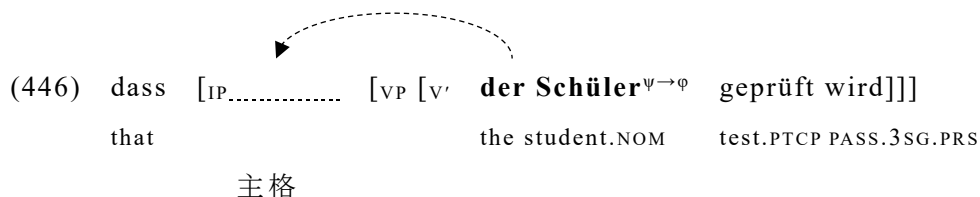
ペーターが時計に視線を向けること

動詞の法と時制の解釈が主語の ϕ 素性を参照して可視化されることは、*prüft* (< *prüfen*) のような動詞の屈折形の項構造を、(445a) のように、主語となる項に ϕ を付した形で記述することで表すことができる。 ϕ に加えて ψ の素性を設ければ、能動態の対格項が受動態において主語に転じる手続きは、もともと ϕ が割り振られていた項が存在量化されて項構造から抑制される代わりに、 ψ をもつ項に鑑みる形で法と時制の解釈が可視化される手続きとしてとらえることができる。この手続きを、受動態の動詞の屈折形で、主語に転じる項に $\psi \rightarrow \phi$ と付すことで表現すれば、*geprüft wird* の項構造は、(445b) のように記述することができる。

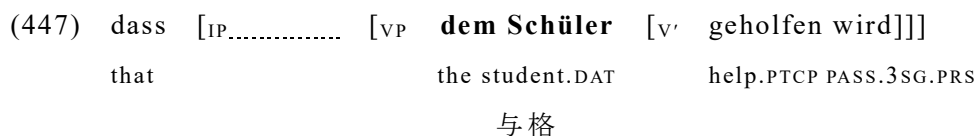
(445) a. $\left[\begin{array}{l} \textit{prüft} \\ \text{SF: } [\text{DO } (x, y) \text{ (s)}] \\ \text{AS: } \langle s \ \langle x^\phi \ \langle y^\psi \rangle \rangle \rangle \end{array} \right]$ b. $\left[\begin{array}{l} \textit{geprüft wird} \\ \text{SF: } \exists x [\text{DO } (x, y) \text{ (s)}] \\ \text{AS: } \langle s \ \langle y^{\psi \rightarrow \phi} \rangle \rangle \end{array} \right]$

法と時制の解釈を可視化するために ϕ 素性を参照される項は、主格によって明示される。この時、当該の項がもともと IP 指定部にはない場合には、IP 指定部

に移動するか，IP 指定部を埋める虚辞によって束縛されることで (cf. Grewendorf 1988: 157)，可視的・不可視的に IP 指定部へと繰り上げられ，主格の付与が行われる。受動態では ψ をもつ項がこの役目を負う。このようにして，能動態で対格となる項が，受動態の主語に転じる (cf. (446))。 (446) の破線矢印は可視的・不可視的な IP 指定部への繰り上げを表す。



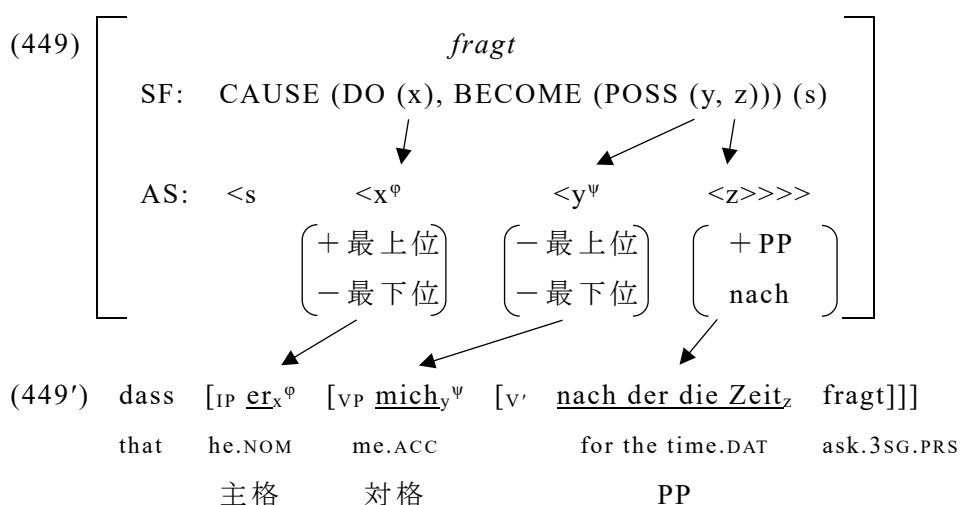
能動態における対格以外の格の項が受動態の主語とならないのは，その項が ψ を持たず，項構造から抑制された ϕ を持つ項の代わりとはならないことによる (cf. (447))。例えば，能動態における与格の項は，受動態でも変わらず与格の付与を受ける。



ψ 素性は，過去分詞が連体修飾語として用いられる際にも参照される。他動詞の過去分詞が連体修飾語として用いられる場合，修飾されるのは，その動詞が能動態において対格で表される項，すなわち ψ を持つ項である。例えば (448) の名詞句では，過去分詞の *gehängt* と *geprüft* が，それぞれ前述の (444ab) の文において対格となっている項を修飾している。この時，過去分詞は形態的な屈折形によって格を明示するが，格は， ψ をもつ被修飾項の性と数に鑑みて可視化される。

- (448) a. ein geprüft-er Schüler ^{ψ}
 a test.PTCP-M.SG.NOM student.M.SG
 テストされた生徒
- b. ein an die Wand gehängt-es Bild ^{ψ}
 a at the wall hang.PTCP-N.SG.NOM picture.N.SG
 壁に掛けられた絵

筆者は、二次的格付与が行われる *fragen* では、 ψ が VP 指定部に割り当てられると考える。*fragen* は「質問の内容」を *nach* の前置詞項として表示するので、V の姉妹位置には ψ の担い手となる構造項がない。そこで、*fragen* では、 ψ が VP 指定部に求められるのである。すると、VP 指定部は (443) に示した対格の構造条件を満たすことになる。いま、対格の構造条件を満たした項には、与格の構造条件を満たしていても、より無標の格である対格が優先的に与えられるとしよう。すると、*fragen* では、[-最上位, -最下位] という中間的な評価をもった構造項に対し、与格ではなく、対格が与えられることになる。



fragen において、*y*, すなわち「質問される人」に ψ が与えられていることは、この動詞の過去分詞が連体修飾語として用いられる際、格が「質問される人」の性と数に鑑みて可視化されることから示される。³⁷ 例えば、(450) では過去分詞の *gefragt* が「質問される人」である通行人を修飾しており、この項の性・数に応じて、男性・単数の主格の語尾 *-er* による格の表示が行われている。

(450) *ein nach der Zeit gefragt-er Fußgänger ψ*
 a for the time.DAT aks.PTCP-M.SG.NOM passenger.NOM
 時間を尋ねられた通行人

11.3.3. 物理作用動詞における二次的対格付与

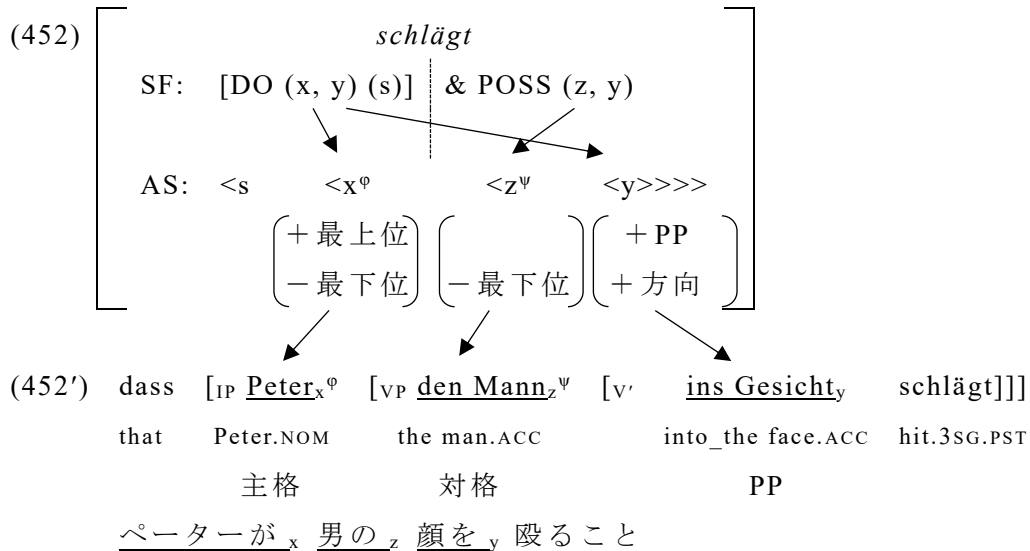
筆者は、*schlagen* などの物理作用動詞では、二次的対格付与によって身体部位の所有者に対格が付与されると考える。身体部位の所有者は潜在的に 1 人称や

³⁷ *gefragt* には「人気のある」という語彙化した用法もあるが、そちらの用法は関係がない。

2 人称であり得る人の項であるから、常に物である身体部位の項との相対的な関係において卓越性が高い。そのため、この項を受動態において主題化できないのは都合が悪く、受動態による主題化が可能となるように、*schlagen* などの動詞は能動態でも身体部位の所有者に対格を与えるのである。実際に、物理作用動詞は、身体部位の所有者を主語として (451) のような受動態を形成する。

(451) Ich wurde ins Gesicht geschlagen.
 I.NOM PASS.3SG.PST into_the face.ACC hit.PTCP
 私は顔を殴られた

物理作用動詞が人に向けた物理作用を表す場合、意味形式は (452) のように分析できる。この意味形式には個体の項として x , y , z の 3 項が含まれるが、 y は語彙的に前置詞項としての指定を受けるので構造項とはならない。そのため、 V の姉妹位置には ψ を割り振られるような構造項がないことになる。*schlagen* の場合、 ψ をどの項にも与えない選択肢と、 ψ を VP の指定部に与える選択肢がある。 ψ を VP 指定部に与えた場合、この位置に投射された z の項には対格が与えられる。



schlagen において、 ψ が身体部位の所有者に与えられることは、過去分詞が連体修飾語としてこの項を修飾し、その性・数に応じて格が解釈されることから示される。例えば (453) では、*geschlagen* が身体部位の所有者である *Mann* を修飾しており、この項の性・数に応じて、男性・単数の主格の語尾である *-er* によって、格の表示が行われている。

- (453) ein ins Gesicht geschlagen-er Mann^W
 a into_the face.ACC hit.PTCP-M.SG.NOM man.NOM
 顔を殴られた男

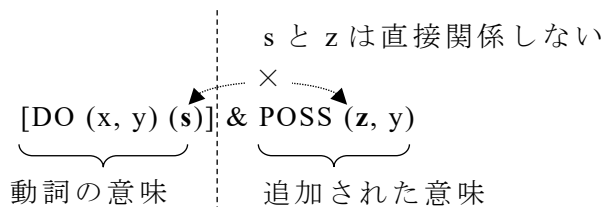
11.4. 身体部位の所有者による状況同定の不可能性

物理作用動詞の名詞化における目的語属格の欠如に話題を戻そう。そもそも目的語属格の欠如という現象が注目されるのは、名詞化において「基盤動詞の対格目的語が属格項となる」という関係が一般的と言ってよいほど広範に成り立つからである。写像論的な一次的格付与の仕組みにおいて、対格の付与を受けるのは、[+最下位]という評価を持つ構造項である。一方、第I部の7章で論じたように、派生名詞化の構造項となり属格項として実現するのは「状況の同定を可能とする項」である。つまり、「基盤動詞の対格目的語が名詞化の属格項となる」という関係が広範に成り立つのは、[+最下位]という評価を受ける項が、一般的な条件下において状況の同定を可能とする項でもあるということの反映である。

一方、物理作用動詞における対格の付与は、最下位の項に対格を与える写像論的な一次的格付与ではなく、受動態による主題化を見込んで相対的に卓越性の高い項に対格を与える二次的対格付与である。その対象となる二次的対格項は、一般的に状況の同定を可能とする項である[+最下位]の項ではない。むしろ、二次的対格項は、いわば「二次的な手続きを経なければ対格とならない項」であることから、この項による状況の同定が可能である蓋然性は低い。そのため、この項は名詞化の項構造に構造項としては記録されず、属格項としての実現が認められないのである。

物理作用動詞の名詞化において二次的対格項となる「身体部位の所有者」が状況の同定を可能とする項でないということは、次のようにして説明される。身体部位の所有者は、そもそも物理作用動詞の語彙的な意味形式に含まれる項ではなく、物理作用が人を標的とする場合に並列的に追加される所有関係に関わる項である。動詞の語彙的な意味形式と追加された意味形式の境界を破線で示した(454)において、状況項sは左側の局所構造にのみ現れており、身体部位の所有者zは右側の局所構造にのみ現れている。例えば、「ペーターがトーマスの顔を殴る」という状況において、顔はペーターが殴ろうと殴るまいとトーマスのものである。したがって、sとzの間には直接の関係はなく、両項は、左右の局所構造に共通して現れる項である身体部位yに仲立ちされる形で間接的にのみ関係づけられる。

(454)



z と s の間に直接の関係がないことから、z を特定しても、s の同定に寄与する情報とはなり得ない。そのため、物理作用動詞の名詞化では身体部位の所有者は構造項とならず、属格項として実現しないのである。

11.5. まとめ

本章では、*Schlag* など物理作用動詞の名詞化に注目し、これらの名詞化に目的語属格が欠如するメカニズムについて、交替現象との関連という観点から考察した。先行研究において目的語属格を欠くことが指摘されている名詞化には、*Schlag* 「殴打」や *Tritt* 「蹴り」など、物理作用動詞の名詞化が多く含まれている。*schlagen* 「殴る」や *treten* 「蹴る」といった物理作用動詞は被動者を前置詞項として語彙的に表す動詞で、人を標的とする場合でも、あくまで前置詞項の形をとる身体部位が「真の被動者」であって、人はその所有者として間接的に状況に参加する存在であると考えられる。意味形式の関係を写像的に統語構造へ写し取る一次的格付与では、身体部位の所有者には与格が与えられる。しかし、身体部位の所有者は身体部位との相対的な関係において卓越的な項であることから文の主題に適しており、受動態による主題化を見越して、二次的格付与により対格が与えられることもある。

一方、身体部位の所有者はあくまで間接的な形で状況に参加する項に過ぎないことから、状況の同定を可能とする項とはならない。そのため、物理作用動詞の名詞化では、動詞の二次的対格項である身体部位の所有者が構造項とはならず、目的語属格が欠如することになるのである。

12. 目的語属格を欠く ung 名詞化

10.3 節において, ung 名詞化にも目的語属格を欠くものがあることを指摘した。これに該当する名詞化としては, 少なくとも *Warnung* 「警告」と *Mahnung* 「催促」が挙げられる。目的語属格を欠く ung 名詞化の存在は, 目的語属格の欠如を名詞化の形態論的な種別と関係づける形態論仮説に対する端的な反例と言える。

(455) **Die Warnung des Mannes hat nicht gefruchtet.**

the warning.NOM the man.GEN PRF.3SG.PRS not work.PTCP

= [男が誰かに警告すること] には成果がなかった

≠ [誰かが男に警告すること] には成果がなかった

(456) **Die Mahnung des Mannes hat nicht gefruchtet.**

the warning.NOM the man.GEN PRF.3SG.PRS not work.PTCP

= [男が誰かに催促すること] には成果がなかった

≠ [誰かが男に催促すること] には成果がなかった

一方, 派生名詞化の項実現が「状況の同定」という動機から行われるというこの論文の立場に立った場合, *Warnung* や *Mahnung* のような ung 名詞化にみられる目的語属格の欠如も, 「問題の項が状況の同定を可能とする項ではない」ことを反映するものととらえることができる。本章では, *warnen* 「警告する」および *mahnen* 「催促する」の対格項が状況の同定を可能とする項ではないことを明らかにする。

12.1 節では, *Warnung* と *Mahnung* が目的語属格を欠くという観察について, コーパスのデータから事実関係の裏付けを行う。12.2 節では, *warnen* と *mahnen* において所有者の項に対する二次的対格付与が行われることを指摘する。12.3 節では, *warnen* や *mahnen* によって表される状況において, 二次的対格項である所有者が状況の同定を可能とする項ではないことを示す。12.4 節では, この章のまとめを行う。

12.1. 言語事実の確認：Warnung と Mahnung における目的語属格の欠如

Warnung と *Mahnung* が目的語属格を欠くという観察は、筆者が行った 4 名のインフォーマント³⁸ への聞き取りから得られたものである。本節では、この観察について、コーパスのデータを使って検証する。

まず両名詞化の基盤動詞について確認すると、*Warnung* と *Mahnung* の基盤動詞である *warnen* 「警告する」と *mahnen* 「催促する」は、ともに動作主である「警告・催促する人」を主語とし、所有者（経験者）である「警告・催促される人」を対格目的語、所有物である「警告・催促の内容」を前置詞項として表す動詞である。両動詞の意味形式は、(457) のように語彙分解することができるであろう。

- (457) *warnen/mahnen* の意味形式
 $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)]
Der Mann_x warnte uns_y vor der Gefahr_z
 the man.NOM warn.3SG.PST us.ACC for the danger.DAT
男が_x 私たちに_y 危険を_z 伝える

所有物である「警告・催促の内容」は語彙的な前置詞項として実現するが、その際、(458) のように、*warnen* では *vor*, *mahnen* では *zu* が用いられる。この項には、(459) のように補文が用いられることもある。

- (458) a. Er warnte ihn vor dem Genuss von Rauschgift.
 he.NOM warn.3SG.PST him.ACC for the consumption.DAT of drug.DAT
 彼は彼に麻薬を使わないよう警告した
- b. Er mahnte seine Kinder zur Ruhe.
 he.NOM warn.3SG.PST his child.PL.ACC to_the quiet.DAT
 彼は自分の子供たちに静かにするよう催促した
- (459) a. Er warnte sie, diesen Weg nicht zu gehen.
 he.NOM warn.3SG.PST her.ACC this way.ACC not to go.INF
 彼は彼女に、この道を行かないようにと警告した

³⁸ インフォーマントはノルトライン・ヴェストファーレン州出身の 20 代男性 2 名、女性 1 名、バーデン・ヴェルテンベルク州出身の 20 代男性 1 名

b. Er mahnte mich, es nicht zu vergessen.

he.NOM warn.3SG.PST me.ACC it.ACC not to vorget.INF

彼は私に、それを忘れないようにと警告した

検証のためのデータとして、マンハイムのドイツ語研究所³⁹ が公開しているコーパス検索システム COSMAS II⁴⁰ を利用し、ドイツ語代表コーパス DEREKO⁴¹ から *Warnung* と *Mahnung* の用例を収集した。その際、*Warnung* および *Mahnung* を検索語とし、結果⁴² を機械的に無作為整列した後、両語について COSMAS II のシステム上の上限である 10,000 件を上限として結果を取得し、検索エラーなどを手作業で取り除いた有効データの上位 500 例を標本とした。調査項目は、*Warnung* および *Mahnung* と共起している項的成分の意味(動作主, 所有者, 所有物)と形式(後置属格, 前置詞句, その他)である。「その他」の形式には、前置属格・所有冠詞と補文が含まれる。

結果は (460) に掲載する通りである。

(460) *Warnung* および *Mahnung* と共起した項的成分の種類

	後置属格			前置詞句			その他		
	動作主	所有者	所有物	動作主	所有者	所有物	動作主	所有者	所有物
<i>Warnung</i> :	50	2	0	11	54 (an)	124 (vor)	40	0	35
					11 (他)	2 (他)			
<i>Mahnung</i> :	34	1	0	17	44 (an)	44 (zu)	37	0	68
					6 (他)	14 (他)			

Warnung も *Mahnung* も、後置属格で実現しているのは基本的に動作主である。

³⁹ IDS: Institut für Deutsche Sprache (cf. www.ids-mannheim.de/)

⁴⁰ Corpus Search, Management and Analysis System (cf. www.ids-mannheim.de/cosmas2/)

⁴¹ Das Deutsche Referenzkorpus (cf. www.ids-mannheim.de/kl/projekte/korpora/)

⁴² 検索結果は、*Warnung* について 69,555 件、*Mahnung* について 21,796 件ヒットした。

- (461) a. **Die Warnung des Alt-Bundespräsidenten vor einer Rentnerdemokratie**
 the warning.NOM the Old-Federal-President.GEN for a pensioner-democracy.DAT
 beschäftigt die Leser. (DEREKO: Braunschweiger Zeitung, 14.04.2008)
 bother.3SG.PRS the reader.PL.ACC
 元連邦大統領による年金生活者民主主義に対する警告は読者の関心を引いている
- b. **die Mahnung des sozialdemokratischen Parteivorsitzenden Willy Brandt an die Tarifpartner [...]** hat [...] ein positives Echo
 the warning.NOM the Social_Democratic Party_leader Willy Brandt
 Brandt.GEN to the social_partner.PL.ACC PRF.3SG.PRS a positive response.ACC
 gefunden. (DEREKO: Die Welt, 07.02.1966)
 receive.PTCP
 社会民主党のヴィリー・ブランド党首による労使双方への警告は歓迎された。

一方,所有者には,後述する少数の例を除き,基本的に後置属格ではなく,(462)のような an の前置詞句が用いられている。

- (462) **Der Angriff sei die letzte Warnung an die Minderheit, Pakistan zu verlassen.**
 the attack.NOM be.3SG.SBJ1 the last warning.NOM to the minority.ACC
 Pakistan.ACC to leave.INF
 (DEREKO: Nürnberger Nachrichten, 29.05.2010)
 その攻撃は,パキスタンを去れというマイノリティに向けた最後の警告であるという

また,所有物には, *Warnung* では vor, *Mahnung* では zu の前置詞句 (cf. (463)),あるいは補文 (cf. (464)) が用いられている。後置属格による表現は見られない。

- (463) a. **die Warnung von Präsident Obama vor einem Rückfall der
Wirtschaft in eine Rezession [trübte] die Stimmung.**
the warning.NOM of President Obama.DAT for the reversion.DAT the
economy.GEN into a recession.ACC cloud.3SG.PST the atmosphere.ACC
(REREKO: St. Galler Tagblatt, 19.11.2009)

オバマ大統領が再度の景気低迷について警告したことが市況を曇らせた

- b. **Mit der Mahnung zur Sparsamkeit habe die SVP ihr Ziel
erreicht**
with the warning.DAT to_the economy.DAT PRF.3SG.SBJ1 the SVP.NOM her goal.ACC
reach.PTCP
(DEREKO: St. Galler Tagblatt, 05.03.1998)

支出削減への勧告によってスイス国民党は自身の目標が達成されたとしている

- (464) a. **Trotz der Warnung der beteiligten Planer, dass vieles noch
im Diskussionsstadium ist, entwickelte sich für viele
Diskutanten das Gefühl, dass hier Unreifes und
Unausgegorenes präsentiert wurde**
despite the warning.GEN the involved planner.PL.GEN that many_thing.NOM still
in_the discussion_stage.DAT be.3SG.PRS develop.3SG.PST REF.ACC for many
discussant.PL.ACC the feeling.NOM that here immature.NOM and
unexperienced.NOM present.PTCP PASS.3SG.PST

(DEREKO: Niederösterreichische Nachrichten, 04.12.2014)

担当した立案者が、多くのことがまだ議論の途上にあると警告したにもかかわらず、議論に参加した人々の多くは、幼稚で浅薄な考えが発表されたという印象を強めた

b. **Die Mahnung der „Bürger für Hanau“ (BfH), dort Wohnungen für**

the warning.ACC the Bürger für Hanau (BfH).GEN there apartment.PL.ACC for

alle und nicht nur für bestimmte Bevölkerungsschichten

all and not just for specific sections_of_the_population.PL.ACC

anzubieten, lehnten CDU und SPD mit ihrer Mehrheit ab.

to_offer.INF reject.3PL.PST CDU.NOM and SPD.NOM with their majority.DAT PTCL

(DEREKO: Frankfurter Rundschau, 19.02.1998)

そこに特定層の住民のためだけの住宅ではなく全住民のための住宅を設けよという「ハーナウのための市民」の勧告に CDU と SPD は反対多数で応じなかった

したがって、基盤動詞 *warnen/mahnen* と名詞化 *Warnung/Mahnung* には、動詞において主格となる動作主が名詞化では属格となり、動詞において対格となる所有者が名詞化では前置詞句となり、所有物は動詞でも名詞化でも前置詞句または補文となるという関係があると言える (cf. (465)/(466))。

(465)	動作主	所有者	所有物
Der Mann	warnt	die Bürger	vor der Gefahr/ dass das gefährlich ist
Der Mann	mahnt	die Bürger	zur Sparsamkeit/ sparsam zu sein
	主格	対格	PP / 補文

(466)	動作主	所有者	所有物
Warnung	des Mannes	an die Bürger	vor der Gefahr/ dass das gefährlich ist
Mahnung	des Mannes	an die Bürger	zur Sparsamkeit/ sparsam zu sein
	属格	PP	PP / 補文

動詞では対格となる所有者が、名詞化では属格ではなく、前置詞句の形をとることから、*Warnung* と *Mahnung* が目的語属格を欠くという上述のインフォーマントの証言は信頼のおけるものと言えそうである。

もっとも、(467) のように所有者が後置属格で表される例も、*Warnung* で 2 例、*Mahnung* で 1 例と、ごく少数ではあるが認められる。(467) のような実例は、

一見して、*Warnung* と *Mahnung* が目的語属格を欠くという証言に対する反例となるように思われる。

(467) a. Durch den Einsatz von Baumaschinen und laut schallenden
by the use.ACC of construction_machinery.PL.DAT and loud sounding
Typhonen oder automatischer Rottenwarnanlagen **zur Warnung**
typhonen.PL.GEN or automatic mass_warning_system.GEN to_the warning.DAT
der Bauarbeiter kommt es dabei zu
the construction_worker.PL.GEN come.3SG.PRS it.NOM at_that_time to
Lärmbelästigungen. (DEREKO: Rhein-Zeitung, 11.03.2013)
noise_nuisance.PL.DAT

その際、建設機械や建設労働者に警告を発するための大音量で鳴り響く警笛や集団警報装置の使用によって騒音が発生することになる

b. Doch solange sich die Ausbildungspolitik darauf beschränkt,
but as_long_as REF.ACC the training_policy.NOM to_that confin.3SG.PRS
strategische Geräusche wahlweise zur Unterstützung oder **zur**
strategic sound.PL.ACC either to_the support.DAT or to_the
Mahnung der Arbeitgeber zu machen, mogelt sie sich
exhort.DAT the employer.PL.GEN to make.INF boggle.3SG.PRS she.NOM REF.ACC
um den harten Interessengegensatz im Kern der Misere herum:
around the harsh conflicting_interest.ACC at_the heart the plight.GEN PTCL

(DEREKO: die tageszeitung, 28.07.2004)

しかし、雇用主の支援のため、あるいは雇用主への警告のために、選択的に戦略的騒音を立てることしかししないなら、職業教育政策は問題の核心である利害の対立を不当にすり抜けてしまう

しかし、これらの一見した反例は、ごく少数であるばかりでなく、14章で詳しく論じるように規則的な分布をしている。そのため筆者は、(467)の例は *Warnung* と *Mahnung* が目的語属格を欠くという観察に対する反例ではなく、一定の条件下において認められる「規則的な例外」であると考え。このような例外が認められる条件については、14章で詳述する。

なお、動作主として解釈される後置属格は、(468)のように2音節以下の無冠詞固有名詞 (cf. 5.1.1.3 節, 7.1.4 節) であり得る。したがって、この属格は属格付加語ではなく属格項である。

- (468) a. **Der Warnung Rachels, die Welt sei nicht nur schwarz**
 the warning.DAT Rachel.GEN the world.NOM be.3SG.SBJ1 not just black
oder weiß, hält Maria ihren politischen Imperativ
 or white counter.3SG.PRS Maria.NOM her political imperative.ACC
 entgegen: (DWDS: Die Zeit, 27.09.1991)

PTCL

世界は白黒はっきりつくことばかりではないというラッヘルの警告
 に対してマリアは「政治的命令」を持ち出して異議を唱えた

- b. **Doch gegen das Donnern des Populisten wirkt die**
 but against the thunder.ACC the populist.GEN work.3SG.PRS the
Mahnung Prodis blaß (DWDS: Berliner Zeitung, 14.09.1996)
 warning.NOM Prodi.GEN pale

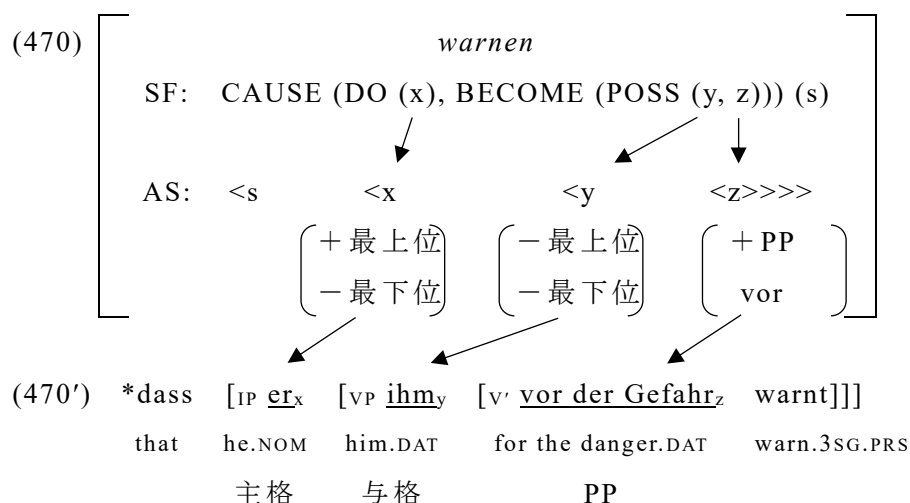
しかしポピュリストの大きな声にプロディの警告は効き目がなかつた

12.2. warnen/mahnen における二次的格付与

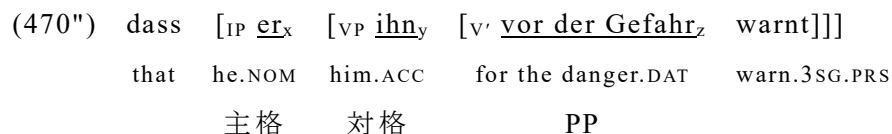
warnen/mahnen によって表される状況は, (469) の意味形式によって分析することができる。

- (469) *warnen/mahnen* の意味形式 (= (457))
 ∃s [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)]
Der Mann_x warnte uns_y vor der Gefahr_z
 the man.NOM warn.3SG.PST us.ACC for the danger.DAT
男が_x 私たちに_y 危険を_z 伝える

この意味形式には潜在的に構造項の資格を持つ項 (cf. 4.3.1 節) として x, y, z の 3 項が含まれるが, *warnen* でも *mahnen* でも, z は語彙的な指定によって前置詞項となるので, 実際に構造項となるのは x と y の 2 項である。この時, x は最上位の項として [+最上位, -最下位] と評価される一方, y は, より下位の個体項として z が存在することから, [-最上位, -最下位] と評価される。



この評価が一次的格付与の仕組みによって統語構造にマッピングされると、x は IP 指定部、y は VP 指定部に投射されるので、x を主格、y を与格とする (470') のような文が導かれそうである。ところが、実際に *warnen* や *mahnen* が形成するのは、y を与格ではなく対格とする (470'') の文である。

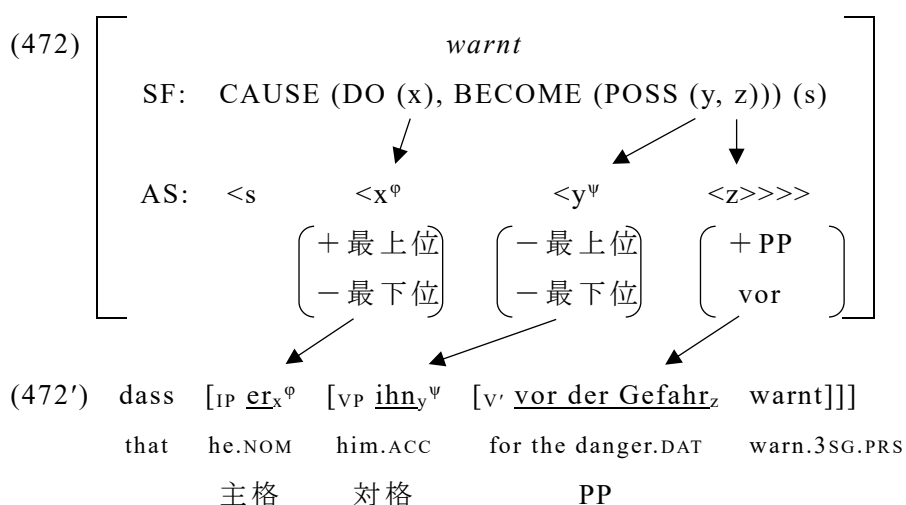


筆者は、*warnen* と *mahnen* において、二次的格付与による対格の付与が行われると考える。所有者たる「警告・催促される人」は潜在的に 1 人称や 2 人称であり得る人の項であるのに対し、所有物たる「警告・催促の内容」は物、それも物体ではなく情報のような抽象物であることから、所有者は所有物との相対的な関係において卓越性が高く、文の主題とするのに適している。実際に、*warnen* や *mahnen* はこの項を主語として (471) のような受動態の文を形成する。

- (471) a. Ich wurde vor der Gefahr gewarnt.
 I.NOM PASS.3SG.PST for the danger.DAT warn.PTCP
 私はその危険について警告された
- b. Ich wurde zur Bettruhe gemahnt.
 I.NOM PASS.3SG.PST to_the bed_rest.DAT order.PTCP
 私は安静を命じられた

受動態によって主題化するには、その項が能動態において対格の付与を受けることが前提となる。そこで、*warnen* と *mahnen* は、所有者を受動態によって主題化できるように、この項に二次的対格付与を行うのである。

二次的対格付与は、項への ψ の割り当てによって行われる。通常、 ψ は V の姉妹位置に求められるが、*warnen* や *mahnen* は語彙的に指定された前置詞項をとるため、V の姉妹位置には ψ の担い手となり得るような構造項がない。そこで、*warnen* と *mahnen* は ψ を VP 指定部に求める。すると、VP 指定部に投射された所有者は対格の付与条件を満たすこととなり、対格を付与される。



warnen と *mahnen* において ψ が所有者に与えられることは、連体修飾語として用いられた過去分詞からも示される。他動詞の過去分詞は、連体修飾語として ψ を持つ項を修飾し、その項の性・数に応じた屈折形により格を明示する。(473) では、過去分詞の *gewarnt* と *gemahnt* がそれぞれ所有者、すなわち「警告・催促される人」である *Mann* 「男性」と *Patient* 「患者」を修飾しており、男性・単数に鑑みた主格の語尾 *-er* による格の明示を行っている。

- (473) a. ein vor der Gefahr **gewarnt-er** Mann^ψ
 a for the danger.DAT warn.PTCP-M.SG.NOM man. NOM
 危険性について警告された男
- b. ein zur Bettruhe **gemahnt-er** Patient^ψ
 a to_the bed_rest.DAT order.PTCP-M.SG.NOM patient.NOM
 安静を命じられた患者

12.3. 所有者による状況同定の不可能性

第 I 部の 7.3 節で論じたように、派生名詞化の項構造において構造項となるのは状況の同定を可能とする項である。したがって、*Warnung* や *Mahnung* が目的語属格を欠くというデータは、*warnen* や *mahnen* によって表される状況において、所有者が状況の同定を可能とする項ではないということを示しているものと解釈することができる。

(474) に示すように、*warnen* と *mahnen* の意味形式は、*schicken* 「贈る」などの使役的所有変化動詞の意味形式と共通していると考えられる。

(474) *warnen/mahnen* と使役的所有変化動詞の意味形式

Es [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)]

- a. Paul_x warnte Anna_y vor der Gefahr_z
Paul.NOM warn.3SG.PST Anna.ACC for the danger.DAT
パウ_x アンナ_y 危険_z 伝える
- b. Paul_x hat Anna_y das Buch_z geschenkt.
Paul.NOM PRF.3SG.PRS Anna.DAT the book.ACC give.PTCP
パウ_x は アンナ_y に 本_z 贈った

warnen や *mahnen* の表す状況において所有者が状況の同定を可能とする項でないのは、7.3.3 節で論じたように、使役的所有変化動詞の名詞化において所有者が状況の同定を可能とする項でないのと同じである。例えば、「パウがアンナに危険を伝える」という状況を考えると、警告されるのがアンナであることが特定されても、アンナへの警告は何度でも行われ得るので、状況の同定に結びつかない。

一般的な使役的所有変化動詞の名詞化では、所有物が状況の同定を可能とする項となる。一方、*Warnung* や *Mahnung* では、状況の同定を可能とする項となるのは動作主である。これには、*warnen* や *mahnen* の表す状況と一般的な使役的所有変化が、所有物の種類という点で異なっていることが関係していると考えられる。一般的な使役的所有変化では、所有物は物体であり得る。物体を所有物とする場合、所有物は、使役的所有変化によって所有者のものとなると同時に元の所有者の手を離れる。例えば、「パウがアンナに本を贈る」という状況では、本がアンナの手に移ると同時に、その本はパウのものではなくなる。また、この状況は、状況の前段階においてその本がアンナのものでないということを前提としており、すでに「アンナのものである本」をアンナに贈ることはあり得ない。そのため、使役的所有変化という状況では、所有関係が変化する

る時点が状況に対してユニークであり、所有物を特定することで状況を同定することができる。

これに対し、*warnen* や *mahnen* が表す状況では、所有物は抽象的な情報に限られている。情報は物体と違い、新しい所有者に伝えられても元の所有者の手を離れるわけではない。例えば、「パウルがアンナに危険を伝える」という場合、情報がアンナに伝えられたからと言って、パウルがその知識を失うわけではない。またこの状況は、状況の前段階において所有者が問題の情報を持っていないということを前提としない。例えば、「パウルがアンナに危険を伝える」という状況は、パウルに警告されるまでもなくアンナが危険を認識していても成立する。そのため、*warnen* や *mahnen* が表す状況では、所有物によって同定されるようなユニークな時点は含意されず、所有物による状況の同定は行われないのである。

warnen や *mahnen* が表す状況の同定を可能とするのは動作主である。このことは、*warnen* や *mahnen* において、動作主が所有物たる情報についての責任を負っているということと関係している。これらの動詞は動作主から所有者へ情報が伝えられる状況を表すが、伝えられる情報が何を根拠としており、どのような言葉で表現されるかは動作主にかかっている。このことは、(475)のように情報が補文で表される場合に、動作主の発言を引用する間接話法となり得ることからもわかる。

(475) a. Darin warnte er sie davor, dass die amerikanische
in_that warn.3SG.PST he.NOM her.ACC for_that that the American
Gesellschaft wegen der wachsenden Kluft zwischen Arm
society.NOM because_of the growing gap.GEN between rich_people.DAT
und Reich auf dem Weg in den Feudalismus sei.
and poor_people.DAT on the way.DAT to the feudalism.ACC be.3SG.SBJ1

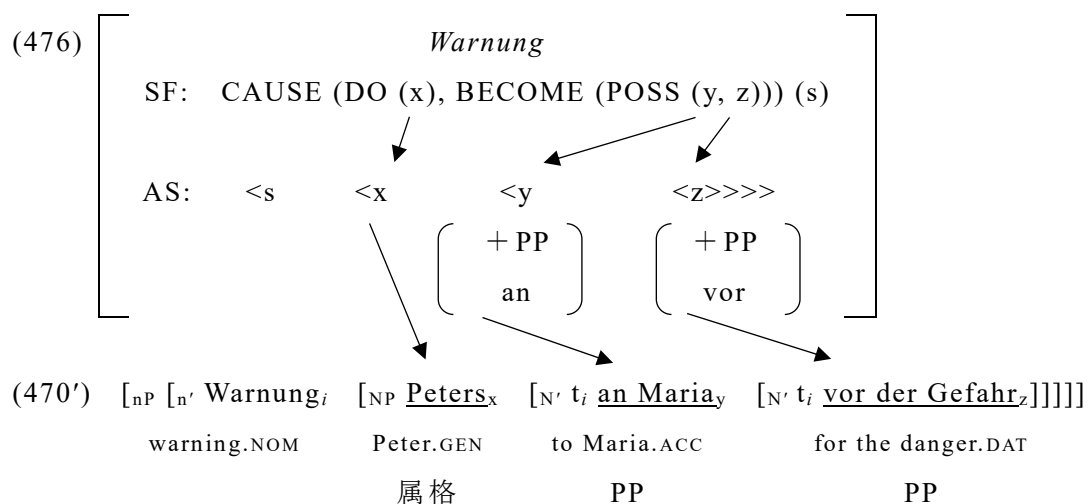
(DWDS: Die Zeit, 24.08.2017)

その中で彼は彼女に、アメリカ社会が貧富の差の広がりによって封建主義への道をたどっていると警告した

b. In Ägypten mahnten hohe islamische Gelehrte den Westen, dass
 in Egypt.DAT warn.3PL.PST high Islamic scholar.PL.NOM the West.ACC that
Meinungsfreiheit mit gegenseitigem Respekt einhergehen
 freedom_of_expression.NOM with mutual respect.DAT go_hand_in_hand
müsse. (DWDS: Die Zeit, 18.01.2015)
 must.3SG.SBJ1

エジプトではイスラム法学者達が西洋世界に対し、表現の自由は相互への敬意をとまわなければならないと警告している

そのため、動作主が特定されると、これが同時に所有物を特定する手掛かりともなり、状況を同定する上での大きな寄与となる。結果として、*Warnung* や *Mahnung* の項構造には動作主が状況の同定を可能とする構造項として記録され、属格項の形で現れる。一方、所有者と所有物は、前置詞項として語彙的に指定されて項構造に記録される。



この時、所有者は *an* の前置詞項となるが、これは 7.3.3 節において使役的所有変化動詞の名詞化との関連で定式化した (477) の規則によるものであると考えられる。

(477) 所有者の語彙的实现 (= (301))
 CAUSE 関数内部の BECOME 関数に埋め込まれた所有者は、*an* の前置詞項として名詞化の項構造に記録される

12.4. まとめ

本章では、目的語属格を欠く *ung* 名詞化である *Warnung* と *Mahnung* に注目した。*Warnung* や *Mahnung* のように、*ung* 名詞化にも目的語属格を欠く名詞化があることは、Rapp (2006) らが唱える形態論仮説に対する反証となる。

warnen や *mahnen* では、意味形式の関係からは与格となることが予見される所有者に対して、その卓越性の高さから、受動態による主題化が可能となるように二次的対格付与が行われる。しかし、この項は、*warnen* や *mahnen* が表す状況の同定を可能とする項ではなく、派生名詞化では構造項とならない。結果として、動詞では対格項となる所有者が名詞化では属格項とならないことになり、目的語属格の欠如という現象に帰結するのである。

13. 使役移動動詞と適用動詞の名詞化：二次的対格付与と「対格化」

物理作用動詞の名詞化にしても、*Warnung* や *Mahnung* にしても、名詞化において目的語属格が欠如するのは、基盤動詞が二次的対格付与を行う動詞であるということに関係している。そもそも、「動詞の対格項が名詞化の属格項となる」という関係が広く成り立つのは、一次的格付与によって対格を付与される最下位項が、一般的な条件下において状況の同定を可能とする項でもあるためである。一方、二次的対格項は、いわば「二次的な手続きによらなければ対格とならない項」であり、状況の同定を可能とする項ではない蓋然性が高いと言える。

ところで、「二次的対格付与」という考え方は、ドイツ語を対象とする言語研究の文脈において、適用動詞 (*Applikativverben*) と呼ばれる動詞を連想させるものである。適用動詞とは、*beladen* 「荷積みする」や *besprühen* 「吹きかける」などに代表される、使役的所在変化を表すと考えられる動詞クラスのひとつで、⁴³ 同じく使役的所在変化を表すと考えられる *laden* 「積み込む」や *sprühen* 「吹きつける」のような使役移動動詞 (*Transportverben*) と対立し、使役移動動詞では方向の前置詞項として表される所在地に関係した項を対格で表すという特徴がある。また、使役移動動詞の対格目的語である所在物は、適用動詞では *mit* の前置詞句に対応する。例えば、(478) の対格目的語 *das Schiff* は、(479) の *auf das Schiff* と意味上対応し、同時に、(479) の対格目的語 *Container* は (478) の *mit Containern* と対応している。

(478) 適用動詞

Sie beladen das Schiff mit Containern.
they.NOM load.3PL.PRS the ship.ACC with container.PL.DAT
彼らは船をコンテナで荷積みする

(479) 使役移動動詞

Sie laden Container auf das Schiff.
they.NOM load.3PL.PRS container.PL.ACC on the ship.ACC
彼らはコンテナを船に積む

適用動詞と使役移動動詞の関係を巡っては、有名な先行研究のひとつである Eroms (1980) において、適用動詞では「所在地に関する項が対格化 (*Akkusativierung*) する」という主張がなされている。「対格化」とは、Eroms

⁴³ 後述のように、適用動詞に使役的所在変化とは異なる意味を仮定する立場もある。

(1980) が第二レベル受動態 (Passiv zweiten Grades) と位置付ける統語操作で、第一レベル受動態 (Passiv ersten Grades) である通常受動態に比肩するような格上げの一種であるとされる。この「対格化」という統語操作は、その名称が「二次的対格付与」を想起させるばかりでなく、Eroms (1980:57) が対格化の行われる背景のひとつとして「通常受動態の主語として取り立てることを可能とする」ことを挙げていることから、機能面でも本稿で言う「二次的対格付与」と関係がありそうである。そこで本章では、二次的対格付与という格付与の仕組みと、Eroms (1980) の言う「対格化」の関係に注目する。

13.1 節では、「対格化」と二次的格付与の一見した関連性について述べる。13.2 節では、使役移動動詞と適用動詞の名詞化についての観察が、「対格化」と二次的格付与の関連性に疑問を投げかけるものであることを示す。13.3 節では、所在関係の精細な分析から、使役移動動詞と適用動詞の本当の関係を明らかにする。13.4 節では、本章のまとめを行う。

13.1. 適用動詞と「対格化」

適用動詞が形成する統語構造の型を「適用構文」、使役移動動詞が形成する統語構造の型を「使役移動構文」と呼ぶことにする。この2つの構文が使役的所在変化という同一の意味形式を反映していると考えられる立場では、両構文の対立が場所格交替 (Lokativalternation) と呼ばれる。

場所格交替では、使役移動構文における方向の前置詞句が、適用構文の対格目的語と意味上対応する。仮にこの2つを同じ意味役割の項と考えると、使役移動構文における語彙的な項が適用構文では対格に格上されているとみることができる。

(480) 適用構文と格上げ

a.	dass er	Heu	auf den Wagen	lädt
	that he.NOM	hay.ACC	on the car.ACC	load.3SG.PRS
		対格	PP	
			↙	格上げ
b.	dass er	den Wagen	mit Heu	belädt
	that he.NOM	the car.ACC	with hay.DAT	load.3SG.PRS
		対格		

場所格交替をそのような格上げの手続きとみる考え方において、この格上げを「対格化」と呼ぶ。

Eroms (1980) は適用構文を第二レベルの受動態と位置付けている。つまり、Eroms (1980) によれば、適用構文における「対格化」は、通常受動態（第一レベルの受動態）において能動態の対格項が「主格化」するのと同じような統語的手続きである (cf. (480)/(481))。

(481) 受動態と格上げ

- | | | | | | |
|----|------|------------|------------|----------------|------------------------|
| a. | dass | er | Heu | auf den Wagen | lädt |
| | that | he.NOM | hay.ACC | on the car.ACC | load.3SG.PRS |
| | | 主格 | 対格 | | |
| | | | ↙格上げ | | |
| b. | dass | Heu | von ihm | auf den Wagen | geladen wird |
| | that | hay.NOM | by him.DAT | on the car.ACC | load.PTCP PASS.3SG.PRS |
| | | 主格 | | | |

受動態では能動態の主語となる項の所与性が低下し von の前置詞句によって任意に表されるようになるが、適用構文でもこれと似通った所与性の低下が使役移動構文の対格目的語となる項にみられる。適用構文において使役移動構文の対格目的語は mit の前置詞句となるが、この前置詞句は任意の成分である。加えて、この前置詞句によって表されるのが典型的に数量的に特定されない物質名詞や複数形の項であることも、この項の所与性が低下していることを示している。

- (482) a. Sie laden *(Container) auf das Schiff.
 they.NOM load.3PL.PRS container.PL.ACC on the ship.ACC
 彼らはコンテナを船に積む
- b. Sie beladen das Schiff ^{OK}(mit Containern).
 they.NOM load.3PL.PRS the ship.ACC with container.PL.DAT
 彼らは船をコンテナで荷積みする

13.1.1. 対格化の副次的効果としての「全体的作用」

場所格交替を巡っては、先行研究において、これを「対格化」による交替現象とみる Eroms (1980), Olsen (1994), 成田 (1989, 2005) らの立場に対し、使役移動動詞と適用動詞がそもそも動詞の語彙的な意味形式において異なっており、「場所格交替」は交替ではないという Rappaport & Levin (1988) や Pinker (1996) の立場が対立している。この立場を「非交替仮説」と呼ぶ。

非交替仮説の立場をとる Rappaport & Levin (1988) や Pinker (1996) の根拠は、適用動詞に、使役移動動詞にはない「全体的作用」という意味特徴が認められるという観察である。この観察は、一般に Anderson (1971) に遡るとされている。Rappaport & Levin (1988) と Pinker (1996) は英語の動詞を観察対象としているが、ドイツ語の適用動詞についても、Pusch (1972) が (483) の例とともに同様の観察を行っている。Pusch (1972) によれば、(483b) において不定冠詞の使用が適当でないのは、たった一つの飾り玉ではクリスマスツリーに「全体的作用」を及ぼすことができないという通念によるものであるという。

- (483) a. Er hängt **Kugeln/ eine Kugel** an den Weihnachtsbaum.
 he.NOM hang.3SG.PRS ball.PL.ACC a ball.ACC at the Christmas_tree.ACC
 彼は飾り玉をクリスマスツリーに吊るす (Pusch 1972: 127)
- b. Er behängt den Weihnachtsbaum **mit Kugeln/ ?mit einer Kugel.**
 he.NOM hang.3SG.PRS the Christmas_tree.ACC with ball.PL.DAT/ with a ball.DAT
 彼はクリスマスツリーを飾り玉で吊り飾る (Pusch 1972: 127)

Rappaport & Levin (1988) と Pinker (1996) は、適用動詞が「全体的作用」を表す意味を持つとして、英語の動詞 *load* を使役移動動詞としての *load_{tp}* と適用動詞としての *load_{appl}* に分け、⁴⁴ *load_{tp}* には使役的所在変化を表す (484) の意味形式を与える一方、*load_{appl}* には使役的状态変化を表す (485) の意味形式を与えている。

- (484) 使役移動動詞 (e.g. *load_{tp}*)
 $\exists s$ [CAUSE (DO (x, y), BECOME (LOC (y, Place))) (s)]
Bill_x loaded_{tp} cartons_y onto the truck_{Place}
 ビルは x 箱を y トラックに_{Place} 積んだ
- (485) 適用動詞 (e.g. *load_{appl}*)
 $\exists s$ [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)]
Bill_x loaded_{appl} the truck_y
 ビルは x トラックを_y 荷積みした

⁴⁴ tp は *transport*, appl は *applicative* の略

ドイツ語の適用動詞と使役移動動詞についても (484)/(485) のように分析する
 なら, *hängen* と *behängen* には (486)/(487) のような意味形式を与えることが
 できよう。

(486) 使役移動動詞

∃s [CAUSE (DO (x, y), BECOME (LOC (y, Place))) (s)]

Er_x hängt Kugeln_y an den Baum_{Place}

he.NOM hang.3SG.PRS ball.PL.ACC at the tree.ACC

彼が_x 飾り玉を_y ツリーに_{Place} 吊るす

(487) 適用動詞

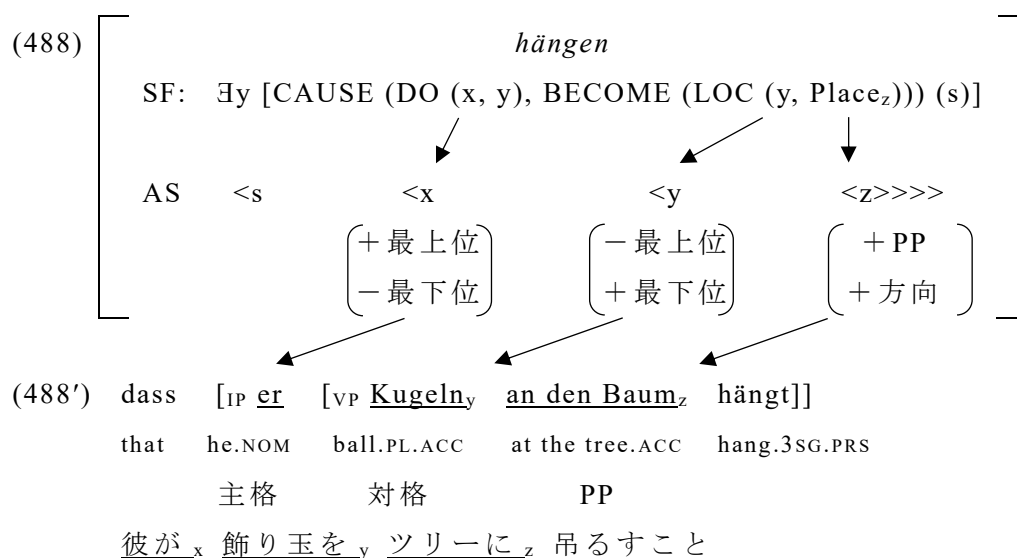
∃s [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)]

Er_x behängt den Baum_y

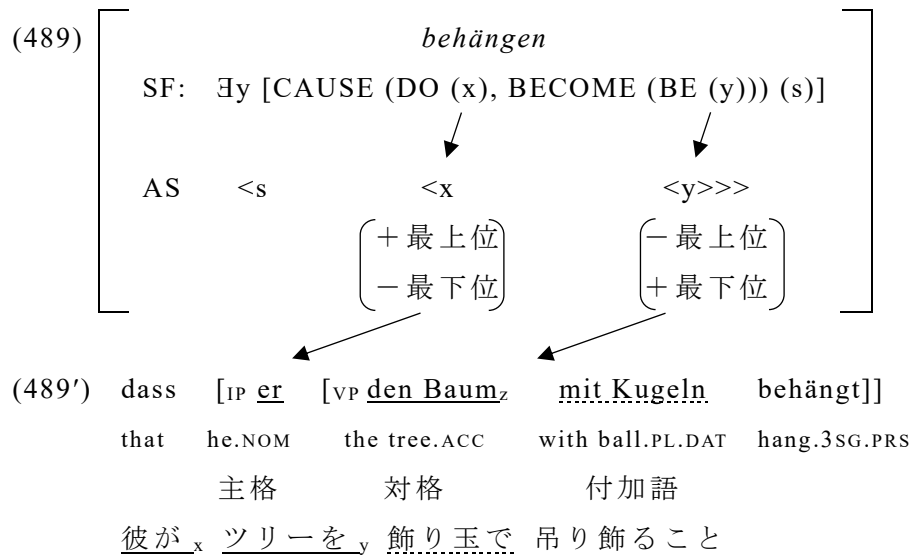
he.NOM hang.3SG.PRS the tree.ACC

彼が_x ツリーを_y 吊り飾る

使役移動動詞と適用動詞に (486)/(487) の意味形式を仮定した場合, 型とし
 ての使役移動構文と適用構文は別々の意味論的關係を反映した統語構造として
 導かれる。すなわち, 使役移動動詞では, 意味形式中の個体項である x と y が,
 x は [+最上位, -最下位], y は [-最上位, +最下位] の評価とともに構造
 項となり, 主格と対格で表される。Place は個体の項ではないから構造項となら
 ず, 語彙的な指定を受けて前置詞項となる。



一方、適用動詞では、意味形式中の個体項 x と y が、 x は [+最上位, -最下位], y は [-最上位, +最下位] の評価とともに構造項となり、主格と対格で表される。mit 句は付加語である。



しかし、適用動詞に見られるとされる「全体的作用」なる意味特徴を巡っては、「対格化」の立場をとる Eroms (1980), Olsen (1994), 成田 (1989, 2005) などの研究により、懐疑的な見解が示されている。というのも、(490) のように、適用動詞とされる動詞が明らかに「全体的作用」を表していない事例があるためである。

(490) a. Er hat sich einen neuen BMW525i gekauft, den
 he.NOM PRF.3SG.PRS REF.DAT a new BMW525i.ACC buy.PTCP which.ACC
 er dann direkt mit einem Atomkraft-Aufkleber beklebte. Und
 he.NOM then directly with a nuclear_power_sticker.DAT tick.3SG.PST and
 ihn dadurch im Wert herabsenkte. (Olsen 1994:221)
 it.ACC in_this_way in_the value.DAT lower.3SG.PST
 彼は新しい BMW525i を買い、原子力シールを直に貼りつけて、その車の価値を下げた。

- b. Er hat den Passanten mit Wasser bespritzt. Sein
 he.NOM PRF.3SG.PRS the passersby.ACC with water.DAT splash.PTCP his
 Hosenbein ist nass geworden. (Olsen 1994:221)
 trouser_leg.NOM PRF.3SG.PRS wet become.PTCP
 彼は通行人に水を跳ねつけた。その人のズボンの片脚が濡れた。

場所格交替を「対格化」として分析する Eroms (1980) や成田 (1989, 2005) および Narita (1991) は、「全体的作用」なる意味特徴は動詞の語彙的な意味によるものではなく、「対格化」の結果として生じる副次的な効果であるとしている。Eroms (1980) によれば、「対格化」には当該の項を焦点化 (Fokussierung) する効果があり、適用動詞では所在地に関する項が「対格化」されることでこの項が焦点化された結果、「全体的作用」を受けているという解釈が生まれるのだという。

成田 (1989, 2005) および Narita (1991) は、Eroms (1980) のいう焦点化という効果が「ある項に向ける注目の度合いを大きくすること」であるとし、焦点化により「全体的作用」という副次的な意味特徴が生じるメカニズムを次のように説明している。すなわち、*den Wagen beladen* という場合、*den Wagen* が焦点化されることで、「何を積むのか」ということに向けられる注目が相対的に低下し、背景に追いやられる。すると、極端な場合には、(491a) のように「車に荷物を積んだかどうか」ということにのみ関心が向けられることになる。

- (491)a. Wir haben den Wagen schon beladen.
 we.NOM PRF.1PL.PRS the car.ACC already load.PTCP
 私たちはもう車を荷積みしてある
- b. Wir haben den Wagen nur halb beladen.
 we.NOM PRF.1PL.PRS the car.ACC only half load.PTCP
 私たちは車を半分だけ荷積みした

そのような場合、(491b) のように *nur halb* などの明示的な限定がない限り、「積んである」ならば「一杯」で、「積んでない」ならば「空」だということが暗示される。「車が積み荷で一杯だ」ということや「車が空だ」ということが暗示されれば、それは車が「全体的」に作用を受けているということである。

適用動詞の「全体的作用」という意味特徴が動詞の語彙的な意味形式に内在するものでないとするならば、Rappaport & Levin (1988) や Pinker (1996) のように

適用動詞に使役移動動詞と異なる使役的状态変化の意味形式を想定する動機は失われる。

13.1.2. 「対格化」と二次的格付与

「対格化」の立場をとる場合、使役移動構文と適用構文は同じ意味形式に対応することになる。この意味形式は、使役的所在変化として、(492)のように語彙分解することができよう。

(492) 使役移動・適用構文の意味形式

Es [CAUSE (DO (x, y)), BECOME (LOC (y, Place_z))] (s)

a. Sie_x laden Heu_y auf den Wagen_z

they.NOM load.3PL.PRS hay.ACC on the car.ACC

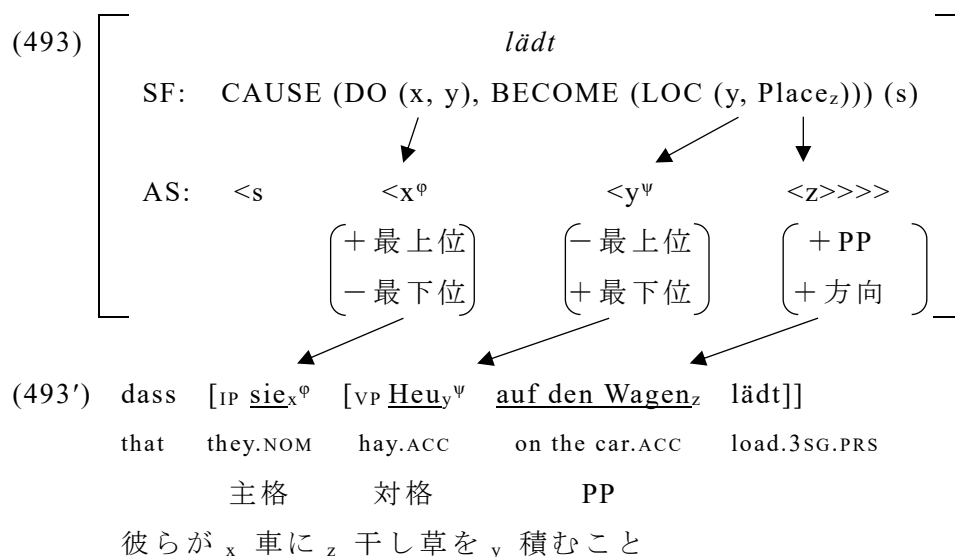
彼らは_x 干し草を_y 車に_z 積む

b. Sie_x beladen den Wagen_z mit Heu_y

they.NOM load.3PL.PRS the car.ACC with hay.DAT

彼らは_x 車を_z 干し草で_y 荷積みする

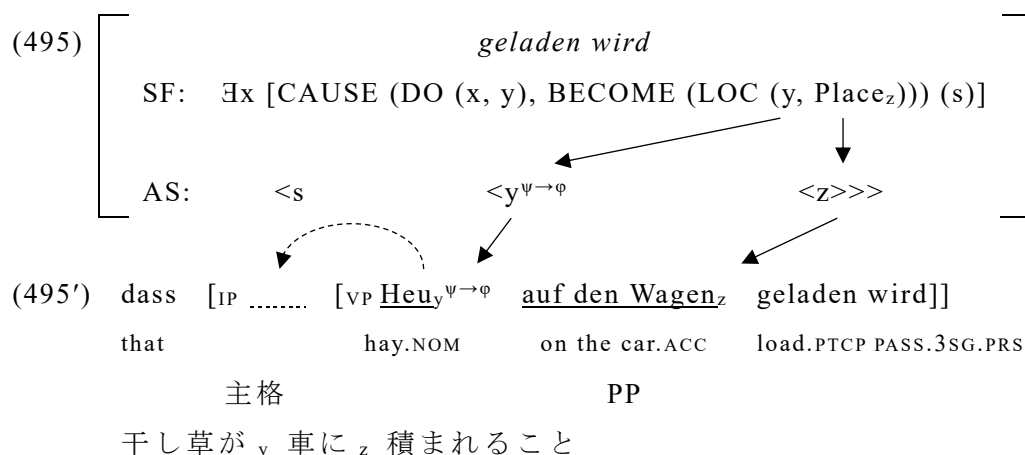
(492) の意味形式には、動作主の x と所在物の y の 2 つの個体項と、場所の項である $Place$ が含まれる。 x は最上位の個体項として [+最上位, -最下位] と評価される一方、 y は個体項の中では最下位の項なので、[-最上位, +最下位] と評価される。 $Place$ は、個体項ではないことから構造項とならず、前置詞項として語彙的な指定を受ける。この時、*lädt* のような屈折形では、法と時制の解釈のために参照される ϕ 素性が x に与えられるとともに、潜在的に素性の参照を可能とする ψ が y に与えられるとすれば、各項に構造条件に応じた格が与えられることで使役移動構文が導かれる。



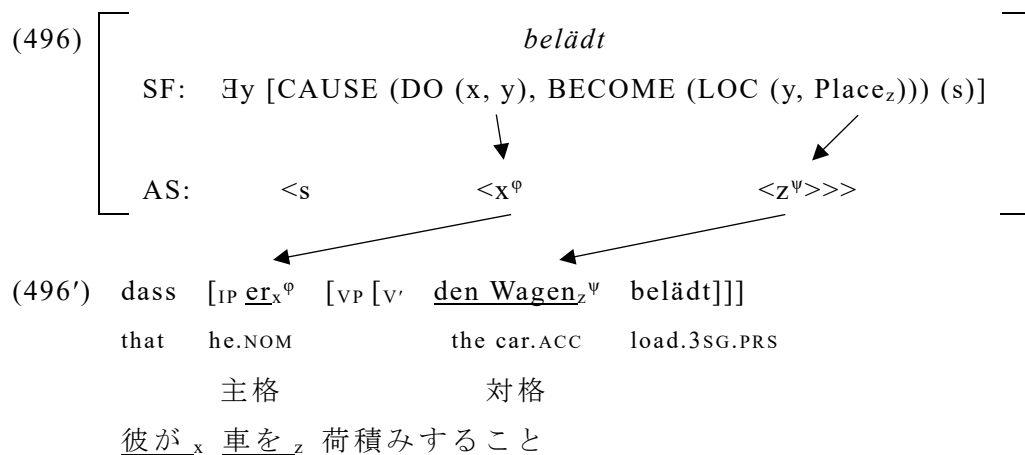
ψ が y に与えられることは、使役移動動詞の過去分詞が所在物を修飾する連体修飾語となり、(494) のように、所在物の性・数に応じた屈折形によって格を明示することからわかる。

(494) auf den Wagen geladen-es Heu^ψ
 on the car.ACC load.PTCP-N.SG.NOM hay.NOM
 車に積まれた干し草

「対格化」を「第二レベルの受動態」と考える場合、適用構文が形成されるプロセスは、受動態の形成プロセスからの類推によってとらえられる。受動態の形成は、能動態の主語となる項が存在量化されて項構造から抑制されるとともに、法と時制の解釈が能動態の対格目的語となる項の人称と数に鑑みて行われるようになる手続きとしてとらえることができる。*laden* の場合、(495) に示すように、受動態の屈折形 *geladen wird* では、能動態の屈折形 *lädt* において人称と数を参照すべき項であった動作主が存在量化され、この項の代わりに所在物の人称と数が参照されるようになる。これを所在物の項に ψ→φ と付すことで表現する。法と時制の解釈のために人称と数を参照される項は主格で明示されるので、所在物は、動作主の抑制により空となった IP 指定部へと移動するか、IP 指定部を埋める虚辞に束縛される (cf. Grewendorf 1988: 157) ことで可視的・不可視的に IP 指定部へ繰り上げられて主格となり、受動態が形成される。(495) の破線矢印は IP 指定部への可視的・不可視的な繰り上げを表す。



したがって、適用構文の形成を受動態の形成との類推でとらえるなら、適用構文も、存在量化による所在物の項構造からの抑制と、「対格化」される項への素性の割り当てにより形成されるものとしてとらえることができる。すなわち、*belädt* のような適用動詞の屈折形では、*y* が存在量化されて項構造から抑制されると同時に、潜在的に素性の参照を可能とする ψ が *y* ではなく *z* に割り振られるということである。すると、*z* は対格の付与条件を満たすこととなり、適用構文が形成されることになる。



「対格化」される項は ψ を受け取るので、受動態によってこの項を主題化することが可能となる。したがって、「対格化」は、(497a) のようにそのままでは受動態の主語とすることのできない所在地に関する項について、(497b) のような受動態による主題化を可能とする仕組みとすることができる (cf. Eroms 1980: 57)。この点で、「対格化」は二次的格付与と似通った仕組みと言える。

- (497) a. *Der Wagen wird geladen auf.
 the car.NOM PASS.3SG.PRS load.PTCP on
- b. Der Wagen wird beladen.
 the car.NOM PASS.3SG.PRS load.PTCP
 その車は荷積みされている

「対格化」される項に ψ が与えられることで、適用動詞の過去分詞は、この項を修飾する連体修飾語となり、その性・数に応じた屈折形により格を明示する。例えば、*beladen* は「積み荷が置かれる場所」に関する項を修飾する連体修飾語となる。(498) では、この項が男性・単数の *Wagen* 「車」なので、男性・単数に鑑みた主格の語尾 *-er* による格の明示が行われている。

- (498) ein mit Heu beladen-er Wagen ψ
 a with hay.DAT load.PTCP-M.SG.NOM car.NOM
 干し草で荷積みされた車

13.2. 適用動詞と使役移動動詞の名詞化における項の振る舞い

しかし、適用動詞の名詞化における項の振る舞いは、適用動詞の「対格化」と二次的対格付与を関係づける見方に反するものである。11章と12章で論じたように、物理作用動詞や *warnen/mahnen* といった二次的対格付与が行われる動詞の派生名詞化では、二次的対格項に対応した属格項は認められず、目的語属格が欠如する。いわば「二次的な手続きによらなければ対格とならない項」である二次的対格項は状況の同定を可能とする項ではなく、派生名詞化の構造項とはならないのである。ところが、適用動詞の名詞化では、「対格化」されて対格目的語となる項が問題なく属格項として認められる。適用動詞の名詞化には *Beladung* 「荷積み」や *Beschuss* 「砲撃」といった名詞化が該当するが、*Beladung* にせよ *Beschuss* にせよ、(499) のように、基盤動詞の対格目的語は問題なく後置属格の形で実現する。

(499) a. **die Beladung des Tankers** in einer Bucht bei Wladiwostok

the loading.NOM the tanker.GEN in a bay.DAT at Vladivostok.DAT

habe zwar am Mittwoch begonnen,

PRF.3SG.SBJ1 indeed on_the Wednesday.DAT start.PTCP

(DEREKO: Süddeutsche Zeitung, 21.10.1993)

ウラジオストク近くの湾内でのタンカーの荷積みは確かに水曜日に始まったとのことだ

b. **beim Beschuss eines Busses durch die Nato** seien 20

in_the bombing.DAT a bus.GEN by the NATO.ACC PRF.3PL.SBJ1 20

Menschen getötet worden. (DEREKO: Tages-Anzeiger, 05.05.1999)

people.PL.NOM kill.PTCP PASS.PTCP

NATOによるバスの砲撃で20名が亡くなったとのことだ

(499') a. Sie beladen den Tanker.

they.NOM load.3PL.PRS the tanker.ACC

彼らはタンカーを荷積みしている

b. Die Nato beschoss einen Bus.

the NATO.NOM bomb.3SG.PST a bus.ACC

NATOがバスを砲撃した

この属格は、(500)のように2音節以下の無冠詞の固有名詞であり得ることから (cf. 5.1.1.3 節, 7.1.4 節), 属格付加語ではなく属格項である。

(500) **Der Beschuss Gilos** ging am Dienstagabend weiter.

the shelling.NOM Gilo.GEN continue.3SG.PST on_the tuesday_evening.DAT PTCL

(DWDS: Berliner Zeitung, 29.08.2001)

ギロ (イスラエルの入植地) の爆撃は火曜日の晩も続いた

ちなみに、使役移動動詞の名詞化では、所在物の項に後置属格の形での実現が認められる。使役移動動詞の名詞化には、*Verladung*「積み込み」や *Verpflanzung*「移植」といった名詞化が該当する。例えば、(501)の名詞化において、属格は(501')の文における対格の所在物に対応している。

- (501) a. Für Frau Fink haben wir einen „Kran“ bzw. „Lift“ gefunden,
 for Ms. Fink.ACC PRF.3PL.PRS we.NOM a crane.ACC or lift.ACC find.PTCP
 der ihr mit einer Fernbedienung **die Verladung ihres**
 which.NOM her.DAT with a remote_control.DAT the loading.ACC her
Elektroscooters in ihren Pkw ermöglicht.“
 electric_scooter.GEN into her car.ACC allow.3SG.PRS

(DEREKO: Niederösterreichische Nachrichten, 30.10.2014)

フィンクさんのために私たちは、遠隔操作で電動スクーターを乗用車に積み込めるクレーンないしリフトを見つけてあげた

- b. Der nächste Schritt wäre **die Verpflanzung eines**
 the next step.NOM be.3SG.SBJ2 the transplantation.NOM a
Designergenoms in eine Zelle (DWDS: Die Zeit, 16.07.2009)
 designer genome.GEN into a cell.ACC

次のステップとなるのは合成ゲノムを細胞に移植することだ

- (501') a. Sie verlädt ihr Elektroscooter in ihren Pkw.
 she.NOM load.3SG.PRS her electric_scooter.ACC into her car.ACC
 彼女は電動スクーターを乗用車に積み込む

- b. Sie verpflanzen ein Designergenom in eine Zelle.
 they.NOM transplant.3PL.PRS a designer-genome.ACC into a cell.ACC
 彼らは合成ゲノムを細胞に移植する

典型的な使役移動動詞では、所在物の項が固有名詞で表されるような「人」の項であることはあまりない。しかし、*versetzen*「転属させる」や *abschieben*「追放する」のような動詞も使役移動動詞の一種と考えれば、(502)のように、所在物（所在者）が1音節や2音節の無冠詞固有名詞の例も認められる。

- (502) a. Die Folge dieses Vorfalls war **die Versetzung Bernds in**
 the consequence.NOM this incident.GEN be.3SG.PST the transfer.NOM Bernd.GEN to
eine Schule, in der er wiederum eigentlich nichts zu
 a school.ACC in which.DAT he.NOM again actually nothing.ACC to
 suchen hatte: (DWDS: Die Zeit, 03.10.1957)
 do.INF have.3SG.PST

この事件の結果は、ベルントを再び彼が来るべきでない学校に転校させることだった

- b. **Die Abschiebung Gulas nach Afghanistan werde dagegen**
 the deportation.NOM Gula.GEN to Afghanistan.DAT FUT.3SG.SBJ1 on_the_other_hand
 ein Sinnbild für die "grausame Behandlung afghanischer Flüchtlinge"
 a symbol.NOM for the cruel treatment.ACC Afghan refugee.PL.GEN
 im heutigen Pakistan werden, (DWDS: Die Zeit, 04.11.2016)
 in_the today's Pakistan.DAT become.INF
 一方、グーラーさんをアフガニスタンに追放すれば、今日のパキスタンにおけるアフガン難民に対する非人道的な扱いを象徴することとなる

- (502') a. **Der Klassenlehrer versetzte Bernd in eine Schule.**

the class-teacher.NOM transfer.3SG.PST Bernd.ACC to a school.ACC

担任教師はベルントをある学校へ転校させた

- b. **Die pakistanische Regierung schiebt Gula nach Afganistan**

the Pakistani government.NOM deport.3SG.PRS Gula.ACC to Afganistan.DAT

ab.

PTCL

パキスタン政府がグーラーさんをアフガニスタンに追放する

また、インフォーマントによると *Verladung* 「積み込み」のような名詞化でも、人身売買などの文脈では、(503) のように「人」を所在物（所在者）とすることができ、その場合、2 音節以下の無冠詞固有名詞でも後置属格となり得ることである。したがって、これらの属格は属格付加語ではなく属格項である。

- (503) **Die Verladung Peters auf das Schiff fand in diesem Hafen**

the loading.NOM Peter.GEN onto the ship.ACC take_place.3SG.PST at this port.DAT

statt.

PTCL

ペーターの船への積み込みはその港で行われた

適用動詞の名詞化では所在地に関する項が属格項となり、使役移動動詞の名詞化では所在物が属格項となるというデータは、適用動詞では所在地に関する項が状況の同定を可能とする項であるのに対し、使役移動動詞では所在物が状況の同定を可能とする項であることを示している。つまり、使役移動動詞が表

す状況と適用構文が表す状況は同じ「使役的所在変化」でありながら、その同定を可能とする項が異なっているのである。

13.3. 所在関係のより精細な分析

13.1 節と 13.2 節で確認した使役移動動詞・適用動詞とその名詞化の特徴は、(504) に挙げる 2 つのジレンマを抱えている。

(504) 使役移動動詞・適用動詞の名詞化を巡るジレンマ：

- a. 場所格交替は使役的所在変化という共通の意味形式に基づく交替であると考えられるが、交替に際して二次的対格付与が行われているならば予想される名詞化での目的語属格の欠如は、使役移動動詞の名詞化にも適用動詞の名詞化にもみられない。
- b. 使役移動動詞の名詞化と適用動詞の名詞化は、使役的所在変化という同じ状況を表す名詞化であるにも関わらず、状況の指示を可能とする項が異なる。

本節では、使役的所在変化という状況を構成する「所在」という関係をより精緻に分析することで、(504) のジレンマが解消されることを明らかにする。

13.3.1. 場所と場所を規定する個体

筆者はここまで、語彙分解に用いられる所在の関数 LOC を、人や物の項である所在物と場所の項である所在地の関係として、(505) のように分析してきた。

(505) LOC (x, Place)

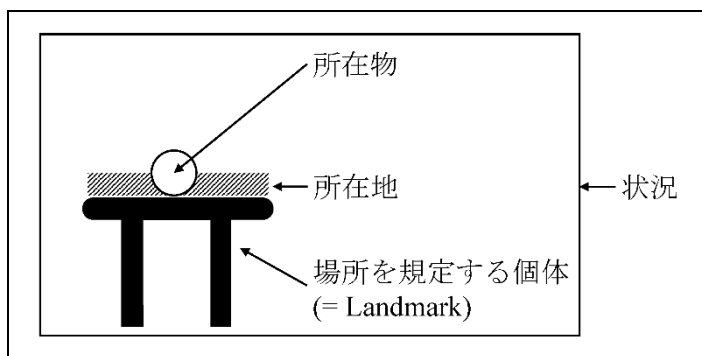
この分析は、場所が人や物と並んで世界に実在する存在のひとつ（タイプ論的に言えば、e タイプの存在）であるという存在論を背景としている。場所という存在を人や物と並ぶものと考えすることは、場所が *hier* や *dort* によって直示されたり、*wo* によって問われたりすることに鑑みれば、少なくとも言語における場所のとらえ方としては妥当なものであると言える (cf. Lyons 1977: 475ff.)。

一方で場所という存在は、「机の上」が「机」という個体を通じて規定されるように、人や物のような個体を基準として相対的に規定される存在でもある。

「机の上」という場所に対する「机」のような「場所を規定する個体」を *Landmark* と呼ぶことにする (cf. Maienborn 2001: 192)。空間における所在物と所在地、お

よび Landmark の関係は, (506) のように図示することができる (cf. 藤縄 2016: 5)。

(506) 空間における諸要素の関係



Landmark を用いて所在地をより細かく分析すると, 所在関係は (505') のように分析することができるようになる。(505') において, AUF (y) は y によって規定される「y の上」という場所を表している。つまり, (505') では, y が Landmark, AUF (y) が所在地である。

(505') LOC (x, AUF (y))

y によって規定される場所には「y の上」の他にも「y の下」や「y の中」などが考えられる。これらの場所も, 「y の下」は UNTER (y), 「y の中」は IN (y) といった形で表すことができる。

13.3.2. 場所・方向の前置詞句の意味形式

ドイツ語では, *stehen* 「立っている」や *liegen* 「横たわっている」, *hängen* 「掛かっている」などが所在関係を表す典型的な動詞である。これらの動詞は, 本来, 人や物の姿勢を述べる様態動詞 (姿勢動詞) であり, 人や物の項に加えて補足語をとる場合, その補足語は (507a) のような場所に限らず, (507b) のような様態の述語でもあり得る。

- (507)a. Er stand vor der Tür.
he.NOM stand.3SG.PST in_front_of the door.DAT
彼は扉の前に立っていた

b. Er stand still.

he.NOM stand.3SG.PST quiet

彼は静かに立っていた

そこで (507) の意味形式をそれぞれ (507') のように語彙分解すれば, 場所の前置詞句 *vor der Tür* の意味形式として, (507'a) の点線部を取り出すことができよう (cf. (508)). d.Tür は *der Tür* の指示対象である文脈上唯一に特定された扉を表している。

(507') a. $\exists s$ [STEHEN (y) & LOC (y, VOR (d.Tür))] (s)

b. $\exists s$ [STEHEN (y) & STILL (y)] (s)

(508)

<p style="text-align: center;"><i>vor der Tür</i></p> <p>SF: LOC (y, VOR (d.Tür))</p> <p>AS: <y></p>
--

この意味形式は, ドイツ語の場所の前置詞句が単に「扉の前」のような所在地を指すのではなく, 「y が扉の前にいる・ある」ということまでも表す所在の意味を含んだ表現であることを示している (cf. 藤縄 2016: 15-18)。⁴⁵

(509) のような姿勢動詞と使役移動動詞のペアでは, 「絵が掛かっている場所」と「絵を掛ける場所」が, それぞれ場所と方向の前置詞句によって表される。(509) では, 前置詞句の主要部がともに *an* で, 場所と方向の区別は前置詞が補語にとる名詞句の格の違いのみによって示されている。

(509)a. Bilder hängen an der Wand.

picture.PL.NOM hang.3PL.PRS on the wall.DAT

絵が壁に掛かっている

b. Er hat Bilder an die Wand gehängt.

he.NOM PRF.3SG.PRS picture.PL.ACC on the wall.ACC hang.PTCP

彼は絵を壁に掛けた

文脈上唯一に特定された壁を d.Wand と置き, (509) の意味形式を (509') のように語彙分解すれば, (509a) の所在地と (509b) の着点が, 点線で示した同一

⁴⁵ 他方, 「扉の前」のような日本語の場所の名詞句は純粹に「場所」の表現であり, 「所在」の意味は所在動詞の「いる・ある」によって担われる (cf. 藤縄 2016: 15-18)

の意味形式に対応することが読み取れる。これは、場所の前置詞句と方向の前置詞句が、格支配の違いこそあるものの、同一の意味形式に対応する表現であることを示している。

- (509') a. $\exists s$ [HÄNGEN (y) & LOC.(y, AN.(d.Wand))] (s)
 b. $\exists s$ [CAUSE (DO (x, y), BECOME (HÄNGEN (y) & LOC (y, AN.(d.Wand))))] (s)

したがって、場所の前置詞 an^{loc} と方向の前置詞 an^{dir} は、それぞれ (510ab) のように分析することができる。⁴⁶ 場所の前置詞と方向の前置詞は、項構造における Landmark の格支配の情報こそ異なっているものの、その他の点では共通の情報をもった語彙項目なのである。

- (510) a.
$$\left[\begin{array}{l} an^{loc} \\ \text{SF: LOC (y, AN (z))} \\ \text{AS: } \langle y \quad \langle z \rangle \rangle \\ \quad \left(\begin{array}{l} + \text{DP} \\ + \text{DAT} \end{array} \right) \end{array} \right]$$
 b.
$$\left[\begin{array}{l} an^{dir} \\ \text{SF: LOC (y, AN (z))} \\ \text{AS: } \langle y \quad \langle z \rangle \rangle \\ \quad \left(\begin{array}{l} + \text{DP} \\ + \text{ACC} \end{array} \right) \end{array} \right]$$

13.3.3. 接頭辞 *be-*の空間的意味形式

ドイツ語の適用動詞には *be-*という特徴的な接頭辞が見られる。

- (511) Er **belädt** den Wagen mit Heu.
 he.NOM BE-load.3SG.PRS the car.ACC with hay.DAT
 彼は車を干し草で荷積みする

Wunderlich (1992) と Brinkmann (1997) は、この接頭辞が通時的に古高ドイツ語・中高ドイツ語の前置詞 *bī* に由来することから、*be-*が場所や方向の前置詞と同じく空間的な意味をもつとする分析を行っている。筆者もこの立場にならない、*be-*という形態素を (512) の意味形式をもつ語彙項目として分析することを試みる。

⁴⁶ loc は locational, dir は directional の略。

- (512)

<i>be-</i> SF: LOC (v, BEI (v)) AS: <v <v>>

古い前置詞 *bī* は現代語の前置詞 *bei* のもとになった前置詞でもあるため, (512) では所在地の項を BEI (v) としている。⁴⁷ これはあくまで *be-* と *bei* の通時的関連性にちなんだ便宜的な表記であり, BEI (v) が現代語の *bei* によって表されるような場所だという意味ではない。

be- が表す空間的意味が具体的にどのようなものかについては, 間接的な手掛かりがある。場所格交替において, *be-* をもつ適用動詞の対格項は使役移動動詞の方向の前置詞句の前置詞項と対応するが, この対応には (513) や (514) のような *an* や *auf* の前置詞句が頻出する一方, (515) のような *in* の前置詞句は, *be-* をもつ適用動詞の対格項とはうまく対応しない。

- (513)a. Ted schmiert Butter **auf die Tischdecke.** (Brinkmann 1997: 80)
Ted.NOM smear.3SG.PRS butter.ACC on the tablecloth.ACC

- b. Ted beschmiert **die Tischdecke** mit Butter.
Ted.NOM BE-smear.3SG.PRS the tablecloth.ACC with butter.DAT
テッドはテーブルクロスの下表面にバターを塗りつけている

- (514)a. Petra hängt Sterne **an den Christbaum.**
Petra.NOM hang.3SG.PST star.PL.ACC on the Christmas-tree.ACC
(Brinkmann 1997: 80)

- b. Petra behängte **den Christbaum** mit Sternen.
Petra.NOM stop.3SG.PST the Christmas-tree.ACC with star.PL.DAT
ペトラはクリスマスツリーの際に星飾りを吊り下げた

- (515)a. Sie luden Gepäck **in den Kofferraum.**
they.NOM load.3PL.PST luggage.ACC into_the trunk.ACC
彼らは荷物をトランクルームの中に積んだ

⁴⁷ 別案として, 具体的な空間関係を表す BEI (v) ではなく, 藤縄 (2016:12) のように「v の上・外」など v によって規定される場所を一般化して P*(v) のように (P*は定項) 表示することで, v によって規定される場所の存在が暗示され, 文脈などに応じて意図されている場所が特定されるとする考え方もある。

- b. ?Sie beluden den Kofferraum mit Gepäck.
 they.NOM BE-load.3PL.PST the trunk.ACC with luggage.DAT

(Wunderlich 1992: 29)

また、それ自体としては問題のない *be*-動詞の適用構文も、対格項を使役移動構文の *in* の前置詞項と対比させると、意味の違いが際立つことが多い。例えば、(516a) の文が日常的なごみ捨て行為として理解されるのに対し、(516b) は「ごみ箱の中ではなく外面に向けてごみを投げつける」という状況と解釈され、日常のごみ捨て行為としては解釈されない。

- (516)a. Er warf Müll in die Tonne.
 he.NOM throw.3SG.PST garbage.ACC into the bin.ACC

彼はごみをゴミ箱の中に投げ入れた

- b. Er bewarf die Tonne mit Müll.
 he.NOM BE-throw.3SG.PST the bin.ACC with garbage.DAT

彼はごみをゴミ箱の外面に投げつけた

したがって、*be*-の表す空間関係は、*an* や *auf* の空間関係に類似し、*in* の空間関係とは相違の大きいものであると推定できる。⁴⁸

13.3.4. 「場所から場所を規定する個体」を取り出す適用動詞

be-を (512) の意味形式を持った形態素として分析することで、適用動詞を (517) の意味形式によって分析することができる。

(517) 適用動詞の意味形式:

$\exists s \exists y$ [CAUSE (DO (x, y), BECOME (LOC.(y, BEI.(z)))) (s)]

Sie_x beladen den Wagen_z

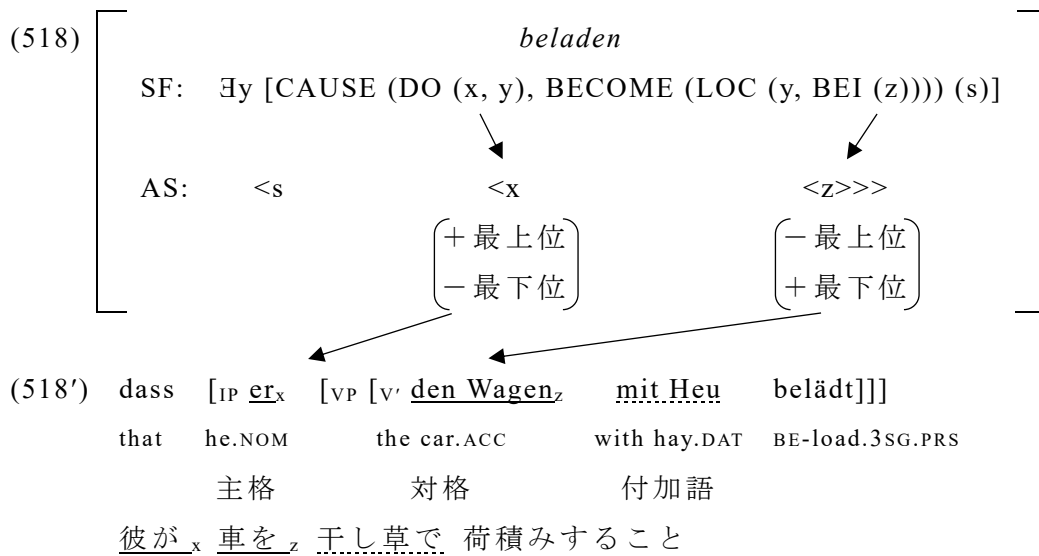
they.NOM load.3PL.PRS the car.ACC

彼らは_x 車を_z 荷積みする

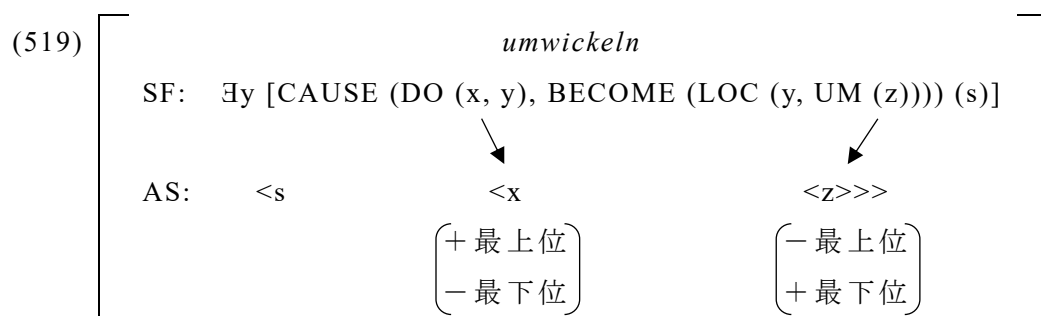
(517) の意味形式のうち、点線で示した箇所は接頭辞の *be*-に由来するものである。この部分に Landmark から場所を規定する BEI が含まれていることから、適用動詞の対格目的語は場所ではなく、Landmark として分析することができる。

⁴⁸ Brinkmann (1997: 80f.) はさらに踏み込んで、*be*-が対象の外面 (the exterior of an object) という空間関係を表すと主張している。

Landmark は、場所の項である所在地と密接に関わる存在ではあるものの、それ自体としてはあくまで人や物、すなわち個体の項である。動詞の項構造に意味形式中の項が記録される際、場所の項は構造項とはならない (cf. 4.3.1 節) が、Landmark は個体項なので構造項となり得る。ゆえに適用動詞の項構造には、(518) に示すように Landmark である *z* が [−最上位, +最下位] の評価とともに構造項として記録される。すると *z* はその評価に応じて VP 補部へと投射され、対格の付与を受けることになる。mit 句は付加語 (項付加語) である。



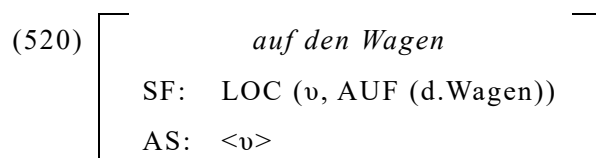
この分析は、*umwickeln*「巻きつける」のような、*be*-以外の前置詞由来の接頭辞を持った動詞にも当てはめることができる。*umwickeln* の場合、接頭辞 *um*-の意味として、Landmark から場所を規定する関係 UM が、動詞の意味に含まれると考えられる。そのため、項構造には Landmark が [−最上位, +最下位] の構造項として記録され、その評価を反映して VP 補部へ投射されて、対格が与えられるのである。



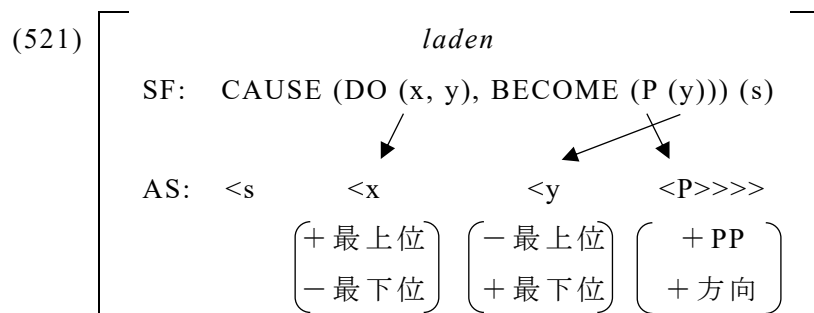
(518') dass [IP er_x [VP [V' die verletzte Hände_z umwickelt]]]
 that he.NOM the injured hand.PL.ACC UM-wrapp.3SG.PRS
 主格 対格
 彼が_x 怪我をした手に_z 包帯すること

13.3.5. 使役移動動詞における構成的な使役的所在変化

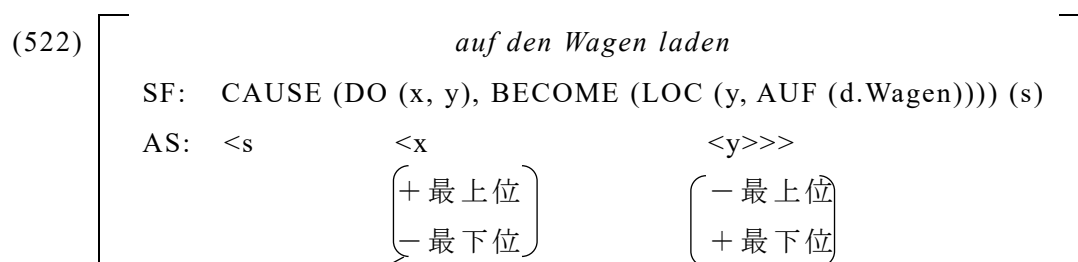
13.3.2 節で述べたように、ドイツ語の場所・方向の前置詞句は単に場所を表すだけでなく、その場所に「いる・ある」という所在の意味を含んだ表現である。例えば、*auf den Wagen* という方向の前置詞句は、単に「車の上」という場所を表すのではなく、「車の上にいる・ある」という意味を持った述語として (520) のように分析することができる。



そのため、方向の前置詞句を構成要素とする使役移動構文では、所在の意味は動詞の意味として与えられるのではなく、あくまで前置詞の意味として与えられると考えられる。したがって、ドイツ語の使役移動動詞の意味形式は、使役的所在変化を表す意味形式をもとに所在の意味を述語変項 P として抽象化することで、(521) のように分析することができる。



(521) において、述語変項 P は、方向の前置詞句によって実現することが語彙的に指定されている。この項が「いる・ある」という所在の意味を持った前置詞句によって具体的に埋められることで、(522) に示す使役的所在変化の意味形式が構成的に導かれる。また、(521) の項構造では、述語変項の P の他に、x と y が構造項となっている。x の評価は [+最上位, -最下位], y の評価は [-最上位, +最下位] である。結果として、x と y はそれぞれ主格と対格で表され、使役移動構文が形成される。



(522') dass [IP er_x [VP Heu_y auf den Wagen lädt]]
 that he.NOM hey.ACC onto the car.ACC load.3SG.PRS
 主格 対格 PP
彼が_x 干し草を_y 車に積むこと

このように考えると、使役移動動詞と適用動詞の大きな違いは、所在の意味が動詞の語彙的な意味に含まれているか、動詞自体の意味ではなく、前置詞から得られるかという点にあると言える。すなわち、使役移動構文と適用構文は、文のレベルの意味形式は共通しているものの、その意味形式のどこまでが動詞の意味なのかということが異なっており、その点で、使役移動動詞と適用動詞は動詞のレベルの意味形式では異なっているのである。

13.3.6. 使役移動動詞・適用動詞の名詞化における状況の同定

Landmark を用いて所在関係を精細に分析すると、使役移動動詞と適用動詞の名詞化を巡る 2 つのジレンマ ((523) に再掲) も解消される。

(523) 使役移動動詞・適用動詞の名詞化を巡るジレンマ (= (504))

- a. 場所格交替は使役的所在変化という共通の意味形式に基づく交替であると考えられるが、交替に際して二次的対格付与が行われているならば予想される名詞化での目的語属格の欠如は、使役移動動詞の名詞化にも適用動詞の名詞化にもみられない。
- b. 使役移動動詞の名詞化と適用動詞の名詞化は、使役的所在変化という同じ状況を表す名詞化であるにも関わらず、状況の指示を可能とする項が異なる。

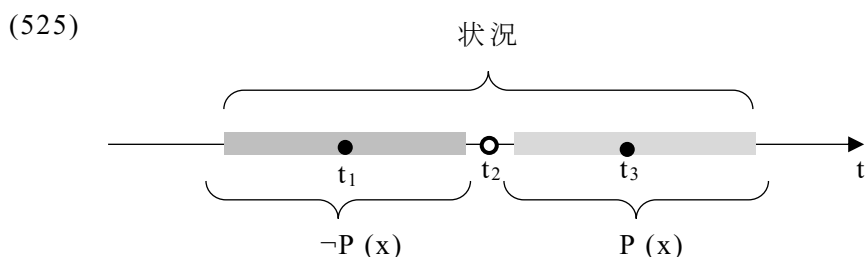
というのも、場所格交替は、文のレベルの意味形式において共通する交替現象ではあるものの、その形成はあくまで意味形式の関係を写像的に反映する一次的格付与によるものであり、二次的格付与は行われていないと考えられるからである。また、使役移動動詞と適用動詞は、文のレベルにおいてこそ同じ使役的所在変化という状況を表すとしても、動詞レベルでは所在の意味を含むか否かという点で意味形式が異なっていると考えられるので、動詞レベルの意味形式に鑑みる限りにおいて「状況の同定を可能とする項」が異なっていると考えることができる。

使役移動動詞の名詞化では、所在物が属格項となる。これは、使役移動動詞によって表される状況において、所在物が状況の同定を可能とする項であることを示すものと解釈できる。

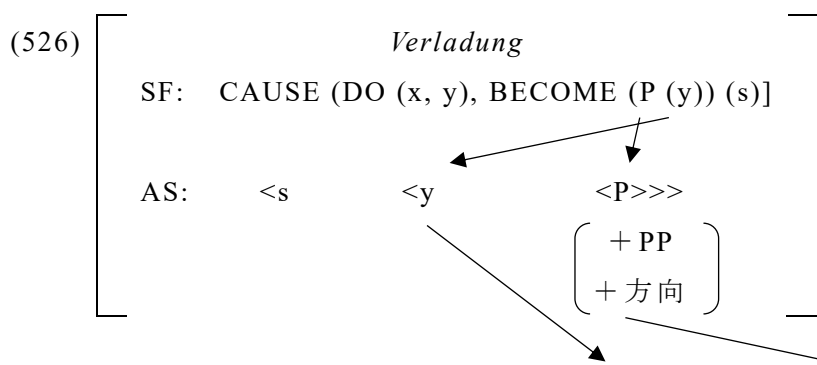
(524) Die Folge dieses Vorfalls war **die Versetzung Bernds** in the consequence.NOM this incident.GEN be.3SG.PST the transfer.NOM Bernd.GEN to **eine Schule**, in der er wiederum eigentlich nichts zu a school.ACC in which.DAT he.NOM again actually nothing.ACC to suchen hatte: (DWDS: Die Zeit, 03.10.1957)
do.INF have.3SG.PST

この事件の結果は、ベルントを再び彼が来るべきでない学校に転校させることだった

使役移動動詞によって表される状況において所在物が状況の同定を可能とする項であることは、所在物の特定によって、状況に対してユニークな時点が特定されることによるものと考えられる。所在物を x と置くと、使役移動動詞によって表される状況では、変化の時点 t_2 を境界として、 t_2 より前の時点 t_1 には $\neg P(x)$ 、 t_2 より後の時点 t_3 には $P(x)$ という関係が当てはまる。 P は述語変項で、この述語が表す具体的な性質は使役移動動詞自体の意味としては与えられず、前置詞句によって与えられる。



この時、 t_2 は状況に対してユニークな時点であり、 t_2 が特定されると状況も同定される。 t_2 は所在物に依存しており、所在物を特定することで、その所在物に P という性質が当てはまるようになる時点として、 t_2 も特定される。つまり、使役移動動詞によって表される状況では、所在物を特定すると t_2 が特定され、 t_2 が特定されることで状況も同定し得るのである。そのため、使役移動動詞の名詞化では、所在の意味が抽象化された述語変項が語彙的な前置詞項となるとともに、所在物が構造項となり、属格項として実現する。



(526') [DP die [n_P [n' Verladung]_i [NP des Produkts]_y [N' t_i auf das Schiff]_P]]]

the loading.NOM the product.GEN on the shipp.ACC

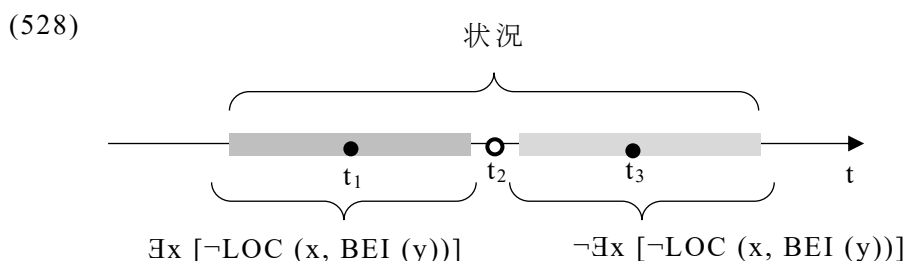
製品の_y 船への_P 積み込み

一方、適用動詞の名詞化では、Landmark が属格項となる。これは、適用動詞により表される状況において、Landmark が状況の同定を可能とする項であることを示すものと解釈できる。

- (527) **Der Beschuss Gilos** ging am Dienstagabend weiter.
 the shelling.NOM Gilo.GEN continue.3SG.PST on_the tuesday_evening.DAT PTCL
 (DWDS: Berliner Zeitung, 29.08.2001)

ギロ（イスラエルの入植地）の爆撃は火曜日の晩も続いた

適用動詞によって表される状況が Landmark によって同定されることは、次のように説明される。適用動詞によって表される状況では、変化の時点 t_2 を境界として、 t_2 より前の時点 t_1 には $\exists x [\neg \text{LOC}(x, \text{BEI}(y))]$ 、 t_2 より後の時点 t_3 には $\neg \exists x [\neg \text{LOC}(x, \text{BEI}(y))]$ という関係が当てはまる。x は所在物、y は Landmark である。所在物は存在量化されており、それが何であるかという事は問われなくなっている。この時、 t_1 において存在量化が否定よりも広い作用域をとっていることに注意されたい。つまり、 t_1 の時点でも x はあくまで存在しており、否定されているのは「x が BEI(y) という場所に所在すること」である。⁴⁹



仮に、BEI(y) が「yの上」という場所であるとしよう。すると、「車を荷積みする」という状況において、 t_2 は、車に関する「現にある何かがその上に積まれる」時点である。つまり、適用動詞によって表される状況では、Landmark の特定によって、状況に対してユニークな時点 t_2 も特定される。状況に対してユニークな時点を特定すれば状況の同定も可能となる。そのため、適用動詞の名詞化では Landmark が状況の同定を可能とする項として構造項となるのである。

⁴⁹ 仮に $\neg \exists x [\text{LOC}(x, \text{BEI}(y))]$ としてしまうと、*den Wagen beladen* は「車にわずかでも物が積まれた時点」で完了してしまうことになり、適用構文において副次的であれ「全体的作用」が表されるという観察と矛盾することになる。

する項は **Landmark** である。結果として、使役移動動詞の名詞化では所在物が構造項なり、適用動詞の名詞化では **Landmark** が構造項となるのである。

14. 例外的目的語属格：不定詞名詞化と置き換わった派生名詞化

11 章と 12 章において，物理作用動詞の名詞化や *Warnung/Mahnung* では目的語属格が欠如することを論じた (cf. (530)/(531))。

(530) **Der Schlag des Nachbarn** hat sich vor Mitternacht
the hit.NOM the neighbor.GEN PRF.3SG.PRS REF.ACC before midnight
ereignet.

happen.PTCP

= [隣人が殴ること] が夜半前に起こった

≠ [隣人を殴ること] が夜半前に起こった

(531) **Die Warnung des Mannes** hat nicht gefruchtet.

the warning.NOM the man.GEN PRF.3SG.PRS not work.PTCP

= [男が警告すること] には効果がなかった

≠ [男に警告すること] には効果がなかった

しかし，このような名詞化でも，稀ではあるものの，目的語属格の実例が見られないわけではない。例えば，(532) の名詞化は明らかに「建設労働者を警告すること」という意味であり，*der Bauarbeiter* が目的語属格となっている。以降，(532) のように，目的語属格を欠くとされる名詞化に現れている目的語属格を「例外的目的語属格」と呼ぶ。

(532) **Durch den Einsatz von Baumaschinen und laut schallenden**
by the use.ACC of construction_machinery.PL.DAT and loud sounding
Typhonen oder automatischer Rottenwarnanlagen zur Warnung
typhonen.PL.GEN or automatic mass_warning_system.GEN to_the warning.DAT
der Bauarbeiter kommt es dabei zu
the construction_worker.PL.GEN come.3SG.PRS it.NOM at_that_time to
Lärmbelästigungen. (DEREKO: Rhein-Zeitung, 11.03.2013)

noise_nuisance.PL.DAT

その際，建設機械や建設労働者に警告を発するための大音量で鳴り響く警笛や集団警報装置の使用によって騒音が発生することになる

本章では，例外的目的語属格に注目し，このような実例が稀とはいえ認められる背景について考察する。

14.1 節では、本章で観察する例外的目的語属格のデータとその収集方法について述べる。14.2 節では例外的目的語属格の生起環境に注目する。14.3 節では、例外的目的語属格と不定詞名詞化の共通点に注目する。14.4 節では、例外的目的語属格が認められるメカニズムについて考察する。最後に 14.5 節において、この章のまとめを行う。

14.1. 例外的目的語属格に関するデータの収集

例外的目的語属格の実例は、存在こそするものの極めて稀である。そのため、無作為的な手法により十分なサイズのサンプルを収集するのは現実的ではない。そこで次善策として、言語外知識や他の語との関係に鑑みた「蓋然性の高い解釈」を念頭に、名詞化と属格の組み合わせを選んでデータの収集を行った。収集したのは、(533) に挙げる名詞化と属格の組み合わせである。

(533)	名詞化		属格
a.	Warnung	+	Bürger「市民」、Bevölkerung「住民」
b.	Mahnung	+	Bürger「市民」、Bevölkerung「住民」
c.	Biss	+	Mensch「人間」
d.	Stich	+	Mensch「人間」

warnen「警告する」と *mahnen*「催促する」については、社会通念上、*Bürger*「市民」や *Bevölkerung*「住民」といった存在は、公共団体などから警告・催促を受けることが多いと考えられる。そのため、*Bürger*「市民」や *Bevölkerung*「住民」が属格となっている場合、これらは目的語属格である蓋然性が高いと言える。*beißen*「噛みつく」については、「人が何かに噛みつく」という状況よりも「犬や蛇などの動物が人に噛みつく」ことの方が普通の状況であるから、*Mensch*「人」が属格となっている場合、これは目的語属格である蓋然性が高いと言える。*stechen*「刺す」は、「人がナイフなどで他人を刺す」という状況も考えられるものの、そのような状況では *verletzen*「怪我を負わせる」や *ermorden*「殺害する」など、より状況に即した別の語が用いられるのが普通で、あえて *stechen* という語が用いられるとすれば、「蜂など針を持つ動物が人を刺す」という状況である。そのため、*Mensch* が属格となっていれば、これは目的語属格である蓋然性が高いと言える。

(533) の名詞化と属格項の組み合わせについて、まず DWDS で検索可能な 5 つの新聞コーパス⁵⁰ を利用し、属格項が名詞化の後方 2 語以内に現れている例を検索した。*Warnung* については、57 例がヒットし、うち 19 例が、(534) のような例外的目的語属格の事例であった。

(534) De Maizière sprach am Mittwoch am Rande der
 De Maizièr.NOM speak.3SG.PST on_the Wednesday.DAT at_the sideline.DAT the
 Kabinettsklausur in Meseberg von einer "vorzüglichen" Aktion
 Cabinet-meeting.GEN in Meseberg.DAT of an "excellent" action.DAT
 des BSI und der Ermittlungsbehörden "zum Schutz und
 the BSI.GEN and the investigative-authority.PL.DAT "to_the protection.DAT and
 zur Warnung der Bürger". (DWDS: Die Zeit, 22.01.2014)
 to_the warning.DAT the citizen.PL.GEN"
 デメジエール大臣はメーゼベルクで閣僚会議の際、「優れた」BSI 対
 策あるいは「市民の保護と警告のための」捜査機関と発言した

しかし *Mahnung* については、1 例しかヒットせず、この 1 例は例外的目的語属格ではなかった。また、*Biss* と *Stich* については、後方 2 語以内に *Mensch* が生起している例は、1 例も発見できなかった。

DWDS の新聞コーパスでは *Warnung* 以外の語についてのサンプルが十分に得られなかったため、インターネット検索エンジン Google (www.google.de) の完全一致検索を利用して、(533) の名詞化に定冠詞または不定冠詞が付された属格が連続している例を検索した。結果、有効なデータとして *Mahnung* については 14 例、*Biss* は 97 例、*Stich* は 15 例がヒットし、(535) のような例外的目的語属格の実例が、*Mahnung* について 6 例、*Biss* について 34 例、*Stich* について 15 例得られた。

⁵⁰ これらは以下のコーパスからなり、2019 年 3 月 23 日現在、延べ 1,898,480,215 語を収録している：Berliner Zeitung (1945–1993); Berliner Zeitung (1994–2005); neues deutschland (1946–1990); Tagesspiegel (1996–2005); Die ZEIT (1946–2018)

- (535) a. Die »Papierflut bei Hinrichtungen« wird u.a.
 the paper-flood.NOM at execution.PL.DAT become.3SG.PRS among_others
 sichtbar in Gedichten, Traktaten und Predigttexten, in denen
 visible in poem.PL.DAT treatise.PL.DAT and sermon_text.PL.DAT in which.DAT
 Pfarrer zwecks Erbauung und Mahnung der
 priest.PL.NOM for_the_purpose_of edifying.GEN and admonishing.GEN the
Bevölkerung die Bekehrung der von ihnen zum Schafott
 citizen.GEN the conversion.ACC the by them.DAT to_the scaffold.DAT
 begleiteten »armen Sünder« schilderten.⁵¹
 accompanied "poor sinner".GEN describe.PTCP
 処刑が紙であふれていたことは、とくに、牧師たちが住民への啓蒙と
 警告を目的として、彼らが断頭台に付き添った哀れな罪びとが改心し
 たことを記述した詩や冊子や説話に見てとれる
- b. "Da sich die Fangzähne im hinteren Bereich befinden,
 Since REF.ACC the fang.NOM in_the rear area.DAT locate.3PL.PRS
 erreichen sie bei einem eventuellen Biss eines
 reach.3PL.PRS they.NOM at a rare bite.DAT a
Menschen kaum die Haut⁵²
 human.GEN hardly the skin.ACC
 牙は奥の方にあるため、稀に人を咬んだとしても皮膚には届かない
- c. **Beim Stich eines Menschen** nehmen die Mücken
 at_the bite.DAT a human.GEN pick_up.3SG.PRS the mosquito.PL.NOM
Gametozyten mit dem Blut auf,⁵³
 gametocyte.PL.ACC with the blood.DAT PTCL
 人を刺す際に蚊は血液とともに（マラリアの）ガメトサイトを吸収す
 る

収集された例外的目的語属格の実例の実数を (536) の表にまとめる。

⁵¹ https://www.gwlb.de/veranstaltungen/GWLB_Veranstaltungen_1_2019.pdf (2019/06/19 11:29 閲覧)

⁵² <https://montelevartempo.wordpress.com/tag/treppennatter/> (2018/11/04 19:50 閲覧)

⁵³ <https://epdf.tips/basics-medizinische-mikrobiologievirologie-und-hygiene.html> (2018/11/13 14:30 閲覧)

(536) 収集された例外的目的語属格の実例

	例外的			コーパス
	目的語属格	主語属格	Σ	
<i>Warnung + Bürger/Bevölkerung</i>	19	38	57	DWDS
<i>Mahnung + Bürger/Bevölkerung</i>	6	8	14	Google
<i>Biss + Mensch</i>	34	63	97	Google
<i>Stich + Mensch</i>	15	0	15	Google

14.2. 例外的目的語属格の生起環境

収集した例外的目的語属格の実例について、各例の生起環境に注目すると、*Warnung* に関して全サンプル 19 例の半数を超える 12 例が目的の副詞規定 (cf. (537)) であることが注意を引く。

- (537) **Aber zur Warnung der Bürger sind die Radarkameras**
 but to_the warning.DAT the citizen.PL.GEN be.3PL.PRS the speed_camera.PL.NOM
alle mit leuchtendem Signalorange gestrichen.
 all with glowing signal-orange.DAT paint.PTCP

(DWDS: Der Tagesspiegel, 01.11.2003)

しかし、市民への警告のためにレーダーカメラ(自動速度違反取締装置)はすべてオレンジの蛍光塗料で塗装されている

19 例中 12 例 (63.1%) という割合は、12 章で観察した DEREKO のデータから導かれる *Warnung* の一般的な分布と比較して、著しく高い割合である (cf. (538))。⁵⁴

(538) 例外的目的語属格をともなう *Warnung* と *Warnung* 一般の分布

	目的の		
	副詞規定	n	コーパス
例外的目的語属格ともなう <i>Warnung</i>	12 (63.1%)	19	DWDS
<i>Warnung</i> 一般	9 (1.8%)	500	DEREKO

⁵⁴ χ^2 検定で 1 パーセント水準での有意差が認められる。

同様の観察は *Mahnung* にも当てはまる。サンプルサイズは小さいものの、*Mahnung* でも、例外的目的語属格の実例は全サンプル 6 例の半数にあたる 3 例が (539) のような目的の副詞規定であった。これも、12 章で観察した DEREKO のデータから導かれる *Mahnung* の一般的な分布と比較して著しく高い割合である (cf. (540))。⁵⁵

(539) "Im 19. bis ins frühe 20. Jahrhundert wurden vornehmlich
 in_the 19th antil into_the early 20th century.DAT PASS.3PL.PST mainly
 Geschlechts- und andere Infektionskrankheiten [...] in Wachs
 sex- and other infectious-diseas.PL.NOM in wax.DAT
 konserviert - bestimmt für die akademische Lehre von Studenten
 conserve.PTCP - intended for the academic teaching.ACC of student.PL.DAT
 und auszubildenden Ärzten sowie zur Aufklärung und
 and trainee doctor.PL.DAT as_well_as to_the education.DAT and
Mahnung der Bevölkerung vor den Gefahren fehlender Hygiene.⁵⁶
 warning.DAT the citizen.GEN for the danger.DAT lacking hygiene.GEN
 19 世紀から 20 世紀初頭にはとくに性病や他の感染症が蠟で固めて保
 存された一学生や訓練の必要な医師への科学的教授のため、そして不
 衛生の危険性に対する住民への啓蒙と警告のために

(540) 例外的目的語属格をともなう *Mahnung* と *Mahnung* 一般の分布

	目的の		
	副詞規定	n	コーパス
例外的目的語属格ともなう <i>Warnung</i>	3 (50%)	6	Google
<i>Mahnung</i> 一般	7 (1.4%)	500	DEREKO

以上の観察から、*Warnung* や *Mahnung* に見られる例外的目的語属格は、どうやら目的の副詞規定という名詞化の生起環境と関係がありそうである。

生起環境の偏在は *Biss* と *Stich* の例外的目的語属格にもみられる。例外的目的語属格をともなう *Biss* と *Stich* の実例は時・条件の副詞規定に偏っている。*Biss* については例外的目的語属格の全サンプル 34 例のうち 13 例が、*Stich* につ

⁵⁵ χ^2 検定で 1 パーセント水準での有意差が認められる。

⁵⁶ <http://www.200.uk-erlangen.de/de/rueckblicke/20042016-stippvisite-krankheitsbilder-in-wachs/index.html> (2019/06/19 15:17 閲覧)

いては例外的目的語属格の全サンプル 15 例のうち 12 例が, (541)/(542) のような時・条件の副詞規定となっている。

(541) Sie [...] verfügen kaum über die Möglichkeit, ihr eher gering
they.NOM have.3PL.PRS barely over the possibility.ACC their rather low
wirkendes Gift **beim Biss eines Menschen einzuspritzen.**⁵⁷
affecting poison.ACC at_the biting.DAT a human.GEN to_inject.INF
それらの蛇には, 人に咬みついた際に, どちらかと言えば弱い毒を注入する可能性はほとんどない

(542) **Beim Stich eines Menschen oder eines Wirbeltieres bleibt**
at_the sting.DAT a human.GEN or a vertebrate.GEN remain.3SG.PRS
der Stachel durch die Widerhaken in der elastischen Oberhaut stecken.⁵⁸
the spike.NOM by the barb.ACC in the elastic epidermis.DAT sting.INF
人や脊椎動物を刺す場合, 針は返しによって弾力のある表皮に残る

割合の比較のため, *Biss* と *Stich* の一般的な分布を調べ, 対照群とした。対照群の収集には COSMASII を使い, DEREKO から *Biss* と *Stich* を検索し,⁵⁹ 機械的に無作為に整列した上で COSMASII のシステム上の上限である 10,000 例を上限として用例を取得し, 検索エラーなどを除いた有効データ上位 200 例を標本とした。その結果, 例外的目的語属格の実例に占める時・条件の副詞規定の割合は, *Biss* と *Stich* の一般的な分布に比べ, かなり高い割合となっていることが明らかとなった (cf. (543)/(544))。⁶⁰

⁵⁷ <http://www.europa-reisetipps.de/griechenland/kreta/wandern-auf-kreta/> (2018/11/04 20:20 閲覧)

⁵⁸ <http://deacademic.com/dic.nsf/dewiki/354170> (2018/11/13 閲覧 19:31 閲覧)

⁵⁹ 検索式は *Biß* oder *Biss* および *Stich*, 検索結果は, *Biss* について 32,470 件, *Stich* について 107,165 件ヒットした。

⁶⁰ どちらも, χ^2 検定で 1 パーセント水準での有意差が認められる。

(543) 例外的目的語属格をともなう *Biss* と *Biss* 一般の分布の比較

	時・条件の		
	副詞規定	n	コーパス
例外的目的語属格ともなう <i>Biss</i>	13 (38.2%)	34	Google
<i>Biss</i> 一般	15 (7.5%)	200	DEREKO

(544) 例外的目的語属格をともなう *Stich* と *Stich* 一般の分布の比較

	時・条件の		
	副詞規定	n	コーパス
例外的目的語属格ともなう <i>Stich</i>	12 (80%)	15	Google
<i>Stich</i> 一般	23 (11.5%)	200	DEREKO

14.3. 例外的目的語属格と不定詞名詞化

2章で述べたように、ドイツ語の名詞化には、語幹名詞化や *ung* 名詞化といった派生名詞化の他に、動詞の不定詞をそのまま名詞化する不定詞名詞化がある。

- (545) a. *stechen* > *Stechen* …不定詞名詞化
 b. *stechen* > *Stich* …語幹名詞化
 c. *warnen* > *Warnung* …*ung* 名詞化
- } 派生名詞化

14.2節で指摘した例外的目的語属格の分布の偏りは、例外的目的語属格と不定詞名詞化の関連性を示唆するものである。というのも、例外的目的語属格の実例が偏って分布する目的の副詞規定や時・条件の副詞規定という環境は、不定詞名詞化が現れやすい生起環境だからである。

不定詞名詞化が目的の副詞規定や時・条件の副詞規定という環境に表れやすいことは、派生名詞化の *Warnung*, *Mehnung*, *Biss*, *Stich* と不定詞名詞化の *Warnen*, *Mahnen*, *Beißen*, *Stechen* の生起環境を比較することで明らかとなる。比較のための対照群として、COSMAS II を使い DEREKO から不定詞名詞化の *Warnen*, *Mahnen*, *Beißen*, *Stechen* の用例を検索し、⁶¹ 機械的に無作為整列したデータからそれぞれ上位最大 10,000 例を取得した上で、検索エラーなどを除いた有効データ上位 200 例を標本とした。このデータと、前節で観察した派生名詞化の一

⁶¹ 検索式は *Warnen*, *Mahnen*, *Beißen* oder *Beissen* および *Stechen*。検索結果は、*Warnen* について 1,059 件、*Mahnen* について 838 件、*Beißen* について 1,955 件、*Stechen* について 31,959 件ヒットした。

般的な分布を利用し、*Warnung/Warnen* と *Mahnung/Mahnen* については目的の副詞規定としての生起件数と割合を、*Biss/Beißen* と *Stich/Stecken* については時・条件の副詞規定としての生起件数と割合を比較した。比較の結果を (546)–(549) にまとめる。

(546) *Warnung/Warnen* の目的の副詞規定としての生起頻度

	目的の副詞規定	n	コーパス
<i>Warnen</i>	22 (11%)	200	DEREKO
<i>Warnung</i>	9 (1.8%)	500	DEREKO

(547) *Mahnung/Mahnen* の目的の副詞規定としての生起頻度

	目的の副詞規定	n	コーパス
<i>Mahnen</i>	14 (7.0%)	200	DEREKO
<i>Mahnung</i>	7 (1.4%)	500	DEREKO

(548) *Biss/Beißen* の時・条件の副詞規定としての生起頻度

	時・条件の副詞規定	n	コーパス
<i>Beißen</i>	22 (11%)	200	DEREKO
<i>Biss</i>	15 (7.5%)	200	DEREKO

(549) *Stich/Stecken* の時・条件の副詞規定としての生起頻度

	時・条件の副詞規定	n	コーパス
<i>Stecken</i>	39 (19.5%)	200	DEREKO
<i>Stich</i>	23 (11.5%)	200	DEREKO

(546)–(549) のいずれの比較でも、当該の環境に、派生名詞化に比べて不定詞名詞化が高い割合で現れていることがわかる。

14.3.1. 例外的目的語属格と nach による副詞規定

Ehrich (2002b:82f.) は、不定詞名詞化が前置詞 nach によって導かれる時の副詞規定にはなり難いと指摘している。例えば、(550) のような派生名詞化は

nach によって導かれる事後性を表す時の副詞規定として用いられるが、不定詞名詞化による (551) のような時の副詞規定は容認度が低下するという。

(550) a. **Nach der Renovierung der Wohnung** legt der Maler die
 after the redecorating.DAT the residence.GEN present.3SG.PRS the painter.NOM the
 Rechnung vor. (Ehrich 2002b:82)
 invoice.ACC PTCL

住宅のリフォームが終わった後、塗装業者は代金を提示した

b. **Nach der Verlesung des Urteils** brach der Angeklagte
 after the reading_out.DAT the verdict.GEN break_down.3SG.PST the defendant.NOM
 zusammen (Ehrich 2002b:82)
 PTCL

判決の読み上げが終わった後、被告人は崩れ落ちた

(551) a. [?]**Nach dem Renovieren der Wohnung** legt der Maler
 after the redecorating.DAT the residence.GEN present.3SG.PRS the painter.NOM
 die Rechnung vor. (Ehrich 2002b:83)
 the invoice.ACC PTCL

b. [?]**Nach dem Verlesen des Urteils** brach der Angeklagte
 after the reading_out.DAT the verdict.GEN break_down.3SG.PST the defendant.NOM
 zusammen. (Ehrich 2002b:83)
 PTCL

nach により導かれる時の副詞規定となり難いという傾向は、例外的目的語属格の実例にも当てはまる。14.2 節で述べたように、*Biss* と *Stich* の例外的目的語属格は時・条件の副詞規定に偏っているが、その内訳を詳しく見てみると、ほとんどが (552) のような *bei* の前置詞句であり、*nach* の前置詞句による時・条件の副詞規定は、皆無ではない (cf. (553)) もの、わずかである。

- (552) a. **Beim Biss eines Menschen können die Giftklauen die Haut**
 at_the bite.DAT a man.GEN can.3PL.PRS the fang.PL.NOM the skin.ACC
 ggf. durchschlagen⁶²
 possibly break_through.INF
 人に噛みつくと、毒牙が皮膚を貫くことがある
- b. **Währenddessen bilden einige Merozoiten geschlechtlich**
 meanwhile form.3PL.PRS some merozoit.PL.NOM sexually
differenzierte Zellen [...], die von der Mücke beim Stich
 differentiated cell.PL.ACC that.NOM by the mosquito.DAT at_the sting.DAT
eines Menschen aufgenommen werden.⁶³
 a human.GEN pick_up.PTCP PASS.INF
 その間、(マラリアの)メロゾイトは、人を刺したときに蚊に取り込まれる性分化した細胞を作り出す

- (553) **Königinnen haben kaum Widerhaken (sterben also nicht**
 Queen.PL.NOM have.3PL.PRS hardly barb.PL.ACC die.3PL.PRS so not
nach Stich des Menschen).⁶⁴
 after sting.DAT the man.GEN
 女王バチ (の針) にはたいてい返しがない (すなわち、人を刺しても死なない)

一方、*Biss* と *Stich* の一般的な分布に目を向けると、*Biss* や *Stich* が時・条件の副詞規定として用いられる場合、むしろ (554) のような *nach* の前置詞句こそが典型的である。

- (554) a. **Nach dem Biss in die rechte Hand musste die Verletzte in eine**
 after the bite.DAT in the right hand.ACC must.3SG.PST the injured.NOM into a
Berliner Klinik gebracht werden. (DEREKO Nordkurier, 18.02.2011)
 Berlin clinic.ACC take.PTCP PASS.INF
 右手を咬まれた後、負傷した女性はベルリン市内の病院に運び込まれなくてはならなくなった

⁶² http://tierdoku.com/index.php?title=Scolopendra_gigantea (2018/1/04 8:01 閲覧)

⁶³ <https://docplayer.org/8433370-Umweltfreundliche-malariabekaempfung.html> (2018/11/13 7:57 閲覧)

⁶⁴ http://www.osnanet.de/hans-feige/bienenanatomie_kurs2013.pdf (2018/11/13 18:20 閲覧)

b. Vor wenigen Monaten war ein junges Mädchen in der Stadt
 before a_few month.PL.DAT PRF.3SG.PST a young girl.NOM in the city.DAT
 Itapebi nach einem Stich ums Leben gekommen.
 Itapebi after a sting.DAT about_the life lose.PTCP

(DEREKO Berliner Morgenpost, 22.03.2002)

数か月前にも（ブラジルの）イタペビ市の少女が（サソリに）刺されて亡くなった

実数を表にまとめた表が (555) である。

(555) 時・条件の副詞規定として生起した *Biss/Stich* の前置詞の種類⁶⁵

		nach	bei	その他	Σ	コーパス
<i>Biss</i>	例外的目的語属格	2	11	0	13	Google
	一般的な分布	8	6	1	15	DEREKO
<i>Stich</i>	例外的目的語属格	1	11	0	12	Google
	一般的な分布	17	4	2	23	DEREKO

Biss と *Stich* の一般的な分布では、*Biss* については、時・条件の副詞規定としての生起例 15 例のうち 8 例 (53.3%) が nach の前置詞句である。*Stich* については時・条件の副詞規定としての生起例 23 例のうち 17 例 (73.9%) が nach の前置詞句である。一方、例外的目的語属格の実例では、*Biss* については、時・条件の副詞規定としての生起例 13 例のうち nach の前置詞句は 2 例 (15.4%) であり、*Stich* については、時・条件の副詞規定としての生起例 12 例のうち nach の前置詞句は 1 例 (8.3%) と、かなり少ない割合となっている。

14.3.2. 例外的目的語属格をともなう派生名詞化の不定詞名詞化への書き換え可能性

例外的目的語属格と不定詞名詞化の関連性は、例外的目的語属格をともなう派生名詞化の実例がどれも不定詞名詞化にパラフレーズできる例であるということからも裏付けられる。14.1 節で収集した例外的目的語属格の実例について、不定詞名詞化へのパラフレーズが可能かどうかをインフォーマント⁶⁶ への聞き取りによって調査した。その結果、すべての実例について、不定詞名詞化に

⁶⁵ *Biss/Stich* とともに、 χ^2 検定で 1 パーセント水準での有意差が認められた

⁶⁶ インフォーマントはノルトライン・ヴェストファーレン州出身の 20 代男性 2 名

よるパラフレーズが可能であるという証言が得られた。例外的目的語属格の例を (556)/(557), 不定詞名詞化にパラフレーズした例を (556')/(557') に挙げる。(556) は, 14.2 節で観察した例外的目的語属格が高い割合で現れる環境の例, (557) はそれ以外の環境の例である。

- (556) a. **Aber zur Warnung der Bürger sind die Radarkameras**
 but to_the warning.DAT the citizen.PL.GEN be.3PL.PRS the speed_camera.PL.NOM
alle mit leuchtendem Signalorange gestrichen.
 all with glowing signal-orange.DAT paint.PTCP

(DWDS: Der Tagesspiegel, 01.11.2003)

しかし, 市民への警告のためにレーダーカメラ (自動速度違反取締装置) はすべてオレンジの蛍光塗料で塗装されている

- b. Sie [...] verfügen kaum über die Möglichkeit, ihr eher gering
 they.NOM have.3PL.PRS barely over the possibility.ACC their rather low
wirkendes Gift beim Biss eines Menschen einzuspritzen.⁶⁷
 affecting poison.ACC at_the biting.DAT a human.GEN to_inject.INF

それらの蛇には, 人に咬みついた際に, どちらかと言えば弱い毒を注入する可能性はほとんどない

- c. **Beim Stich eines Menschen oder eines Wirbeltieres bleibt der**
 at_the sting.DAT a human.GEN or a vertebrate.GEN remain.3SG.PRS the
Stachel durch die Widerhaken in der elastischen Oberhaut stecken.⁶⁸
 barb.NOM by the barb.ACC in the elastic epidermis sting.INF

人や脊椎動物を刺す場合, 針は返しによって弾力のある表皮に残る

- (557) a. **Eine frühe Warnung der Bevölkerung, etwa bei Chemieunfällen,**
 an early warning.NOM the population.GEN sucht_as at chemical_accident.PL.DAT
sei daher oft nicht möglich.
 be.3SG.SBJ1 therefore often not possible

(DWDS: Berliner Zeitung, 23.09.1998)

化学事故などが起きた際の国民に早期に警告することは, それゆえしばしば不可能である

⁶⁷ <http://www.europa-reisetipps.de/griechenland/kreta/wandern-auf-kreta/> (2018/11/04 20:20 閲覧)

⁶⁸ <http://deacademic.com/dic.nsf/dewiki/354170> (2018/11/13 閲覧 19:31 閲覧)

b. Nach Ablauf dieser Wochenfrist erfolgt **eine Mahnung**
 after expiration.DAT this weekly_period.GEN take_place.3SG.PRS a reminder.NOM
des Bürgers und die Setzung einer neuerlichen Wochenfrist.⁶⁹
 the citizen.GEN and the setting.NOM a new weekly_period.GEN
 この一週間の期限が切れた後は、市民の警告ともう一週間の期限の設定が行われる

c. Aggressives Verhalten kann normal sein, da er ein
 aggressive behavior.NOM can.3SG.PRS normal be.INF because he.NOM a
 Raubtier ist. Zwischen Kontrollverhalten und **den** (sic!)
 predator.NOM be.3SG.PRS between control-behavior.ACC and the
Biss eines Menschen gibt es eine Vielzahl von
 bite.ACC a human.GEN give.3SG.PRS it.NOM a variety.ACC of
 aggressiven Varianten, die man erkennen und nicht
 aggressive variant.PL.ACC which.ACC one.NOM recognize.INF and not
 unterschätzen sollte.⁷⁰
 underestimate.INF schuld.3SG.PST

犬は肉食動物なのだから、攻撃的な行動は普通のことと言える。飼い主を管理しようとする行動と人への咬みつきの間には、知っておくべき、そして過小視するべきでない様々な攻撃的行動がある。

d. Drei Wochen später sind sie in der Lage, **durch**
 three week.PL.ACC later be.3PL.PRS they.NOM in the situation.DAT with
den Stich eines Menschen, diesen zu infizieren.⁷¹
 the bite.DAT a human.GEN this_person.ACC to infect.INF
 三週間後には、それらは人を刺すことで感染させることができるようになっている

(556') a. ^{OK}Aber **zum Warnen der Bürger** sind die Radarkameras
 but to_the warning.DAT the citizen.PL.GEN be.3PL.PRS the speed_camera.PL.NOM
 alle mit leuchtendem Signalorange gestrichen. (cf. (556a))
 all with glowing signal-orange.DAT paint.PTCP

⁶⁹ https://books.google.co.jp/books?id=RER4DwAAQBAJ&pg=PT233&lpg=PT233&dq=%22Mahnung+des+B%C3%BCrgers%22&source=bl&ots=YD58zIJOgX&sig=ACfU3U3kp1f0cZxwnp_fav_a2S7caZ4_neA&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKewi9Orqn_TiAhXTyIsBHQ97C5QQ6AEwAHoECAIQAQ#v=onepage&q=%22Mahnung%20des%20B%C3%BCrgers%22&f=false
 (2019/6/20 8:48 閲覧)

⁷⁰ <https://www.hundetraining-dittmar.de/problemhundtherapie> (2018/11/04: 11:51 閲覧)

⁷¹ <https://www.muecken.org/schlafkrankheit/> (2018/11/13 11:50 閲覧)

b. ^{OK}Sie verfügen kaum über die Möglichkeit, ihr eher gering
 they.NOM have.3PL.PRS barely over the possibility.ACC their rather low
 wirkendes Gift **beim Beißen eines Menschen** einzuspritzen.
 affecting poison.ACC at_the biting.DAT a human.GEN to_inject.INF
 (cf. (556b))

c. ^{OK}**Beim Stechen eines Menschen oder eines Wirbeltieres** bleibt
 at_the stinging.DAT a human.GEN or a vertebrate.GEN remain.3SG.PRS
 der Stachel durch die Widerhaken in der elastischen Oberhaut stecken.
 the spike.NOM by the barb.ACC in the elastic epidermis.DAT sting.INF
 (cf. (556c))

(557') a. ^{OK}**Ein frühes Warnen der Bevölkerung**, etwa bei Chemieunfällen,
 an early warning.NOM the citizen.GEN sucht_as at chemical_accident.PL.DAT
 sei daher oft nicht möglich.
 be.3SG.SBJ1 therefore often not possible

b. ^{OK}Nach Ablauf dieser Wochenfrist erfolgt **ein Mahnen des
 Bürgers**
 citizen.GEN
 after expiration.DAT this weekly_period.GEN occur.3SG.PRS a reminder.NOM the

c. ^{OK}Zwischen Kontrollverhalten und **dem Beißen eines Menschen**
 between control-behavior.ACC and the biting.ACC a human.GEN
 gibt es eine Vielzahl von aggressiven Varianten, die
 give.3SG.PRS it.NOM a variety.ACC of aggressive variant.PL.ACC which.ACC
 man erkennen und nicht unterschätzen sollte.
 one.NOM recognize.INF and not underestimate.INF schuld.3SG.PST

d. ^{OK}Drei Wochen später sind sie in der Lage, **durch das
 Stechen eines Menschen**, diesen zu infizieren.
 three week.PL.ACC later be.3PL.PRS they.NOM in the situation.DAT with the
 stinging.ACC a human.GEN this_person.ACC to infect.INF

もちろん、派生名詞化が一般に不定詞名詞化にパラフレーズできるというわけではない。例外的目的語属格と無関係な派生名詞化には、不定詞名詞化にパラフレーズすることのできないものも存在する。例えば、(558) の派生名詞化

は、(558') に示すように、どれも不定詞名詞化によってパラフレーズすることはできない。

- (558) a. **Die Warnung, Kinder sollen nicht im Freien spielen**
the warning.NOM child.PL.NOM should.3PL.PRS not in_the outdoor.DAT play.IN
und Gemüse aus dem eigenen Garten sollte nicht verzehrt
and vegetable.ACC from their own garden.DAT should.3SG.SBJ1 not consume.PTCP
werden, sei viel zu spät erfolgt.
PASS.INF PRF.3SG.SBJ1 far too late occur.PTCP.

(DEREKO: Frankfurter Rundschau, 30.10.1997)

子供たちが屋外で遊ぶことや家庭菜園の野菜を消費することは避けるべきだという警告が行われるのが遅すぎたとのことだ

- b. **Die Mahnung des Landammanns Kurt Wernli, mit der Rückweisung**
the reminder.NOM the district-mayor Kurt Wernli.GEN with the rejection.DAT
des Budgets verweigere der Grosse Rat die kooperative
the budget.GEN refuse.3SG.SBJ1 the Grand Council.NOM the cooperative
Diskussion, fruchtete nichts.
discussion.ACC work.3SG.PST not

(DEREKO: Neue Zürcher Zeitung, 24.10.2001)

予算を否決すればカントン議会が協調的な議論を拒むことになるとするクルト・ヴェルリ郡長の警告は実らなかった

- c. **Der tödliche Biss eines Pitbulls gegen einen sechsjährigen Jungen**
the deadly bite.NOM a pit-bull.GEN against a six-year-old boy.ACC
in Hamburg [...] schreckte auch die Öffentlichkeit (sic!) in
in Hamburg.DAT arouse.3SG.PST also the public.ACC in
Ueckermünde und den umliegenden Gemeinden auf.
Ueckermünde.DAT and the surrounding community.PL.DAT PTCL

(DEREKO: Nordkurier, 28.06.2000)

ハンブルクでピットブルが6歳の少年に噛みついて致命傷を負わせた事件はウエッカーミュンデと周辺自治体の人々も震撼させた

d. Mehr als fünf Mal hatte jemand mit der 18
 more than five time.PL.ACC PRF.3SG.PST someone.NOM with the 18
 Zentimeter langen Klinge eines Fahrtenmessers auf die junge
 centimeter.PL.ACC long blade.DAT a knife.GEN on the young
 Frau eingestochen. Bereits **der erste Stich** zerfetzte die Haupt-
 woman.ACC stab.PTCP already the first sting.NOM shred.3SG.PST the main-
 schlagader und traf das Herz.
 artery.ACC and hit.3SG.PST the heart.ACC

(DEREKO: Süddeutsche Zeitung, 04.09.1999)

5 回以上何者かが刃渡り 18 センチのシース・ナイフでその若い女性を
 刺した。最初の一刺しがすでに大動脈を寸断し，心臓に達していた。

(558') a. ***Das Warnen**, Kinder sollen nicht im Freien spielen
 the warning.NOM child.PL.NOM should.3PL.PRS not in_the outdoor.DAT play.INF
 und Gemüse aus dem eigenen Garten solle nicht
 and vegetable.ACC from their own garden.DAT should.3SG.SBJ1 not
 verzehrt werden, sei viel zu spät erfolgt.
 consume.PTCP PASS.INF PRF.3SG.SBJ1 far too late occur.PTCP

b. ***Das Mahnen des Landammanns Kurt Wernli**, mit der Rückweisung
 the reminding.NOM the district-mayor Kurt Wernli.GEN with the rejection.DAT
 des Budgets verweigere der Grosse Rat die kooperative
 the budget.GEN refuse.3SG.SBJ1 the Grand Council.NOM the cooperative
 Diskussion, fruchtete nichts.
 discussion.ACC work.3SG.PST not

c. ***Das tödliche Beißen eines Pitbulls gegen einen sechsjährigen**
 the deadly bite.NOM a pit-bull.GEN against a six-year-old
Jungen in Hamburg schreckte auch die Öffentlichkeit auf.
 boy.ACC in Hamburg.DAT arouse.3SG.PST also the public.ACC PTCL

d. ***Bereits das erste Stechen** zerfetzte die Hauptschlagader und
 already the first stinging.NOM shred.3SG.PST the main-artery.ACC and
 traf das Herz.
 hit.3SG.PST the heart.ACC

14.4. 例外的目的語属格が認められるメカニズム

第 I 部の 2.3 節や 7.5 節でも述べたように、不定詞名詞化には、項に関して派生名詞化とは異なる特徴がある。すなわち、派生名詞化の主題項が一般に任意であるのに対し、不定詞名詞化には義務的な項がある。例えば、(559a) の派生名詞化は、属格の *der Möbel* を削除しても容認性は損なわれないのに対し、(559b) の不定詞名詞化は属格の *der Möbel* を削除することができない。

- (559) a. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Die Fertigstellung** ^{OK}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completing.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

- b. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Das Fertigstellen** ^{??}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completings.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

残念ながらそのショーケースは一月より前には届けられません。高い需要のため、一か月以内で(その家具を)仕上げることはできません。

項に関する不定詞名詞化の特徴は、目的語属格の欠如とも関係する。すなわち、派生名詞化において目的語属格が欠如する動詞でも、同じ動詞を基盤とする不定詞名詞化では、目的語属格が認められるのである。例えば、*Schlag* 「殴打」は「殴られる人」を属格項とできないのに対し (cf. (560)), 同じ *schlagen* 「殴る」を基盤とする不定詞名詞化の *Schlagen* では、「殴られる人」が問題なく属格項となる (cf. (561))。

- (560) Es gilt beispielsweise auch für **den Schlag der Ehefrau**
 it.NOM apply.3SG.PRS for_example also to the beat.ACC the wife.GEN
 = それは、例えば妻が(夫を)殴ることにも当てはまる
 ≠ それは、例えば(夫が)妻を殴ることにも当てはまる

- (561) Es gilt beispielsweise auch für **das** [...] **Schlagen der**
 it.NOM apply.3SG.PRS for_example also to the beating.ACC the
Ehefrau: (DWDS: Die Zeit, 08.12.2016)
 wife.GEN

それは、例えば（夫が）妻を殴ることにも当てはまる

筆者は、派生名詞化では目的語属格が欠如する動詞でも、同じ動詞の不定詞名詞化では目的語属格が認められる背景として、派生名詞化が状況を唯一に同定して指示を行う「状況の外延的表現」であり得るのに対し、不定詞名詞化が「状況の内包的表現」とどまることが関係していると考えられる。2.3 節や 7.5 節でも述べたように、(562) のように具体的状況を指示する派生名詞化が (562') のように不定詞名詞化によってパラフレーズし難いことから、不定詞名詞化は具体的状況の指示を行わないと考えられる。

- (562) a. Als wir in Geschichte **über die Ermordung John F. Kennedys**
 as we.NOM in History.DAT about the murder.ACC John F. Kennedy.GEN
 sprachen, fragten wir uns, ob es einen solchen
 talk.3PL.PST wonder.3PL.PST we.NOM REF.ACC if it.NOM a such
Aufschrei wie damals auch geben würde, wenn so etwas
 outcry.ACC as that_time also give.INF FUT.3SG.SBJ2 if such_a_thing.NOM
 mit Trump passieren würde. (DWDS: Die Zeit, 09.04.2017, Nr. 15)
 to Trump.DAT happen.INF FUT.3SG.SBJ2

私たちは歴史の授業でジョン・F・ケネディの殺害について話した際、もし同じことがトランプ大統領に起きたら、当時のような悲鳴が起きるだろうかと考えた

- b. Im kommenden Jahr jährt sich **die Besteigung des Mount**
 in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount
Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay zum
 Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the
 50sten Mal. (DWDS: Der Tagesspiegel, 22.12.2002)
 50th times.DAT

来年にはサー・エドモント・ヒラリーとテンジン・ノルゲイによるエベレスト山登頂から 50 年を迎える

- (562') a. ^{??}Als wir in Geschichte **über das Ermorden John F. Kennedys**
 as we.NOM in History.DAT about the murder.ACC John F. Kennedy.GEN
 sprachen, fragten wir uns, ob es einen solchen
 talk.3PL.PST wonder.3PL.PST we.NOM REF.ACC if it.NOM a such
 Aufschrei wie damals auch geben würde, wenn so etwas
 outcry.ACC as that_time also give.INF FUT.3SG.SBJ2 if such a_thing.NOM
 mit Trump passieren würde.
 to Trump.DAT happen.INF FUT.3SG.SBJ2
- b. ^{??}Im kommenden Jahr jährt sich **das Besteigen des Mount**
 in_the next year.DAT year.3SG.PRS REF.ACC the climb.NOM the Mount
Everest durch Sir Edmund Hillary und Tenzing Norgay zum
 Everest.GEN by Sir Edmund Hillary.ACC and Tenzing Norgay.ACC to_the
 50sten Mal.
 50th times.DAT

11章および12章で論じたように、目的語属格の欠如という現象が生じるのは、いわば「二次的な手続きによらなければ対格を与えられない項」である二次的対格付与が状況の同定を可能とする項とならないためであると考えられる。派生名詞化では状況の同定を可能とする項が構造項となるため、状況の同定を可能とする項ではない二次的対格項は派生名詞化の構造項とならないのである。ところが、状況の内包的表現である不定詞名詞化は、状況を唯一に同定して指示するというを行わない。そのため不定詞名詞化では、状況の同定を可能とする項ではないからといって、構造項とならない理由にはならないのである。

例外的目的語属格が不定詞名詞化と似通った環境に分布するという観察は、例外的目的語属格をともなう派生名詞化も、不定詞名詞化と同様、具体的状況を唯一に同定して指示する状況の外延的表現としては用いられていないことを意味する。このことは、名詞化に付される冠詞からも見てとれる。例外的目的語属格をともなう派生名詞化の実例は、(563)のように、不定冠詞を付された例が多くみられるのである。

- (563) a. **Eine frühe Warnung der Bevölkerung**, etwa bei Chemieunfällen,
 an early warning.NOM the population.GEN sucht_as at chemical_accident.PL.DAT
 sei daher oft nicht möglich.
 be.3SG.SBJ1 therefore often not possible

(DWDS: Berliner Zeitung, 23.09.1998)

化学事故などが起きた際の国民に早期に警告することは、それゆえし
 ばしば不可能である

- b. Nach Ablauf dieser Wochenfrist erfolgt **eine Mahnung**
 after expiration.DAT this weekly_period.GEN take_place.3SG.PRS a reminder.NOM
des Bürgers und die Setzung einer neuerlichen Wochenfrist.⁷²

the citizen.GEN and the setting.NOM a new weekly_period.GEN

この一週間の期限が切れた後は、市民の警告ともう一週間の期限の設
 定が行われる

また、例外的目的語属格となる項が状況の同定を可能とする項ではないとい
 ことも、例外的目的語属格をともなう派生名詞化が状況の外延的表現として
 用いられていないということと合致する。

筆者は、例外的目的語属格をともなう派生名詞化が、不定詞名詞化と同じよ
 うな、状況の内包的表現となっていると考える。通常、状況の外延的表現で
 あり得る派生名詞化では、構造項の実現は状況を同定する手段であり、構造項は
 状況の同定に寄与する限りにおいて実現する。そのため、状況の同定を可能と
 する項ではない二次的対格項は派生名詞化の構造項とはならず、目的語属格の
 欠如に結び付く。しかし、不定詞名詞化が状況の外延的表現とはならないのと
 違い、派生名詞化は状況の内包的表現となることもある。状況の内包的表現と
 なった派生名詞化は、状況を唯一に同定して指示するわけではないので、状況
 の同定を可能とする項でないからといって構造項とならない理由にはならない。
 そのため、そのような派生名詞化では、構造項が状況の同定を可能とする項に
 限定されず、通常の派生名詞化では構造項とならない二次的対格項であっても
 構造項となり、例外的目的語属格として実現し得るのである。

⁷² https://books.google.co.jp/books?id=RER4DwAAQBAJ&pg=PT233&lpg=PT233&dq=%22Mahnung+des+B%C3%BCrgers%22&source=bl&ots=YD58zIJOgX&sig=ACfU3U3kp1f0cZxwnp_fav_a2S7caZ4_neA&hl=ja&sa=X&ved=2ahUKewiI9Orqn_TiAhXTyIsBHQ97C5QQ6AEWAHoECAIQAAQ#v=onepage&q=%22Mahnung%20des%20B%C3%BCrgers%22&f=false
 (2019/6/20 8:48 閲覧)

14.5. まとめ

本章では、目的語属格を欠くとされる派生名詞化に少ないながらもみられる例外的目的語属格について考察した。例外的目的語属格の実例は、目的の副詞規定や時・条件の副詞規定といった、不定詞名詞化が現れやすい環境に偏っている。

目的語属格の欠如という現象は、派生名詞化では状況の同定を可能とする項が構造項となる一方で、二次的対格項が状況の同定を可能とする項ではないことの帰結である。そのため、状況を唯一に同定して指示することのない状況の内包的表現である不定詞名詞化では、状況の同定を可能とする項でないからといって、構造項とならない理由とはならない。

不定詞名詞化が状況の外延的表現とはならないのに対し、派生名詞化は状況の内包的表現となることもある。状況の内包的表現となった派生名詞化では、状況の同定を可能とする項でない二次的対格項であっても構造項となり、結果として例外的目的語属格の形で実現することがあるのである。

15. 第 II 部のまとめ

第 II 部では、*Schlag* などの名詞化にみられる目的語属格の欠如という現象に注目した。(564)/(564') に示すように、名詞化において、基盤動詞の対格項は、ほとんどの場合に属格項として認められる。

(564) a. 活動動詞の名詞化 (= (405a))

is [DO (x, y) (s)]

Die Behandlung Peters_y dauert noch an.
the treatment.NOM Peter.GEN go_on.3SG.PRS still PTCL
ペーターの_y 治療が続いている

b. 所有動詞の名詞化 (= (405b))

is [POSS (x, y) (s)]

Bei diesem Krieg ging es um den Besitz Schlesiens_y
in this war.DAT go.3SG.PST it.NOM about the possession.ACC Silesia.GEN
この戦争はシュレージエンの_y 領有を巡るものだった

c. 使役的状态変化動詞の名詞化 (= (405c))

is [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y) (s))

Die Erschießung Peters_y geschah des Nachts.
the shooting.NOM Peters.GEN occur.3SG.PST the night.GEN
ペーターの_y 射殺は夜行われた

d. 使役的所有変化動詞の名詞化 (= (405d))

is [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z) (s))

Die Übergabe Peters_z erfolgte termingemäß.
the handover.NOM Peter.GEN occur.3SG.PST on_schedule
ペーターの_z 引き渡しは期日通り行われた

e. 効果動詞の名詞化 (= (405e))

is [[BE (z) & DO (x, y)] (s)]

Die Gefährdung Peters_z wurde bewiesen.
the endangering.NOM Peter.GEN PASS.3SG.PST prove.PTCP
ペーターの_z 危機的状况が証明された

(564') a. 活動動詞 (= (405'a))

∃s [DO (x, y) (s)]

Der Arzt behandelt Peter_y

the doctor.NOM treat.3SG.PRS Peter.ACC

医者がペーターを_y治療する

b. 所有動詞 (= (405'b))

∃s [POSS (x, y) (s)]

Die Habsburger besaßen Schlesien_y

the Habsburgs.PL.NOM possess.3PL.PST Silesia.ACC

ハプスブルク家がシュレージエンを_y領有していた

c. 使役的狀態変化動詞 (= (405'c))

∃s [CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y) (s)))]

Die Geheimpolizei hat Peters_y erschossen.

the secret_police.NOM PRF.3SG.PRS Peter.ACC shoot.PTCP

秘密警察がペーターを_y射殺した

d. 使役的所有変化動詞 (= (405'd))

∃s [CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z) (s)))]

Er hat der Polizei Peter_z übergeben.

he.NOM PRF.3SG.PRS the police.DAT Peter.ACC hand_over.PTCP

彼は警察にペーターを_z引き渡した

e. 効果動詞 (= (405'e))

∃s [[BE (z) & DO (x, y)] (s)]

Seine Familie gefährdet Peter_z

his family.NOM endanger.3SG.PRS Peter.ACC

彼の家族はペーターを_z危険にさらしている

そのため、一見すると、動詞の項と名詞化には (565) の一般化が成り立つように思われる。

(565) 目的語属格の一般性 (= (406))

名詞化において、基盤動詞の対格目的語は、一般に後置属格の形をとる属格項として実現できる

ところが、*Schlag* など一部の名詞化では、(566) に示すように、動詞の対格項が属格項として認められない。

- (566) **Der Schlag des Nachbarn hat sich vor Mitternacht**
 the hit.NOM the neighbor.GEN PRF.3SG.PRS REF.ACC before midnight.DAT
 ereignet.
 happen.PTCP
 = [隣人が殴ること] は夜半前に起こった
 ≠ [隣人を殴ること] は夜半前に起こった

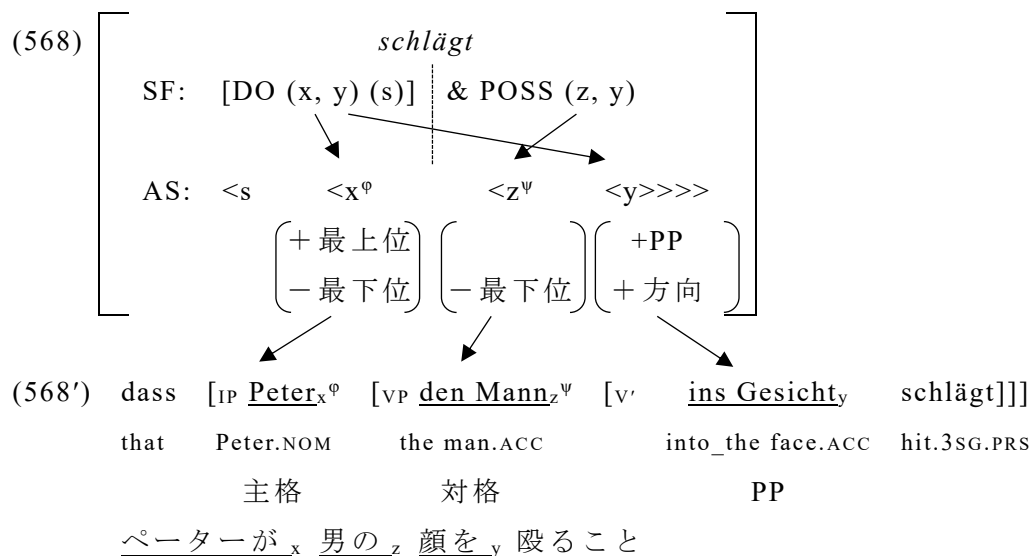
この目的語属格の欠如という現象を巡っては、Rapp (2006) などの先行研究において、語幹名詞化という名詞化の形態論的な種別が関与的であるとする意見（形態論仮説）が示されている（cf. 10章）。しかし、*Warnung* など *ung* 名詞化にも目的語属格の欠如が見られることから（cf. 12章）、目的語属格の欠如を名詞化の形態論的な種別と結びつける形態論仮説は早計であることが明らかとなる。

- (567) **Die Warnung des Mannes hat nicht gefruchtet.**
 the warning.NOM the man.GEN PRF.3SG.PRS not work.PTCP
 = [男が警告すること] には効果がなかった
 ≠ [男に警告すること] には効果がなかった

そもそも目的語属格の欠如という現象が問題となるのは、基盤動詞の対格項が、ほとんどの名詞化において属格項として認められるためである。第 I 部の 7.3 節で論じたように、派生名詞化において属格項の形をとる構造項となるのは「状況の同定を可能とする項」である。一方、動詞の項と形式の関係は、第 I 部の 4 章で定式化したように、「意味形式の関係における上位の項が、統語構造においても上位の統語的位置に表される」という写像論的な関係を基本としている。したがって、動詞の対格項が、通常、派生名詞化の属格項として認められるのは、意味形式の関係を写像的に反映した結果として対格項となる最下位項（cf. 4.3 節）が、一般的な条件下において、「状況の同定を可能とする項」であるためである。

ところが、動詞における項と形式の関係は、意味形式の関係を写像的に反映する一次的格付与（cf. 11.2 節）の仕組みを基本としながらも、項同士の相対的な関係において文の主題とするのにより適した卓越性の高い項に対格を与える二次的格付与（cf. 11.3 節）の仕組みも作用する多元的なシステムとなっている。ドイツ語では、能動態において対格を与えられる項しか受動態の主語に認めら

れないが、二次的格付与によって卓越性の高い項に対格を与える（二次的対格付与）ことによって、この項を受動態の主語として主題化することが可能となる。*schlagen* の場合、一次的格付与では与格の付与が見込まれる身体部位の所有者が、受動態による主題化を見込んで二次的対格項となる。



二次的対格項は、いわば「二次的な手続きによらなければ対格を与えられない項」である。そのため、この項は状況の同定を可能とする項ではない蓋然性が高い。実際に、*schlagen* などの物理作用動詞や *warnen/mahnen* が表す状況では、身体部位の所有者や「警告・催促を受ける人」である所有者（＝経験者）を特定しても、状況の同定は可能とならない（cf. 11.4 節, 12.3 節）。結果として、これらの項は派生名詞化の構造項とはならず、目的語属格の欠如という現象に結び付くのである。したがって、この論文の 4 つの問題提起のうち、Q4 に対する答えは A4 となる。

Q4. *Schlag* などの名詞化にみられる目的語属格の欠如は、どのようなメカニズムで生じるのか

A4. *schlagen* などの動詞では、意味形式の関係を反映する一次的格付与では対格とならない項が、他の項との相対的な卓越性の高さから、受動態による主題化を見込んで二次的対格項となる。二次的対格項は「状況の同定を可能とする項」ではないことから派生名詞化の構造格とはならないので、*Schlag* などの名詞化では目的語属格の欠如が生じる

二次的対格付与という概念は、ドイツ語の項と形式の関係に関する研究の文脈では、使役移動構文と適用構文の交替（場所格交替）について Eroms (1980) が提唱した「対格化」という概念を連想させるものである (cf. 13.1 節)。しかし、「所在」という関係を精密に分析すると、使役移動構文と適用構文はともに一次的格付与による構文であり、二次的格付与によるものではないということが明らかとなる (cf. 13.3.1 節-13.3.5 節)。使役移動動詞の名詞化では対格項の所在者が「状況の同定を可能とする項」であり、適用動詞が表す状況では対格項の **Landmark** が「状況の同定を可能とする項」である (cf. 13.3.6 節)。そのため、使役移動動詞や適用動詞の名詞化には、目的語属格の欠如は見られない。

目的語属格を欠くとされる物理作用動詞の名詞化や *Warnung/Mahnung* にも、少数ながら、(569) のような目的語属格の実例が存在する。

(569) Durch den Einsatz von Baumaschinen und laut schallenden
 by the use.ACC of construction_machinery.PL.DAT and loud sounding
 Typhonen oder automatischer Rottenwarnanlagen **zur Warnung**
 typhonen.PL.GEN or automatic mass_warning_system.GEN to_the warning.DAT
der Bauarbeiter kommt es dabei zu
 the construction_worker.PL.GEN come.3SG.PRS it.NOM at_that_time to
 Lärmbelästigungen. (DEREKO: Rhein-Zeitung, 11.03.2013)
 noise_nuisance.PL.DAT

その際、建設機械や建設労働者に警告を発するための大音量で鳴り響く警笛や集団警報装置の使用によって騒音が発生することになる

こうした例外的目的語属格をともなう名詞化は、目的の副詞規定や時・条件の副詞規定といった不定詞名詞化が現れやすい環境に偏ってみられ (cf. 14.2 節)、不定詞名詞化によりパラフレーズできることから (cf. 14.3.2 節)、不定詞名詞化と同じ「状況の内包的表現」として (cf. 7.5 節) 用いられていると考えられる。具体的状況を唯一に同定して指示するというを行わない状況の内包的表現では、状況の同定を可能とする項でないからと言って、構造項とならないということにはならない。そのため、(570) のように派生名詞化に目的語属格の欠如が見られる場合でも、(571) のように同じ動詞を基盤動詞とする不定詞名詞化には目的語属格の欠如は見られない。

(570) Es gilt beispielsweise auch für **den Schlag der Ehefrau**
 it.NOM apply.3SG.PRS for_example also to the beat.ACC the wife.GEN
 = それは、例えば妻が（夫を）殴ることにも当てはまる
 ≠ それは、例えば（夫が）妻を殴ることにも当てはまる

(571) Es gilt beispielsweise auch für **das [...] Schlagen der Ehefrau:** (DWDS: Die Zeit, 08.12.2016)
 it.NOM apply.3SG.PRS for_example also to the beating.ACC the wife.GEN
 それは、例えば（夫が）妻を殴ることにも当てはまる

例外的目的語属格をともなう名詞化も、不定詞名詞化のように状況の内包的表現として用いられているために、派生名詞化でありながら、状況の同定を可能とする項ではない二次的対格項が構造項となり得るのである。

16. おわりに

この論文では、ドイツ語の名詞化について項と項構造の観点から論じた。

第 I 部では、名詞化の項の実現を条件づけている規則について、原理立った定式化を行った。項を記録した項構造は、語彙項目を構成する語彙的な情報のひとつである。項構造中の項は、項構造と並んで語彙項目を構成する情報のひとつである意味形式に含まれた項と関係づけられている (cf. 3.1 節)。動詞の項構造には主語や目的語として実現する主題項と状況に対応する状況項 (cf. 3.2 節) が記録されており、名詞の項構造には、種族名詞の場合には指示項 (cf. 3.3.1 節) が、機能名詞や関係名詞 (cf. 3.3.2 節) の場合には指示項に加えて関係項が記録されている。

(572) a. 動詞

<i>erschießen</i>		
SF:	ERSCHIESSEN (x, y) (s)	
AS:	<s	<x <y>>>

b. 種族名詞

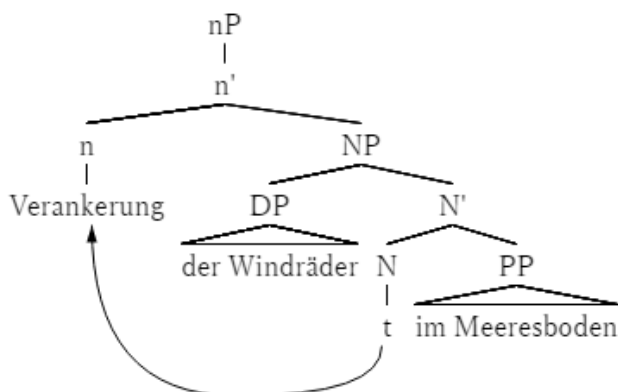
<i>Junge</i>	
SF:	JUNGE (r)
AS:	<r>

c. 機能名詞・関係名詞

<i>Vater</i>	
SF:	VATER (r, x)
AS:	<r <x>>

主要部後置型の語順をなす動詞句と主要部前置型の語順をなす動詞句は句構造において対称的であるという想定から、ドイツ語の名詞句には、NP の上に nP の被さった (573) の統語論的分析が与えられる (cf. 7.1 節)。

(573)



名詞の構造項 (cf. 4.2 節) は, nP 配下の NP 指定部へと投射され, 構造的に属格を付与される。この位置は, nP 主要部のすぐ右に隣接するので, 名詞の構造項は後置属格の形で実現する。

(574) [DP die [nP [n' Verankerung_i [NP der Windräder [N' t_i im Meeresboden]]]]]
GEN

ドイツ語では, 後置属格に属格項と属格付加語が並存する。属格項が名詞に依存した項であるのに対し, 属格付加語は独立の連体修飾語である。属格項と属格付加語は, 1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞が認められる否かという音韻論的な基準によって経験的に峻別される (cf. 5.1.1 節, 7.1.4 節)。属格項としての後置属格には 1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞が認められるのに対し, 属格付加語には 1 音節や 2 音節の無冠詞固有名詞は認められない。

(575) a. **Die Freundin Ulf**s kann wunderbar kochen.

the girlfriend.NOM Ulf.GEN can.3SG.PRS wonderful cook.INF

ウルフのガールフレンドは素晴らしく料理ができる

b. ***Der Computer Ulf**s ist kaputt.

the computer.NOM Ulf.GEN be.3SG.PRS broken

(Hartmann & Zimmermann 2003: 199)

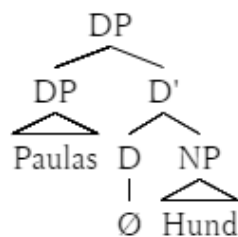
b'. **Ulf**s **Computer** ist kaputt.

Ulf.GEN computer.NOM be.3SG.PRS broken

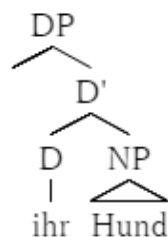
ウルフのコンピューターが壊れた

後置属格は前置属格や所有冠詞とも競合するが, 前置属格や所有冠詞は項ではなく, 関手である発音されない決定詞 \emptyset や所有冠詞を中心とした表現である (cf. 7.4 節)。

(576) a.



b.



動詞は、時制と法の解釈を可視化するために、項の人称と数の参照を必要とする。例えば、*rolle* という動詞の屈折形は、1 人称・単数に鑑みれば直説法現在、3 人称・単数に鑑みれば接続法 I 式である。複数の項が参与する状況では、人称と数を参照される項は格により他の項と区別される (cf. 7.2.1 節)。そのため動詞では、人称と数を参照される項と、この項の識別に必要となる他の主だった項は義務的となる。

(577) a. Ich **rolle** das Fass in den Keller.

I.NOM roll.1SG.PRS the barrel.ACC into the cellar.ACC

私は樽を地下室に転がして入れる

b. Der Ball **rolle** über die Seitenlinie.

the ball.NOM roll.3SG.SBJ1 over the side_line.ACC

ボールがアウトラインの向こうに転がっていくと

一方、機能名詞や関係名詞の項は、指示対象の同定を可能とするために表される (cf. 7.2.2 節)。機能名詞では、関係項が特定されると指示対象は唯一に同定されるので、定冠詞が付される。機能名詞を除く狭義の関係名詞の場合、関係項が特定されても指示対象が唯一に同定されるわけではないが、コンピュータの述語など、その名詞を主要部とする名詞句がそれ自体として何かを指示しているわけではない場合には、定冠詞を付するのが自然となる。

(578) a. der Geburtsort des Mannes; der Vater des Mädchens; der Kopf

the birthplace.NOM the man.GEN; the father.NOM the girl.GEN; the head.NOM

der Frau

the woman.GEN

その男の出生地 ; その少女の父 ; その女性の頭

b. #ein Geburtsort des Mannes; #ein Vater des Mädchens; #ein Kopf der

a birthplace.NOM the man.GEN; a father.NOM the girl.GEN; a head.NOM the

Frau

woman.GEN

(579) Er war **der Sohn** eines arment Bauern. (Löbner 1985: 324)

he.NOM be.3SG.PST the son.NOM a poor farmer.GEN

彼は貧しい農夫の息子だった

Bierwisch (1989), Ehrich & Rapp (2000), Bücking (2012) といった先行研究で論じられているように、名詞化では、基盤動詞から意味形式が継承されるとともに、基盤動詞の状況項が指示項となると考えられる (cf. 6 章)。そのため、状況の参与者を表す基盤動詞の主題項は、名詞化の項候補 (cf. 3.4.2 節) となる。派生名詞化では、その中から、「状況の同定を可能とする項」が構造項となる (cf. 7.3 節)。状況の同定を可能とする項は基盤動詞の意味的な種類によって異なっており、主な名詞化については、(580) にまとめる項が状況の同定を可能とする項である。

(580) 基盤動詞の種類と状況の同定を可能とする項

動詞の種類	意味形式の構造	状況の同定を可能とする項
活動動詞 (自動詞) : e.g. <i>arbeiten</i> etc.	DO (x) (s)	x
活動動詞 (他動詞) : e.g. <i>behandeln</i> etc.	DO (x, y) (s)	x または y
所有動詞 : e.g. <i>besitzen, gehören</i> etc.	POSS (x, y) (s)	x または y
使役的狀態変化動詞 : e.g. <i>erschließen</i> etc.	CAUSE (DO (x), BECOME (BE (y))) (s)	y
使役的所有変化動詞 : e.g. <i>übergeben</i> etc.	CAUSE (DO (x), BECOME (POSS (y, z))) (s)	z
共動作主動詞 : e.g. <i>helfen</i> etc.	[DO (x, y) & DO (y)] (s)	x
効果動詞 : e.g. <i>gefährden</i> etc.	[BE (z) & DO (x)] (s)	z

指示対象としての状況が唯一に同定されると、その状況の参与者についても存在が含意される。そのため派生名詞化では、指示対象となる状況が文脈など

から同定できる場合には、項は明示的に表現されなくても、文脈などに応じて理解され得る。結果として、派生名詞化では項が基本的に任意となる (cf. 7.2.2 節)。一方、不定詞名詞化は外延を唯一に同定して指示するというところを行わない「状況の内包的表現」である (cf. 7.5 節)。そのため不定詞名詞化では、項の情報は明示的に表されるか、母文の項に束縛されなければ満たされず、結果として、不定詞名詞化は派生名詞化と違って義務的な項を持つことがある。

- (581) a. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Die Fertigstellung** ^{OK}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completing.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

- b. Die Vitrinen können leider nicht vor Januar
 the showcase.PL.NOM can.3PL.PRS unfortunately not before January.DAT
 geliefert werden. **Das Fertigstellen** ^{??}(**der Möbel**) innerhalb eines
 deliver.PTCP PASS.INF the completings.NOM the furniture.GEN within one
 Monats ist wegen der großen Nachfrage nicht möglich.
 month.GEN be.3SG.PRS due_to the large demand.GEN not possible
 (Blume 2004: 42)

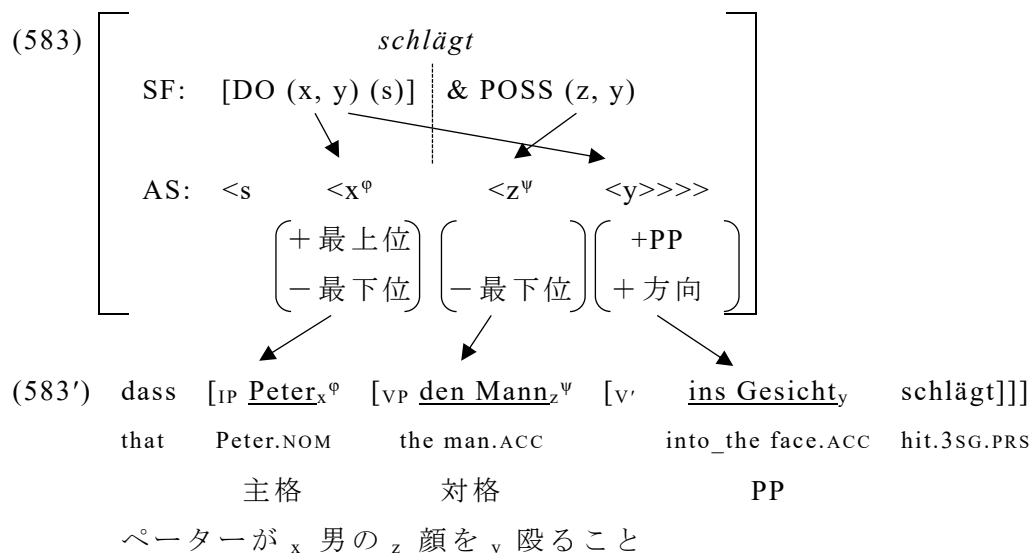
残念ながらそのショーケースは一月より前には届けられません。高い需要のため、一か月以内で(その家具を)仕上げることはできません。

第 II 部では、*Schlag* などの名詞化にみられる目的語属格の欠如という現象 (cf. 9 章) に注目した。基盤動詞の対格項は、ほとんどの名詞化において属格項 (目的語属格) として認められるが、*Schlag* など一部の名詞化では、目的語属格が認められない。

- (582) **Der Schlag des Nachbarn** hat sich vor Mitternacht
 the hit.NOM the neighbor.GEN PRF.3SG.PRS REF.ACC before midnight.DAT
 ereignet.
 happen.PTCP

= [隣人が殴ること] は夜半前に起こった
 ≠ [隣人を殴ること] は夜半前に起こった

ほとんどの名詞化に目的語属格が認められるのは、「意味形式の関係において上位の項が、統語論の構造においても高い統語的位置に表される」という写像論的な一次的格付与の仕組みによって対格を与えられる最下位項が、一般的な条件下において、「状況の同定を可能とする項」であるためである。しかし、動詞における項と形式の関係は、写像論的な一次的格付与の仕組みを基本としながらも、項同士の相対的な関係において卓越性の高い項について、受動態による主題化が可能となるように対格を与えるという二次的格付与の仕組み (cf. 11.3 節) も作用する多元的なシステムとなっている。*schlagen* では、一次的格付与では与格の付与が見込まれる身体部位の所有者が、受動態による主題化を見込んで二次的対格項となる。



この時、いわば「二次的な手続きによらなければ対格を与られない項」である二次的対格項は、「状況の同定を可能とする項」には該当しない。そのためこの項は、派生名詞化の構造項とはならず、属格項とならないのである。

この論文の 4 つの問題提起 Q1-Q4 に対する答えは、A1-A4 のようにまとめられる。

Q1. 基盤動詞の項と名詞化の項の対応関係は、どのような原理に基づくどのような規則によって定式化できるか

A1. 状況の参与者を表す基盤動詞の項は、名詞化の潜在的な項候補となる。派生名詞化では、基盤動詞の種類に応じた「状況の同定を可能とする項」が構造項となり、指示される状況の同定に寄与する限りにおいて、nP 配下の NP

指定部に属格項として任意に表される。「状況の内包的表現」である不定詞名詞化では、状況の参加者の情報は、属格項として表されるか、母文の項によって束縛されることで与えられる。

Q2. 動詞において項と付加語はその義務性を第一の基準として峻別されるが、項が基本的に任意であると考えられる名詞において、項と付加語はそもそも、またどのようにして峻別できるのか

A2. 名詞の項のうち、後置属格の形をとる構造項は、音韻論的な基準によって峻別される。属格項には1音節や2音節の無冠詞固有名詞が認められるのに対し、属格付加語には2音節以下の無冠詞固有名詞は認められない。

Q3. 動詞の項が基本的に義務的であるのに対し、名詞の項はどのようにして基本的に任意なのか

A3. 動詞の項は、動詞が法と時制の解釈を可視化するために項の ϕ 素性を必要とすることから義務的となる。一方、名詞の項は指示対象の同定を可能とするために実現されることから、文脈などを通じて指示対象が同定可能な場合には実現が求められず、任意となる

Q4. *Schlag* などの名詞化にみられる目的語属格の欠如は、どのようなメカニズムで生じるのか

A4. *schlagen* などの動詞では、意味形式の関係を反映する一次的格付与では対格とならない項が、他の項との相対的な卓越性の高さから、受動態による主題化を見込んで二次的対格項となる。二次的対格項は「状況の同定を可能とする項」ではないことから派生名詞化の構造格とはならないので、*Schlag* などの名詞化では目的語属格の欠如が生じる

この論文の成果は、名詞化に関する研究に対しても、狭義の名詞化研究の範疇に収まらない研究に対しても、いくつかの示唆をもたらすものである。

第一の示唆は、不定詞名詞化の特徴に関するものである。ドイツ語の名詞化に関する最近の研究では、項構造に注目する場合、ung 名詞化などの派生名詞化ではなく、不定詞名詞化を議論の中心に据えることが増えてきている (cf. Bücking 2012)。この背景には、Blume (2004) や Bücking (2010) により、不定詞名詞化に義務的な項がみられることが知られるようになったことや、項が述語の選択制限を満たさない場合に直ちに非文となるのではなく、項や述語の意味が変容することで解釈される意味強制 (Coersion) という現象に関する

Pustejovsky (1995) や Asher (2011) の理論化をうけて、名詞化の意味論的種別への関心が高まった結果として、論点の分散を避ける狙いから、結果名詞化の解釈を持たない不定詞名詞化のデータが好まれるようになったといった事情がある。しかし、「状況の内包的表現」である不定詞名詞化には、項の振る舞いという点で他の名詞とは異なる特徴がある。したがって、名詞化の研究では、不定詞名詞化について慎重な扱いが求められる。また、新たな問題提起として、不定詞名詞化の「内包的表現」という性質が、複数形を持たないことや、完了相のアスペクト形式としての機能を持つこと (cf. Ullmer-Ehrich 1977, Ehrich 1991) など、項に関する特徴以外の不定詞名詞化の特徴とも関係があるのか否か、関係しているなら、どのように関係しているのかという問題や、「内包的表現」という特徴の当てはまる名詞が不定詞名詞化の他にも認められるのか否か、認められるならば何がこれに該当するのかという問題も問うことができよう。

第二の示唆は、動詞と名詞という統語範疇の差異を巡る研究に対してもたらされる。この論文では、機能名詞・関係名詞や派生名詞化の項が指示対象の同定を可能とするために任意に実現されることが明らかとなった。このことは、名詞という統語範疇にとっての「指示」という機能の重要性を示している。加えて、不定詞名詞化のように指示を行わない名詞もあるという知見からは、これらの「名詞」が動詞と名詞という範疇の対立にどのように位置づけられるのか、それらは「名詞」なのか、何をもって「名詞」とみなされるのかという問題も問われるであろう。

第三に、義務性という特徴は、動詞の項を特徴づける本質的な性質ではないことが明らかとなった。動詞の項が義務的なのは、動詞が、法と時制の解釈のために項の人称と数を必要とするということの帰結に過ぎない。したがって、動詞の非義務的な項は、その非義務性を、その項が人称と数を参照すべき項の識別に寄与しないことを示すことによって説明できるかも知れない。これは項と項構造に関する一層の理解をもたらす知見である。

項構造は、意味形式と統語構造を結び付けるインターフェースである。したがって、項構造についての見識は、意味論と統語論の関係を解き明かすために欠かすことのできない重要なピースである。項構造を巡る問題への貢献は、Helbig & Schenkel (1969) といった結合価研究の伝統を誇るドイツ語の研究が果たすべき使命のひとつに違いない。

参考文献

- Abney, Steven Paul. 1987. *The English Noun Phrase in its Sentential Aspect*. Cambridge, Mass.: MIT Dissertation.
- Abraham, Werner. 2013. *Deutsche Syntax im Sprachenvergleich: Grundlegung einer typologischen Syntax des Deutschen*. 3., erweiterte Auflage. Tübingen: Stauffenburg.
- Anderson, Stephen Robert. 1971. On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation. *Foundations of Language* 7(3). 387–396.
- Asher, Nicholas. 1993. *Reference to Abstract Objects in Discourse*. Dordrecht: Kluwer.
- Asher, Nicholas. 2011. *Lexical Meaning in Context: A Web of Words*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Asher, Nicholas & Pascal Denis. 2004. Dynamic Typing for Lexical Semantics A Case Study: the Genitive Construction. *Formal Ontology in Information Systems. Proceedings of the Third International Conference*, 165–176. Amsterdam: IOS Press.
- Axel-Tober, Katrin. 2013. Unselbstständiger dass- und ob-VL-Satz. In Jörg Meibauer, Markus Steinbach & Hans Altmann (eds.), *Satztypen des Deutschen*, 247–265. Berlin: De Gruyter. doi:10.1515/9783110224832.247.
- Bartsch, Renate. 1981. Semantics and Syntax of Nominalizations. In Jeroen A. G. Groenendijk, Theo M. V. Janssen & Martin B. J. Stokhof (eds.), *Formal Methods in the Study of Language*, 1–28. Amsterdam: Mathematisch Centrum.
- Bartsch, Renate. 1986. On Aspectual Properties of Dutch and German Nominalizations. In Vincenzo Lo Cascio & Co Vet (eds.), *Temporal Structure in Sentence and Discourse*, 7–39. Dordrecht; Riverton: Foris.
- Bhatt, Christa. 1989. Parallels in the Syntactic Realization of the Arguments of Verbs and their Nominalizations. In Christa Bhatt, Elisabeth Löbel & Claudia Maria Schmidt (eds.), *Linguistik Aktuell/Linguistics Today*, vol. 6, 17–37. Amsterdam: John Benjamins. doi:10.1075/la.6.03bha.
- Bhatt, Christa. 1990. *Die syntaktische Struktur der Nominalphrase im Deutschen*. Tübingen: Narr.
- Bierwisch, Manfred. 1983. Semantische und konzeptuelle Repräsentation lexikalischer Einheiten. In Rudolf Růžička & Wolfgang Motsch (eds.), *Untersuchung zur Semantik*, 61–99. Berlin: Akademie.
- Bierwisch, Manfred. 1989. Event nominalization: Proposals and problems. In Wolfgang Motsch (ed.), *Wortstruktur und Satzstruktur* (Linguistische Studien

- 194), 1–73. Berlin: Akademie der Wissenschaften der DDR; Zentralinstitut für Sprachwissenschaft.
- Blume, Kerstin. 2000. *Markierte Valenzen im Sprachvergleich: Lizenzierungs- und Linking- bedingungen*. Tübingen: Niemeyer.
- Blume, Kerstin. 2004. *Nominalisierte Infinitive: Eine empirisch basierte Studie zum Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Brandt, Margareta, Marga Reis, Inger Rosengren & Ilse Zimmermann. 1992. Satztyp, Satzmodus und Illokution. In Inger Rosengren (ed.), *Satz und Illokution*, 1–93. Tübingen: Niemeyer. doi:10.1515/9783111353210.
- Brinkmann, Ursula. 1997. *The Locative Alternation in German: Its Structure and Acquisition*. Amsterdam: John Benjamins.
- Bücking, Sebastian. 2010. Zur Interpretation adnominaler Genitive bei nominalisierten Infinitiven im Deutschen. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 29. 39–77. doi:10.1515/zfsw.2010.002.
- Bücking, Sebastian. 2012. *Kompositional flexibel Partizipanten und Modifikatoren in der Nominaldomäne*. Tübingen: Stauffenburg.
- Cate, Abraham P ten. 1985. *Aspektualität und Nominalisierung: Zur Bedeutung satzsemantischer Beziehungen für die Beschreibung der Nominalisierung im Deutschen und im Niederländischen*. Frankfurt am Main ; New York: Peter Lang.
- Chomsky, Noam. 1970. Remarks on Nominalization. In Roderick A. Jacobs & Peter S. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, 184–221. Boston: Ginn.
- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding. The Pisa Lectures*. Dordrecht: Foris.
- Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge; New York: Cambridge University Press.
- Czepluch, Hartmut. 1987. Lexikalische Argumentstruktur und syntaktische Projektion: zur Beschreibung grammatischer Relationen. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 6(1). 3–36. doi:10.1515/zfsw.1987.6.1.3.
- Davidson, Donald. 1967. The Logical Form of Action Sentences. In Nicholas Rescher (ed.), *The Logic of Decision and Action*, 81–95. Pittsburgh: University of Pittsburgh.
- Demske, Ulrike. 2001. *Merkmale und Relationen. Diachrone Studien zur Nominalphrase des Deutschen*. Berlin; Boston: De Gruyter.

- Dölling, Johannes. 2015. Sortale Variation der Bedeutung bei *ung*-Nominalisierungen. In Christian Fortmann, Anja Lübke & Irene Rapp (eds.), *Situationsargumente im Nominalbereich*, 49–91. Berlin, Boston: De Gruyter. doi:10.1515/9783110432893-003.
- Dowty, David R. 1979. *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Springer. doi:10.1007/978-94-009-9473-7.
- Duden. 1984. *Die Grammatik*. Auflage 4. Mannheim: Bibliographisches Institut.
- Duden. 2006. *Die Grammatik*. Auflage 8. Mannheim: Bibliographisches Institut.
- Ehrich, Veronika. 1991. Nominalisierungen. In Arnim von Stechow & Dieter Wunderlich (eds.), *Semantik* (HSK 9), 441–458. Berlin; New York: De Gruyter.
- Ehrich, Veronika. 2002a. On the verbal nature of certain nominal entities. In Ingrid Kaufmann & Barbara Stiebels (eds.), *More than Words*, 69–89. Berlin: Akademie.
- Ehrich, Veronika. 2002b. The Thematic Interpretation of Plural Nominalizations. *ZAS Papers in Linguistics* 27. 23–38.
- Ehrich, Veronika & Irene Rapp. 2000. Sortale Bedeutung und Argumentstruktur: *ung*-Nominalisierungen im Deutschen. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 19(2). 245–303. doi:10.1515/zfsw.2000.19.2.245.
- Engel, Ulrich. 1988. *Deutsche Grammatik*. Heidelberg: Groos.
- Eroms, Hans-Werner. 1980. *Be-Verb und Präpositionalphrase. Ein Beitrag zur Grammatik der deutschen Verbalpräfixe*. Heidelberg: Carl Winter.
- Esau, Helmut. 1973. *Nominalization and Complementation in Modern German*. Amsterdam; London: North-Holland.
- Fabricius-Hansen, Cathrine & Arnim von Stechow. 1989. Explikative und implikative Nominalerweiterungen im Deutschen. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 8(2). 173–205.
- Fanselow, Gisbert. 1981. *Zur Syntax und Semantik der Nominalkomposition*. Tübingen: Niemeyer.
- Fanselow, Gisbert. 1987. *Konfiguralität. Untersuchungen zur Universalgrammatik am Beispiel des Deutschen*. Tübingen: Narr.
- Fillmore, Charles John. 1968. The Case for Case. In Emmon Bach & Robert T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, 1–88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Fujinawa, Yasuhiro. 2009. (In-)Finitheit, unterspezifizierte Kasus und Argumentstruktur: Über Partizipien II im Perfekt und Passiv im Deutschen.

- (Ed.) Claudio Di Meola, Livio Gaeta, Antonie Hornung & Lorenza Rega. *Deutsche Sprachwissenschaft international* 5. 103–116.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Grewendorf, Günther. 1988. *Aspekte der deutschen Syntax. Eine Rektions- -Bindungs-Analyse*. Tübingen: Narr.
- Grewendorf, Günther. 2002. *Minimalistische Syntax*. Tübingen; Basel: Francke.
- Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Haider, Hubert. 1985. The Case of German. In Jindřich Toman (ed.), *Studies in German Grammar*, vol. 21. Berlin, Boston: De Gruyter. doi:10.1515/9783110882711-005.
- Haider, Hubert. 1993. *Deutsche Syntax - generativ. Vorstudien zur Theorie einer projektiven Grammatik*. Tübingen: Narr.
- Haider, Hubert. 2000. Branching and Discharge. In Peter Coopmans, Martin B.H. Everaert & Jane Grimshaw (eds.), *Lexical Specification and Insertion (Current Issues in Linguistic Theory 197)*, 135–164. Amsterdam: Benjamins. doi:10.1075/cilt.197.08hai.
- Haider, Hubert. 2009. Adverb placement – convergence of structure and licensing. *Theoretical Linguistics* 26(1–2). 95–134. doi:10.1515/thli.2000.26.1-2.95.
- Hartmann, Katharina & Malte Zimmermann. 2003. Syntactic and Semantic Adnominal Genitive. In Claudia Maienbaum (ed.), *(A)Symmetrien*, 172–202. Tübingen: Stauffenburg.
- Hartmann, Stefan. 2016. *Wortbildungswandel, Eine diachrone Studie zu deutschen Nominalisierungsmustern*. Berlin, Boston: De Gruyter. doi:10.1515/9783110471809.
- Helbig, Gerhard. 1976. Zur Valenz verschiedener Wortklassen. *Deutsch als Fremdsprache* 13. 131–146.
- Helbig, Gerhard. 1986. Zu umstrittenen Fragen der substantivischen Valenz. *Deutsch als Fremdsprache* 23. 200–207.
- Helbig, Gerhard & Joachim Buscha. 2001. *Deutsche Grammatik: Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Berlin; München: Langenscheidt.
- Helbig, Gerhard & Wolfgang Schenkel. 1969. *Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben*. Leipzig: Bibliographisches Institut.
- Higginbotham, James. 1985. On Semantics. *Linguistic Inquiry* 16. 547–593.
- Holler, Anke. 2013. Attributsätze. In Jörg Meibauer, Markus Steinbach & Hans

- Altmann (eds.), *Satztypen des Deutschen*, 526–535. Berlin: De Gruyter. doi:10.1515/9783110224832.526.
- Hölnzer, Matthias. 2007. *Substantivvalenz. Korpusgestützte Untersuchungen zu Argumentrealisierungen deutscher Substantive*. Tübingen: Niemeyer.
- Jackendoff, Ray. 1987. The Status of Thematic Relations in Linguistic Theory. *Linguistic Inquiry* 18(3). 369–411.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Jacobs, Joachim. 1994. *Kontra Valenz*. Trier: WVT.
- Kaufmann, Ingrid. 2003. Infinitivnominalisierungen von reflexiven Verben. *(A)Symmetrien – (A)Symmetries. Beiträge zu Ehren von Ewald Lang - Papers in Honor of Ewald Lang*, 202–232. Tübingen: Stauffenburg.
- Kaufmann, Ingrid. 2005. Referential arguments of nouns and verbs. In Claudia Maienborn & Angelika Wöllstein (eds.), *Event Arguments: Foundations and Applications*, 153–173. Tübingen: Niemeyer.
- Kobayashi, Taishi. 2017. Zur fehlenden Objekt-Lesart von Genitivkomplementen bei Nominalisierungen im Deutschen – mit besonderer Berücksichtigung der primären und sekundären Kasuszuweisung. In Shin Tanaka, Elisabeth Leiss, Werner Abraham & Yasuhiro Fujinawa (eds.), *Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik (Linguistische Berichte Sonderhefte 24)*, 271–289. Hamburg: Buske.
- Larson, Richard K. 1988. On the Double Object Construction. *Linguistic Inquiry* 19(3). 335–391.
- Lattewitz, Karen. 1994. Eine Analyse des deutschen Genitivs. *Linguistische Berichte* 150. 118–146.
- Leirbukt, Oddleif. 1997. *Untersuchungen zum “bekommen“-Passiv im heutigen Deutsch*. Tübingen: Niemeyer. doi:10.1515/9783110928013 (5 June, 2019).
- Lindauer, Thomas. 1995. *Genitivattribute: eine morphosyntaktische Untersuchung zum deutschen DP/NP-System*. Tübingen: Niemeyer.
- Löbner, Sebastian. 1985. Definites. *Journal of Semantics* 4(4). 279–326. doi:10.1093/jos/4.4.279.
- Löbner, Sebastian. 2003. *Semantik: Eine Einführung*. Berlin, New York: De Gruyter.
- Lohnstein, Horst. 1996. *Formale Semantik und Natürliche Sprache: Einführendes Lehrbuch*. Opladen: Springer. doi:10.1007/978-3-663-10079-9.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*. Vol. 2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Maienborn, Claudia. 2001. On the Position and Interpretation of Locative Modifiers.

- Natural Language Semantics* 9. 191–240.
- Maienborn, Claudia. 2003. Event-Internal Modifiers: Semantic Underspecification and Conceptual Interpretation. In Ewald Lang, Claudia Maienbaum & Cathrine Fabricius-Hansen (eds.), *Modifying Adjuncts*, 475–509. Berlin: De Gruyter.
- Narita, Takashi. 1991. Akkusativierung und Satzbedeutung - eine Korpusanalyse an Beispielen mit be-Verben -. 富山大学教養部紀要 (人文・社会科学篇) 24(2). 177–191.
- Ogawa, Akio. 2003. *Dativ und Valenzerweiterung: Syntax, Semantik und Typologie*. Tübingen: Stauffenburg.
- Olsen, Susan. 1994. Lokativalternation im Deutschen und Englischen. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 13(2). 201–235. doi:10.1515/zfsw.1994.13.2.201.
- Partee, Barbara & V Borschev. 1998. Integrating Lexical And Formal Semantics: Genitives, Relational Nouns, And Type-Shifting. *Proceedings of the Second Tbilisi Symposium on Language, Logic and Computation*, 229–241. Tbilisi: Center on Language, Logic, Speech, Tbilisi State University.
- Partee, Barbara H. & Vladimir Borschev. 2003. Genitives, relational nouns, and argument-modifier ambiguity. In Ewald Lang, Claudia Maienborn & Cathrine Fabricius-Hansen (eds.), *Modifying Adjuncts*, 67–112. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Persons, Terence. 1990. *Events in the Semantics of English, A Study in Subatomic Semantics*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Pinker, Steven. 1996. *Lerability and Cognition. The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Primus, Beatrice. 2012. *Semantische Rollen*. Heidelberg: Winter.
- Pusch, Luise F. 1972. *Smear = schmieren / beschmieren: Bemerkungen über partitive und holistische Konstruktionen im Deutschen und Englischen*. In Gerhard Nickel (ed.), *Reader zur kontrastiven Linguistik*, 122–135. Frankfurt am Main: Athenäum Fischer.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, Mass.: A Bradford Book.
- Pustejovsky, James. 1996. *Lexical Semantics: The Problem of Polysemy*. Oxford: Clarendon.
- Rapp, Irene. 1997. *Partizipien und semantische Struktur: zu passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.
- Rapp, Irene. 2001. Argumentstruktur und Erstgliedinterpretation bei deverbalen

- Derivaten—ein semantikbasierter Ansatz. *Folia Linguistica* 35(3–4). 243–284. doi:10.1515/flin.2001.35.3-4.243.
- Rapp, Irene. 2006. „Was den Besuch zum Ereignis macht“ – eine outputorientierte Analyse für die Verb-Nomen-Konversion im Deutschen. *Linguistische Berichte* 208. 407–437.
- Rappaport, Malka & Beth Levin. 1988. What to do with θ -roles. In Wendy Wilkins (ed.), *Syntax and Semantics 21: Thematic relations*, 7–36. New York: Academic Press.
- Rivet, Anne. 1999. Rektionskomposita und Inkorporationstheorie. *Linguistische Berichte* 179. 307–342.
- Schäfer, Florian. 2008. Event denoting *-er* nominalizations in German. *Working Papers of the SFB 732 Incremental Specification in Context* 173–187.
- Schäublin, Peter. 1972. *Probleme des adnominalen Attributs in der deutschen Sprache der Gegenwart. Morpho-syntaktische und semantische Untersuchungen*. Berlin ; New York: De Gruyter.
- Solstad, Torgrim. 2007. *Mehrdeutigkeit und Kontexteinfluss: Die Spezifikation kausaler Relationen am Beispiel von durch*. Universität Oslo Dissertation.
- Solstad, Torgrim. 2010. Post-nominal genitives and prepositional phrases in German: A uniform analysis. In Artemis Alexiadou & Monika Rathert (eds.), *The Syntax of Nominalizations across Languages and Frameworks*, vol. 23, 219–252. Berlin, New York: De Gruyter. doi:10.1515/9783110245875.219.
- Sternefeld, Wolfgang. 2007. *Syntax: Eine morphologisch motivierte generative Beschreibung des Deutschen. Band 1*. Tübingen: Stauffenburg.
- Tesnière, Lucien. 1959. *Éléments de Syntaxe Structurale*. Paris: Klincksieck. 小泉保監訳. 2007. 『構造統語論要説』. 研究社.
- Truckenbrodt, Hubert. 2007. The Syntax Phonology Interface. In Paul de Lacy (ed.), *The Cambridge Handbook of Phonology*, 435–456. Cambridge: Cambridge University Press.
- Truckenbrodt, Hubert & Isabelle Darcy. 2010. Object Clauses, Movement, and Phrasal Stress. In Nomi Erteschik-Shir & Lisa Rochman (eds.), *The Sound Patterns of Syntax*, 189–216. Oxford: Oxford University Press.
- Ullmer-Ehrich, Veronika. 1977. *Zur Syntax und Semantik von Substantivierungen im Deutschen*. Kronberg: Scriptor.
- Vater, Heinz. 1981. Valenz. In Günter Radden & René Dirven (eds.), *Kasusgrammatik und Fremdsprachendidaktik*. Trier: WVT.

- Vendler, Zeno. 1967. *Linguistics in philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Vinker, Carl & Per Anker Jensen. 2002. A Semantic analysis of the English genitive. Interaction of lexical and formal Semantics. *Studia Linguistica* 56(2). 191–226.
- Wegener, Heide. 1985. *Der Dativ im heutigen Deutsch*. Tübingen: Narr.
- Wegener, Heide. 1991. Komplemente in der Dependenzgrammatik und in der Rektions- und Bindungstheorie. Die Verwendung der Kasus im Deutschen. *Zeitschrift für Germanistische Linguistik* 18(2). 150–184. doi:10.1515/zfgl.1990.18.2.150.
- Wellmann, Hans. 1975. *Das Substantiv*. Berlin, New York: De Gruyter.
- Williams, Edwin. 1981. Argument Structure and Morphology. *The Linguistic Review* 1(1). 81–114.
- Wunderlich, Dieter. 1992. *CAUSE and the Structure of Verbs* (SFB 282). Vol. 36. Düsseldorf: Seminar für Allgemeine Sprachwissenschaft.
- Wunderlich, Dieter. 1997a. CAUSE and the Structure of Verbs. *Linguistic Inquiry* 28(1). 27–68.
- Wunderlich, Dieter. 1997b. Argument Extension by Lexical Adjunction. *Journal of Semantics* 14(2). 95–142. doi:10.1093/jos/14.2.95.
- Wunderlich, Dieter. 2000. Predicate composition and argument extension as general options - a study in the interface of semantic and conceptual structure. In Barbara Stiebels & Dieter Wunderlich (eds.), *Lexicon in Focus*, 247–210. Berlin: Akademie.
- Zifonun, Gisela, Ludger Hoffmann & Bruno Strecker. 1997. *Grammatik der deutschen Sprache*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- 小林大志. 2018. ドイツ語における名詞化複合語の項の解釈について一項の意味論的階層関係と階層外項一. 『Der Keim』 42. 25 -48. doi: 10.15026/93491
- 清野智昭. 1991. 身体表現における 4 格目的語の機能. 『熊本大学文学部論叢』 35. 138–152.
- 清野智昭. 1992. ドイツ語における「人」と「物」—有生性と動作主性—. 『西日本ドイツ文学』 4. 25–35.
- 関口存男. 1960. 『冠詞—意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究—』 . 三修社.
- 高橋亮介. 2010. 「欠如・欠落」の概念と与格の実現—「存在」・「所有」概念との接点を探る—, In: 成田節・藤縄康弘 [編] 『文意味構造の新展開—

- ドイツ語学への，そしてその先への今日的展望—』．日本独文学会研究叢書 073. 25–46.
- 成田節. 1989. 「4 格化」と文の意味— be-動詞表現を例にして—. 『富山大学教養学部紀要（人文・社会科学篇）22 (2). 117–128.
- 成田節. 1993. ドイツ語の 4 格目的語の一特性について—日本語のヲ格補語と比較して—. 『富山大学教養学部紀要（人文・社会科学篇）』25 (2). 153–168.
- 成田節. 2005. ドイツ語の be-動詞表現—対格化をめぐる—. 『言語情報学研究報告』 7. 361–381.
- 西山佑司. 1990. 『カキ料理は広島が本場だ』構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句—. 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22. 169–188.
- 西山佑司. 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』．ひつじ書房.
- 藤縄康弘. 2005. 格再考：「人に尋ねる」は，どうして *jmdn. fragen* なのか. 『ドイツ文学論集』38. 13–23.
- 藤縄康弘. 2010. 意味構造と項構造—基本関数の認定とその複合をめぐる—, In: 成田節・藤縄康弘 [編] 『文意味構造の新展開—ドイツ語学への，そしてその先への今日的展望—』．日本独文学会研究叢書 073. 4–24.
- 藤縄康弘. 2013. 自由な与格, In: 岡本順治・吉田光演 [編] 『講座ドイツ語学 1 ドイツ語の文法論』．ひつじ書房. 145–165.
- 藤縄康弘. 2016. 言語的空間把握の日独比較—一場所表現の品詞的範疇を軸に—, In: 宮下博幸 [編] 『ドイツ語と日本語に現れる空間把握 認知と類型の関係を問う』．日本独文学会研究叢書 112. 5–19.
- 吉田光演. 2013. ドイツ語の名詞表現の統語論と意味論, In: 岡本順治・吉田光演 [編] 『講座ドイツ語学 1 ドイツ語の文法論』．ひつじ書房. 169–191.

謝辞

この論文は、筆者が東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士後期課程言語文化専攻に在籍中の研究成果をまとめたものである。東京外国語大学大学院総合国際学研究所教授の藤縄康弘先生には主任指導教員として本研究の実施の機会を与えて戴き、その遂行にあたって終始、ご指導を戴いた。ここに深謝の意を表す。同研究所教授の成田節先生には、副指導教員としてご助言を戴くとともに、特に本論文の第13章の内容に関して貴重なご助言を戴いた。ここに深謝の意を表す。同研究所教授の浦田和幸先生には副指導教員としてご助言を戴くとともに本論文の細部にわたりご指導を戴いた。ここに深謝の意を表す。慶應義塾大学文学部教授の田中慎先生には、千葉大学言語教育研究センター教授であられた当時より、たびたび本学にご足労戴き、有益なご助言を戴いた。ここに深謝の意を表す。筆者が東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程に在籍中に派遣留学によって留学したドイツ・ビーレフェルト大学の各位には、ドイツ語の例文に関して数多くの有益な指摘を戴いた。ここに深謝の意を表す。本学ドイツ語専攻の各位には、研究遂行にあたり日頃より有益なご討論、ご助言を戴いた。ここに感謝の意を表す。